ソ連邦共産党史 1



●ソ連邦共産党史翻訳委員会訳

国民文庫＝435a

大月書店

国民文庫

435 a

ソ連邦共産党史

最新版

（1）

ソ連邦共産党史翻訳委員会訳



大月書店

История Коммунистической партии Советского Союза
(Издание четвертое, дополненное)
издательство политической литературы
Москва・1972

凡　例

一　本書は、『ソ連邦共産党史』（増補第四版）、モスクワ、政治文献出版所、一九七一年刊の翻訳である。

一　本訳書では、原書を三冊に分けて刊行する。本書はその第一分冊である。

一　本文中に引用されているレーニンの著作の参照ページは、原書では第五版全集によっているが、本訳書では、読者の便宜を考えて、大月書店版の邦訳全集によってあげてある。

一　原書でゴチック活字で組んである箇所は本訳書でもゴチック体にし、原書でイタリック体のものは本訳書では傍点付にし、イタリック体を隔字で組んだものは、訳文では傍丸をつけてある。

一　本文中に〔　〕でかこんで六号活字で組んであるものは、訳者のつけた注である。

目次

第三章　一九〇五―一九〇七年の革命におけるボリシェヴィキ党

ソ連邦共産党史（2）目次

ソ連邦共産党史（3）目次

序　文

偉大なレーニンによって創立され育てあげられたソ連邦共産党は、世界の他のどの政党もこれに匹敵するものを知らない歴史的な道をとおってきた。それは、英雄的な闘争の道、苦しい試練の道であり、労働者階級の世界史的な勝利の道、社会主義・共産主義の勝利の道であった。

一九世紀の末から二〇世紀の初めに、党は歴史の舞台に登場し、労働者階級と農民をひきいてツァーリ専制とロシア資本主義にたいする戦いに敢然とおもむいた。これは、世界帝国主義にたいする闘争でもあった。ロシアは、世界革命運動の中心になった。ロシアの労働者階級と勤労農民の大多数とをマルクス＝レーニン主義の思想で武装して、党はツァーリズムとブルジョアジーにたいする人民の勝利を保障した。

一九世紀の八〇年代いらい、ロシアの労働運動内で活動していた小さなマルクス主義サークルからはじまって、党は、強大な社会主義国家を指導する大きな力になった。第二四回大会をむかえるに当たって、党は、マルクス＝レーニン主義の思想にもとづいて結束し、国民と固く結びついた一四〇〇万の大勢力に成長していた。

共産党はロシアの諸民族をひきいて、三次の革命——一九〇五—一九〇七年のブルジョア民主主義革命、一九一七年二月のブルジョア民主主義革命、十月社会主義大革命——を遂行し、ソヴェト国民に社会主義の世界史的な勝利をおさめさせた。党は、二次の帝国主義戦争（一九〇四—一九〇五年の日露戦争と一九一四—一九一八年の第一次世界大戦）の試練を切りぬけた。党は、二次の祖国防衛戦争（一九一八—一九二〇年の内戦と一九四一—一九四五年の大祖国戦争）におけるソヴェト国民の英雄的な闘いの先頭に立った。党の指導のもとにソヴェト国民とその武装力は敵の大軍の侵害から社会主義の祖国の自由と独立を守りぬいた。

共産党は、マルクス＝レーニン主義の革命的理論を終始指針としている。党は、隠然、公然の敵の侵害から、各種の日和見主義者から、マルクス主義理論を守りぬき、この理論をさらに前進させた。ヴラヂーミル・イリイチ・レーニンはカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの学説を豊かにし、これを新しい、いっそう高い段階に引き上げた。レーニン主義は、マルクス主義を継承し発展させたものであり、帝国主義とプロレタリア革命、ソ連邦における社会主義・共産主義の建設、社会主義世界体制の成立と発展、民族解放革命と植民地体制の崩壊の時代のマルクス主義であり、人類の社会主義への過渡期のマルクス主義である。

マルクス、エンゲルス、レーニンの忠実な教え子と後継者は、彼らの偉大な学説を一貫して守っているし、社会主義・共産主義の建設のため、国際プロレタリアートの利益のための闘争の、また諸国人民の民族的および社会的解放の、新しい、今日の条件に応じてこの学説を終始前進させている。マルクス＝レーニン主義の旗のもとに、十月大革命は勝利をおさめ、社会主義社会が建設され、社会主義世界体制が成立した。マルクス＝レーニン主義の旗のもとに、全世界の労働

者と勤労者のいく百千万の大衆が闘争をつづけている。

共産党は、国内で活動していた、敵対する政党政派とねばりづよく非妥協的な闘争をおこなった。帝政派、カデット、ブルジョア民族主義諸党、さらに「経済主義者」、ロシアの労働運動内の日和見主義の主力であるメンシェヴィキ、エス・エル、無政府主義者との闘争がそれである。労働者階級、人民大衆は、すべての政党を自分の経験にもとづいて確かめて、自分たちの利害の真の代表者、自分たちの指導者は共産党であると、最終的に確信するようになった。

党内では、トロツキー派、「労働者反対派」、「民主主義的中央集権派」、トロツキー＝ジノヴィエフ・ブロック、右翼日和見主義者との、民族主義グループその他反レーニン主義グループとの長期にわたる激闘がおこなわれた。すべての敵対政党と反レーニン主義グループにたいする政治的勝利とそれらのものの思想的粉砕とは、社会主義革命が勝利し、ソ連邦に社会主義が建設される必須条件であった。

ソ連邦共産党の歴史は、二つの主な時期に分かれる。第一の時期は、ツァーリ専制と資本主義制度を倒すための、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を樹立するための党の闘争をふくむ。第二の時期には、党は権力をにぎっており、ソ連邦に社会主義・共産主義を建設するためにたたかっている。これらの時期に応じて、党の任務、その戦略戦術、その活動の組織形態はかわった。

それぞれの歴史的段階で党は、党綱領に科学的に定式化された課題の解決に当たった。一九〇三年に第二回大会で採択された最初の綱領を遂行するための党と人民の闘争は、十月社会主義大革命の勝利をもたらした。一九一九年に第八回大会で採択された第二の綱領を遂行するための党と人民の闘争は、ソ連邦における社会主義の完全かつ最後的な勝利をもたらした。一九六一年の

第二二回大会で党は、新しい、第三の綱領——ソ連邦に共産主義社会を建設する綱領を採択した。すべての発展段階で党は、マルクス＝レーニン主義の学説にもとづいた政治方針を作成して実行してきた。この方針は、労働者階級、勤労農民、国のすべての民族の利益にかない、祖国の利益、ソ連邦における共産主義の勝利と国際社会主義の事業との利益にかなっている。

共産党は、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の勝利をめざす闘争で大きく多種多様な経験をつんだ。十月革命以前の時期に地下活動の苦しい条件のもとで、ボリシェヴィキは、イデオロギー上、政治上、組織上の複雑な問題を理論的に究明し、これらの問題に関連した課題を実践的に解決し、これにもとづいて、ブルジョア民主主義革命と社会主義革命で勝利をおさめた。これらの課題というのは、新しい型の党である革命的マルクス主義党の学説を仕上げ、こうした党を創立すること、帝国主義の時代に応じて、社会主義革命の新しい理論を仕上げること、ブルジョア民主主義革命と社会主義革命における戦略戦術を仕上げること、ツァーリズムと資本主義にたいする勝利のためにプロレタリアートのヘゲモニーをめざし、労働運動の統一をめざし、労働者階級を先頭とする労働者階級と農民の同盟の確立をめざし、被抑圧民族をプロレタリアートの味方につけることをめざしてたたかうこと、ロシアの革命運動と労働運動の隊列内で、また国際舞台でマルクス主義の敵とたたかうこと、その他であった。党は、闘争と活動の非合法的形態と合法的形態、議会的形態と議会外的形態を結合する模範、さらに新しい歴史的状況に応じてこれらの形態を急速に交替させる能力の模範をしめした。

それにもまして豊かで多種多様なのは、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）、社会主義・共産主義の建設で党のたくわえた経験である。社会主義の建設は、人類史上はじめて、比較的発達がおくれ

ていて農民が圧倒的な多数を占め、住民のなかに多くのいろいろな民族をかかえていた広大な国ですすめられてきた。困難は、ソ連邦が三〇年以上も世界でただ一つの社会主義国家で、敵対する資本主義の包囲の凶暴な攻撃をうけていたために何倍にもなった。党は、社会主義建設の複雑きわまる問題を理論的に究明しなければならず、実際にもまた究明した。ソ連邦共産党の歴史的経験は、資本主義から社会主義への過渡と社会主義社会の共産主義への発展にかんする実にさまざまな問題にわたっている。

そのなかで主なものはつぎのようである。

ソヴェト社会のいろいろな発展段階でプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）、社会主義的民主主義を実現すること、社会主義・共産主義を建設する全期間にわたって労働者階級の指導のもとに労働者階級と農民の同盟を実現すること、ソ連邦で民族問題を解決し、社会主義的諸民族の共同体を創出すること、社会主義から共産主義への過渡の基本問題を究明すること。

社会主義的経済形態の創出、国の工業化と社会主義の物質的・技術的基盤の創出、農業の集団化と社会主義的機械制大農業の創出、搾取階級の一掃と人間による人間の搾取の廃絶、以前にはおくれていた民族が資本主義的発展段階をとおらずに社会主義に移っていくこと。

国家間の関係にソヴェト国民と全世界の勤労者との利益にかなった新しい原則をつくり上げること、世界平和の維持、社会主義国家の防衛力の強化のためにたたかうこと、社会主義諸国との友好・相互援助政策、社会主義諸国の共同体の強化、帝国主義と植民地主義とに対抗して、民族解放運動と新興民族国家を支援すること、社会制度を異にする国家の平和共存の政策。

社会主義的イデオロギー、科学的な、マルクス＝レーニン主義的な世界観の確立、文化革命の

遂行、社会主義的科学の繁栄と新しい人民的インテリゲンツィアの多数の基幹活動家の養成、社会主義的国際主義とソヴェト愛国主義との共産主義的精神に立ったソヴェト人の教育。

共産党が搾取制度を打倒する力から共産主義を建設する力に転化すること、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の体系内で党の指導的役割を実現すること、マルクス＝レーニン主義にもとづいて党の統一を強化すること、党内民主主義、集団指導の原則、党生活のレーニン主義的規範を推し進めること、基幹活動家だけでなく全党員を教育し思想的にきたえること、マルクス＝レーニン主義、プロレタリア国際主義の原則にもとづいて兄弟党である共産党・労働者党との結びつきを強固にすること。

以上はすべて全面的に理論的究明をうけ実践で検証されたものであって、いま、社会発展のいろいろな段階におかれている、いろいろな国の人民は、社会主義のための闘争で、もちろん、彼らの民族的特質を考慮にいれながら、これを活用することができる。ソ連邦と人民民主主義諸国の経験は、社会主義社会の創出と発展で共産党が決定的な役割を果たす、党の役割は共産主義の建設期にはいっそう高まるという、マルクス＝レーニン主義学説を完全に裏付けている。

こうして、ソ連邦共産党が社会発展の客観的合法則性をよりどころとする理論活動と実践的闘争を、労働者階級と人民大衆の先頭に立っておこなった結果、人類は、史上最初の社会主義社会をもつようになり、同時に経験にもとづいて確かめられた、社会主義建設の科学をも、手にいれたのである。ソヴェト国民は、共産党の指導のもとに全世界のために社会主義への大道を切り開いた。多くの国の人民がこの道をすすんでいるが、おそかれはやかれ世界のすべての国の人民がこの道をすすむようになるだろう。

いまソヴェト国民は、共産党の指導のもとに、共産主義社会を建設しており、人類のために共産主義への道を切り開きつつある。新しい状況のもとで党は、革命的理論にたいする真のマルクス＝レーニン主義的態度の模範を示し、新しく重要な理論的結論と命題でマルクス＝レーニン主義を豊かにした。

プロレタリア国際主義の原則に忠実なソ連邦共産党は、他の国々の労働者階級と民族解放運動にたいする責務を厳格に果たし、社会主義思想の勝利のために全力をつくした。ソ連邦は、反ヒトラー連合の勝利とファシストの圧政からの諸国人民の解放に決定的な役割を果たした。ソヴェト国民は、党の指導のもとに、ドイツと日本の占領とたたかう東南および中央ヨーロッパ、中国、朝鮮、ベトナム各国人民を援助し、人民民主主義体制を建設し強化するうえで彼らに援助をあたえた。

人類の三分の一をふくむ社会主義世界体制が成立し、資本主義との経済競争での勝利をめざして邁進している。社会発展の歩みにたいする社会主義世界体制の影響は、ますます高まっている。共産党は、全力をつくして、社会主義世界体制のいっそうの強化と繁栄をはかるという偉大な歴史的課題の解決につとめている。党は、ソ連邦における共産主義建設とソ連邦の防衛力の強化とを、ソヴェト国民の偉大な国際的課題であり、社会主義世界体制全体と国際革命運動の利益にかなうものであると考えている。ソ連邦共産党は、平和とすべての国の国民の友好の旗手である。

ソ連邦共産党は、世界共産主義運動の不可欠の一部であり、その戦闘的な革命的部隊である。この党の歴史は、行動と創造的発展におけるマルクス＝レーニン主義である。

ソ連邦共産党の歴史は、きわめて重要な社会科学である。ソ連邦共産党史の、党のとおってき

た勝利の道の研究、マルクス＝レーニン主義理論の研究は、社会発展と階級闘争の法則の知識を、革命の推進力の知識、社会主義・共産主義の建設の法則の知識を勤労者にあたえる。

党史の研究は、共産党員に、すべてのソヴェト人に、自分の偉大な党を誇り、党の世界史的な勝利を誇りに思う気持をおこさせ、すべての点で自分の党、自分の祖国にふさわしくあろうとする決意をおこさせ、新しい課題を解決するために党の豊富な経験を生かすのに役立ち、共産主義を建設するための創造的エネルギーを生みだす。

ソ連邦共産党の歴史は、外国の共産主義者に、自分の常勝の兄弟党を誇りに思う気持をおこさせ、全世界の勤労者の社会主義の勝利にたいする信念を固めさせる。党史の研究は、マルクス＝レーニン主義を身につけ、搾取者の圧政の打倒をめざし、共産主義の建設をめざす闘争の経験を身につけるのを助ける。

人類は、ソ連邦共産党にたえず眼をむけていくであろう。この党の指導のもとに、勤労者は、搾取階級を打倒して、はじめて世界史の新しい時代――もっとも幸福な社会である共産主義を建設する時代をひらいたのである。人類はいつも、ソ連邦共産党の英雄的な歴史に眼をむけ、史上最初の共産主義社会を建設するうえでソヴェト国民のおさめた偉大な成果に感嘆をおしまないだろう。

本書は、ソ連邦共産党史を簡潔に述べたものである。

教程『ソ連邦共産党史』第四版には、党中央委員会一〇月総会（一九六四年）と第二三回―第二四回党大会の諸決定と新しい党綱領にもとづいて、党が近年、ソヴェト国民の幸福のため、共産主義社会の建設のため、平和と諸国民の安全の確保、マルクス＝レーニン主義の思想の勝利の

ためにおこなってきた、多方面で豊かな政治上、イデオロギー上、組織上の活動をふくめて、党の生活と活動が明らかにされている。本書では、党文書保管所の新しい資料が利用され、本書を審議する過程で述べられた意見や、本書を簡略にしてもらいたいという要望が考慮されている。

第一章　ロシアにおける労働運動のはじまりとマルクス主義の普及（一八八三—一八九四年）

1　一九世紀後半のロシアにおける資本主義の発展と人民大衆の状態

一九世紀の後半に、ロシアにはめざましい変動が生じ、この変動は二〇世紀はじめにロシアの労働者階級を世界プロレタリアートの闘争の先頭に立たせるようになった。前世紀の中ごろまで、ロシアは、ヨーロッパのきわめておくれた国の一つであった。ロシアで資本主義が発展しはじめたのは、比較的おそかった。当時ロシアには、農奴制が存続していて、農民を、家畜や物品と同じように売買することができた。強制労働の生産性は低く、このような労働にもとづく農業は、非常におくれていた。自由な労働力と国内市場が不足していたため、工業も本格的に発展することができなかった。商品＝資本主義的諸関係の発展は、農奴制の廃止をうながしていたが、農奴主的地主はこれに頑強に抵抗していた。

農奴制の退廃と農奴制のおよぼす害とは、ますます強く感じられるようになった。一八六一年

農奴制にうながされ、またひろがった農民騒擾におびやかされて、ツァーリ政府は農奴制を廃止せざるをえなかった。

農奴制の崩壊後、ロシアには資本主義が、まず最初に工業で、かなり急速に発展しはじめた。一八六六年から一八九〇年までに、工場数は二五〇〇ないし三〇〇〇から、六〇〇〇にふえた。機械設備をそなえ数千人の労働者をかかえた大規模な工場が出現した。労働者数百人以上の大企業は、一八九〇年当時企業総数の七％たらずであったが、鉱工業総生産高の半ば以上を生産していた。鉄道網は四〇〇〇キロメートルから二万九〇〇〇キロメートルにふえた。経済生活・政治生活・文化生活の中心地である大都市が急速に発達した。ドンバスやバクー油田地区などの新しい鉱工業地帯がうまれた。これらの変動がすべて、四分の一世紀のあいだに、一世代の見ている前でおこったのである。

資本主義の発展は、住民の階級構成に根本的な変化をおこさせた。農奴制のロシアには二つの基本的階級――地主と農民――があった。資本主義の発展にともなって、社会生活の舞台にはブルジョアジーとプロレタリアートが登場してきた。すでに農奴制のもとでうまれていたブルジョアジーは、急速に成長し、経済力をたくわえていった。

大規模な資本主義的工業生産が現われ発展するにつれて、近代工業プロレタリアートも出現し増加した。一八九〇年に、労働者の数は、大工場、鉱山、鉄道だけでも一四三万二〇〇〇人に、つまり一八六五年の二倍に達していた。工業労働者の半数近く〔四八・三％〕は、労働者数五〇〇人以上の大企業に集中していた。工場労働者は賃金労働者の大軍勢の中核であった。レーニンの計算によると、一九世紀末ロシアには、工業、鉄道、農業、建設業、林業に約一〇〇〇万人の

賃金労働者がいた。

機械制大工業と工業プロレタリアートの出現は、進歩的な現象であった。しかし、ロシアの資本主義国への転化は、どこでもそうであったように、勤労者の搾取を強化することによっておこなわれた。工場数の増加、鉄道の建設をしめす数字の背後には、人民の悲しみ、彼らの血と涙がひめられていた。資本主義的搾取が農奴制の圧制の遺物とむすびついていたために、大衆の状態はますますたえがたいものになった。

農奴制の廃止は、農奴主的地主がその特権と権力を維持するためにおこなわれた。農民は、「解放」のさい破廉恥きわまるやりかたで略奪された。地主は、農民が以前たがやしていた土地のかなりな部分を切りとって、自分のものにした。しかもそれはいい地所であった。農民は、とりあげられた土地を「切取地」と呼んだ。ツァーリ政府は、残りの土地を法外な高値で農民に買いとらせた。農民が「解放」にこたえて大衆行動に出たのは異とするにたりない。農民は、「解放」後ほとんど半世紀間も、自分が血と汗をながしてきた土地の代償として、地主に支払をつづけていた。革命の圧力によってはじめて、ツァーリ政府は一九〇七年以降償還金〔地主に支払う土地買取金のために国家から受けた貸付金の年賦償還金〕の支払を廃止したのである。

地主は莫大な土地財産と権力を持ちつづけていた。筆頭の最大の地主は、ツァーリであった。ツァーリの一族だけでもヨーロッパ・ロシアに七〇〇万デシャチーナ〔一デシャチーナ＝一・〇九二ヘクタール〕の土地をもっていたが、これは五〇万の農家の土地よりも多かった。地主の大土地所有は、半農奴制的搾取の基礎であった。農民は、自分の農具や馬をつかって地主の土地をたがやすとか、収穫の半分を地主にわたすとかいった屈辱的な条件で地主の土地を小作しなけれ

続が存続していることを意味していた。

※

ばならなかった。「雇役」、「折半」小作、償還金の支払は、農村に農奴制の根づよい遺物が存続していることを意味していた。

資本主義は農村でも発達した。農民経済は、現物経済からますます商品経済になり、ますます強く市場に依存するようになった。競争がはげしくなり、借地と土地の買取りが広がり、富裕な経営者はますます大きな経済力をたくわえていった。資本主義の影響をうけて、農民の分解がすすみ、富農(クラーク)(農村ブルジョアジー)と貧農(レーニンのいう農村プロレタリアと半プロレタリア)とがわかれた。

地主と富農は農民を隷属させ、貧困と死滅においしいれた。凶作と飢饉がしばしば農村をおそった。一八九一年にひどい飢饉が四〇〇〇万人もの農民をおそった。貧苦に追われて農民は、賃稼ぎをもとめて生まれ故郷の村から出ていった。これらの農民の一部は、都市に、工場に完全に住みつき定着して、恒常的な労働者となった。

農民の運命はいたましいものだった。労働者も、資本家とツァーリの行政機関との権力のもとに完全におかれて、信じられないほど苦しい条件のもとで生活していた。労働日は一二—一三時間つづき、紡織工場では一五—一六時間にもおよんでいた。どんな労働保護もなかった。取るにたりない賃金は、まずしい生計をささえるのがやっとだった。しかも、このわずかなかせぎも、ありとあらゆる方法で切りとられていた。労働者は勘定をごまかされ、賃金は雇主のほしいままに、不定期に支払われていた。とりわけ、労働者を苦しめたものは罰金であった。罰金はしばしば賃金の三分の一、あるいは四〇%にも達し、しかもあらゆる口実で課せられた。婦人や児童の労働が広く用いられていた。彼らは、男と同等に働きながら、受けとるものはずっと少なかった。

労働者の大部分は、工場宿舎や、板寝床が二段も三段もついた共同の「寝部屋」でくらしていた。小さな部屋に三家族ないし四家族が同居しているのだった。炭鉱労働者は、普通、掘立小屋か土小屋に住んでいた。苦役労働とみじめな生活とは、病気を集団発生させ、労働者を急速に消耗させて死滅させ、児童の死亡率をたかめた。

　農奴制の遺物は、国の社会生活と政治生活で、とくに顕著であった。ロシアは専制君主国であった。すなわちロシアの権力は完全にツァーリにぞくし、ツァーリは気ままに法律を発布し、大臣や官吏を任命し、国民の金をほしいままに徴収し、費消していた。ツァーリ君主制は、実質上農奴主的地主の執権（ディクタツーラ）で、農奴主的地主は、あらゆる政治的権利や特権をあたえられ、国家のすべての要職を占め、国民の金から巨額の手当を貰っていた。ツァーリ政府は、大工場主や財界の大物を支持していた。人民は、どんな政治的権利ももたなかった。自由に集会をひらき、自分の意見をのべ、要求をだし、組合や団体を結成し、自由に新聞雑誌を発行することができなかった。憲兵、刑事、獄吏、町巡査、村巡査、警部、郡警察長、地方区長〔ゼムスキー・ナチャーリニク〕などの大群が、ツァーリや地主や資本家を人民から守っていた。

　教会は熱心に搾取制度につくしていた。二〇世紀のはじめロシアには約六万九〇〇〇の正教教会があり、一一万人の聖職者、五万八〇〇〇人の修道僧がいた。そのほか、他の宗教の僧侶が数万人もいた。このおびただしい僧侶は、宗教の阿片を熱心にひろめ、ツァーリの官憲にたいする屈従の念を勤労者に教えていた。

　ツァーリ政府は、知識の光をうけて人民が柔順でなくなるのをおそれていた。そこで、政府は人民を無知蒙昧にとじこめた。文部省は事実上、人民の自覚をくもらせる機関であった。学校には

一人当り年八〇コペイカのはした金しか支出されていなかった。労働者や農民出身の青年は「めしたきの子」と蔑称されて、中学校や上級学校への進学はゆるされなかった。ロシアの人口の五分の四ちかくが文盲であった。ツァーリズムは、物質的だけでなく、精神的にも人民を貧困の運命におとしいれていた。

帝政ロシアは諸民族の牢獄であった。ロシア人以外の民族は、人口の五七％を占めていたが、まったく無権利で、略奪的な搾取をこうむり軽侮の目で見られていた。ツァーリの官吏は、彼らを裁判にかけ、制裁をくわえた。非ロシア諸民族の民族文化は迫害されていた。多くの民族は、新聞や図書の発行を禁じられ、児童に母語でおしえることを禁じられていた。東部地方の住民は全部文盲であった。政府は、非ロシア諸民族を公式に「異民族」と呼び、彼らにたいする蔑視の念を、ロシア人に教えこもうとつとめていた。ツァーリ政府は、民族同士をけしかけ、ユダヤ人虐殺や、アルメニア人とアゼルバイジャン人との殺しあいを組織した。

農奴制の遺物は国の発展を妨げた。一九世紀末に農業には人口のほぼ六分の五が従事していた。資本主義の発展にもかかわらず、ロシアは依然として経済的におくれた農業国であった。

一八九七年におこなわれた人口調査は、当時のロシアにおける諸階級の概況をしめしている。ロシアの総人口は一億二五六〇万人であった。人口の大多数は農民で、その三分の二は貧農であった。人口のほぼ五分の一は労働者とその家族で占めていた。富裕層——富農、小企業主、ブルジョア・インテリゲンツィア、官吏等々は、ほぼそれと同数であった。約二％が大ブルジョアジー、地主および高級官僚であった。

勤労被搾取大衆——労働者、貧農、中農、手工業者——は、人口のほぼ五分の四を占めていた。

そして、この圧倒的多数の人民が、ひとにぎりの地主や資本家に抑圧され、奴隷化されていた。ツァーリズムはこの地主・資本家の忠実な守り手であった。都市と農村の、無産の、隷従した幾百万の働く人々は、巨大な革命力を意味していた。だが、この力を組織し、政治的に啓蒙し、自分の利害と、抑圧から解放されるためにたたかう道とをはっきり理解させ、労働者階級のまわりに結集させる必要があった。

農奴制の廃止は、農民と地主のあいだの矛盾をとりのぞかなかったが、それと同時に、労働者と資本家のあいだの矛盾が広がり、貧農と富農のあいだの矛盾がつよまった。勤労大衆は、資本主義的搾取からも、農奴制的抑圧の遺物からも、苦しめられていた。人民のためにも、社会発展全体のためにも、まず第一に農奴制度の遺物をなくし、ツァーリ君主制を打倒する必要があった。

一九世紀末のロシアは、もはや一八六一年以前のロシアではなかった。レーニンは当時ロシアにおこっていた過程をつぎのように特徴づけている。

「農奴制ロシアにかわって、資本主義ロシアがあらわれた。土着の、うちひしがれ、自分の村にすっかり根をはやした、僧侶を信じ、『お上』をおそれる農奴的農民にかわって、都市へ出かせぎにいき、渡り者暮しや賃労働のつらい体験からなにかをまなびとった農民の新しい世代が成長してきた。大都市の工場では、労働者の数はますます増加していった。資本家および政府にたいする共同闘争のために、労働者の団体が徐々につくられるようになった。この闘争をおこなうことによって、ロシアの労働者階級は、幾百万の農民が立ちあがり、背をのばし、農奴の習慣をはらいおとすのをたすけた」(全集、第一七巻、七九ページ)。これらの過程の結果、革命運動はますますつよまった。

2　革命的民主主義運動。最初の労働者組織

ロシアの革命運動には、英雄精神にみちた、すばらしい歴史がある。人民を苦役労働と窮乏の運命におとしいれ、国内の生きとし生けるものにかせをはめていた農奴制的抑圧は、大衆のなかに不満と抗議の気運をうみだした。こうした気運は一揆や騒擾となって爆発した。ロシアの革命思想は、農奴制に反対する農民大衆の闘争に根をおろし、西ヨーロッパの革命運動の経験を熱心にうけいれた。階級闘争の地味豊かな土壌には、はやくも農奴制の時代、すなわち一九世紀の四〇—五〇年代に、ヴェ・ゲ・ベリンスキー、ア・イ・ゲルツェン、エヌ・ア・ドブロリューボフ、エヌ・ゲ・チェルヌィシェフスキーのような偉大な革命的民主主義者が育っていた。彼らの活動は、ロシアの社会生活における農奴制のあらゆる現われにたいする深い憎しみにみちており、国の進歩的発展の熱烈な擁護にあてられていた。彼らは、ロシアの諸民族の解放運動に卓越した役割を演じた。彼らの影響をうけて、テ・シェフチェンコ、ゼ・セラコフスキー、カ・カリノフスキー、ア・マッキャヴィチュス、エム・ナルバンヂャンのような熱烈な革命家が生まれた。一九世紀後半の先進的な人々にとりわけつよい影響をあたえたのは、革命的民主主義者の首領であり、マルクス主義以前の時期のもっとも傑出した革命的思想家であったチェルヌィシェフスキーである。

革命的民主主義者は、人民を専制から、搾取から解放する武器として、正しい理論をねばりづよく探しもとめた。彼らは、正当にも人民が社会発展の主要な推進力であると考えていた。だが、

彼らは、社会を改革する能力をもつ唯一の階級である労働者階級の歴史的役割を知らなかったし、まだ知ることもできなかった。

革命的民主主義者は、農民革命の思想家であった。彼らの見解のなかでは、戦闘的民主主義と空想的社会主義とが、一体になっていた。ヨーロッパのどこでも、社会的抑圧にたいする抗議は、はじめは空想的社会主義の学説をうみだした。空想的社会主義者は、資本主義を非難し、よりよい社会制度を夢想していたが、真の活路をさししめすことはできなかった。なぜなら、搾取のない新しい社会の創造者となることのできる社会勢力を知らなかったからである。ロシアの空想的社会主義者は、西ヨーロッパの空想的社会主義者とはちがって、農民革命による国の改革を主張し、土地共有にもとづく農民共同体をへて社会主義に移ることを夢想していた。彼らはこの農村共同体をあやまって社会主義の萌芽と考えていた。

農奴制の崩壊後、ロシアの革命運動はつよまった。この運動に主役を演じていたのはナロードニキ主義であった。「ナロードニキ」という名称は、当時の革命家が人民〔ナロード〕とその利益をまもることが自分の任務であると宣言したことにちなんだものであった。ナロードニキ主義は、さまざまな潮流と色合をともなう広範な社会運動であった。七〇年代に革命的ナロードニキ主義の主流を代表していたのは、エム・ア・バクーニン、ペ・エリ・ラヴロフ、ペ・エヌ・トカチョフであった。だが、ナロードニキはみなロシアの発展について同じ見解をもっていた。彼らは、農民的民主主義の思想家であり、ロシアの生活が特殊な構造をもっていると信じ、共同体が国の社会主義的発展の出発点になると考え、農民を理想化していた。農民的社会主義革命が可能であるという彼らの信念は、彼らをはげまし、ツァーリズムや地主の抑圧との英雄的な闘争に立

ちあがらせた。ナロードニキのなかには、ア・イ・ジェリャボフ、エヌ・イ・キバリチッチ、イ・エヌ・ムィシキン、エス・エリ・ペロフスカヤのような傑出した革命家がいた。ツァーリの死刑執行人どもは、革命的ナロードニキに容赦なく制裁をくわえ、彼らをしばり首にし、牢獄で虐待し、苦役でせめさいなんだ。革命的ナロードニキは、プロレタリアートの歴史的役割を理解していなかったが、彼らの一部は、ロシアではじめて、工場労働者のなかで宣伝をはじめた。レーニンは、ナロードニキ主義の複雑な、矛盾した性格をあきらかにするとともに、その革命的な農民民主主義や、革命の呼びかけを高く評価した。

一八七四年にナロードニキは自分の考えを実行する大胆な試みを企てた。革命的な志をもったインテリゲンツィアは、農民を専制政治にたいする革命に立上らせ、社会主義への即時移行を実現しようと考えて、「人民の中へ」、農村に出かけた。だが実生活は、農民が「共産主義的本能」をもっているというナロードニキの考えがまったく根拠のないものであることをしめした。農民は、彼らの説くことに半信半疑の態度をとった。ツァーリ政府は、何百人も革命家を逮捕した。けれども、「人民のなかにはいること」に失敗したからといって、ナロードニキの幻想はすぐにはくずれなかった。一八七六年の末にナロードニキの組織「土地と自由」（ゼムリャ・イ・ヴォーリャ）がうまれた。この組織は、農民の信頼をえて、彼らを革命に立上らせようとして、農村に支持者たちの居住地を設けた。しかし、これもナロードニキに成功をもたらさなかった。今後の闘争方法にかんする論争は、ますますはげしくなった。

一八七九年に「土地と自由」は分裂した。ナロードニキの少数派は、政治的自由をめざす闘争がブルジョアジーに有利なだけだと考えて、これを否定する旧来の立場にとどまった。少数派は、

地主の土地をふくめてすべての土地を農民のあいだで割替えることを説き、「黒い割替」（チョルヌイ・ペレデール）という組織を設立した。ナロードニキの大多数は、「人民の意志」（ナロードナヤ・ヴォーリャ）団に結集した。「人民の意志」団は、一歩前進して、ツァーリ専制との政治闘争に移った。だが、「人民の意志」派は、政治闘争を大衆闘争として理解せずに、革命家の小さな組織によってツァーリズムを打倒し権力を奪取することを目的とする陰謀であると解していた。彼らは、政府をおどかし瓦解させて権力を奪取するつもりで、個人的テロル、すなわちツァーリ政府の個々の代表者やツァーリ自身を暗殺することを闘争手段にえらんだ。マルクス、エンゲルス、レーニンは、「人民の意志」派の最大の功績は、農奴制と専制政治にたいして献身的にたたかったことにあると考えていた。しかし大衆の闘争が発展するにつれて、個人的テロルの戦術が革命運動にながす害毒は、ますます目につくようになった。なぜなら、この戦術は、大衆の積極性を拘束するものだったからである。

七〇年代のナロードニキ主義は、ロシアの革命運動の発展に重要な役割を果した。だがナロードニキのえらんだ闘争方法、とくに彼らの理論は非常にあやまっていた。ナロードニキ主義は、革命運動の敗北を必至にした。ナロードニキはエヌ・ゲ・チェルヌイシェフスキーの影響のもとにはあったが、彼らの見解は多くの問題で一歩後退していた。これらの見解は唯物論的観点からはほど遠かった。農民共同体が社会主義的発展の源であるというあやまった見解は、ロシアに資本主義が発展しはじめて、工業プロレタリアートが出現したという新しい歴史的状況のもとではとくに有害なものになった。だがナロードニキはこの新しい状況を理解しなかった。彼らは、ロシアにおける資本主義は「偶然な現象」であると主張した。ナロードニキは人民大衆の闘争の先頭に立ってこの闘争を最後まで遂行することを使命とする歴史的勢力に気づかなかった。この勢

力とは労働者階級であった。

略奪的な搾取と完全な政治的無権利とは、労働者の抗議をうんだ。はやくも六〇年代に、騒擾やストライキがおこった。七〇年代に、それはさらに増加した。一〇年間(一八七〇—一八七九年)に、不完全な資料によっても、三二六件の労働者のストライキと騒擾がおこった。それは、絶望に追いやられた人々の自然発生的な行動であった。彼らにはまだ、なぜ貧乏になるのか、なにを目標にすべきかがわかっていなかった。

だが労働者の自然発生的な闘争は、すでに自覚の萌芽形態であった。労働者は、彼らを抑圧する制度が確固不動なものとは信じないようになり、もうこれ以上すべてを奴隷の従順さでがまんするつもりはなく、自分たちの抑圧者に集団的に反撃する必要があると感じはじめてきたのである。闘争のなかで、大衆のなかから、先進的で自覚した労働者があらわれはじめた。彼らは革命家になっていった。

当時、革命運動を完全に支配していたのはナロードニキであったので、労働者革命家は、彼らの影響をうけて、彼らに同調していた。だが、先進的な労働者は、むさぼるように勉強した。彼らは、プロレタリアートの悲惨な状態の原因や、彼らを解放する道を熱心に探しもとめた。彼らは、すでに第一インタナショナルやヨーロッパの労働者党の活動についていくらか知っていた。ロシア語に翻訳されたマルクスやエンゲルスの労作が、はじめて彼らの手にとどきはじめた。彼らはパリ・コミューンの報せに熱狂した。労働者革命家は、ロシアのプロレタリアの大衆行動の経験について、いろいろと考えにふけった。労働者に革命における補助的な役割しかみとめなかったナロードニキの学説は、もはや彼らを満足させることができなかった。先進的な労働者は自、

分の闘争方法を見付けようとし、独自の組織をつくろうとした。

このような組織の最初のものは、一八七五年にオデッサで結成された「南ロシア労働者同盟」であった。この団体の組織者はインテリゲンツィア革命家のイェ・オ・ザスラフスキーであった。「同盟」は、ロストフーナードヌー、ハリコフ、オリョール、タガンロークに支持者をもっていた。「同盟」はほぼ一年間存続して、ツァーリの警察によって壊滅させられた。「南ロシア労働者同盟」は、「労働者を資本と特権階級との抑圧のもとから解放する思想を宣伝し」、「既存の政治経済制度とのきたるべき闘争」のために労働者を団結させることを、目的としていた。「同盟」にはまだナロードニキ主義の影響があらわれていた。たとえば、農民のあいだで活動するために農村に居住地をつくるという決議にそれがあらわれている。「同盟」の歴史的功績は、政治闘争の思想を労働運動内に普及させ、プロレタリアートの独自の組織をつくりだしたことにある。

七〇年代の中ごろから、ペテルブルクの先進的な労働者たちも、自分の組織の結成にとりかかったが、この組織は、一八七八年に「ロシア労働者北部同盟」という名で、最終的に結成された。「同盟」の組織者は、傑出した労働者革命家のヴィクトル・オブノルスキーとステパン・ハルトゥーリンであった。「同盟」の出現は、労働運動の発展上あらたに巨歩をふみだしたことを意味していた。その綱領には、プロレタリアートの国際的な階級連帯の思想が宣言され、「同盟」は、「その任務上西欧の社会民主党とかたく連携する」とのべられていた。「同盟」の目的は、「不正きわまる制度である現存の国家の政治経済制度を打倒する」ことであった。当面の任務は、政治的自由を獲得することであった。綱領には、まだナロードニキの影響があらわれていて、「同盟」は農民共同体を社会主義の要因とみていた。

「北部同盟」はストライキに数回参加し、ビラをだし、闘争に組織性をもちこんだ。「同盟」は、一八七九―一八八〇年に憲兵によって壊滅させられたが、その事業はほろびはしなかった。「だから、労働者諸君、決定権は諸君にある。わが偉大な同盟の運命とロシアの社会革命の成否は、諸君にかかっている」――「同盟」の綱領のこの熱烈な呼びかけは、先進的な労働者の自覚をうながした。

労働者階級は、しだいに広範な政治的任務をかかげるようになった。闘争のなかで、彼らの革命的な資質が形成されていった。労働者のあいだには、りっぱな革命家が現われた。モスクワの織工ピョートル・アレクセーエフが一八七七年に法廷でおこなった、ロシアの労働者階級の歴史的役割にかんする偉大な予言――「数百万の働く人々が筋骨たくましい手をあげれば、兵士の銃剣で守られた専制のくびきは、粉みじんにくだけちるだろう！」――は意味深くひびきわたった。プロレタリアートの最初の階級的組織がうまれた。だが、それは独自の道をすすむ労働運動の第一歩にすぎなかった。先進的な労働者は、ナロードニキ主義の思想の重荷を脱するために非常な苦労をしていた。プロレタリアの水流は、まだナロードニキ主義の本流から分離することができなかったのである。

一般民主主義運動から分離するためには、労働者階級は、みずからを他の階級にはっきりと対置し、自分の思想的および政治的立場を明確にしなければならなかった。このためには、労働運動は、ナロードニキ主義という小ブルジョア・イデオロギーを克服して、プロレタリアートの真のイデオロギーであるマルクス主義の基盤に立つ必要があった。

プロレタリアートの偉大な教師であるマルクスとエンゲルスは、一九世紀の中ごろ、科学にお

けるもっとも深刻な革命的変革をなしとげた。マルクスとエンゲルスは、社会主義を空想から科学にかえた。彼らは、資本主義を研究し、その発展法則を発見し、資本主義が、それに先だつ農奴制と同じく、歴史的に一時的なものであり、自分で自分の滅亡の諸条件を準備するということを、科学的に証明した。資本主義の発展につれて、生産手段の集中がおこる、すなわち、中小企業はたえず大企業に駆逐され、吸収される。労働と生産の性格はますます社会的になるが、共同労働の生産物はひとにぎりの資本家に取得される。なぜなら、生産手段は資本家のものだからである。このように、資本主義そのものが、社会主義実現の物質的条件である大規模生産をつくりだす。資本主義的生産様式を社会主義的生産様式に代えるためには、生産手段を資本家階級の私的所有から社会全体の所有にしなければならない。

だが、支配している搾取階級は、自発的に自分の財産、特権および権力を放棄するものではない。古い搾取社会を一掃して、搾取のない新しい社会をつくりだすことのできる社会勢力が必要である。このような社会勢力とはプロレタリアート、つまり近代労働者階級である。マルクスとエンゲルスは、資本主義の墓掘人であり、新しい共産主義社会の創造者である労働者階級の世界史的役割の根拠を示した。資本主義そのものがプロレタリアート——生産手段をもたず、生きてゆくために自分の労働力を売らざるをえない人々——をうみだす。プロレタリアートは、資本の増大につれて成長し、発達する。プロレタリアートは、資本主義社会では、他の勤労大衆にくらべて、独特な地位を占めている。労働者階級は、生産手段を私有していない。彼らは、搾取のうえにきずかれた社会の存続を全然利益としていない。プロレタリアートが革命で失うものは鉄鎖だけである。大都市の大工場における共同の労働は、労働者大衆をむすびつけ、彼らを訓練し、団結さ

せ、共同行動をおしえる。労働者は、いたるところで、主敵である資本家階級と衝突する。労働者と資本家との闘争は、ますますはげしくなる。もっとも抑圧された階級として、プロレタリアートは、社会全体の根本的改造、私的所有、貧困および抑圧の完全な廃絶を利益としている。プロレタリアートは、自分以外の勤労大衆全体をもあらゆる搾取から解放せずには、自分を解放することができない。したがって、労働者階級は全勤労者の根本的な利益を代表し、実際にそれを擁護する。プロレタリアートはもっとも革命的で、もっとも先進的な階級なのである。

　マルクスとエンゲルスは、資本主義社会の発展とこの社会内の階級闘争とが、不可避的に資本主義の滅亡とプロレタリアートの勝利をもたらすことを、科学的に証明した。この勝利は、資本主義にたいする断固たる闘争によって、かちとられる。資本主義的所有を社会的所有に代え、資本主義的生産関係を社会主義的生産関係に代えるためには、労働者階級は、すべての抑圧されている人々の先頭に立って、社会主義革命をなしとげ、搾取者の抵抗をおさえつけて、新しい社会主義社会を建設するために自分の政治的支配すなわちプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を、樹立しなければならない、と。

　マルクスとエンゲルスはこうおしえている。労働者階級の力は、その組織性と自覚にあり、自分の目標と任務、闘争の方法と手段をはっきり理解することにある。勝利するためには、労働運動は、科学的社会主義の理論で武装していなければならない。社会主義と労働運動が融合するばあいにだけ、労働者の闘争は、資本主義的搾取から自分を解放するためのプロレタリアートの意識的な階級闘争になる。社会主義と労働運動との融合を実現するのは、労働者階級の党であり、この党は職業別あるいは民族別に個々の労働者グループの利益を代表するのではなく、プロレタ

リアート全体の共通の利益を代表する。党は、労働運動にその政治的任務と終局目標とをさしめす。したがって、資本主義を打倒し、共産主義を建設するためには、プロレタリアートは自分の独自の党——共産党を必要とする。

地球のどこにいようと、労働者には資本主義という一つの共通の敵があり、社会主義、共産主義という共通の目標がある。資本は国際的な力である。全世界にわたって資本に勝利するためには、万国の労働者の協力が必要である。だからこそ、国際的な階級連帯は、労働運動に必要欠かせないものであり、労働運動が勝利する条件なのである。各国の労働者階級は、国際労働軍の各国部隊である。マルクスとエンゲルスは、「万国のプロレタリア団結せよ！」というプロレタリア国際主義の偉大なスローガンをかかげた。

マルクスとエンゲルスは、一八四八年に出た『共産党宣言』のなかで自分たちの世界観の基礎を述べている。彼らは、一八六四年に創立された国際労働者協会——第一インタナショナルの先頭に立った。

マルクス主義は、七〇年代に西ヨーロッパの労働運動内の有力な勢力となった。このことは、ロシアの革命運動にある影響をおよぼした。科学的共産主義の創始者であるマルクスとエンゲルス自身、多くのロシアの革命家と連絡を取っていた。彼らは、終始かわらぬ関心をいだいてロシアをみまもり、ロシア革命の世界的意義を深く信じ、ロシアの国と人民とをいっそうよく知るためにロシア語をまなんだ。マルクスとエンゲルスは、ナロードニキ主義の学説に最初の打撃をくわえた。エンゲルスは、マルクスの緊密な協力をえて書いた労作『ロシアの社会事情』のなかで、ナロードニキ主義の基本「原理」——ロシアは特殊な発展の道をとおるという考え、ロシアにお

ける資本主義の発展の否定、農民共同体の理想化、ロシア革命のブルジョア的性格にたいする無理解——に批判をくわえた。

一八八三年三月一四日、国際労働運動は、大きな損失をこうむった。科学的共産主義の創始者カール・マルクスがなくなったのである。マルクスの葬儀のさい、エンゲルスは「彼の名前も事業も何世紀も生きのこるだろう」と言った。マルクスの事業は、エンゲルスが引きついだ。マルクス主義はますます広く普及していった。欧米のいくたの国に社会主義政党が生まれた。一八八九年、パリ大会で第二インタナショナルが創立された。大会は、すべての国の勤労者に、国際連帯の日としてメーデーを祝うよう呼びかけた。

ロシアの先進的な人々は、はやくも一八四〇年ないし五〇年に、マルクスとエンゲルスの個々の労作を知るようになった。だが、ロシアの革命家のあいだにマルクス主義の創始者たちの著作が普及しはじめたのは、七〇年代のことであった。なかでも大きな意義をもっていたのは、『資本論』第一巻が一八七二年にロシア語で合法的に出版されたことであって、これはマルクスのこの主著の総じて世界最初の翻訳であった。

「『資本論』が刊行されるとほとんど時をうつさずに」とレーニンは書いている。「ロシアの社会主義者にとっては、『ロシアにおける資本主義の運命』の問題が理論上の主要な問題となった。この問題に熾烈きわまる議論が集中した。綱領上のもっとも重要な諸命題をどうきめるかは、この問題にかかっていた」(全集、第一巻、二七九ページ)。

このように、ナロードニキ主義が革命運動を完全に支配していた時期に、早くも、革命思想と労働運動の発展の歩み全体によって、ロシアにマルクス主義の現われる地盤がととのえられたの

である。だがロシアの革命運動のなかでマルクス主義が普及し勝利するためには、ナロードニキ主義の見解を克服し、それを思想的にうちやぶる必要があった。

3　プレハーノフと「労働解放」団。ロシアにおけるマルクス主義サークル。ヴェ・イ・レーニンの革命的活動のはじまり

一八七九―一八八〇年に、ロシアには革命的情勢が生じた。一八七七年には、きわめて不十分な資料によっても、一一の県で農民騒擾がおこり、一八八〇年には、それはもうヨーロッパ・ロシアの三四県を巻きこんだ。労働運動も成長した。七〇年代のおわりに、ペテルブルクでは大ストライキがおこった。ツァーリズムに反対する革命家たちの闘争は空前の規模に達した。支配階級である地主のあいだでは、革命にたいする恐怖が高まった。支配階級の上層部はあがきはじめた。彼らは警察のテロルを強化するかと思うと、今度は憲法を約束したりした。

けれども、労働者と農民はまだ、ツァーリの専制を打倒できるほど成熟してはいなかった。農民はばらばらな自然発生的な一揆をおこしただけであったし、プロレタリアートは革命闘争に一歩ふみだしたばかりであった。ブルジョアジーはびくびくしていて、ツァーリ政府に小さな改革を嘆願した。大衆とむすびつき、正しい革命的理論を武器とし、情勢を正しく判断して科学的な根拠のある闘争スローガンをかかげることができる革命的な党はなかった。「人民の意志」派は、個人的テロルというあやまった道をえらんだ。彼らは、一八八一年三月一日、皇帝アレクサンド

ル二世を暗殺した。だが、彼のかわりにアレクサンドル三世が帝位についた。あるツァーリを別のツァーリに代えても、国家制度と社会制度にはなんの変化も生じなかったばかりか、専制はますます大衆を圧迫するようになった。ツァーリ政府は攻勢に転じた。人民から遊離した「人民の意志」派は壊滅させられた。革命の波は静まった。

敗北に影響されて、ナロードニキ主義の危機がはじまった。ナロードニキのあるものは、「人民の意志」派の組織を再建しようと努力したが、成功しなかった。大多数は、闘争をやめた。闘争をやめようとしなかった革命家たちは、つぎのような問題に直面した。ツァーリを暗殺した結果として、ロシアに革命がおこらなかったのはなぜか、革命運動の将来の見通しはどうか、社会主義を実現することのできる現実の勢力はどこにあるのか、革命闘争の方法と手段はどんなものであるべきか？　新しい革命理論の探究が盛んになったのは当然であった。それにかりたてていたのは、なによりも、ナロードニキ主義にたいする幻滅であった。ロシアの労働運動の発展と西ヨーロッパのプロレタリアートの成功は、革命思想に大きな影響をおよぼした。

亡命をよぎなくされた革命的ナロードニキ――「黒い割替」派の小グループは、マルクス主義を熱心に研究し、注意ぶかく西ヨーロッパの労働運動をまなぶようになった。このグループは、ロシアにおける労働者のストライキの意義、とりわけ先進的なプロレタリアのあいだでおこなった自分たちの活動の経験を、真剣に考えた。一八八三年九月二五日、このグループは、自分たちはナロードニキ主義ときっぱり手を切る、ロシアの労働者階級の独自の党を結成する必要があると、綱領的な声明をおこなった。このグループは、マルクス主義を普及させること、ナロードニキ主義を批判すること、マルクス主義とロシアの勤労者の利益の見地からロシアの社会生活のも

っとも重要な諸問題を検討することを、その基本任務とすると声明した。こうしてロシア最初のマルクス主義組織——「労働解放」団がうまれた。これにはいっていたのは、ゲ・ヴェ・プレハーノフ、ぺ・べ・アクセリロート、エリ・ゲ・ドイチ、ヴェ・イ・ザスーリッチ、ヴェ・エヌ・イグナトフであった。このグループの創立者で指導者であったのは、マルクス主義の有能な理論家で宣伝家のゲ・ヴェ・プレハーノフである。

マルクス主義の宣伝こそ、「労働解放」団の従事したものであった。同団は、『共産党宣言』、『賃労働と資本』、『哲学の貧困』、『ルートヴィヒ・フォイエルバッハ』、『科学的社会主義の発展』、『自由貿易についての演説』、『フリードリヒ・エンゲルスのロシア論』(『ロシアの社会事情』)など、マルクスとエンゲルスの多くの著作をロシア語に翻訳出版して、ロシア国内に秘密に配布した。マルクスとエンゲルスは、自分の著作のいくつかのロシア語版のために、特別の序文を書いた。プレハーノフは、多くの著書や論文を執筆し、そのなかでマルクス主義を宣伝し、擁護した。ロシアの革命家たちは、プレハーノフの著書のなかに、彼らの関心をひいていた多くの問題の解答を見いだした。

ロシアのマルクス主義者の最初の著作は、一八八三年の秋に出た『社会主義と政治闘争』というプレハーノフの小冊子であった。プレハーノフは、ロシアの革命運動の分析にもとづいて、階級闘争はすべて政治闘争であるというマルクスの命題がきわめて重要であることをしめした。社会主義と政治闘争は、不可分のものであり、緊密にむすびつき、融合している。社会主義への道は、労働者階級の政治闘争、プロレタリアートによる政治権力の獲得を通じている。ロシアにおける革命運動は、社会主義と労働運動との融合をもたらすであろう。そうなれば、労働運動は不

敗のものになるであろう、と。

ナロードニキ理論のあやまりを証明するためには、その当時まだよく研究されていなかった、ロシアに生じている経済過程を研究することが必要であった。一八八五年に出版されたプレハーノフの著書『われわれの意見の相違』は、ロシアの経済にマルクス主義的分析をくわえる最初のこころみであった。

ナロードニキは、ロシアの資本主義は発展の条件をもたない「偶然の現象」であると主張し、ロシアにおける資本主義を総じて退廃であり退歩であるとみていたが、プレハーノフは彼らの見解を反駁した。国内市場の発展、工場数、労働者数、家内工業者の状態などの事実は、ロシアがすでに資本主義の道にはいっていることをものがたっていた。ナロードニキがしていたように、この点についてぐちをこぼしたり、「プロレタリアート主義の病毒」といったりするのは正しくない。革命家の任務は――とプレハーノフは言っている――資本主義の発展を革命のために利用することにある。資本主義は強力な革命勢力であるプロレタリアートをうみだす。だから革命家は、専制と資本主義にたいする闘争では、この力をよりどころとしなければならない。

農民共同体は資本主義をふせぐとりでであり、社会主義へ移るかけ橋であるとしたナロードニキの見解は、まったく根拠のないものであった。農民共同体は、以前には多くの国にあったが、資本主義の打撃によって崩壊した。ロシアにも共同体の分解のはっきりしたきざしがあらわれていた。共同体の内部で貧農と富農とが分離した。貧農は、自分の土地をたがやす手段をもたなかったので、土地を富農にひきわたし、自分は雇農として富農にやとわれるか、さもなければ賃仕事をさがしによそに出ていくかしていた。貧農はすでに富農と高利貸に隷属しており、共同体は

貧農にとって重荷になった。だがツァーリ政府にとっては、共同体は、連帯保証にもとづいて税金をしぼりとる手段として有利なものであった。

プレハーノフは、ナロードニキが社会改革に果たす労働者階級の先進的役割を否定することが、どんなにはなはだしいあやまりであるかをしめした。革命的な役割をになっているのは農民ではなく、労働者である。農民は小経営をいとなみ、分散している。彼らは、社会主義の学説を受けいれにくく、組織にしたがいにくい。大規模な工場生産とむすびついたプロレタリアートのばあいは、事情は別である。プロレタリアートはたえず数的に増大し、社会主義思想を受けいれやすく、組織能力をもっている。革命家の任務は、労働者の自覚をたかめ、彼らの自主活動をのばし、組織を発展させることである。労働者の社会主義政党の結成に全力をあげなければならない。いま眼目は、労働者のあいだで社会主義の宣伝をおこなうことである。

プレハーノフは、ナロードニキのあやまった社会観に批判をくわえた。彼は、その著作のなかで、マルクス主義の唯物論をいっそう豊かにした。とくに重要な意義をもっていたのは、一八九五年に出版された著書『史的一元論の発展の問題によせて』であった。ナロードニキは、社会発展の客観的法則を否定し、思想が世界を支配すると考えていた。インテリゲンツィアが社会に決定的な影響をおよぼしているので、歴史の車輪をどの方向にむけるかは、彼らの意志にかかっていると、ナロードニキは声明した。ナロードニキは、能動的な「英雄」と受動的な「大衆」という、あやまった理論にしたがっていた。この理論によると、歴史をつくるのは個々の、傑出した個人であり、大衆、人民、群衆は彼らにしたがう。だが、社会生活やその発展を規定するものは、傑出した個人の願望や思想ではなくて、物質的条件であり、社会的生産様式に生じる変化である。

人民こそ、歴史の真の創造者なのである。思想は、それが大衆をつかむときにはじめて、物質的な力となる。傑出した個人は、彼らが社会発展の機の熟した要求を正しくいいあらわすかぎりでだけ、重要な役割を演じる。だがどんなに傑出した個人でも、歴史的諸条件を理解せず、社会の要求にそむいて行動するならば、かならず失敗する。社会改革のために、歴史発展の諸法則の正しい認識をあたえるのは、マルクス主義だけである。プレハーノフの著書は、科学的な唯物論的世界観を宣伝するうえで大きな意義をもっていた。同書によって「ロシアのマルクス主義者の一世代がそだてられた」と、レーニンは指摘している（全集、第一六巻、二八八ページ）。

「労働解放」団の綱領は、ロシアのマルクス主義的労働運動に多くの貢献をした。この綱領は大体において、ロシアのマルクス主義者の闘争の道と諸任務を、その当時としては正しく規定していた。綱領では、労働者階級だけが社会主義をめざす自主的な闘士であることが強調されていた。プロレタリアートの終局目標は、資本主義を新しい社会制度である共産主義に代えることである。この目的をとげる前提条件は、労働者階級が政治権力を獲得することである。綱領には、革命的な労働者党を結成する必要が宣言されていた。この党の最初の政治的任務は、専制を打倒することであった。だがこれは、まだ戦闘的な政党の綱領ではなく、ロシアに幅広く自主的な労働運動がなかったときに活動していた、革命家の在外組織の綱領であった。綱領の多くの命題が抽象的であいまいな理由は、ここにあった。

「労働解放」団は、その当時のロシアが直接に社会主義に移ることが可能だというナロードニキ主義の幻想を一掃した。このような考えは、理論的にも、歴史的にもあやまっていた。革命闘争のもっとも焦眉の問題は、農奴制の遺物の一掃と専制の打倒であった。したがって、国が直接

に当面していたのは、社会主義革命ではなくて、ブルジョア革命であった。ロシア最初のマルクス主義者のグループがこの点を指摘したのは、疑いもなく彼らの功績であった。

けれども、このグループは、きたるべきブルジョア革命のなかでの諸階級の力関係について漠然とした観念しかもたず、革命におけるブルジョアジーと農民の地位と役割に正しい評価をくだすことができず、この問題で矛盾した立場をとっていた。プレハーノフは、いくつかの著作のなかで、プロレタリアートはブルジョアジーを活動の目標にしなければならないというあやまった見解をのべ、農民の革命的役割を無視した。また、当分のあいだ自由主義的ブルジョアジーを社会主義の「赤い妖怪」でおびやかしてはならないから、自由主義者も賛成するような綱領が必要であるという考えものべられていた。ロシアにおける将来の労働者党は、当時、西ヨーロッパに存在していた社会民主諸党に似たものと考えられていた。これらのあやまった見解は、のちにこのグループの活動家がマルクス主義から離れる一因となり、彼らを日和見主義の陣営にみちびくことになった。

エンゲルスは、ロシア最初のマルクス主義組織が結成されたことを歓迎した。プレハーノフは第二インタナショナルの創立に参加し、その第一回大会で演説した。

「労働解放」団は、ロシアの歴史で顕著な役割を演じた。プレハーノフの理論的諸労作は、ロシアの文化をゆたかにした。ロシアの解放運動にはマルクス主義の流派が生まれた。ナロードニキ主義が完全に支配した時期はおわった。マルクス主義の批判の的確な打撃を受けて、当時の革命的イデオロギーの基盤であったナロードニキ主義は崩壊した。しかし、ナロードニキ主義が思想的に粉砕されるには、まだほど遠かった。それは、革命的インテリゲンツィアと先進的な労働

者のあいだにまだ大きな影響力をもっていて、マルクス主義をさえぎる思想上のおもな障害であった。マルクス主義は、ますます深く革命運動のなかにはいりこみ、多くのナロードニキにますます強い影響をおよぼしながら、自分の進路をたたかいによって切りひらいていった。その証拠の一つは、アレクサンドル・イリイチ・ウリヤーノフ（レーニンの兄）のグループの活動である。このグループの綱領には、マルクス主義の影響がみられ、社会主義は資本主義の不可避的な結果とみられ、労働者は社会主義政党の中核として重要視されていた。だが、政治闘争はまだ陰謀テロリスト風に理解されていた。グループは、「『人民の意志』党のテロリスト派」と自称していた。一八八七年三月一日にツァーリを暗殺しようとしたくわだては、失敗した。ア・イ・ウリヤーノフその他の指導者は処刑された。

ナロードニキ主義とのたたかいを通じてのみ、ロシアのマルクス主義は成長することができ、強固になることができた。

「労働解放」団の活動は、ロシアに労働者党を創立するための道をひらこうとしていた。だが、このグループは、実践的には大衆的な労働運動とむすびついていなかった。このグループの歴史的地位を、レーニンはつぎのように正確に規定している。

『労働解放』団は、ただ理論的に社会民主主義派を創設し、労働運動にむかって一歩ふみだしたにすぎない」（全集、第二〇巻、二九二ページ）。

ナロードニキ主義の理論と実践の批判的再検討は、ロシア国内でもおこなわれていた。革命的な志をもった青年の秘密集会では、激烈な論争がたたかわされ、新しい道の探究がねばりづよくつづけられていた。「労働解放」団は、革命家たちに大きな感化をおよぼした。ロシアを支配し

ていた残忍な政治的反動にもかかわらず成長をつづけていた労働運動を地盤として、革命思想は発展していった。八〇年代には四四六件のストライキと騒擾がおこり、九〇年代の前半には一五万七〇〇〇人の労働者の参加する二三二件のストライキがおこった。

一八八五年一月にオレホヴォ－ズエヴォのモロゾフ工場でおこったストライキは、組織的な点でとくにきわだっていた。ストライキの先頭に立っていたのはすぐれた指導者ピョートル・モイセエンコとヴァシリー・ヴォルコフであった。モイセエンコはかつて「北部同盟」の一員で、投獄や流刑に処せられたことがあった。もっとも積極的な労働者たちの秘密会議で、以前の出来高単価を復活し罰金を引き下げよという要求が作成された。労働者たちの不屈と大胆さとは、社会の広い層の眼をみはらせ、ツァーリの政府を仰天させた。ストライキは武力で弾圧された。約六〇〇人の労働者が追放され、三三人が被告席にすわらされた。だが、裁判では、労働者愚弄のおどろくべき状況が暴露されたので、ツァーリの法廷の陪審員でさえ、一〇一項目にもおよぶ起訴箇条のすべてに、「いな、無罪である」とこたえたほどである。反動新聞『モスコーフスキエ・ヴェードモスチ』〔『モスクワ報知』〕は憤慨して、「ロシアにあらわれた労働問題に敬意を表した一〇一発の祝砲」と書いた。モイセエンコとヴォルコフは無罪とみとめられたにもかかわらず、憲兵は爪牙から二人を放さなかった。彼らは流刑に処せられた。ヴォルコフはまもなく死亡した。モイセエンコは、のちにボリシェヴィキになった。

モロゾフ工場のストライキは、労働者の階級的連帯性と階級意識とがめざめたことをものがたっていた。労働者たちは、指導と組織の意義を悟った。ヴォルコフとモイセエンコが法廷にひきだされると、そこにいた労働者は全員起立して、彼らにむかって深く頭をさげた。

モロゾフ工場のストライキは、ロシアの労働運動の重要な道標となった。のちにレーニンは、これを個々の社会主義者が参加した大衆的ストライキと特徴づけた。このストライキは、強固な組織に指導されるなら労働者階級がどんなにおそるべき力になりうるかを、非常にはっきりとしめした。ツァーリの政府は、まもなく、資本家の横暴をいくらか制限した罰金法を公布せざるをえなくなった。

プロレタリアートの闘争は、革命思想がマルクス主義にむかってすすんでいくのをうながした。在外の「労働解放」団とならんで、ロシア国内にも、まず最初にペテルブルクに、マルクス主義者があらわれた。そこでは、一八八三年から一八八四年にかけての冬に、ブラゴエフ・グループとして歴史に記されているマルクス主義組織「ロシア社会民主主義者党」がうまれた。グループの組織者は、ペテルブルク大学の学生でブルガリア人のデ・ブラゴエフであった。彼はのちにブルガリアの社会民主党の創立者になり、ついで共産党の創立者にもなった。

ブラゴエフ・グループと「労働解放」団のあいだにはまもなく連絡がついた。ブラゴエフ・グループは、ペテルブルクの労働者と学生のあいだでマルクス主義の宣伝を広くおこなった。このグループによって、労働者サークルが一五ほど組織された。一八八五年にこのグループは、新聞『ラボーチー』〔『労働者』〕を二号秘密に発行した。これはロシア最初の社会民主主義的な労働者新聞であった。

ツァーリの警察は、一八八七年のはじめにブラゴエフ・グループを壊滅させた。だが、その活動は、あとかたなく消えたのではなかった。グループの蒔いた種子は、芽ばえた。このグループによって、国の政治上、工業上の中心地であったペテルブルクの労働者のあいだにマルクス主義

を系統的に宣伝する端緒(たんしょ)がひらかれたのである。

一八八五年の秋、ペテルブルクに、のち「サンクト・ペテルブルク職工協会」と称するようになったマルクス主義組織がもう一つ生まれた。その組織者はペ・ヴェ・トチスキーであった。ブラゴエフ・グループとトチスキー・グループは、まだばらばらに行動していて、たがいに連絡をとっていなかった。この「協会」の功績は、先進的な労働者との強固な組織的連係をうちたてたことにある。この「協会」のサークルのなかで、イェ・ア・アファナシエフ（クリマノフ）やヴェ・ア・シェルグノーフのようなすばらしい労働者革命家がそだてられた。のちに、トチスキー、シェルグノーフおよびクリマノフはボリシェヴィキになった。

一八八八年に警察は「協会」を壊滅させた。逮捕をまぬがれた労働者たちは、一八八八―一八八九年に結成された新しい組織と継承関係を確保した。この新しい組織は、その組織者の名をとってエム・イ・ブルスネフ・グループとして知られている。ブルスネフ・グループは、しだいに整然とした組織に成長した。ペテルブルクのほとんどすべての区に、このグループのサークルがあった。全体で約二〇のサークルがあり、各サークルにはそれぞれ六―七名の労働者がいた。婦人労働者のあいだにも最初のマルクス主義サークルがつくられた。

ブルスネフ派は労働者との接近をめざした。彼らは、いくつかのストライキにさいしてアピールをだした。一八九一年に、先進的な労働者たちは、民主主義作家エヌ・ヴェ・シェルグノーフの葬式に参列した。同じ年に、ブルスネフ派は、ロシアではじめてメーデーの祝祭を組織した。郊外での秘密の会合には七〇人から八〇人の労働者があつまった。労働者たちの演説は、のちにひそかに印刷されて広く配布された。これは、先進的な労働者の最初の社会民主主義的デモンス

トレーションであったが、大衆運動はまだ存在していなかった。

ブルスネフ派の多くは、社会民主主義運動の積極的な参加者になった。のちに労働者エフ・ア・アファナシエフは党の有数な活動家になった。一八九二年に、憲兵はブルスネフ・グループを壊滅させた。小さな中核だけが無事にのこり、いくつかの労働者サークルとのむすびつきを維持していた。

八〇年代のおわりに、マルクス主義はロシアのいくつかの地区に広がっていた。モスクワにマルクス主義サークルがあらわれた。ヴォルガ沿岸地方——カザン、サマラ(クイブィシェフ)、ニジニ・ノヴゴロト(ゴーリキー)——は、マルクス主義の宣伝のおこなわれた地区の一つになった。ここでは、有能で献身的な革命家エヌ・イェ・フェドセーエフが、革命家のマルクス主義への転換に大きな影響をおよぼした。のちに、彼はシベリアの流刑地で死んだ。ウクライナではキエフ、ハリコフ、オデッサ、エカテリノスラフ(ドネプロペトロフスク)に、マルクス主義サークルが生まれた。ウクライナにおける最初のマルクス主義サークルの組織者は、著名な革命家ユ・デ・メリニコフであった。

ボリシェヴィキ党、共産党の創立者であり、首領であるヴラヂーミル・イリイチ・レーニン(ウリヤーノフ)は、ロシア最初のマルクス主義者の一人であった。一八八七年に一七歳の青年であったレーニンは、カザン大学生の革命的行動に参加して逮捕され、追放された。こうしてレーニンは革命闘争の道にはいった。あらゆる専横と抑圧にたいするはげしい憎しみ、働く民衆にたいする熱烈な愛情が、レーニンを革命家にした。彼は勤労者を抑圧と搾取から解放するための闘争、人類の幸福な未来のための闘争に、全生涯をささげた。レーニンは、彼の先輩であるロシ

アの革命家たちの最高の英雄精神と一身をかえりみない自己犠牲の伝統をうけついだが、彼らのあやまりをおかすことのない別の道、革命的マルクス主義の道をすすんだ。

マルクスやエンゲルスの著作を研究して、レーニンは確固たるマルクス主義者になった。一八八八年に、彼はカザンのマルクス主義サークルの一つにくわわった。一八八九年に彼はサマラにうつり、そこにマルクス主義サークルを組織し、ニジニ・ノヴゴロト、ヴラヂーミル、ペテルブルクのマルクス主義者たちと連絡をつけた。レーニンは、当時はやくも、ロシアにおけるマルクス主義の普及に顕著な役割を演じていた。マルクス主義は、世界を革命的に改革し、経済的・政治的・精神的奴隷状態から勤労者を解放する強力な武器であると、レーニンはみていた。

マルクス主義理論を書物のうえの抽象理論として受けいれることは、レーニンには、縁もゆかりもないことであった。彼にとっては、マルクス主義は、死んだ教条ではなくて、つねに革命的行動の生きた指針であった。レーニンは、すでにその革命的活動の初期に、ロシアのマルクス主義者のもっとも重要な理論的課題の解決に着手した。それは、当時のロシアの社会経済構造、ロシアの経済発展と階級関係を全面的に研究することであった。このような活動なしには、ナロードニキ主義を徹底的に粉砕し、ロシアにおける労働者党の綱領と戦術を科学的に仕上げることはできなかった。

一八九三年の春、レーニンは論文『農民生活における新しい経済的動向』——現存する彼の著作の最初のもの——のなかで、いくつかの重要な思想をのべた。彼は、農民の内部に深刻な経済的反目と階級矛盾が熟していること、農民は三つの基本的なグループ——貧農、中農、富農——に分解しつつあること、ロシアでは資本主義が破竹の勢いで発展していることを証明している。

この論文は、若いレーニンが、ロシアの現実の複雑な問題の分析に、マルクス主義の方法をみごとに適用していることをしめしている。

一八八三―一八九四年は、ロシアの社会民主主義運動が、緩慢に、苦労しながら成長した時期であった。新しいマルクス主義学説の支持者は非常に少なかった。広大な国全体で、大都市に一〇あまりのマルクス主義のグループとサークルがあったにすぎない。これらのサークルは、先進的な労働者のあいだで宣伝をおこなうだけで、大衆のなかで政治活動をおこなっていなかった。レーニンは、当時社会民主党は胎内発育過程にあった、と書いている。

ナロードニキとの思想闘争のなかで、初期のロシア・マルクス主義者がきたえられた。科学的社会主義の学説は、彼らに将来のたたかいの道を明るく照らしだし、彼らはその知識を労働者のあいだにもちこんだ。革命的サークルのなかでは、マルクス主義者とナロードニキとの激闘がおこなわれていた。ますます多くの先進的な労働者やインテリゲンツィア革命家が確固たるマルクス主義者になっていった。八〇年代のおわりから九〇年代のはじめにかけて活動したマルクス主義者の世代のなかから、エム・エフ・ヴラヂミルスキー、ヴェ・ヴェ・ヴォロフスキー、エリ・ベ・クラシン、ゲ・エム・クルジジャノフスキー、ヴェ・カ・クルナトフスキー、ア・ヴェ・ルナチャルスキー、エム・エヌ・リャドフ、エヌ・ア・セマシコ、ペ・イ・ストゥーチカ、エム・ゲ・ツハカーヤ、ア・デ・ツュルーパ、ヴェ・エリ・シャンツェル（マラト）、ア・ゲ・シリフテル、その他多くのボリシェヴィキ党の著名な活動家が輩出した。この時代に、マルクス主義思想の影響をうけながら、未来のプロレタリア作家のア・エム・ゴーリキーとア・エス・セラフィモヴィチが形成途上にあった。マルクス主義は、ロシアの精神生活と政治生活のうえで顕著な力

になっていった。ナロードニキ主義の影響は大幅にうちやぶられた。

要約

一九世紀後半の帝政ロシアでは、資本主義の発展と工業プロレタリアートの出現にともなって、革命闘争がますます激しくなった。それは労働運動、農民騒擾、革命的組織の活動にあらわれていた。

革命闘争のはじまりかけていた国のすべてでかつてそうであったように、ロシアでも、はじめは社会主義の学説と労働運動が別々に存在していた。ナロードニキ主義の危機の結果、また西ヨーロッパのプロレタリアートの成功の影響を受け、ロシアの労働運動を基盤として、ロシア最初のマルクス主義諸組織が徐々にうまれてきた。一八八三年にプレハーノフが組織した「労働解放」団は、ナロードニキ主義に思想的大打撃をあたえ、労働運動にむかって最初の一歩をふみだした。

ロシアのマルクス主義は、ナロードニキ主義との闘争を通じて発展し、強固になった。だが、古い、時代おくれの見解は、けっして、頑強で、はげしい抵抗をせずに、自分の席をゆずるものではない。マルクス主義が勝利してロシアの労働運動の理論的基礎になるまでには、ナロードニキ主義にたいする多年にわたる断固たる思想闘争が必要であった。

九〇年代の中ごろまでロシアのマルクス主義は、労働運動とむすびつかない思想的潮流にとどまっていた。プロレタリアートの闘争の発展とマルクス主義諸組織の活動とは、科学的社会主義

と大衆的な労働運動とがむすびつくため、ロシアにマルクス主義党が成立するための諸条件をととのえた。マルクス主義党を創立するこの課題は、レーニンによって解決された。

ロシアの労働者階級と革命運動の歴史には新しい時代がはじまろうとしていた。

第二章　ロシアにマルクス主義党を創立するための闘争。ロシア社会民主労働党の結成。ボリシェヴィズムの成立

（一八九四―一九〇四年）

1　マルクス主義の発展におけるレーニン的段階のはじまり。ナロードニキ主義と「合法マルクス主義」にたいするヴェ・イ・レーニンの闘争。ペテルブルク「労働者階級解放闘争同盟」。ロシア社会民主労働党第一回大会

一九世紀の九〇年代に、ロシアの資本主義はあらたな進歩をとげた。当時は産業の繁栄期であった。とくに鉄道建設が急激に進展し、鉄鋼業と燃料産業が急速に発展していった。高い利潤にひきつけられて、外国のブルジョアジーの資本が、さかんに流入しはじめた。この一〇年間に、生産額と労働者総数は倍増した。親の代からのプロレタリアは工業労働者の半数を占めていた。彼らの父親もすでに工場で働いていたのである。

七〇―八〇年代の自然発生的なストライキは、労働者大衆が意識的な闘争にめざめる素地をととのえた。労働運動が盛りあがる前夜の一八九三年の秋、レーニンは革命活動にくわわるため、サマラからペテルブルクにうつった。彼がペテルブルクのサークルでおこなった最初のいくつかの演説ははやくも、傑出した活動家、すぐれた理論家ですばらしい組織者、労働者の事業が不敗であることを熱烈に信じ、他人にもこうした信念をつたえる、つきることのない精力と鉄のような意志をもった不屈の革命家が革命運動のなかにあらわれたことをしめしていた。まもなくレーニンは、ペテルブルクのマルクス主義者のだれからも認められた指導者となった。

レーニンはマルクス主義者に、独自の労働者党を創立する任務を負わせた。党の創立は、警察の追求にさらされながら、地下活動のきびしい条件のもとでおこなわなければならなかった。党は、ナロードニキ主義だけでなく、その他の政治的諸潮流とも、また目先の利益のためにプロレタリアートの根本的利益を犠牲にする労働運動内の日和見主義者ともはげしくたたかいながら、つくられていった。以前、マルクス主義のための闘争で主役をはたしていたのは、「労働解放」団であった。いまや、この闘争で決定的な意義をもつようになったのは、ロシア国内に成長してきた、マルクス主義者の基幹活動家であった。

マルクス主義を確立しプロレタリア党を創立するうえで思想上の主な障害になっていたのは、いまなおナロードニキ主義であった。これを思想的に徹底的に粉砕する必要があった。革命的サークルのなかにマルクス主義の影響が急速にのびていくのをくいとめようとして、ナロードニキは、マルクス主義攻撃をはじめた。これにこたえてロシアのマルクス主義者の多数の抗議の手紙が発表されたが、なかでもエヌ・イェ・フェドセーエフの手紙がとくにすぐれていた。これらの

手紙は、手から手へわたされて、地下の革命的サークルのあいだでむさぼるように読まれた。

ナロードニキ主義の思想的粉砕にめざましい役割をはたしたのは、一八九四年の夏に秘密に印刷されたレーニンの著書『「人民の友」とはなにか、そして彼らはどのように社会民主主義者とたたかっているか』であった。この著書では、ナロードニキ主義の世界観、経済観、政綱、戦術が批判されていた。

ナロードニキの観念論的な歴史観に、レーニンは社会生活についての唯物論的な見解を対置した。歴史の進行を規定するものは、個人の主観的な願望ではなくて、社会発展の客観的な法則である。マルクス主義は、資本主義のあらゆる形態の矛盾をあばきだし、プロレタリアートに資本主義的搾取から解放される道をしめす。ロシアの社会主義者の任務は、マルクス主義理論を仕上げ、この理論を労働者大衆のあいだに普及させ、労働者階級を組織することである。マルクス主義者の理論活動と実践活動とは不可分のものでなければならない。理論は実生活からだされる問題にこたえなければならず、実践の資料によって確かめられる。こうしてはじめてマルクス主義者は、教条主義やセクト主義におちいらずに、プロレタリアートのほんとうの指導者になることができる。

レーニンは、ナロードニキ主義が深刻な変化をとげて、革命的ナロードニキ主義から自由主義的ナロードニキ主義になったことをあきらかにし、九〇年代のナロードニキを徹底的に暴露した。彼らは、資本主義が、農民を零落させたり、勤労者を搾取したりすることなしに、「人民の生活のなかにはいる」ことができるかのように、主張していた。彼らは勤勉な「経営じょうずな百姓」をほめたたえた。つまり、実際には、富農経営の発展をほめそやしていたのである。ナロードニ

キは、農村における階級矛盾や富農への貧農の隷属をごまかし、こうしたことはすべて、「人民を愛する」行政当局の手で容易にとりのぞくことのできる単純な「欠点」であるようにみせかけていた。彼らは、こまごました改革を盛った、けちくさい綱領を提案していたが、それらの改革は、農村における搾取の根底にはふれずに、革命闘争から農民をそらせ、金持の富農経営にしか利益をもたらさないものであった。ナロードニキは、ツァーリズムにたいする闘争を放棄した。いまでは彼らは、ツァーリ政府が階級を超越したもので、したがって勤労者をたすけることができると称して、ツァーリ政府にすべての望みをかけていた。

自由主義的ナロードニキ主義は、革命的ナロードニキ主義とは根本的にちがっていた。ナロードニキ主義の変質は、農村に生じた深刻な社会経済過程の結果であった。七〇年代の革命的ナロードニキは、農村の階層分化がまだあまりすすんでいない状況のもとで活動し、農民大衆の気分を反映していた。九〇年代の自由主義的ナロードニキは、資本主義の発展の影響を受けて農民の分解がすすんでいる状況のもとで活動し、実際には農村の上層部分の利益の代表者であった。だから、ナロードニキは人民のにせの友であった。

ナロードニキの見解の反動的な面を容赦なく暴露すると同時に、レーニンは、彼らの綱領には、農奴制の遺物にたいする抗議をあらわす民主主義的特徴があることを強調した。レーニンはこう述べた。人民の真の代表者であるマルクス主義者は、一般民主主義的要求を他の者より的確に、徹底的に、幅広く貫徹する。彼らは、ツァーリズムを打倒し地主への隷属と資本主義的搾取をなくすように呼びかける。

レーニンは、『「人民の友」とはなにか、そして彼らはどのように社会民主主義者とたたかって

いるか』のなかで、人民の政治的指導者としてロシアの労働者階級のすすむべき歴史的進路をしめし、プロレタリアートのヘゲモニー（指導的役割）の思想を提唱し、革命闘争におけるプロレタリアートの同盟者の問題を提起した。ツァーリの専制とたたかううえでの労働者階級の同盟者は、農民であり、広範な人民大衆である。労働者階級は、資本主義に反対するたたかいでただ一人でたたかうのではなく、国内の勤労被搾取住民の先頭に立ってたたかっている。

プロレタリアートが歴史的任務をはたすためには、労働運動に意識性と組織性をあたえるマルクス主義党が必要である。だから、ロシアのマルクス主義者が第一にしなければならない仕事は、ばらばらなマルクス主義サークルをまとめて、単一の社会主義的労働者党をつくることである。労働者のばらばらな一揆やストライキをプロレタリアートの意識的な階級闘争に転化する強固な組織、すなわち党をマルクス主義者がつくりだすとき、「そのとき、ロシアの**労働者**は、すべての民主主義的分子の先頭に立ちあがって、絶対主義をうちたおし、公然たる政治闘争のまっすぐな道をとおって、**ロシアのプロレタリアート**を（**万国の**プロレタリアートと手をたずさえて）**勝利の共産主義革命**へみちびくであろう」と、レーニンは書いている（全集、第一巻、三一八ページ）。

レーニンは、ロシアのマルクス主義者のなかではじめて、プロレタリアートのヘゲモニーという思想と、ツァーリズム、地主、ブルジョアジーを打倒する主要な手段としての労働者階級と農民の革命的同盟という思想とを提出した。これらの思想は、マルクス主義理論への貴重な貢献であった。レーニンは、先進的労働者のあいだに、すべての抑圧されている者の指導者としてのプロレタリアートの歴史的役割を理解し、人民大衆、まず第一に農民のなかにひそんでいる巨大な革命的能力を理解する力をやしなっていった。

九〇年代に、ロシアの革命的マルクス主義者には、ナロードニキのほかに、いわゆる「合法マルクス主義者」というもうひとりの敵も現われていた。これは、合法的な、つまりツァーリ政府の許可をえた新聞雑誌で、マルクス主義という名にかくれて自分たちの見解を説いていたブルジョア・インテリゲンツィアであった。国の資本主義的発展を擁護するとともに、「合法マルクス主義者」は、小規模生産の擁護者であるナロードニキを、彼らなりに批判した。彼らは、いっさいの革命性をマルクス主義から取り除いてそれをほかならぬこういう批判に順応させようとしていた。「合法マルクス主義者」の先頭に立っていたペ・ベ・ストルーヴェは、資本主義をほめたたえ、ブルジョア制度にたいして革命的にたたかうのでなく、「わが国の非文化性をみとめて資本主義を見ならう」よう呼びかけた。こういうわけで、「合法マルクス主義者」は、ブルジョア・イデオロギーの表明者であった。彼らは労働運動をブルジョアジーの利益に順応させようとしていた。

ナロードニキ主義とたたかうにあたって、革命的マルクス主義者は「合法マルクス主義者」との一時的な協定を受けいれ、後者の編集していた諸雑誌に自分たちの著作をのせはじめた。それと同時に、レーニンは、著書『ナロードニキ主義の経済学的内容とストルーヴェ氏の著書におけるその批判』（一八九五年）のなかで、「合法マルクス主義」がマルクス主義の基礎である、社会主義革命の学説とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の学説とを修正したことを、断固として批判した。レーニンは、「合法マルクス主義」をブルジョア文献におけるマルクス主義の反映と見、自由主義的ブルジョアジーのイデオロギーであると見ていた。レーニンの特徴づけは、その後完全に裏書きされた。「合法マルクス主義者」は著名なカデット（ロシアの自由主義的ブルジョアジーの

主政党はこう呼ばれていた）になり、十月革命後には、凶暴な白衛派になったのである。

ナロードニキはマルクス主義の公然たる敵であった。「合法マルクス主義者」は、ロシアのマルクス主義者がはじめて出あった偽装した敵で、マルクスの支持者と自称しながら、実際にはマルクス主義の革命的内容を骨抜きにしていた。このような歪曲は、西ヨーロッパにもあった。「合法マルクス主義」にたいするレーニンの闘争は、国際的な意義をもち、マルクス主義理論の歪曲にたいする非妥協性の模範であった。

マルクス主義の発展のうえで、またマルクス主義の基幹活動家を思想的・理論的に育成するうえで、すぐれた意義をもっていたのは、一八九九年に出版されたレーニンの著書『ロシアにおける資本主義の発展』であった。同書は、ナロードニキ主義の思想的粉砕をなしとげた。

レーニンは、ロシア社会の発展を研究して、重要な結論をくだした。ロシアは資本主義国になった。資本主義と農奴制の遺物との矛盾はますますはげしくなりつつある。資本主義の発展は専制制度の基礎を掘りくずしている。国内ではこの制度を一掃するための客観的条件が熟しつつある。社会には革命勢力が形成されつつある。革命で決定的な役割をはたすのは労働者階級であり、歴史的運動における彼らの力は総人口中に占めるその割合よりもはるかに大きい。労働者階級の同盟者は農民であり、農民の革命性には深い経済的な根底がある。レーニンのこの分析にもとづいて、マルクス主義党の綱領と戦術がつくりあげられた。

ロシアのマルクス主義者は、労働運動の実践のなかにレーニンの思想をもちこんだ。レーニンは、ペテルブルクのマルクス主義者に、労働者大衆のなかでの政治的扇動にうつるという任務を負わせた。一八九四年一二月、セミャンニコフ工場の労働者が動揺したさい、レーニンは、この

工場の労働者バーブシキンの協力をえて労働者へのアピールを書き、何部かがくばられた。社会民主主義者は多くの企業のストライキに参加した。経済的要求と政治的要求とをむすびつけたリーフレットは、労働者のあいだにかつてない意気込みをおこさせ、彼らの革命的自覚をたかめた。マルクス主義者は、労働者大衆を政治的に教育し組織することに系統的に従事するようになった。こうして、レーニンの指導のもとに、先進的労働者の小さなサークルのなかでの宣伝から、労働者階級の幅広い大衆のあいだでの扇動への転換がなしとげられた。

ペテルブルクのマルクス主義諸サークルは、大衆のあいだで活動をくりひろげるために、レーニンの提唱で単一の社会民主主義的非合法組織に合同し、この組織は一八九五年末に「労働者階級解放闘争同盟」と呼ばれるようになった。「同盟」は中央集権制、厳格な規律、大衆との固いむすびつきという原則にもとづいて建設されていた。組織の中核には一五名ないし一七名がはいり、彼らは、市を分けた三つの地区に配置されていた。土台になっていたのは、工場の労働者サークルであった。「同盟」を指導していたのは、レーニンを先頭とする中央グループであったが、レーニンは同時に「同盟」のあらゆる出版物の編集者でもあった。同盟員のなかには、ア・ア・ヴァネーエフ、ペ・カ・ザポロジェッツ、ゲ・エム・クルジジャノフスキー、エヌ・カ・クルプスカヤ、ユ・オ・マルトフ、ア・エヌ・ポトレソフ、エス・イ・ラトチェンコ、ヴェ・ヴェ・スタルコフ、その他がいた。

「闘争同盟」の活動に不安を感じたツァーリ政府は、「同盟」に手きびしい打撃をくわえた。一八九五年一二月八日の深夜、レーニンを先頭とする「同盟」の指導部と、約四〇名の積極的活動家とが逮捕された。一八九六年中に警察はさらに何回か手入れをおこない、「同盟」からつぎ

つぎに闘士をうばっていった。レーニンは一年以上獄中ですごした。だが、獄中でも彼は革命的活動を中止せずに、ひきつづき「闘争同盟」をたすけて、リーフレットを書いたり、党綱領の草案を起草したりした。一八九七年、レーニンは遠くシベリアの流刑地へおくられた。「同盟」の多数の積極的な活動家も流刑に処せられた。こうした損失はきわめて手いたいものであったが、「同盟」はツァーリの捕吏の打撃をもちこたえた。「同盟」はそれほど深く労働運動に根をおろしていたのである。

一八九六年は「闘争同盟」に大きな勝利をもたらした。この年の夏、首都の繊維労働者のゼネラル・ストライキが勃発した。「同盟」は、ストライキを指導し、一三種のビラをだした。ツァーリ政府は、一〇〇〇名以上の労働者を逮捕して、きびしい弾圧でストライキをつぶそうとしただけでなく、政府にとっては「工場主の利益も労働者の利益も同じように大切だ」などと見えすいたことをいって、運動を思想的に切りくずそうとした。「同盟」はビラをだして、こうした策略を即座に暴露した。ストライキの報道は全国につたわり、遠く外国までつたわった。闘争の規模に仰天したツァーリ政府は、一八九七年に法律で一日の労働時間を一一時間半に制限せざるをえなかった。

一八九五—一八九六年のペテルブルクのストライキ、とくに一八九六年のストライキは、ロシアの歴史に新しい時期——人民革命の準備期をひらいた。労働者大衆が、最初に、社会民主主義組織の指導のもとに闘争に立ちあがった。

プロレタリアートの進出によって、革命闘争の新しい状況がうまれた。レーニンがのちに指摘しているように、一九世紀のロシアの革命運動には、どの社会階級がこの運動に足跡をのこした

かにしたがって、三つの時期がはっきりとみとめられる。農奴制の時期、すなわちデカブリストの決起から農奴制の廃止までは、貴族出身の革命家が革命運動のなかで優位を占めていた。一八六一年から九〇年代の中ごろまでは、雑階級出身の民主主義的インテリゲンツィアが運動の主要な活動家であった。資本主義の発展、労働運動の成長、マルクス主義者の活動は、転換を準備した。ほぼ一八九五年から革命運動の第三期、プロレタリア期がはじまる。労働者階級が強大な革命的政治勢力として登場した。大衆的な社会民主主義的労働運動の出現にともなって、だれが農民をひきいるか、労働者階級かそれとも自由主義的ブルジョアジーか、という問題がおこった。

ロシアの労働運動は、国際プロレタリアートの闘争の重要な要因になろうとしていた。ロシア社会民主主義派がはじめて代表を送った第二インタナショナル・ロンドン大会(一八九六年)は、ロシアの労働者に挨拶を送り、彼らが「政治経済的専制と困難な闘いをおこなうにあたって剛勇と不抜の勇気」を発揮するようにという希望を表明した。ロシアの労働者と他の国のプロレタリアとのつながりは、ますますかたくなった。

「闘争同盟」は先進的プロレタリアの一団、大衆のあいだでうむことなく活動した党建設者の一団をそだてあげた。「同盟」の積極的な活動家は、大工場の労働者であった。オブホフ工場(現「ボリシェヴィキ」工場)のヴェ・ア・シェルグノーフ、セミャンニコフ工場(現「レーニン」工場)のイ・ヴェ・バーブシキン、プチロフ工場(現キーロフ工場)のエヌ・ゲ・ポレターエフ、エム・イ・カリーニンなどが、それであった。

レーニンの「労働者階級解放闘争同盟」は、ロシアではじめて、経済的要求のための労働者の闘争をツァーリズムと資本主義的搾取に反対する政治闘争にむすびつけることによって、社会主

義と労働運動の結合を実現しはじめた。レーニンが書いているように、「同盟」は、労働運動をよりどころにして、プロレタリアートの階級闘争を指導する革命党の、最初の本格的な芽ばえであった。レーニンの「闘争同盟」には、未来の党の特徴がはっきりあらわれていた。党の革命的性格、労働者階級との固い結びつき、民主主義と社会主義をめざす労働者階級の闘争の指導が、それである。

ペテルブルク「闘争同盟」を手本にして、同盟やグループがモスクワ、トゥーラ、イヴァノヴォ-ヴォズネセンスク（イヴァノヴォ）、ヤロスラヴリ、コストロマ、ヴラヂーミル、ロストフ-ナ-ドヌー、その他の都市にもつくられはじめた。ウクライナとザカフカースにも社会民主主義組織が生まれた。それらの組織の多くは「闘争同盟」と名のった。これらの組織は、自分の基本的な任務の一つを、ストライキ闘争を組織することとみなし、それぞれのストライキをプロレタリアートの階級闘争の学校にしようと努力した。こうして、社会民主主義者がストライキに参加する伝統ができてきた。彼らは労働者と生活をともにするようになった。

西部の少数民族地区でも、社会民主主義運動が発展していった。一八九三年にはポーランド社会民主党が創立された。一八九六年にはリトワニア社会民主党と「リトワニア労働者同盟」が創立された。一八九七年には「ロシア・ポーランド在住ユダヤ人労働者総同盟」（ブント）が組織された。九〇年代の後半には、ラトヴィアとエストニアにも最初の社会民主主義組織があらわれた。

サークルのなかでの宣伝から労働者大衆のあいだでの扇動に移ることは、これらの組織の内部での闘争をともなわなかったわけではない。一部のものは、宣伝と組織の時代おくれになったサ

ークル的形態に、頑としてしがみついていた。他のものは、扇動に移ることには賛成していたが、プロレタリアートの政治的任務を忘れて、経済的扇動だけにかぎること、労働者の経済的要求をみたすための組織をつくること、政治闘争のほうは自由主義者にまかせておくことを提案した。

こういうわけで、ロシアの社会民主主義運動の始めにあたって、プロレタリアートの政治組織ではなく、狭い職業的な組織をつくり、労働運動から自立した政治的な性格を失わせようとする、危険な傾向がうまれた。こうした見解の支持者は、「経済主義者」と呼ばれた。彼らは、ロシアの「合法マルクス主義者」と西欧の改良主義者との思想をよりどころとしており、実践的には労働運動を自由主義的ブルジョアジーに従わせようとしていた。

レーニンと彼の支持者たちは、日和見主義のこの最初のあらわれとうまずたゆまずたたかった。プロレタリアートの独自の党が必要だというマルクスの結論を、レーニンは国際労働運動のゆるぎない成果とみていた。彼は、このような党をロシアにつくるにあたって党の独自性を傷つけようとするどんな小さなくわだてとも容赦なくたたかった。この闘争は、党の基幹活動家が形成され、ボリシェヴィズムが生まれるうえで、大きな意義をもっていた。後にレーニンが、「ボリシェヴィキは『異常な事例』ではない、彼らは一八九四―一九一四年の日和見主義にたいする闘争のうちから成長したものなのだ!!」(第五版、全集、第三三巻、一三三ページ〔大月書店版『国家論ノート』、五七ページ〕)と書いたとき、彼はこの闘争の歴史的意義をまさにこのように評価したのである。

九〇年代におけるレーニンの活動、彼が提出した思想、マルクス主義理論の歪曲にたいする非妥協的な闘争、革命的精神による党の基幹活動家と労働者大衆の教育、これらすべてが、マルク

ス主義の発展における新しいレーニン的段階の端緒をひらいたのである。

社会民主主義運動は、めざましい成功をおさめた。マルクス主義者のまえには、党に統合するという任務が現われた。このような統合は、思想的にはレーニンの「闘争同盟」によって準備されていた。大会招集のための実際的な措置もとられた。「同盟」員のエヌ・カ・クルプスカヤは、この目的のために他の諸都市の社会民主主義者と話合いをすすめた。レーニンは、流刑地で小冊子『ロシア社会民主主義者の任務』を書いて、党のマルクス主義的な政綱の根拠を明らかにした。

第一回大会は、一八九八年の三月一日から三日にかけて、ミンスクでひそかにひらかれた。この大会には全部で九名が出席していたが、彼らはペテルブルク、モスクワ、キエフ、エカテリノスラフの各「闘争同盟」、ブント、キエフの『ラボーチャヤ・ガゼータ』(『労働新聞』)グループを代表していた。大会は、ロシア社会民主労働党の結成についての決定を採択し、三名からなる中央委員会を選出した。党は、「ロシアの」党という名称をつけて、この党がロシア国内のすべての民族の先進的労働者を統合するものであることを、最初から強調した。レーニンは大会のこの歴史的功績をとくに強調して、「党は一八九八年に、『ロシアの』党として、すなわちロシアのあらゆる民族のプロレタリアートの党として生まれた」と言っている(全集、第一九巻、二五三ページ)。大会の名で発表された宣言には、つぎのようにのべられていた。

「ロシアのプロレタリアートは、社会主義が完全に勝利するまで、資本主義およびブルジョアジーにたいする闘争をいっそう精力的につづけるために、専制のくびきをかなぐりすてるであろう」(『ソ連邦共産党決議集』、第一巻、一九七〇年版、一五ページ)。

この宣言では、プロレタリアートによる政治権力の獲得、労働者階級の指導的役割、ツァーリ

ズムおよび資本主義にたいする闘争における労働者階級の同盟者についての基本思想が、十分明確にのべられていなかった。だが宣言は、党が目標を公然と声明したものとして大きな役割をはたした。レーニンはこの宣言に賛成した。

大会は、一八四八年の革命の闘士を追悼して、ドイツ社会民主党に挨拶を送った。

大会は党の創立を宣言したが、このことは、大きな政治的意義と革命的宣伝上の意義とをもっていた。各地の社会民主主義者は、党成立の報道をよろこびむかえた。大会がひらかれたというニュースは、地下活動の困難な条件のもとにおかれていた党の基幹活動家をはげまし、勇気づけ、彼らに広々とした見通しをひらいた。各地の社会民主主義組織は、ロシア社会民主労働党の委員会と呼ばれるようになった。ロシア社会民主労働党は、労働者大衆のあいだでますます知られるようになり、ますます衆望をあつめた。

だが実際には、党は単一の中央集権的な組織として創立されてはいなかった。社会民主主義諸組織は、単一の綱領、規約、戦術をもっていなかったし、単一の中央部からの指導はなく、思想的にも組織的にも統一されていなかった。第一回大会後まもなく、ツァーリの警察は、中央委員二名と多くの有数な社会民主主義者とを逮捕した。思想的な動揺がつよまり、日和見主義分子の影響がひろまった。レーニンをはじめ革命的マルクス主義者が流刑地にいて、彼らからなる強固な中核のないことが形になって現われたのである。ロシアのマルクス主義党は、困難な条件のもとで生まれようとしていた。

2　レーニンのマルクス主義党建設計画。党創立をめざすレーニンの『イスクラ』の闘争

二〇世紀初頭のロシアには、革命的爆発をひきおこす燃料が十分たまっていた。戦闘的、中央集権的な党の必要は、ますます切実なものになってきた。

一九〇〇―一九〇三年に世界経済恐慌がおこった。この恐慌は、ロシアではとくにはげしく、手いたい形であらわれた。恐慌の打撃を受けて、中小企業が没落していった。工業の集中がつよまり、資本家の独占団体が急速に成長して、鉱業、鉄鋼業、機械工業、その他の重要鉱工業部門で支配的な地位を打ちたてた。ロシアの資本主義は帝国主義段階にはいっていった。

恐慌はますます国の情勢を激化させた。失業者は何千人となく「故郷」へ、凶作にみまわれて飢えている農村へ、帰っていった。労働者は、経済的なストライキやデモンストレーションから政治的なそれにうつりはじめた。一九〇一年二月から三月にかけて、ペテルブルク、モスクワ、ハリコフ、キエフでは、数千人がデモンストレーションに参加し、「専制をたおせ！」というスローガンをかかげて街頭に出て行った。多くの都市で、メーデーのデモンストレーションとストライキがおこなわれた。オブホフ工場の労働者のストライキは、警官隊や軍隊との衝突に転化した。労働者はねばりづよく抵抗したが、互角の力はなかったので、ツァーリの官憲は、オブホフ労働者に残忍な制裁をくわえた。英雄的な「オブホフ防衛」は、プロレタリアートの士気をたかめた。

一九〇二年は、労働運動がさらにもりあがった年であった。ストライキとデモンストレーションが大波のように全国へ広がった。とくに重要な意義をもっていたのは、ロシア社会民主労働党委員会の指導する、ロストフ－ナ－ドヌーの大ストライキとデモンストレーションであった。数日にわたって何千人もの参加する労働者大会がひらかれ、社会民主主義者の演説を傾聴した。警察は軍隊のたすけをかりてようやく労働者を始末した。

一九〇三年に、労働運動の波はさらにたかまった。多くの都市でメーデーのストライキとデモンストレーションがおこなわれた。一九〇三年の夏、南部地方、すなわちザカフカース（バクー、チフリス、バトゥーム、チアトゥルィ、ザカフカース鉄道）とウクライナ（オデッサ、キエフ、エカテリノスラフ、ニコラーエフ、エリサヴェトグラート）で、政治的ゼネラル・ストライキがロシア社会民主労働党委員会の指導のもとにおこなわれた。これらのストライキには、二〇万人以上の労働者が参加した。ロシアのプロレタリアートは、ツァーリ権力との革命闘争に立ちあがった。

労働運動の発展に仰天したツァーリズムは、あらゆる手段でこれを阻止しようとした。プロレタリアートの革命的行動に答えて、ツァーリ政府はますます頻繁に銃弾と皮鞭、投獄と流刑に訴えるようになった。警官隊は、一九〇三年三月ズラトウストの労働者に射撃をくわえて、とくに残忍に彼らを制裁した。同時に、ツァーリズムは労働者を革命闘争からそらせようとした。ツァーリの保安課は、その手先の力をかりて、いくつかの都市に組織をつくった。これらの組織は、労働者が政治にまきこまれさえしなければ、ツァーリ政府が自分からすすんで労働者をたすけ、その経済的要求を満足させようとしているように、労働者に思いこませようとした。労働者をあ

ざむこうとするこうした策略は、「警察社会主義」とか、その発案者である憲兵大佐ズバトフの姓をとって、ズバトフ主義とかよばれるようになった。だが、運動の発展は、これらの警察的組織を一掃してしまった。

プロレタリアートの革命闘争に影響されて、他の階級や社会層も動きだした。果てしない窮乏に絶望した農民が闘争に立ちあがった。一九〇二年にはポルタヴァ、ハリコフ、サラトフの各県で、農民は地主の屋敷に放火し、地主の土地を占拠し、警官隊や軍隊に反抗しはじめた。学生運動もひろがった。警察の残忍な弾圧にこたえて、学生は、一九〇一年から一九〇二年にかけての冬、ストライキを組織した。

自由主義的ブルジョアジーも動きはじめた。しかし、経済的にツァーリズムとむすびついていて、大衆の運動をおそれていた彼らには、多少とも断固たる行動に出る能力はなかった。自由主義者は、取るにたりない改革の実施をもとめる請願書をツァーリにさしだしたにすぎなかった。

革命の近づいたことがいたるところで感じられた。「嵐よ、もっと吹き荒れよ！」――ゴーリキーの『うみつばめの歌』のこの熱烈な呼びかけは、当時の革命的な気運をみごとにあらわしている。プロレタリアートは、勤労者の闘争の先頭に立つ能力をもった戦闘的なマルクス主義党をもち、完全に武装をととのえて革命をむかえることを必要としていた。

社会民主主義運動はめざましい発展をとげていた。委員会やグループは、ペテルブルク、モスクワ、トゥーラ、トヴェリ（カリーニン）、イヴァノヴォ-ヴォズネセンスク、ヤロスラヴリ、コストロマ、ニジニ・ノヴゴロト、サラトフ、キエフ、エカテリノスラフ、オデッサ、ハリコフ、ニコラーエフ、バクー、チフリス、バトゥーム、ゴメリ、ヴィテプスク、ウファ、その他の都市

ドンバス鉱業労働者同盟がそれであった。

しかし、これらの組織は、たがいにむすびついていなかった。各委員会はねりあげた活動計画をもっておらず、地方的な狭い実践活動にとどまって、全国的な政治的任務をかかげていなかった。手工業的なやりかたをしていて、秘密活動がまずかったため、組織は、しばしば警察によって壊滅させられていた。したがって、活動には継承性がなかった。組織上の細分状態は、思想的混乱によってつよめられた。労働運動の任務や、これらの任務を解決する方法と手段について、統一的な理解がなかった。社会民主主義組織は、あきらかに大衆の自然発生的な高揚にたちおくれていた。ロシア社会民主主義派は混乱と動揺の時期にあった。組織上の分散状態と思想上の不一致がひどかったので、単一の中央集権的な党をつくりだすことは非常に困難であった。

とくに危険になっていたのは「経済主義者」であった。彼らは新聞『ラボーチャヤ・ムィスリ』〔『労働者の思想』〕、雑誌『ラボーチェエ・デーロ』〔『労働者の事業』〕という自分たちの機関紙誌をもっていた。彼らは、賃金の引上げや労働日の短縮など、経済的な要求にとどまるよう労働者に呼びかけていた。「経済主義者」は、「経済状態を改善するためにたたかうこと、切実な日常の利益にもとづいて資本とたたかうこと、このような闘争の手段としてのストライキ、これが労働運動の標語である」と声明した。一部の「経済主義者」は、「段階論」なるものを説いて、もっとカムフラージュした形でこの日和見主義思想を主張していた。この「理論」によると、労働者階級は経済闘争において、まずはじめにストライキの自由の要求をかかげ、ついで結社の自由の要求にうつり、最後に政治的自由の思想を慎重にとりあげるというのである。

「経済主義者」の見解をもっともはっきり表明していたのは、『クレード』（信条）と呼ばれるようになった文書であった。『クレード』の筆者は、国外の「ロシア社会民主主義者同盟」の一員であるイェ・デ・クスコヴァであった。「労働者は経済闘争を、自由主義者は政治闘争を」と、「経済主義者」は声明した。彼らはプロレタリアートの独自の政治的役割を否認し、プロレタリアートの独自の政党が必要なことを否認した。こういう日和見主義思想がひろまるなら、プロレタリアートをブルジョアジーの政治的付属物にかえてしまう恐れがあった。

一九世紀末、「経済主義者」は、各地の社会民主党委員会のなかで優位を占めていた。ロシアに「経済主義」が発生した原因は、どの資本主義国であれそこに日和見主義があらわれた原因と同じもので、ブルジョアジーの影響が労働運動のなかに侵入してきたためであり、プロレタリアートがいろいろの要素からなっているためであった。小ブルジョアジーが人口の多数を占めていたことも、日和見主義の普及をうながしていた。マルクス主義者の基幹活動家の大多数が獄中や流刑地にいたうえに、ナロードニキ主義にたいするマルクス主義の勝利の影響をうけて社会民主主義組織に殺到してきたインテリゲンツィア出の青年が、マルクス主義的訓練と政治的経験を十分もたなかったことも、「経済主義」の強化を助長した。

「経済主義」は、国際日和見主義のロシア的変種であった。九〇年代にマルクス主義は、すでに国際労働運動内で指導勢力となっていたので、マルクス主義の敵は手をかえはじめた。彼らは、マルクス「批判の自由」というスローガンをかかげて、マルクスの学説の再検討（修正）を要求した。修正主義者は、社会主義の科学的根拠を示す可能性を否定し、労働運動の「終局目標」の概念そのもの、すなわち共産主義がなりたたないと宣言した。彼らは、大衆の貧困が増大し、資

階級闘争、社会主義革命、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の理論を放棄することを要求した。修正主義の指導者であるドイツの社会民主主義者ベルンシュタインは、「終局目標は無であり、運動がすべてである」。すなわち、肝心なことは、資本主義の根底にはふれずに、労働者のための改良、つまり些細な改善を、支配する搾取階級から獲得することである、と声明した。日和見主義者は、社会民主党を社会革命の党から社会改良の党にしてしまおうと努力していた。ロシアでは、プロレタリアートの根本的利益を裏切ったこのような改良主義者が「経済主義者」なのであった。

レーニンは、「経済主義者」に断固として反対した。彼は『クレード』にこたえて、一八九九年に『ロシア社会民主主義者の抗議』を書いたが、それはシベリアに流刑されていた一七人のマルクス主義者の会議で承認された。彼らは、「経済主義」の思想全般にたいして非妥協的な戦いを布告するよう呼びかけた。『抗議』は社会民主主義組織のあいだに広くゆきわたり、ロシアにマルクス主義党を建設するうえで大きな役割をはたした。いくつかの組織で、「経済主義者」にたいする闘争が開始された。国外で「経済主義者」に反対したのはプレハーノフであった。

手工業的なやりかた、思想的動揺、「経済主義」といった害毒とたたかうために、すべての革命勢力を統合することが必要であった。はやくも流刑中にレーニンは、マルクス主義党を創立するうえでは全国的政治新聞が決定的な役割をはたすにちがいないという結論に達していた。レーニンは、一九〇〇年、流刑がおわるやいなや、新聞の創刊に精力的にとりかかった。彼は多くの都市を回り、多数の社会民主主義者と話合い、将来の新聞の支持者を獲得し、結集した。ロシア国内で地ならしをしたのち、レーニンは国外にいき、そこで新聞発行の手はずをととのえた。こう

してうまれた新聞が、革命的マルクス主義者の最初の非合法の全国的政治新聞『イスクラ』〔『火花』〕であった。その編集局には、ロシア国内の社会民主主義組織の代表者であるレーニン、マルトフ、ポトレソフと、「労働解放」団のメンバーであるプレハーノフ、アクセリロート、ザスーリッチがはいった。『イスクラ』の真の首唱者、その真の組織者、指導者は、レーニンであった。

一九〇〇年一二月、『イスクラ』第一号が発行された。その題字には、デカブリストがプーシキンにあたえた回答のなかから「火花から炎は燃えあがる！」という言葉が取られていた。ロシアのマルクス主義者は、「万国のプロレタリア団結せよ！」というマルクスの宣言した偉大なスローガンにしっかりと依拠して、自分を国際労働運動の一部隊とみていた。それと同時に、彼らは、ロシアの革命闘争の歴史によって託された任務を解決するのは、ほかならぬプロレタリアートであるという深い確信を表明した。

レーニンの書いた『イスクラ』第一号の論説、『われわれの運動の緊急な任務』では、ロシアにマルクス主義党をつくることが同紙の主要任務とされていた。このような党がなければ、プロレタリアートは意識的な階級闘争をおこなえるまでに成長することはできないし、自分自身とロシアの勤労者全体を政治経済的隷属から解放するという、偉大な歴史的使命をはたすこともできない。

「われわれの前面には」とレーニンは書いている。「敵の要塞がいかめしくそびえており、そこから、われわれに雨あられと砲弾や銃弾があびせかけられ、最良の闘士たちをうばっている。われわれはこの要塞を奪取しなければならない。もしわれわれが、めざめつつあるプ

ロレタリアートの全勢力とロシアの革命家の全勢力とを一つにして、ロシア内の生命あるもの、誠実なもののすべてが心をよせる単一の党とするなら、われわれはこの要塞を奪取できるであろう」(全集、第四巻、四〇五―四〇六ページ)。

『イスクラ』は、まさにこうした党の創立にその全力をささげたのである。

では当時の情勢のもとで党を建設するにはどのようにすべきであったか? レーニンは、一九〇一年五月の『イスクラ』に発表された『なにからはじめるべきか』という論文でこの問題にこたえた。レーニンの有名なマルクス主義党建設計画は、この論文のなかで提起されている。肝心なことは、広範な大衆が闘争につきすすんでいるのに、革命家が指導者・組織者の司令部をもたない点にある、とレーニンは書いている。そして、「なにからはじめるべきか」という問題にこたえてこう言っている。全国的政治新聞の発行からはじめるべきだ。このような新聞は、労働運動内部の敵を思想的に粉砕する準備をととのえ、革命的理論の純潔を守るであろう。それは、党の綱領的目標と戦術的任務について統一的な理解に達するのをたすけるだろう。新聞は、各地方の委員会やグループを単一の党に組織上統合するためにも強力な手段になるだろう。全党的事業である新聞を中心にして、この新聞に材料を供給し、この新聞を配布し、労働者とのむすびつきをつくることを使命とする受任者網がうまれるだろう。新聞の支持者たちの組織は、将来の党の中核となり、骨組みとなるだろう、と。

『イスクラ』は、専制にたいする憤激が社会の広い層をとらえていた情勢のもとで、活動を開始した。社会民主主義運動のなかには多数のさまざまなグループがあって、各自、自分の勧める道こそ唯一の正しいものだと公言していた。この運動には小ブルジョア・インテリゲンツィアも

参加していた。彼らは、実質上、プロレタリアートの社会主義的目標とは無縁であったが、ツァーリズムにたいする闘争が問題であったかぎり、さしあたり労働者階級の同伴者となっていた。すべての革命的なマルクス主義勢力を結集することが必要であったが、そのためには、あらゆる種類の日和見主義者と一線を画し、自分の立場をはっきりきめなければならなかった。そこで『イスクラ』は、こう宣言した——

「統合するまえに、また統合するために、われわれはまず、きっぱりと、明確に、一線を画さなければならない」(同、三八八ページ)。

まず第一に、党の建設をさまたげていた主要な障害である「経済主義者」と一線を画さなければならなかった。『イスクラ』は、彼らにたいして積極的な攻勢をくりひろげた。

革命的マルクス主義党のための闘争でめざましい役割をはたしたのは、一九〇二年三月に出版されたレーニンの著書『なにをなすべきか』であった。

同書全体をつらぬいている基本的命題は、労働運動を革命化し、指導し、組織する力としての党という思想である。

レーニンは、「経済主義」がマルクス主義の最悪のカリカチュアであることをしめした。「経済主義者」の主張では、歴史ではすべてが不動の法則にしたがっておこなわれる以上、社会発展に意識的要素のはたす役割はとるにたりない。それどころか、意識的・計画的な活動はすべて余計なものであり、有害でさえある。なぜなら、それは歴史の客観的な行程にたいする一種の強制行為だからである。したがって、党は、自然発生的な労働運動に方向をさし示すべきではなく、プロレタリアートが徐々に自分で社会主義に行きつくのを受動的に待たなければならない。「経済

主義者」はこう公言していた。

だが、マルクス主義は、労働者に理論や意識性を軽視させる日和見主義的な自然発生性哲学とは縁もゆかりもない。マルクス主義は、人民の先進的な活動家の自覚、活動力、決意を非常に重視する。正しい理論は革命闘争の強力な武器である。それは現状を認識し、将来を予見するのをたすけ、プロレタリアートが自分の目標を達成するのを容易にし、促進する。レーニンはこう書いている――

「先進的な理論に導かれる党だけが先進的な闘士の役割をはたすことができる」(全集、第五巻、三九〇ページ)。

マルクス主義こそ、このような先進的な革命的理論であり、革命的行動のたしかな指針である。

プロレタリアートは、政治と経済の分野だけでなく、理論やイデオロギーの分野でもブルジョアジーとたたかう。イデオロギー闘争は労働者階級にとってきわめて重要な、並はずれた意義をもっている。それは、こういうわけである。資本主義社会にはブルジョア・イデオロギーと社会主義的イデオロギーの二つのイデオロギーが存在している。労働者階級の社会的地位は労働者階級を社会主義へひきつける。しかし、ブルジョアジーは、支配階級として、全力をあげてプロレタリアートに自分のイデオロギーを植えつけようとしている。「経済主義者」は、社会主義的意識を労働者階級のなかにもちこむ必要を否定し、社会主義的イデオロギーは自然発生的な労働運動のなかからひとりでにうまれてくると言明して、この点でブルジョアジーをたすけている。だが、社会主義的イデオロギーすなわちマルクス主義は、科学の発展過程でうまれ、プロレタリアートの政党によって労働運動のなかにもちこまれる。

「いやしくも労働運動の自然発生性のまえにひざまずくことは」とレーニンは書いている。「いやしくも『意識的要素』の役割、社会民主主義派の役割を軽視することはとりもなおさず、——その軽視する人がそれをのぞんでいようといまいと、それにはまったくかかわりなく——労働者におよぼすブルジョア・イデオロギーの影響をつよめることを意味する」(同、四〇四ページ)。

社会主義的イデオロギーとブルジョア・イデオロギーとのあいだには、妥協のない闘争がおこなわれている。レーニンはこう指摘している——

「ブルジョア・イデオロギーか、それとも社会主義的イデオロギーか、問題はもっぱらこのように提起されている。ここには中間はない。……だから、いやしくも社会主義的イデオロギーを軽視すること、いやしくもそれからはなれることは、とりもなおさず、ブルジョア・イデオロギーをつよめることを意味する」(同、四〇六ページ)。

したがって、プロレタリアートのなかに浸透してくるブルジョア思想にたいして、たえず断固としてたたかうことが、ぜひとも必要である。この闘争をおこなうのはマルクス主義党であって、党のもっとも重要な任務は、プロレタリアートの思想的独自性を守り、彼らのあいだに社会主義的イデオロギーをひろめることである。党は、自然発生的な労働運動のなかに社会主義的意識をもちこむ、プロレタリアートの自覚した部分である。

レーニンは、自然発生性への拝跪が労働者階級の党を受動的な勢力にすることをあきらかにした。このような党は、労働運動の尻についてのろのろいくもので、この運動を指導する司令部とは似ても似つかないものである。事実上、プロレタリアートは、党をもたないことになり、した

がって階級敵をまえにして武装を解除されることになる。

「経済主義者」は、プロレタリアートの政治闘争一般について、とくにロシアの労働者階級の政治的任務について、まったくあやまった有害な見解を説いていた。彼らは社会民主主義派に、「雇主と政府とにたいする労働者の経済闘争」を組織することにだけたずさわり、こうして「経済闘争そのものに政治性をあたえる」ようにすすめていた。だが、経済闘争は、労働運動を、労働力の販売条件を有利にする問題だけにかぎる。ところがプロレタリアートは、搾取制度が完全に廃止され、それにかわって社会主義がうちたてられることを利益としている。

社会主義をめざして首尾よくたたかうためには、プロレタリアートは、高度の階級的・政治的自覚を必要とする。プロレタリアートのあいだにこのような自覚をそだてていくものは、マルクス主義党である。この党は、すべての階級の生活のいっさいのあらわれを観察し正しく評価することを、プロレタリアートにおしえ、またどの階級にかかわるものであろうと、専横と抑圧のあらゆる出来事に自分の立場から反応することを、おしえる。

ロシアの労働者階級は、――とレーニンは書いている――民主主義のための先進闘士として、ツァーリズムにたいする全人民の闘争の組織者・指導者として、行動しなければならない。そのためには、プロレタリアートは、自分の階級の真の前衛となるような党を必要とする。ほんとうの前衛となるためには、党は、専制の全面的な政治的暴露を組織し、人民のこの兇悪な敵にたいする抗議のいっさいの表明を利用しなければならず、またプロレタリアートの利益とその社会主義的目標をうまずたゆまず守りながら、万人の先頭に立ってあらゆる一般民主主義的問題の解決のためにたたかわなければならない。この点に、自分を解放するためにたたかう労働者階級の政

治的指導者としてのマルクス主義党のもっとも重要な任務の一つがある。
「社会民主主義者の理想は」とレーニンはのべている。「労働組合の書記ではなくて人民の護民官でなくてはならない。その人民の護民官というのは、どこでおこなわれたものであろうと、またどういう層または階級にかかわるものであろうと、専横と圧制のありとあらゆるあらわれに反応することができ、これらすべてのあらわれを警察の暴行と資本主義的搾取とをしめす一画面にまとめあげることができ、自分の社会主義的信念と民主主義的要求とを万人に説明するため、プロレタリアートの解放闘争のもつ世界史的意義を万人に明らかにするために、どんな小さな事件をも利用できる、そういう人である」（全集、第五巻、四五二ページ）。

革命家とは人民の護民官であるというレーニンのこの有名な規定を指針としながら、党は、党員を政治家に育てていった。党組織は、プロレタリアートの社会主義的信念と民主主義的要求を大衆に説明しながら、大衆を組織することをまなんだ。

「経済主義者」の自然発生性への屈従は、プロレタリアートの組織上の任務の分野にも、少なからず害をおよぼしていた。「経済主義者」は手工業的なやりかたを正当化し、狭い職業的な型の組織をつくろうとつとめていた。レーニンは、にがにがしげに、当時の社会民主主義組織の活動は、棍棒（こんぼう）を武器とする農民が近代的な軍隊を攻撃するのに似ている、と書いている。ツァーリズムと資本主義とにたいするたたかいに勝利するためには、労働者階級は自分の勢力をしっかりと組織することが必要である。

「われわれに革命家の組織をあたえよ、そうすればわれわれはロシアをくつがえすであろ

う！」とレーニンは宣言した（全集、第五巻、五〇二ページ）。
大衆と切っても切れないようにむすびついた、戦闘的、中央集権的、革命的なマルクス主義党があるばあいにはじめて、――とレーニンはのべている――ロシアの労働者階級は自分の歴史的諸任務をはたすことができるであろう。このような党は、革命的労働運動を必ずしっかりした、堅固なものにならせるであろう。革命にあくまで献身的な党は、きわめて広範な労働者大衆の心からの信頼をえるであろう。党を建設するためには、革命的活動にうちこみ、そのために必要な資質をねばりづよく、系統的に育てていくような、職業革命家の基幹活動家が必要である。このようにして、試練をへた、多年の政治的修練によって訓練された指導者たちの足並のよくそろった集団が生まれるであろう。このような指導者なしには、「現代社会ではどの階級も堅忍不抜の闘争をおこなうことはできない」（同、四九六ページ）。
マルクス主義党は「社会主義的労働運動の最高の形態」である、とレーニンは書いている。ロシアの労働運動の特異性は、プロレタリアートの政治組織が最初の、かつ唯一の組織だったという点にあった。しかし党組織を、労働組合組織や文化・啓蒙団体などの組織でとりかこまなければならない。党は、階級組織の最高の形態として、プロレタリアートのすべての組織を指導する使命をおびている。
レーニンは、ロシアの労働者階級の革命的マルクス主義党の前途には、偉大な歴史的任務がひかえていることをしめした。彼は、予言的にこう書いている――
「歴史はいまわれわれに、あらゆる国のプロレタリアートのすべての当面の任務のうちで、もっとも革命的な任務を負わせている。この任務を実現し、ひとりヨーロッパだけでなく、

アジアをもふくめた（いまでは、こういってよい）反動のもっとも強力なとりでを破壊するならば、ロシアのプロレタリアートは国際的な革命的プロレタリアートの前衛になるであろう」（同、三九二―三九三ページ）。

レーニンの著書『なにをなすべきか』は、「経済主義」を思想的に粉砕し、マルクス主義にもとづいて党の基幹活動家を結集し、ロシア社会民主労働党第二回大会を準備するうえで、巨大な役割をはたした。レーニンの著書は、ベルンシュタインとその支持者たちを代表者とする、西ヨーロッパの社会民主党内の修正主義者に手きびしい打撃をあたえ、彼らが日和見主義におちいって労働者階級の利益を裏切っていることを暴露した。

ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの革命戦が近づいてきた新しい歴史的時代に、レーニンは、労働者階級の党の問題を新しい仕方で提起した。西ヨーロッパの社会主義諸党は、プロレタリアートの階級闘争のすべての形態を指導してはいなかった。これらの党は議会活動にとどまっていた。それらの党のなかでは、日和見主義がますますつよく現われてきた。これらの党は、党の基幹活動家と労働者大衆に革命の準備をととのえさせていなかった。

レーニンは、マルクス主義者のなかで、労働者階級には新しい型の党が必要なことを見ぬいた最初の人である。彼は、党、その性格、労働運動ではたす役割、その活動の基本原則についての見解を、『なにをなすべきか』のなかでのべた。

『なにをなすべきか』の歴史的意義は、レーニンが同書のなかで、プロレタリア党にかんするマルクスとエンゲルスの思想を発展させ、革命的なマルクス主義党である、新しい型の党についての学説の基礎を仕上げた点にある。すなわち、彼は、

マルクス主義党は労働運動と社会主義との結合であるというマルクス主義の根本命題を論証し、労働運動にとり、党の全活動にとって科学的社会主義の理論のもつ巨大な意義をあきらかにし、プロレタリアートの政治的指導者としての、すなわちプロレタリアートの階級闘争を一つにし、これに方向をしめす労働運動の指導力としての、党の問題を究明し、大衆を教育して革命の準備をさせるために、党活動全体をたてなおす必要を論証し、日和見主義の思想的源泉が、まず第一に、労働運動の自然発生性にたいする拝跪と、社会主義的意識が労働運動ではたす役割の軽視とにあることをしめしたのである。

レーニンの『イスクラ』は、マルクス主義の革命的理論を守る闘争の旗を高くかかげた。ロシアのマルクス主義者は、日和見主義者にたいする革命家の国際的戦闘の先頭に立っていた。マルクス主義の純潔を守るとともに、レーニンは、理論をいっそう仕上げ、それを実践運動の経験でゆたかにする必要があることを、とくに力をこめて強調した。すでに『イスクラ』の準備期に、レーニンはこう書いている――

「われわれはマルクスの理論を、けっして完結した、侵すべからざるものとは考えていない。反対に、この理論は、社会主義者が実生活におくれたくなければあらゆる面でさらに前進させなければならない科学の土台石をすえたにすぎないと、われわれは確信している」(全集、第四巻、二一六ページ)。

レーニンは、マルクス主義の一般的な原則をそれぞれの国に適用するにあたっては、その国の特殊性を考慮すべきであり、ロシアの社会主義者はマルクス主義理論を自主的に仕上げる義務がある、と説明している。レーニン自身の活動は、マルクス主義にたいするこのような創造的態度

の模範であった。

マルクス主義党にとって大きな危険になっていたのは、革命的高揚の影響をうけて立ちなおったナロードニキ主義であった。一九〇一年の末、さまざまなナロードニキ・グループの残党が、社会革命党（エス・エル）という大げさな党名をつけて合同した。一九〇一年から一九〇二年にかけて、エス・エルは数回テロル行為にでた。「人民の意志」派の陰謀、テロリスト的伝統、エス・エルのまったくうわべだけではあるがある種の革命性は、革命的インテリゲンツィアや、一部の労働者や、さらに十分しっかりしていない社会民主主義者にも、影響をおよぼしていた。

『イスクラ』は、エス・エルに手きびしい批判をくわえた。エス・エルは、プロレタリアートと農民の階級的差異を否定し、彼らをインテリゲンツィアもろとも勤労大衆全体に解消させることによって、労働者階級が革命闘争ではたす自分の指導的な役割を理解するのをさまたげた。彼らは、インテリゲンツィアと専制政府の一騎打を説いて、革命家の力を無益なテロル行為にそらせ、大衆の革命闘争を組織することを妨げた。彼らは、「土地の社会化」という要求をかかげることによって、土地の私有を廃止し土地を農民のあいだに均等に分配すれば、農村に社会主義を導入できるかのような幻想を大衆のあいだにふりまいていた。

『イスクラ』のもっとも重要な仕事は、党綱領の草案を仕上げることであった。綱領は、党の目標と任務を明確にして、ばらばらな社会民主主義組織を思想的に結束させて単一の党にするはずであった。

国内に革命的高揚が見られる情勢のもとで、『イスクラ』は、ツァーリズムにたいする全人民の闘争を組織する大規模な政治計画をかかげた。『イスクラ』の活動は、きたるべき革命の準備

を大幅に促進した。

『イスクラ』は、当時各地にあった社会民主党委員会を、プロレタリアートの階級闘争の指導者と組織者からなる真の司令部にかえることを、自分の主要な任務の一つとみていた。平和な議会活動にとどまっていた西ヨーロッパの社会主義諸党とはちがって、『イスクラ』は、革命闘争を呼びかけ、政治的ストライキやデモンストレーションといった革命的な闘争方法をいっそう重視していた。各地の委員会が労働運動ではたす役割はますます増大し、その影響と指導はますますつよまった。これらの委員会は、労働運動の中心にあって大衆とのむすびつきをつよめ、大衆の真の指導者をそだてていった。

『イスクラ』は、一貫して、大衆の革命闘争をプロレタリアが指導することをめざしていた。この新聞は、社会民主主義者に「住民のすべての階級のなかにはいっていく」任務を負わせた。『イスクラ』の影響を受けて、社会民主主義組織は活動部面をひろげた。

『イスクラ』がとくに注意をはらっていたのは、プロレタリアートの同盟者である農民であった。同紙は、農民運動を極力支援するよう、労働者階級に呼びかけた。一九〇二年の春農民の騒擾がはじまったとき、社会民主主義者は、自分たちの任務をこれまでよりはっきり理解しながら、それをむかえた。各地のロシア社会民主労働党委員会は農村とむすびつこうとした――農民むけのリーフレットがだされ、社会民主主義的な宣伝グループが農民のあいだに組織された。この最初の成功はささやかなものではあったが、何百万という農民大衆のあいだに階級闘争と政治的自覚の思想を計画的にひろめる手はじめとして、きわめて大きな原則的意義をもっていた。

一九〇三年に出版された小冊子『貧農に訴える』のなかで、レーニンは、幾百万の農民にもわ

かりやすい言葉で労働者党の政策をのべ、貧農が革命闘争でどういう立場を占めるべきかを彼らに説明した。

「ロシアのすべての労働者とすべての貧農は」とレーニンは書いている。「両方の手で、二つの方向にむかってたたかわなければならない。すなわち、一方の手では、すべての労働者と同盟して、すべてのブルジョアとたたかい、他方の手では、すべての農民と同盟して、農村の役人や農奴主的地主とたたかわなければならない。……

農村における最初の一歩は、農民を完全に解放すること、彼らに完全な権利をあたえること、切取地を返還させるための農民委員会をつくることである。しかし、都市でも農村でも、われわれの最後の一歩は同じであろう。われわれは、地主からもブルジョアジーからも、すべての土地、すべての工場をとりあげて、社会主義社会をうちたてるであろう」（全集、第六巻、四二〇、四三一ページ）。

活動は軍隊内でも広くおこなわれた。一九〇二年一二月、ロシア社会民主労働党に密着した軍事革命組織がうまれた。学生青年にたいする影響も増大した。大学に社会民主主義グループがつくられた。一九〇二年はじめの全国学生大会は、社会民主労働党とできるだけ密接に連携するという決定を採択した。

帝政ロシアの既存の秩序にたいする不満なら、どの社会層にあらわれているものであろうと、『イスクラ』はそれを支持した。自由主義的ブルジョアジーの反政府運動にたいする同紙の態度もこれによって規定された。自由主義派がはっきりした政治的グループになるまでは、『イスクラ』は、彼らが中途半端で臆病なことを批判しながらも、彼らがツァーリ専制の専横に抗議する

つ、ペ・ストルーヴェをはじめとする自由主義派の政治的グループが出現して、解放運動の指導権をねらうと、自由主義派の反革命性を暴露することが『イスクラ』の主要な仕事になった。

ロシア・マルクス主義者のこの戦闘的機関紙は、各民族が自分で自分の運命をきめる権利をもつことを、一貫して主張した。民族抑圧のどんなあらわれも、『イスクラ』の断固たる反撃をうけた。同紙は、フィンランド人民の正当な権利を擁護し、ツァーリの徒党の強圧を憤然として糾弾した。同紙は、極東における植民地略奪政策を暴露し、ヨーロッパの帝国主義者とロシアのツァーリズムが中国人民にしかけた戦争を犯罪だと宣言した。レーニンの『イスクラ』は、抑圧されている民族の勤労大衆に、ロシアのプロレタリアートを心から信頼させ、彼らがあらゆる形の民族抑圧にたいする不撓不屈の闘士であることをさとらせるために、多くの仕事をした。それと同時に、『イスクラ』は、労働者のあいだに民族的不和をもちこんだユダヤ人、ポーランド人、その他の民族の小ブルジョア民族主義者とも、非妥協的にたたかった。レーニンは、プロレタリア国際主義の原則をうまずたゆまず宣伝した。彼は、民族のちがいをこえてロシアの労働者階級全体が、戦闘的な団結をうちたてることによってのみ、ツァーリズムにたいする勝利がもたらされ、勤労者の完全な政治経済的解放が保障されるであろうと説いた。

こうして、レーニンの『イスクラ』は、国の社会生活のすべての分野におよぼす労働者階級の影響をうまずたゆまず、一貫してひろげながら、さまざまな住民層のなかに政治的不満を呼びさましていった。『イスクラ』は、経済的・政治的・社会的・民族的なあらゆる抑圧とたたかう党の建設に当たり、労働者階級を、ツァーリズムにたいする全人民の闘争の指導者にそだてていっ

た。

『イスクラ』は、ねばりづよくレーニンの組織計画の実行に当たった。『われわれの組織上の任務について一同志にあたえる手紙』のなかで、レーニンは、ロシア社会民主労働党の地方組織の構成についてつぎのような図式を提案した。各都市に、その地方の運動の先頭に立つ一つの党委員会をおくべきである。「経済主義者」がしていたように、地方組織を労働者とインテリゲンツィアという、二つの委員会、二つの部分にわける、変則的で有害なやりかたは、やめる必要がある。委員会には、大衆ともっとも固くむすびつき、大衆のあいだでもっとも声望のある、労働運動の主要な指導者が全部はいらなければならない。委員会のもとには二種類の組織がおかれる。第一は、地区グループと工場内下級委員会である。すべての工場がわれわれの要塞とならなければならない、とレーニンは要求した。これらの地区グループと工場グループは、委員会を労働者大衆にむすびつける。第二は、委員会に直属して、党のさまざまな必要のために働くいろいろなグループ、すなわち、宣伝家グループ、輸送や印刷を担当するグループ、秘密会合所設置グループ、スパイ監視グループ、青年グループ、党に協力する官吏のグループなどである。以上のグループのあるものは直接に党組織に加入し、他のものは党組織と連携し、その影響下におかれる。こうして、それぞれの地方党組織は、職業革命家を主とする指導的な基幹活動家と、下級のサークルやグループの広い網の目から成るべきである。組織のこのような構成は、中央集権制、規律、大衆との緊密なむすびつき、機動性、弾力性を保障する。レーニンのこの計画をもとにして、社会民主主義組織の改組がはじまった。

『イスクラ』を中心にして、職業革命家の強固な組織ができあがった。地下活動のきびしい条

件のもとで、多くの敵とのたたかいのなかで、プロレタリアートの大業に一身をささげ、原則に忠実で、規律正しく、どんな日和見主義的醜悪とも妥協せず、大衆と固くむすびついた職業革命家の基幹活動家がきたえあげられた。このような職業革命家としては、イ・ヴェ・バーブシキン、エヌ・エ・バウマン、エル・エス・ゼムリャチカ、エム・イ・カリーニン、ヴェ・ゼ・ケッホヴェリ、エヌ・カ・クルプスカヤ、エム・エム・リトヴィノフ、ゲ・イ・ペトロフスキー、オ・ア・ピャトニツキー、ヤ・エム・スヴェルドロフ、エヌ・ア・スクルィプニク、ア・ア・ソーリツ、エス・エス・スパンダリャン、イ・ヴェ・スターリン、イェ・デ・スタソヴァ、エス・ゲ・シャウミャン、その他多くのイスクラ派がいた。職業革命家のイスクラ組織は、党の生活で、めざましい役割をはたした。

党創立のたたかいでは、『イスクラ』は一体になって活動していた。しかし、党の綱領上および戦術上の見解をつくりあげるさいには、レーニンは、『イスクラ』編集局内の深刻な動揺を克服しなければならなかった。自由主義的ブルジョアジーにたいする態度の問題について、意見の相違が表面化した。レーニンは、自由主義者の政治的な惰弱と臆病を断固として批判し、彼らの反革命性を暴露することを主張した。プレハーノフとアクセリロートは、自由主義者を革命における同盟者とみていた。

綱領上の諸問題についても、激論がおこった。プレハーノフは、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の問題で動揺の色を見せた。綱領草案に、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)にかんするマルクス主義の基本的な命題が、はっきりと定式化されたのは、もっぱらレーニンのおかげであった。プレハーノフは、プロレタリアートを勤労大衆全体に解消させ、労働者階級が資本に抑圧されているす

べての人々を自分のまわりに統合することができるし、またそうしなければならないという点を強調しなかった。党がプロレタリアートの階級闘争を指導するという思想も、彼には欠けていた。レーニンが頑強に主張した結果、綱領草案には、党のプロレタリア的性格と労働者階級のヘゲモニーの思想とがはっきり表明され、党が労働運動で前衛の役割をはたすことが正確に指摘された。農業綱領の問題についても、激闘がくりひろげられた。レーニンは、農村における農奴制の遺物を一掃する、とりわけ「切取地」を農民に返還するという要求を提出した。それと同時に彼は、革命的農民運動が展開していくなら、「切取地」の返還という要求を、土地国有化の綱領に代えることが必要になるだろうと考えていた。プレハーノフ、アクセリロート、マルトフは、土地の国有化に反対した。彼らは革命における労働者と農民の同盟の意義を軽視していたのである。

編集局内には、当時はやくも、二つの政治的方向、革命的マルクス主義的方向と日和見主義的方向とがあらわれていた。きわめて重要な原則上の問題をめぐる激突は、時には『イスクラ』指導者集団の分裂をひきおこそうとすることがあったが、しかし、当時は分裂するまでにはならなかった。

レーニンの指導によって、労働運動のすべての問題について、『イスクラ』の革命的マルクス主義的立場が確保された。レーニンは、後に、旧『イスクラ』の方向を特徴づけて、それは完全にボリシェヴィキ的であったと言っている。

「ボリシェヴィズムは」とレーニンは書いている。「一九〇〇年から一九〇三年までの三年間に旧『イスクラ』の方針をさだめ一つのまとまった流派としてメンシェヴィズムとの闘争にのりだした」（全集、第一六巻、五一ページ）。

『イスクラ』は、思想的動揺と組織上の混乱という情勢のもとで、活動を開始した。同紙の活動の結果、革命的マルクス主義党の創立の準備が、思想的にも組織的にもととのった。一九〇二年の後半から一九〇三年のはじめにかけて、すべての委員会が（当時なお「経済主義者」に牛耳られていたヴォローネシ委員会をのぞいて）『イスクラ』に合流した。『イスクラ』の勝利を、党大会で定着させる必要があった。

3　ロシア社会民主労働党第二回大会。最初の党綱領。ボリシェヴィキ党の成立

ロシア社会民主労働党第二回大会は、一九〇三年七月一七日から八月一〇日まで、はじめブリュッセルで、ついでロンドンで秘密におこなわれた。この大会には、二六の組織を代表し、五一票の議決権をもつ四三名の代議員が出席していた。準備が綿密になされたこと、代表選出方法が完璧であったこと、決定すべき問題の範囲が広かったこと、こういう点でロシア社会民主労働党第二回大会は、ロシアの革命運動史上に例のないものであった。大会直前と大会開催中に、ゼネラル・ストライキの大波がロシア南部にまきおこった。代議員たちは、近づいた革命の嵐の息吹を大会にもちこんだ。

ロシア社会民主労働党第二回大会のもっとも重要な任務は、レーニンがのべているように、『イスクラ』によって提起され、仕上げられた原則上および組織上の基礎のうえに真の革命的労働者党をつくることにあった。この任務は、日和見主義との激闘をつうじて解決されていった。

「イスクラ」派は大会で三三票をもち、多数を占めていた。反イスクラ派は八票（三票は「経済主義者」、五票がブント派）をもっていた。『ユージヌィ・ラボーチー』（『南部労働者』）グループには、動揺する中間派、レーニンのいわゆる「沼地」派がしたがっていた。彼らは一〇票をもっていた。大会代議員の大多数は『イスクラ』の味方と自称していたが、彼らの全部が真のイスクラ派というわけではなかった。確固たる、一貫したイスクラ派、すなわちレーニン支持者は二四票をもっており、マルトフにしたがった、いわゆる「軟弱な」イスクラ派、つまりあとでメンシェヴィキになった人々は九票をもっていた。反イスクラ派は、イスクラ派内部で意見の相違がおこるたびに、それを自分たちの目的に利用しようとした。

大会は、サークル根性のような障害を除かなければならなかった。大会に期待されていたことは、狭いサークル的な結びつきを単一の広い党的な結びつきに代え、すべての組織が思想的にも組織的にも相互に固く結びついた党をつくることであった。サークルを党に吸収することは、激論のもとでおこなわれ、大会では、党派性の原則がサークル根性と再三衝突した。

大会の議事は、党内でブントのしめる地位の問題からはじまった。これは偶然ではなかった。『イスクラ』は、ロシアに住むすべての民族の先進的労働者を、単一の中央集権的な党に結集することを主張していた。ブントは、党を全党的指導部から独立した民族別組織の形式的な結合体とみていたので、連合制にもとづいて党をきずくことをめざしていた。相互の結びつきのよわい組織は、結束した党にはならなかったであろう。連合主義の雰囲気は、ポーランド人、ラトヴィア人、リトワニア人、アルメニア人という少数民族の社会民主主義組織にあらわれていたので、この問題はますます重大であった。

レーニンと彼の支持者は、中央集権制の原則に反し、党の内部生活の疎隔状態を公認する連合制が有害なことを説明しながら、ブントの組織上の民族主義と非妥協的にたたかった。大会は、党建設における民族主義的な原則をしりぞけた。中央集権制とプロレタリア国際主義を基礎にして党を創立するというレーニンの思想が勝利をおさめた。

大会決定の意義はロシアのわくをこえていた。それは、多民族的な国の労働者党の重要な組織原則にかんするものだった。ロシア社会民主労働党第二回大会からすこし前、やはり多民族的な国で活動していたオーストリア社会民主党は連合制に賛成し、単一の党は民族別の組織に分解した。ロシアのマルクス主義者は、すべての民族の労働者の戦闘的な統一を保障する、党建設の正しい道を示したのである。

ついで大会は、党綱領の問題を審議した。

綱領のプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）についての命題をめぐって、激闘がおこった。日和見主義者たちの指導者アキモフとその仲間は、この命題を綱領にいれることに反対した。そのさい彼らは、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を獲得するという任務をかかげていない西ヨーロッパの社会主義諸党の綱領を引合いにだした。彼らは、階級矛盾が緩和しつつあると称し、労働者階級の生活状態が徐々によくなれば、それは、ひとりでに社会主義をもたらすと主張した。大会は、日和見主義者に痛撃をくわえ、綱領のなかでプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）というマルクス主義の根本命題を確認した。

「経済主義者」は、労働運動で党が指導的役割をはたすという命題に反対し、「自然発生論」の立場からいろいろな修正意見を大会に提出した。大会は、彼らの修正意見をすべて否決した。

日和見主義者がとくに頑強に反対したのは、農民問題についての綱領であった。彼らは、農民は革命性をもたないという主張によって、彼ら自身が大衆を革命に立ちあがらせようと思っていないこと、それをおそれてさえいることをごまかそうとした。実質的には日和見主義者たちは、革命でプロレタリアートが指導的役割をはたすことや労農同盟に反対したのである。

農業綱領には、互いに関連のある二つの基本思想がすえられた。「農奴制の遺物を一掃せよ」というスローガンのもとに農民をブルジョア民主主義革命に立ち上らせることと、「農村における階級闘争の自由な発展」、すなわち、社会主義革命の勝利をめざす闘争の条件を準備するという任務がそれであった。レーニンは、この綱領を擁護して、農奴制の遺物を一掃するという要求が革命的性格をもつことを強調した。

「われわれはこう信じている」と彼は言った。「社会民主党がいま農民の利益のための闘争に立ちあがったのを念頭に置けば、今後はわれわれは、農民大衆が社会民主党を自分たちの利益の擁護者とみることに慣れるものと、あてにしてよい、と」（全集、第六巻、五一二ページ）。

民族問題をめぐって激論がおこった。ロシアのような多民族国家にとっては、民族問題を正しく解決することは、並はずれた意義をもっていた。レーニンは、マルクス主義的民族綱領の理論的基礎と実践的要求を究明した。『われわれの綱領における民族問題』という労作その他の論説のなかで、彼は、徹底的に国際主義的な綱領的命題——民族にかかわりなくすべての市民の完全な同権、国家にくわわっているすべての民族にたいする自決権の承認、すべての民族の労働者を単一の階級的組織（党、労働組合、その他）に統合すること——の根拠をしめした。

民族自決権というスローガンは、革命闘争における党の強力な武器であった。このスローガンは、ロシアの抑圧されている諸民族を、民族的抑圧に反対する首尾一貫した闘士であるプロレタリアートの味方につけ、労働者階級をプロレタリア国際主義の精神で教育するのに役だった。ブント派は、このスローガンに対抗して、文化的民族的自治というきわめて日和見主義的で民族主義的な要求をかかげた。この要求は、民族文化別に労働者を区分し、プロレタリアートの国際的な階級的統一を破壊するものであった。またこの要求は、いろいろな民族の勤労者の関心を文化問題だけにかぎり、彼らを革命や国家全体の民主主義的改造をめざす闘争からそらすものであった。ポーランド社会民主党の代表たちも、大会でまちがった立場をとった。彼らは、民族自決権のスローガンがポーランドの民族主義者に手をかすことになるだろうと誤解し、このスローガンの撤回を提案したのである。

レーニンの思想とロシア社会民主労働党第二回大会で採択された民族問題についての党の綱領とは、民族主義に打撃をあたえた。それはマルクス主義理論をゆたかにし、党が正しい民族政策をとるのをたすけた。

日和見主義者の攻撃はすべて、イスクラ派によって撃退された。大会は、最大限綱領と最小限綱領の二つの部分からなるイスクラ派の綱領を承認した。最大限綱領には、党の終局目標である資本主義を社会主義に代えることと、社会主義社会実現の条件である、社会主義革命とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の樹立とがのべてあった。最小限綱領には、党の当面の任務である、ツァーリズムの打倒、ブルジョア民主主義革命、民主的共和制の樹立、八時間労働日、すべての民族の完全な平等と民族自決権、農村における農奴制の遺物の一掃がのべてあった。

大会は、真にマルクス主義的な党綱領を採択した。西ヨーロッパの社会民主諸党とはちがって、ロシア社会民主労働党は、当時は、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の思想をその綱領に定式化した、世界でただ一つの労働者党であった。この綱領は、民主主義のための闘争と社会主義のための闘争の関係、この闘争ではたす労働者階級の指導的役割などの命題でマルクス主義をいちじるしくゆたかにした、ロシアのマルクス主義者の理論活動の成果であった。この綱領は、党の一貫したマルクス主義的政策を規定しており、権力をめざす革命闘争の精神に立ってプロレタリアートを教育するのに役だった。党は、当然、このような綱領を誇ることができた。ボリシェヴィキ党は、この綱領を基礎にして形成され、強化していった。党はこの綱領を指針として、ロシアにおけるブルジョア民主主義革命と社会主義革命の勝利をめざして着々とたたかいをすすめた。

大会は、日和見主義とたたかい、マルクス主義を擁護し発展させ、党を建設するうえで、『イスクラ』がはたしたすぐれた功績を強調し、『イスクラ』を党の中央機関紙と宣言した。イスクラ派の方向は全党の方向とみとめられた。

党規約、とくにその第一条、党員資格についての条項を審議したさい、党の問題について二つのするどく対立する態度が表面化した。レーニンは、第一条をつぎのように定式化していた。「党の綱領を承認し、財政的にも、また党組織の一つにみずから参加することによっても党を支持するものは、すべて党員とみなされる」。マルトフは、自分の定式を提出した。それは、「党の綱領を受けいれ、財政的に党を支持し、党組織の一つの指導のもとに党に規則的な個人的協力をおこなうものは、すべて党員とみなされる」というのであった。このように、レーニンが、党員資格を規定するにあたって「党組織の一つにみずから参加すること」を主張したのに、マルトフ

は「規則的な個人的協力」にとどめるよう提案したのである。

レーニンは、党を、組織された全体とみていた。それぞれの党員は、かならず党組織の一つにはいっていなければならない。これによって、すべての党員のマルクス主義的教育と高度の規律も、各党員の活動にたいする党の真の統制と、党員にたいする確固とした指導も保障される。こうしたばあいに、党は、単一の計画にしたがって行動する党諸組織の整然たる体系になり、規律と組織性を具現したものとなる。

マルトフは、希望者をすべて入党させ、彼らに党の一組織の構成員となる義務を負わせず、党規律のわくでしばらないよう提案した。マルトフと彼の仲間は、第二インタナショナルの社会民主諸党でとられている「門戸開放」政策をとっていた。だがそれはプロレタリアートの党組織の厳重な規律をよわめたであろう。マルトフ派の意見によると、すべてのストライキ参加者あるいはインテリゲンツィアは、たとえ党組織のどれか一つにはいらず、またはいるつもりがなくても、自分を党員にかぞえる権利をもつことになった。こうして、党は、明確な組織上の境界をうしなって、雑然とした、あいまいな、はっきりした形のない団体になってしまったであろう。

党員資格についてのレーニンの見解は、マルクス主義党の方針の確固さとその原則の純潔を守り、動揺分子が党にはいるのを困難にするものであった。

「われわれの任務は」とレーニンは大会でのべている。「わが党の堅固さ、堅忍不抜、純潔を守ることである。われわれは、党員という資格とその意義を、もっともっとたかめるようにつとめなければならない。だから私はマルトフの定式に反対である」（全集、第六巻、五一九ページ）。

レーニンは、あらゆる種類のふらふらした、動揺的な日和見主義分子で党がけがされる危険があると警告した。この危険は、どの国でも労働者党をおびやかすものであるが、とくにロシアでは大きかった。ロシアは、ブルジョア民主主義革命の前夜にあったので、小ブルジョア分子が党にはいりこもうとしていたからである。党への選抜を慎重にし、党員という資格を厳重に扱えというレーニンの指示は、ボリシェヴィキ党の基本的な組織原則の一つになった。

党規約第一条をめぐるたたかいの原則的な意義は、要するに党はどのようなものでなければならないかという問題であった。レーニン派は、一枚岩の、戦闘的な、きちんと組織されていて規律のある、革命的なプロレタリア党に賛成であった。マルトフ派は、あいまいで雑然とした、はっきりした形をもたない小ブルジョア的・日和見主義的な党に賛成であった。レーニンは、一貫した革命性を保障するような党内秩序をうちたてることを主張した。だからこそ、すべての日和見主義分子、すなわちブント派、「経済主義者」、中央派、「軟弱な」イスクラ派は、全力をあげてマルトフの定式を擁護したのである。アキモフからトロツキーにいたる日和見主義者が連合した結果、大会は賛成二八票、反対二二票、保留一票の多数で、マルトフの定式による規約第一条を採択した。

日和見主義者のこの一時的な勝利も、レーニン派を動揺させはしなかった。中央委員会の役割の問題で、激闘がくりひろげられた。日和見主義者たちは、中央委員会の指導的役割を削減しようとした。彼らは各地の委員会を中央委員会が解散する権限を制限するよう、また全党にかんする中央委員会の決定だけが党の諸組織にとって拘束力をもつとみなすように提案したのである。大会はこの提案を否決した。規約には、中央委員会は「党のすべての実践活動を統一し、軌道に

のせ」、党の働き手と資金を配分し、各種の党機関を設立し、その活動を指導する、「中央委員会のすべての決定は、あらゆる党組織にとって拘束力をもつ」（『ソ連邦共産党決議集』、第一巻、六九ページ）と、のべられていた。これらの規定は、その後のすべての党規約にのこされた。確固たるイスクラ派は、自治制や連合制という日和見主義的原則に対抗して、党建設における中央集権制の原則を守りぬいた。

レーニンに指導されるイスクラ派が、党規約のためにおこなったたたかいの意義はきわめて大きい。レーニンとその支持者は、大会でイスクラ派の組織計画を守りぬいた。この計画にもとづいて、ロシアの革命的マルクス主義党、ボリシェヴィキ党はうまれ、強化したのである。

規約の承認にともなって、大会は、党派性を強化するための一連の決定を採択した。当時、国外には、「経済主義者」の「在外ロシア社会民主主義者同盟」とイスクラ派の「ロシア革命的社会民主主義在外連盟」の二つの組織があったが、大会は、国外のこのような変則的な状態を一掃することを決定し、「連盟」をロシア社会民主労働党の唯一の在外組織とみとめた。これに抗議して、在外「同盟」の代表である二名の「経済主義者」が、大会から退場した。

ブントは大会で、ブントをユダヤ人プロレタリアートの唯一の代表者とみとめるように要求した。これは、党組織内で労働者を民族別に区分し、プロレタリアートの単一の階級的組織を拒否することを意味するであろう。大会はブントのこの民族主義的な要求を否決した。すると、五名のブント派代議員も、ブントはロシア社会民主労働党から脱退すると声明して、大会から退場した。七名の日和見主義者が大会から退場したため、力関係は確固たるイスクラ派に有利にかわった。

綱領問題、戦術問題、組織問題でのイスクラ派の原則の勝利は、サークル主義を一掃することにより、また党の全活動に一貫した革命的方向を保障できるような中央指導機関（中央委員会と中央機関紙）を選出することによって、確保する必要があった。レーニン派は、確固たる、一貫した革命家からなる中央委員会の構成を主張した。マルトフ派は、中央委員会内でふらふらした日和見主義分子に優位を占めさせようとした。確固たるイスクラ派は、レーニン、マルトフ、プレハーノフからなる『イスクラ』編集局を選出することを提案した。マルトフ派は、これまでの六人組の編集員をそのままのこすよう主張した。

代議員の大多数は、イスクラ的党派性の勝利を確保するレーニンの計画を断固として支持した。『イスクラ』編集局は、レーニン、マルトフ、プレハーノフの構成で選出された。党中央委員会には、クルジジャノフスキー、レングニク、ノスコフがえらばれた。だが、マルトフは、編集局で働くことを拒否し、マルトフの支持者は、中央委員会の選挙に参加しなかった。

大会は、中央機関の問題についての表決で、党内におけるレーニン的原則の勝利を確保した。このときいらい、党の指導機関の選挙で多数を獲得したレーニン支持者は、ボリシェヴィキ〔多数派〕と呼ばれるようになり、レーニンの反対派は、メンシェヴィキ〔少数派〕と呼ばれるようになった。大会でのたたかいのなかからうまれた「ボリシェヴィキ」という言葉は、「労働者階級の事業、共産主義の事業にあくまでも献身的な、一貫した革命的マルクス主義者」という観念と同じ意味になった。

大会でのボリシェヴィキの勝利は、社会民主主義運動の発展全体によって準備されたものであった。大会には、日和見主義との原則上の激闘を通じて成長した党の基幹活動家の代表が出てい

た。ふらふらした動揺分子に党の指導をゆだねようとしたマルトフ派の意図は、イスクラ的方針の一貫した支持者たちを、マルトフ派から遠ざけずにはおかなかった。形成された雑多な日和見主義分子の連合に反対して、大会で党の利益を精力的に擁護したのは、最大級の委員会の代表、すなわちペテルブルク委員会のア・ヴェ・ショットマン、モスクワ委員会のエヌ・エ・バウマン、バクー委員会のベ・エム・クヌニャンツ、ドン委員会のエス・イ・グセフ、キエフ委員会のペ・ア・クラシコフ、オデッサ委員会のエル・エス・ゼムリャチカ、「北部連盟」のエリ・エム・クニポヴィチとア・エム・ストパニ、トゥーラ委員会のエス・イ・ステパノフとデ・イ・ウリヤーノフ（レーニンの弟）であった。

大会の議事の進行につれて、党のためのたたかいではたしたレーニンのすぐれた役割が、ますますはっきりと現われてきた。党の事業を徹底的に守りぬいたすべての人は、レーニンを中心に団結した。

革命的マルクス主義党、ボリシェヴィキ党の創立が、ロシア社会民主労働党第二回大会の最も重要な成果であった。ロシアの労働運動は、その最高の形態である独自の政党をつくりあげるまで、長いいばらの道をとおってきた。この党は、レーニンの『イスクラ』によって究明された思想的・組織的原則にもとづいてつくられたものであり、その基幹活動家は、たたかいのなかできたえあげられた職業革命家であり、その指導者はレーニン派ボリシェヴィキであった。

労働者階級の革命党が出現したことは、ロシアの歴史上のきわめて重要な道標であった。九〇年代の中ごろから、プロレタリアートは、重要な政治勢力として登場していた。だがプロレタリアートは、自分の党を創立するとともに、勤労者全体の指導者になりはじめた。労働者階級、う

ちひしがれた農民大衆、抑圧された諸民族は、ロシア社会民主労働党の綱領に自分たちの宿願が表明されていることをみとめた。自由主義者には、ツァーリ君主制を温存する穏健な憲法が都合がよかったし、エス・エルは、政治的自由というあいまいな要求以上に出なかったが、労働者党は、ツァーリズムの打倒を大衆に呼びかけ、社会主義革命とプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)をめざし、社会主義の原則にもとづく社会の根本的改造をめざしてたたかうために、国家生活と社会生活全体の完全な民主化を呼びかけた。ロシア社会民主労働党は、国と人民の利益に完全にかなった活動をおこなう、ロシアでただ一つの党であった。

第二回大会は、世界史的意義をもっている。この大会は、国際労働運動の転換点であった。西ヨーロッパでは、労働者党は資本主義の比較的平和な発展の状況のもとで成立した。当時、ブルジョア革命の時代はすでに大体においておわっていたが、社会主義革命の時代はまだきていなかった。このような情勢のもとで、ブルジョア的合法性に毒され、党内の日和見主義と妥協する議会主義政党が徐々に発展をとげた。ロシアにおける労働者党は、革命の機が熟する情勢のもとでうまれた。党には、大衆にこの革命の準備をさせるという任務がひかえていた。警察のきびしい追及のもとで、日和見主義のさまざまなあらわれとの激闘を通じて、党は徹底的に革命的な勢力としてきたえられていった。

ロシアのマルクス主義党は、新しい歴史的時代すなわち、帝国主義時代の初めに出現し、プロレタリアートは革命戦の直前にあった。第二インタナショナルの諸党は、新しい任務を正しく解決することができず、労働者階級に、資本主義のくびきをくつがえしてプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)をうちたてるための戦闘の準備をととのえさせることができなかった。エンゲルスの死

（一八九五年）後に、第二インタナショナルの指導部は、ますます日和見主義にかたむいていった。すでに一九世紀末の修正主義との最初のたたかいは、社会主義革命の拒否とブルジョアジーとの協調を説いていた、マルクス主義の敵に、西ヨーロッパの社会主義諸党の指導者たちがますます屈服していることを示した。第二インタナショナル内の革命的分子は、あまり弱くて、情勢をかえることができなかった。

ロシアのマルクス主義者、レーニンを先頭とするボリシェヴィキだけが、労働運動の根本問題に正しい解答をあたえて、新しい時代の要請におうじることができた。彼らは、党の役割をプロレタリアートの政治的指導者と規定し、社会主義革命を遂行してプロレタリアートの執権を樹立するために、勤労大衆を労働者階級の味方に獲得する任務をかかげた。彼らは、労働運動のもっとも緊急な任務の一つとして、日和見主義との断固たる闘争をかかげ、日和見主義と妥協しない模範をしめした。彼らは、労働者階級を系統的に革命的精神で教育する党を創立した。またこの党は、大衆としっかりむすびつき大衆に影響をあたえることのできる指導者の基幹部隊を養成した。

ボリシェヴィズムは、国際労働運動内でもっとも革命的で首尾一貫したマルクス主義的流派であった。レーニンと彼に指導されるマルクス主義者たちの活動の結果、ロシアにはじめて、日和見主義と妥協しない、ブルジョアジーにたいして革命的な、新しい型の党、社会革命とプロレタリアートの執権の党、すなわちボリシェヴィキ党が生まれた。

「ボリシェヴィズムは」とのちにレーニンは言っている。「政治思想の一潮流として、また政党として、一九〇三年いらい存在している」（全集、第三一巻、九ページ）。

4　メンシェヴィキに反対し、党の強化をめざす闘争の展開

第二回大会後の党内情勢は、イスクラ派のなかに分裂がおこったため複雑になった。「経済主義者」は、徹底的に暴露されていた。党はメンシェヴィキという新しい日和見主義者とたたかっていたが、メンシェヴィキの日和見主義的本質は、まだ暴露されていなかった。党がメンシェヴィキのために重大な脅威にさらされていることを、各党員がはっきり理解する必要があった。

革命家のボリシェヴィキと日和見主義者のメンシェヴィキとのあいだに、多年にわたる、はげしい闘争がはじまった。この闘争が党と革命の前途にとってもつ意義は非常に大きかった。レーニンとボリシェヴィキは、党が大会で承認された綱領にもとづいて行動するよう求めた。メンシェヴィキは、党を日和見主義の道にむけようとした。彼らは、大会の決定にしたがうことをこばんだが、それと同時に、党と手を切るよう自派に公然と呼びかけるだけの勇気はなかったし、また新党の結成を公然と宣言もしなかった。メンシェヴィキは、ロシア社会民主労働党が労働者に身近かなことを理解していたので、労働運動の分裂主義者である正体をさらけ出すことをおそれたのである。彼らは大会後まもなく、党にかくれて、マルトフ、トロツキー、アクセリロートを首脳とする反党分派組織をつくった。彼らは党の中央諸機関をボイコットし党活動を混乱させて、党の指導権を奪取しようとした。メンシェヴィキは、マルトフが声明したように、「レーニン主義にたいして反乱をおこした」。

メンシェヴィキは「在外連盟」を反党闘争の拠点にしたが、そこではインテリゲンツィアが優勢で、労働者大衆とのつながりはなかった。メンシェヴィキは、一九〇三年一一月には『イスクラ』を、一九〇四年七月には中央委員会を、と一歩一歩党のすべての中央機関を乗っとった。これに成功したのは、彼らが自分の正しさを党に説得することができたためではなくて、調停主義者の援助があったからであった。

調停主義の音頭取りとなったのは、プレハーノフであった。彼は、大会ではレーニンを支持したが、大会後まもなく、編集委員であった四人のメンシェヴィキを編集局に復帰させるよう要求した。レーニンは、大会の意志にそむくことには同意できず、編集局を脱退した。彼は党中央委員に補充され、そこを足場として日和見主義者とたたかった。プレハーノフは、単独で前編集委員の全員を『イスクラ』編集局に「補充した」。彼は『なにをなすべきでないか』という論文のなかで、自分の行動を弁明し、党内の平和のために日和見主義者への譲歩に応じなければならない、と主張した。これは、敵に原則的立場をあけわたすことを意味していた。プレハーノフの論文は、マルクス主義党のあらゆる敵から大歓迎された。ブルジョア自由主義者のストルーヴェは、この論文を「注目すべき転換」と評価した。

プレハーノフ自身の活動は、「なにをなすべきでないか」のはっきりした一例であった。プレハーノフはまず、たとえメンシェヴィキがまちがった立場をとっているとしても、メンシェヴィキに譲歩すべきである、とのべたが、まもなく、自分自身熱烈なメンシェヴィキになってしまった。原則的な問題で日和見主義に譲歩的な態度をとると、日和見主義者を勝利させる結果になることを、党員はまのあたり納得した。プレハーノフがマルクス主義からはなれたのは、彼が新し

い歴史的時代の労働者階級の新しい任務を理解しなかったためである。彼がロシアの労働運動から長いあいだはなれていたことも、これに影響していた。過去の彼のあやまりも、一定の役割をはたした。

『イスクラ』は第五二号から、革命的マルクス主義の戦闘的機関紙、党のための闘争の機関紙ではなくなった。メンシェヴィキは『イスクラ』を乗っとって、これを反党闘争の機関紙にかえ、まず最初に組織問題の分野で日和見主義を説く演壇にかえた。メンシェヴィキ自身、「旧『イスクラ』と新『イスクラ』のあいだには深い溝がある」とみとめないわけにはいかなかった。党派性の基礎は掘りくずされた。党の決定を遂行する義務を要求することは、「官僚主義」とか「形式主義」とかいわれ、多数に少数が服従することは、党員の意志と自由を「乱暴に機械的に」抑圧することとみなされ、党規律は「農奴制」であると鼻であしらわれたのである。メンシェヴィキは党を、組織上の細分状態とだらしなさへ、サークル主義と手工業的なやりかたへひきもどそうとした。

メンシェヴィキに決戦をいどみ、組織問題における彼らの日和見主義を暴露し、党にとってメンシェヴィズムがどんなに危険であるかをあきらかにする必要があった。レーニンは、一九〇四年五月に出た著書『一歩前進、二歩後退』のなかで、この任務をはたした。党についてのマルクス主義学説は同書のなかでさらに発展させられた。レーニンは、マルクス主義党はプロレタリアートの政治的指導者であるという見解の上に立って、ボリシェヴィキ党のつぎのような組織原則を仕上げた。

マルクス主義党は、労働者階級の一部であり、その前衛部隊である。党を階級全体と混同して

はならない。党は、労働者階級のなかのすぐれた人々、もっとも自覚した、組織だった行動能力のある、自己犠牲的な、革命の事業にあくまでも献身的な人々を選りすぐって、つくられる。

プロレタリアートは均質なものではない。プロレタリアートのなかには、意識水準や人生の経験の度合いを異にする、いろいろな層がある。そのうえ、資本主義のもとでは、労働者階級の隊列は零落した農民や零細な手工業者から出てきた人々で、たえず補充される。労働者の先進分子とその他の労働者大衆とのあいだの差異は避けられない。もし党が希望者をその隊列に見さかいなく全部加入させはじめるとしたら、党はどのようなものになるであろうか？ 党が前衛部隊の役割をはたせなくなることはあきらかである。

党についてのメンシェヴィキの見解の根本的な欠陥は、彼らが党と階級を混同していた点にあった。メンシェヴィキは、自分は党員だと名のる権利をすべてのストライキ参加者にあたえるよう要求することによって、労働者のなかの先進分子とその他の大衆とのあいだの境界をいっさいとりはらってしまった。党は、労働者階級全体をその前衛部隊の意識水準に引き上げずに、おくれた層のおくれた気分に追随する組織になってしまったであろう。その結果、党は前衛の役割をうしなってしまったであろう。

党は、プロレタリアートの自覚の最高のあらわれであり、労働者階級のゆたかな経験と革命的伝統をとりいれる。党は科学的な理論、すなわち社会発展と階級闘争の法則の知識で武装されているので、労働者階級を指導することができる。

党は、労働者階級の前衛部隊であるだけでなく、その組織された部隊でもある。党が意志の統一、行動の統一、規律の統一によって固く結束した労働者階級の単一かつ共通の部隊として組織

されるばあいに、党は前衛部隊としての役割をはたすことができるだろう。プロレタリアートの行動の統一のためには、意志の統一が必要であるが、統一された意志は、組織をぬきにしては考えられない。労働者階級の自覚した部隊としての党は、労働者階級の組織性を具現したものである。団結した組織になるばあいに、党は労働者階級の闘争をりっぱに指導することができるだろう。

メンシェヴィキは、インテリゲンツィアは党規律をわずらわしく思い、党組織にはいりたがらないから、多くのインテリゲンツィアが党外にのこるだろうといって、党をおどそうとした。しかし労働者階級の党には、個人主義的な気分をもつ人たちは必要でない。プロレタリアートは組織と規律をおそれない。大規模な資本主義的生産は、プロレタリアートを結合し、規律の自覚をたかめる。階級闘争は、組織と規律の必要をたやすく会得するのをたすける。だから、先進的な労働者は、組織を尊重し、闘争における組織の意義を理解している。

プロレタリアートは、意識水準の点だけでなく、組織性の度合いの点でも、一様でない。組織性と意識のあいだには密接な関係がある。意識が高ければ、それだけ組織も完璧である。労働者のなかには、まったくおくれた未組織層もあれば、労働組合組織しか受けつけようとしないおくれた層もある。前衛部隊である党は、プロレタリアートのもっとも完璧な階級組織である。

党は中央集権制にもとづいて建設されるばあいにだけ、強固な、団結した組織になる。中央集権制の原則とは、単一の規約にもとづいた党の建設と活動のことであり、単一の中央機関から党を指導することである。この単一の中央機関とは党大会であり、大会と大会のあいだは中央委員会である。中央集権制の原則とはまた、単一の規律をもち、少数が多数に服従し、下級組織が上

級組織に服従することである。

マルクス主義党は民主主義を持ち前とする。だが、非合法活動のもとでは、党組織は、完全な選挙制と報告義務制の原則にもとづいて建設することはできず、厳重な秘密組織とならざるをえなかった。しかし、レーニンは、適当な条件がうまれれば、党組織は民主主義的中央集権制の徹底的な実施にもとづいて建設されるだろうと考えていた。

メンシェヴィキは、中央集権制が党を「工場」にかえ、党員を「歯車やねじ」にかえるといった、デマをとばした。実際には、メンシェヴィキは、党規律に反対したのである。彼らは、各組織が自分かってに活動し、自分のうえに立つ権力をなにもみとめていなかった時代に、党をひきもどそうとしていた。

「以前には」とレーニンは書いている。「わが党は正式に組織された全体ではなくて、私的なグループの総和にすぎなかった。だから、これらのグループのあいだには、思想的働きかけ以外に他の関係はありえなかった。いまでは、われわれは組織された党になった、そしてこのことはまさに、権力がつくりだされたこと、思想の権威が権力の権威に転化されたこと、党の下級機関が上級機関に服従することを意味している」(全集、第七巻、三九三ページ)。

全権をもつ中央機関がなければ、党は真に革命党とはなりえないし、プロレタリアートの闘争を指導することはできないであろう。

単一の中央集権的な党は、規律をはなれては考えられない。組織と規律のあいだには密接な関係があり、強固な組織は厳格な規律をはなれてはありえない。討議と批判との自由、行動の統一――レーニンは、労働者党内の規律をこう規定した。決定が採択されたのちは、全党員が一体と

なって行動しなければならない。なぜなら、組織性とは行動の統一だからである。

メンシェヴィキは大会の決定や中央委員会の決議をボイコットして、党内の規律をそこなった。彼らは、党員、とくに「えらばれた者」、指導者にとっては、大会の決定は拘束力がないと説いた。だが労働者階級の党内では、党の決定が拘束力をもつのは一般党員にたいしてだけであるといった秩序は許されない。こういう「秩序」は、党の統一をはなはだしい危険にさらす。

「日和見主義的な論議と」とレーニンは書いている。「無政府主義的な空文句とにかたむき勝ちな傾向をあからさまにしめして、すでに第一条についての論争のさいにあらわれていたインテリゲンツィア的個人主義には、あらゆるプロレタリア的な組織や規律が農奴制のように思われる」（同、三八一ページ）。

党の真の統一とは、思想上の統一であるだけでなく、組織上の統一でもあるが、後者は全党員にたいして拘束力をもつ単一の規律をはなれては考えられない。

マルクス主義党は前衛部隊と労働者階級の幾百万の大衆とのむすびつきを具現したものである。メンシェヴィキは、先進分子を選抜して、中央集権的な、規律ある組織にまとめることは、先進分子と大衆とのむすびつきをよわめると主張したが、レーニンはメンシェヴィキのこの主張の欠陥を暴露した。

「それどころか」とレーニンは答えている。「真の社会民主主義者からなるわれわれの党組織が強固になればなるほど、また党の内部に動揺とぐらつきとが少なくなればなるほど、労働者大衆のなかの党をとりまき、党に指導される分子にたいする党の影響は、それだけ広く、多方面で、ゆたかになり、また効果的なものになるであろう」（同、一一六七ページ）。

党の不断の心づかいは、党外大衆とのむすびつきを拡大し強化し、自分の階級の信頼を得ることである。労働者大衆とのむすびつきを固くし、彼らの支持をうけることなしには、マルクス主義党は発展することができない。

党内で党内民主主義と自己批判がおこなわれれば、党は強化し、党と大衆とのむすびつきは倍加する。全党員の積極性を極力たかめ、彼ら全員を党生活のもっとも重要な諸問題の審議に参加させるように努力しなければならない。

「大衆の党となることが口先だけにおわらないためには」とレーニンは書いている。「われわれは、ますます広範な大衆を党のあらゆる問題に参加させ……なければならない」（全集、第七巻、一〇九ページ）。

マルクス主義党は、「自己批判して自分の欠陥を容赦なく暴露する活動」（同、二一〇ページ）を自分の義務と考えており、これを党の活動の欠点を克服し、党の基幹活動家を育成するもっとも重要な方法だとみている。

マルクス主義党は、プロレタリアートの階級組織の最高の形態である。レーニンは、メンシェヴィキが党と労働者階級との境界をとりはらうことによって、実際には、労働運動の指導組織としての党の意義を否定したことをあきらかにした。

マルクス主義党は、労働者階級のもっとも自覚した、組織だった行動能力のある分子を結集する。党は、社会発展の法則の知識を身につけ、明確な綱領と柔軟な戦術をもっている。このような党は、労働者階級の指導者を教育する最良の学校である。党の隊列のなかで、先進的労働者は、プロレタリアートの階級闘争のあらゆる形態を指導するのに必要な理論上の知識と政治上の経験

とを得る。党、その委員会や活動家は、プロレタリアートの日常闘争に参加し、プロレタリアートの切実な利益を確固として守ることによって、労働者大衆の信頼を得る。すべてこうしたことが、党がプロレタリアートのあらゆる組織に指導をあたえ、これらの組織に一致した、足なみのそろった行動をとらせ、その行動を搾取制度の打倒と社会主義制度の樹立という一つの目標にむけることができるようにするのである。

レーニンは、規約第一条についての討論のさいにのべられたメンシェヴィキの見解が、一個の日和見主義的体系に発展したことをあきらかにした。メンシェヴィキの組織上の日和見主義の主な特徴は、中央集権制に敵対的な態度をとること、規律を憎むこと、組織上のたちおくれを擁護すること、小ブルジョア的日和見主義分子に労働者党の門戸を開放すること、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)をめざし、社会主義をめざす闘争における労働者階級のもっとも重要な武器である党の役割を否定することであった。

組織問題についてのボリシェヴィキとメンシェヴィキの態度の根本的なちがいは、党を建設する上での二つの対立する方針を表わしていた。ボリシェヴィキは、プロレタリア的な組織性と規律の代表者であり、メンシェヴィキはブルジョア・インテリゲンツィア的個人主義の擁護者であった。

マルクス主義の歴史上はじめて、組織上の日和見主義があますところなく批判され、組織を軽視する態度が労働運動にとくに危険なことがあきらかにされた。レーニンは、この著作のなかで、労働者階級の闘争上、とりわけ、ロシアで巨大な人民革命がもりあがっており、資本主義世界で社会主義革命の条件が熟している新しい歴史的時期には、マルクス主義党が巨大な意義をもつこ

とを、力づよく解明した。

「権力獲得のためにたたかうにあたって、プロレタリアートには組織のほかにどんな武器もない。ブルジョア世界の無政府的競争の支配によって分裂させられ、資本のための強制労働によってうちひしがれ、まったくの貧困と荒廃と退化の『どん底』にたえず突きおとされているプロレタリアートは、マルクス主義の原則による彼らの思想的統合が、幾百万の勤労者を労働者階級の一軍に結束させる組織の物質的統一でうち固められることによってのみ、不敗の勢力となることができるし、またかならずなるであろう。この軍隊にむかっては、ロシアの専制の老衰した権力も、国際資本の老衰しつつある権力も、もちこたえることはできない」（全集、第七巻、四四五―四四六ページ）。

「権力獲得のためにたたかうにあたって、プロレタリアートには組織のほかにどんな武器もない」というレーニンの命題は、ボリシェヴィズムの礎石の一つになった。

党の基幹活動家たちは、熟達さと組織問題についてのレーニンの思想の深い理解とを示した。多くの委員会が、メンシェヴィキの『イスクラ』を批判し、党の問題、党の組織原則の問題を、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）をめざす闘争の任務と直接にむすびつけた。

「プロレタリアートに執権（ディクタツーラ）の準備をととのえさせることは」とウラルの活動家は書いている。「非常に重要な組織上の任務であって、他のすべての任務に優先させなければならない。その準備とは、強力で影響力のあるプロレタリア組織を支持する気運をつくることであり、そのような組織のもつ意義をあますところなくあきらかにすることである」（『ロシア社会民主労働党第三回大会』、一九五五年刊、一四六ページ）。

レーニンは、西ヨーロッパの社会民主諸党の指導部から支持されないばかりか、彼らの敵意をまっこうから浴びさえしながら、党のためのたたかいをすすめなければならなかった。レーニンは、党の役割や、党の性格と組織原則や、日和見主義との断固たる、非妥協的なたたかいのなかで党の基幹活動家を育成することについて、マルクス主義を発展させる新しい見解をのべたが、第二インタナショナルの指導者たちは、これに反対した。メンシェヴィキは、アウグスト・ベーベルやカール・カウツキーのような、当時権威者とみとめられていた人たちにたよることができた。

ボリシェヴィキは、第二インタナショナルの指導者たちに、しかるべき回答をあたえた。一連の発言で、とりわけ一九〇四年の第二インタナショナルのアムステルダム大会での演説で、ボリシェヴィキは、党規約第一条についてのレーニンの定式がドイツの社会民主主義者の悲しむべき経験を考慮していたことを、率直に言明した。ドイツ社会民主党の規約は、党員が党組織の一つに所属することを要求していなかったので、日和見主義分子がこれを広く利用して、党に害をながしたのである。

ボリシェヴィキは、第二インタナショナルの諸党にならって、それと同じような党をつくることを拒否した。ボリシェヴィキは、国際労働運動とロシアの労働運動の経験を慎重にまなび、批判的にとりいれながら、レーニンの指導のもとに勇敢に新しい型の党の建設に当たった。ボリシェヴィズムは、国際労働運動に影響をおよぼしながら、国際舞台で活発に行動した。

一九〇四年の夏、党は非常に困難な状態にあった。メンシェヴィキの指導者たちは、党の中央機関を乗っとったうえで、地方の党組織を分裂させはじめた。メンシェヴィキの組織破壊活動は、

労働者階級の行動の統一を破壊しようとしていた。このような事態は、国内の革命的情勢が党勢力の結集とプロレタリアートの戦闘的統一を必要としていたときだけに、なおさら我慢ならないものであった。

一九〇四年八月、レーニンの指導のもとにスイスでひらかれた二二名のボリシェヴィキの会議は、党を結束させるうえで大きな役割をはたした。採択された『党に訴える』というアピールは、党の諸組織に、メンシェヴィキの手をしばり党の意志にそった新しい指導部をつくる第三回大会を招集するためにたたかうよう呼びかけた。

一九〇四年の秋、南部、カフカース、北部で三つの会議がひらかれ、これらの会議で、レーニンの指導のもとに、多数派諸委員会ビューローがつくられた。一九〇四年一二月二二日、旧『イスクラ』の立派な後継者である新聞『フペリョート』〔『前進』〕の第一号が出た。編集局には、ヴェ・イ・レーニン、ヴェ・ヴェ・ヴォロフスキー、ア・ヴェ・ルナチャルスキー、エム・エス・オリミンスキーがはいった。

ペテルブルク、モスクワ、リガ、バクー、エカテリノスラフ、オデッサ、中部工業地方、ウラルといった大工業地帯や主要中心地は、ボリシェヴィキにしたがった。職業革命家の基幹部隊は、レーニンを全面的に支持した。ボリシェヴィズムのためのたたかいのなかで、党の新しい勢力が成長してきた。メンシェヴィキとのはげしい思想闘争のなかで、ア・エス・ブブノフ、カ・イェ・ヴォロシーロフ、エス・エム・キーロフ、ヴェ・ヴェ・クイブィシェフ、デ・ゼ・マヌイリスキー、ゲ・カ・オルヂョニキッゼ、ペ・ペ・ポストィシェフ、エム・ヴェ・フルンゼのようなすぐれた党活動家が生まれた。党と党員の圧倒的多数は、プレハーノフ、アクセリロート、マル

トフのような指導者を批判的に検討し、彼らをしりぞけ、自分たちの指導者であるレーニンを中心に結束した。

要約

第一次ロシア革命にさきだつ一〇年間（一八九四―一九〇四年）は、人民の生活に大変動の生じた時期であった。レーニンは、もっとも強力な革命勢力である労働者階級の進出にともなって、ロシア史の新しい時代がはじまったと指摘している。

九〇年代の中ごろに、ロシアの革命家が正しい、真に科学的な革命理論を探しもとめてきた半世紀の歴史がおわりをつげた。無数の犠牲をはらい、実践の試練をくぐりながら、さまざまな理論を批判的に対比して、ロシアにおける革命思想と労働運動は、マルクス主義に到達した。社会民主主義とむすびついた大衆的な労働運動が成立した。社会民主主義派のなかには、革命的マルクス主義的潮流と日和見主義的潮流との二潮流がうまれた。レーニンは、マルクス主義擁護の非妥協的な闘争の旗をかかげ、ロシアにおけるマルクス主義党の萌芽である「労働者階級解放闘争同盟」をペテルブルクで設立した。マルクス主義発展の新しいレーニン的段階がはじまった。

二〇世紀のはじめに、ロシアでは革命の機が熟してきた。労働者階級はきたるべき戦闘にそなえて、自分の思想的・政治的武器をきたえた。レーニンに指導される『イスクラ』は、「経済主義者」にたいして勝利のたたかいをすすめ、マルクス主義党の結成を準備した。ロシア社会民主労働党第二回大会は、ボリシェヴィキ党、社会革命とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の党の存立の

端緒をひらいた。

ボリシェヴィキはメンシェヴィキにたいして、新しい型の党のため、革命における労働者階級の指導的役割のために断固たる闘争をくりひろげた。このことは、巨大な歴史的意義をもっていた。それは国際労働運動内の日和見主義との闘争でもあった。

この闘争の火のなかで、レーニンは、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）と共産主義革命の勝利とをめざす闘争における労働者階級のもっとも重要な武器である党についての学説をつくりあげた。レーニンは、プロレタリアートの偉大な首領、マルクスとエンゲルスの学説のりっぱな後継者としての実を示した。レーニンの著作は、党の巨大な思想的資産となり、党のゆるぎない理論的基礎になった。

ロシアに労働者階級の革命的マルクス主義党が出現したことは、この国と国際労働運動全体の前途にとって、きわめて大きな意義をもっていた。史上はじめて、もっとも抑圧され、もっとも革命的な階級であるプロレタリアートは、自分の独自のマルクス主義党をもって革命の道をすすんだのである。

第三章　一九〇五—一九〇七年の革命における　ボリシェヴィキ党

1　一九〇五年の前夜のロシアにおける革命運動。日露戦争。一月九日。第一次ロシア革命のはじまり

ロシアの革命の機運は多年にわたって熟してきた。二〇世紀はじめ国内には、革命的爆発の近いことをはっきりと立証するような、状況がうまれていた。このころ、資本主義は、ロシアでも、全世界でも、その最高で最後の発展段階である帝国主義にはいっていた。帝国主義の特徴は、資本主義制度の社会的矛盾と政治的矛盾がすべて極度に激化することである。

ロシアの帝国主義には独特の特殊性があった。高度に集中した大工業では資本主義的独占体がますます発展していった。高度に発達した資本主義は、経済や政治構造のなかにある農奴制のきわめて強力な遺物とからみあっていた。これらの遺物は、プロレタリアートの搾取のとくに残忍な形態、農民の極貧、非ロシア民族の暴圧をうんでいた。

ロシアのプロレタリアートは、資本主義的搾取のあらゆる惨苦をなめていた。一九〇〇—一九

〇三年の経済恐慌は、勤労者のそうでなくても苦しい状態を悪化させた。多数の失業者が生じた。資本家は、労働者の賃金をさらに引き下げ、労働日を延長した。労働時間は一八九七年の法律によって一一時間半に制限されていたが、実際には大多数の企業で一二時間から一四時間にものぼっていた。労働者の栄養状態はひどく悪化した。大多数の労働者は、あいかわらず地下室や、バラックや工場付属の宿舎にくらしていた。ブルジョア出版物でさえ、「これらの住宅での生活は懲役人の生活と大差ない」と、みとめざるをえなかった。

レーニンは、労働者階級の状態についてこう書いている――

「他人の富をつくりだすために生涯あくせく働いている幾千、幾万の人々が、飢えと不断の栄養不良とのために死んでいき、ひどい労働条件や、みじめな住宅環境や、休養の不足からおこる疾病のために、早死している」(全集、第五巻、一二ページ)。

勤労農民の状態は並はずれて苦しいものであった。一九〇五年、農奴制的搾取によって零落させられ、うちひしがれた農家一〇五〇万戸が、七五〇〇万デシャチーナの土地をもっていたのにたいし、三万の巨大地主が、それとほぼ同じだけの土地――七〇〇〇万デシャチーナ――をもっていた。地主ひとりが、貧農の三三〇〇家族がもっているのと同じだけの土地をもっていたのである。農民は、土地がたりないため、屈辱的な条件で地主の土地を借りなければならなかった。農民は、小作料として地主と国庫に、年々金で七億ルーブリ以上支払っていた。

地主への隷属には、さらに富農への隷属がくわわった。富農は、全農民の土地の半分と役畜の半数以上とをその手にあつめていた。富農は富んでいき、大多数の農民は貧乏になっていった。凶作と飢えは、農村住民の圧倒的多数の生活の不断の道づれであった。毎年、何百万という農民

が稼ぎをもとめて出ていった。工場、鉄道建設工事、木材の伐りだしと浮送の仕事にやとわれたり、人夫となって都市や波止場に出ていったり、地主や富農のところで雇農や日雇いになったりしたのである。官憲にたいしてほんの些細な「とが」をおかしたとか、税金を滞納したとかいう理由で、農民は笞で打たれ、その財産は売りはらわれた。

一九〇五年の前夜の農民の生活について、レーニンはこう書いている——

「農民改革後のまる四〇年間は、このような非農民化の連続した過程であり、緩慢な、苦痛にみちた死滅の過程である。農民はこじきのような生活水準に引き下げられた。彼らは、家畜と同居し、ぼろをまとい、あかざを食って生きていた。……農民は慢性的に飢えていて、凶作時には何万という人々が飢えと疫病のために死んでいったが、そういう凶作はますます頻繁にめぐってきていた」（全集、第四巻、四六二ページ）。

地主と資本家の抑圧は、生きとし生けるもの、進歩的なものをすべておしつぶすツァーリ専制の専横のために、いっそうひどくなっていた。軍隊、警察、裁判所、つまりツァーリズムの国家組織全体が、搾取者の利益をまもっていた。

あらゆる種類の抑圧——地主、資本家の抑圧、民族的抑圧——は、専制の警察的暴政とむすびついて、人民大衆の状態をたえがたいものにし、階級矛盾をとくにはげしいものにした。社会発展の根本的な必要、労働者と農民の切実な利益は、まず第一に地主の支配とツァーリ君主制を廃止することを要求していた。これらの課題を解決できるものは、革命だけであった。

革命直前の数年間に、勤労者の政治的積極性と革命的気分は急速に高まった。プロレタリアートは、搾取階級全体とツァーリ政府とに公然と対立するようになり、国のすべての民主勢力を団

結させる要求をかかげるようになった。都市では、政治的ストライキやデモンストレーションがおこった。一九〇四年一二月、ボリシェヴィキの委員会に指導されるバクー・プロレタリアの強力なストライキが勃発した。ストライキは労働者の勝利におわり、いくつかの都市に連帯ストライキを誘発した。

労働者階級は、その革命的積極性によって農民に範をしめし、農民は、ますます頻繁に闘争に立ちあがった。政治的自由の要求をかかげた学生運動が広がった。

ボリシェヴィキは、ツァーリズム反対の気分をもつ分子をすべて革命のために利用することをプロレタリアートにおしえると同時に、自由主義的ブルジョアジーの政策をうまずたゆまず暴露した。

ポーランド、バルト海沿岸地方、フィンランド、ザカフカースその他の地区の民族ブルジョアジーには、ロシアのブルジョアジーよりも反政府的な気分がつよかった。というのは、ツァーリ君主制は政治的抑圧や農奴制的抑圧の担い手であっただけでなく、民族的抑圧の担い手でもあったからである。被抑圧民族のブルジョアジーは、支配的な地位について勤労者を搾取する自由を手に入れるためロシアのツァーリズムからの解放をねがうはずであった。しかし、これらの民族の内部では、資本主義が発達した結果、労働者階級が成長してきて、ツァーリズムにたいしてだけでなく、「自」民族のブルジョアジーにたいしても階級闘争をおこなっていた。だから、ロシアの少数民族地区のブルジョアジーは、反政府的態度の点ではなはだしく一貫性を欠いており、ツァーリズムとの協定を求めていた。ポーランドの大ブルジョアジー、貴族、僧侶は、ポーランドのために小さな改良を手に入れようとして、ロシアのツァーリズムと和解した。ツァーリズム

は彼らの階級的利益を守ってくれたからである。フィンランドでは人民は抑圧されていたにもかかわらず、ブルジョアジーと地主は、ツァーリズムにたいする忠誠心を強調していた。ラトヴィアとエストニアでは、ツァーリ政府はドイツ人の地主貴族という支柱をもっていた。これらの地主貴族の多くは、ツァーリ政府の機構内で有力な地位を占めていた。グルジアやフィンランドの地主・ブルジョアの上層部に属する者も同様であった。

労働者階級だけが、ツァーリズムに抑圧されている諸民族の完全な自決を要求し、あらゆる民族的抑圧に反対して、一貫してたたかっていた。被抑圧民族のプロレタリアートは、ロシアの労働者に見ならって、ますます頻繁にツァーリズムとの闘争に立ちあがり、農奴制的抑圧・階級的抑圧・民族的抑圧に反対して行動するようになった。

革命運動の成長に直面してツァーリ政府は、自由主義的ブルジョアジーに小さな譲歩をおこなって彼らを自分の味方につけようとしていた。一九〇四年の末、当時「自由主義の春」と呼ばれたものがはじまった。政府は、ブルジョアジーやゼムストヴォ〔地方自治体〕機関が大会や懇親会をひらくのを許可した。それらの会合の席上では、自由主義的ブルジョアジーと地主の代表者たちが、憲法の必要を説き、ブルジョアジーを権力に近づけるべきだという演説をおこなった。

メンシェヴィキは、懇親会に出席するよう労働者に呼びかけたが、これは、ブルジョアジーが人民の代表者としてツァーリ政府のまえに出ざるをえなくするためだというのであった。こうして彼らは、労働者を自由主義的ブルジョアジーの後に追随させようとした。

これに対抗して、ボリシェヴィキは、労働者に、自由主義者の懇親会にいくのではなく、たたかう勢力全体の先頭に立ち、専制に反対するデモンストレーションのために街頭に出るよう、呼

びかけた。こうして、一九〇五年の前夜に、ボリシェヴィキとメンシェヴィキのあいだの意見の相違はいちじるしく深まった。組織問題についての意見の相違に、革命運動内の党の戦術を規定する上での意見の相違がくわわった。

一九〇四年一月に勃発した日本との戦争は、ロシアの社会生活のすべての矛盾をはげしくし、革命的事件を促進した。日露戦争は帝国主義時代の最初の戦争の一つであった。この戦争の主因は、日本帝国主義とロシア帝国主義との利害の衝突であった。日本の支配階級は多年中国を略奪してきた。日本は、朝鮮と満州をうばい、アジア大陸で地歩を固めようとねらっていた。レーニンが「軍事的・封建的帝国主義」と規定したツァーリズムも、極東で強奪政策をおこなっていた。極東では、ツァーリとその側近者の私利私欲のために各種の権益が設定された。ロシアのブルジョアジーは新しい市場をあさっていた。

日本は、さかんに戦争の準備をすすめていた。日本は、アメリカおよびイギリス帝国主義の支持を受けていた。後者は、戦争が両国をよわめるのを見込んで、ロシアを攻撃するよう日本をそそのかした。ロシアは戦争の準備ができていなかった。しかし、戦争がせまりくる革命を阻止するのに役立つものと考えて、ツァーリズムは冒険政策をとった。ツァーリズムの目算では、日本に勝利することは「易々たる」もので、新しい植民地、新しい販売市場をもたらし、専制の威信を高め、革命運動を粉砕する一助になるはずであった。

ツァーリズムの目算ははずれた。ツァーリの陸海軍の無準備をよく知っていた日本帝国主義者は、宣戦を布告せずに、ロシアの太平洋艦隊と旅順口要塞を攻撃した。彼らは不意をついて、極東におけるロシアの兵力に手いたい打撃をあたえた。

ロシアの軍隊は勇敢にたたかった。しかし、愚鈍で無知な将軍や提督にひきいられるツァーリの軍隊は連戦連敗した。第一および第二太平洋艦隊の壊滅、奉天付近での陸軍の敗北、旅順口の陥落は、戦争に負けたことを示していた。ツァーリ専制は不名誉な敗北をこうむった。

ロシア社会民主労働党は、自国の政府がおこなう帝国主義戦争にたいする労働者階級の態度という問題にはじめて直面した。レーニンは、この問題に明確な解答をくだした。戦争は、ロシアと日本の人民の利益のためにおこなわれているのではなく、一方ではツァーリ専制とロシア帝国主義の利益のため、他方では日本帝国主義と日本の支配階級の利益のためにおこなわれていた。そこで、ボリシェヴィキは、この戦争が不正義の戦争であることを人民に説明し、専制とたたかうよう呼びかけた。

すべての社会主義政党のなかで、ボリシェヴィキだけが、帝国主義戦争における自国政府の敗北というスローガンをかかげた。ボリシェヴィキはこう論証した。戦争でツァーリズムが敗北することは人民が敗北したことを意味しないどころか、人民の利益になるであろう。ツァーリズムの敗北は、ツァーリズムの打倒と人民革命の勝利をたすけるであろう、と。

「ロシアの自由の大業と」とレーニンは書いている。「社会主義をめざすロシア（と全世界）のプロレタリアートの闘争の大業は、専制の軍事的敗北にいちじるしくかかっている」（全集、第八巻、三九ページ）。

ボリシェヴィキの地方組織は、レーニンのこの方針にしたがって、労働者、農民、インテリゲンツィア、兵士、水兵のあいだで、活動をつづけた。彼らは、ビラやリーフレットをだして、戦争のほんとうの目的を説明し、ツァーリ専制を暴露した。ボリシェヴィキは戦争とツァーリズム

に反対してたたかうよう呼びかけた。日露戦争でボリシェヴィキがとった革命的マルクス主義の立場は、一九一四―一九一八年の帝国主義戦争のさいに彼らが正しい方針を立てる準備となった。メンシェヴィキは、「是が非でも平和を」というスローガンをかかげた、すなわち、ツァーリ政府による講和締結に賛成し、専制の革命的打倒を呼びかけなかった。こうして、メンシェヴィキは、一九一四―一九一八年の戦争のさいに彼らがかかげたあからさまな祖国防衛主義的な政綱を準備したのである。

戦争は最初からロシアでは不人気であった。ロシア軍の敗北が専制制度全体の腐敗した結果であることを、すべての革命的階層と民主的階層は理解していた。日本との戦争に敗北したことは、ツァーリズムに痛烈な打撃をあたえた。

日露戦争は勤労人民に新しい災厄をもたらした。それは経済をがたがたにし、運輸を混乱させ、国庫を空にした。国内では物価が騰貴した。労働者の実質賃金は二五％近くも低下した。同時に、ブルジョアの上層と軍経理部の官吏は空前のぼろもうけをした。農村では、軍隊への動員が農家の働き手をうばって、農民の不平不満をかきたてた。

戦争は、人民の堪忍袋の緒を切らせた。国内には革命的危機が熟した。

ツァーリ政府は革命運動をおさえようとして、卑劣きわまる手段をもふくめて、あらゆる手段を用いた。一九〇四年に僧侶ガポンは、保安課の指示にしたがって、ペテルブルクの労働者のあいだにズバトフ組織に類した組織をつくった。一九〇五年一月のはじめ、プチロフ工場にストライキがはじまり、他の工場の労働者からも支持されると、ガポンは、挑発を目的として、ツァーリに請願書を奉呈するために冬宮にむけて労働者の行進をおこなうことを提案した。

ボリシェヴィキは、ガポンの挑発的なたくらみを暴露し、ツァーリが労働者に血の制裁をくわえるおそれがあると警告した。ボリシェヴィキのペテルブルク委員会のビラには、こうのべてあった――

「自由は血であがなわれる。自由は、武器を手に、はげしい戦闘でかちとられるものである。ツァーリにお願いするのでなく、彼に要求するのでさえなく、われわれの憎むべき仇敵のまえに身を屈するのでなくて、ツァーリを帝位からたたきおとすのだ。……労働者の解放は、労働者自身の事業でしかありえない。坊主やツァーリの手から自由がえられるのを待ってもむだである。……戦争をやめろ！　専制をたおせ！　人民の武装蜂起万歳！　革命万歳！」

だがボリシェヴィキはまだ、大多数の労働者がツァーリに寄せていた信頼に打ち勝つことができなかった。集会で労働者は、ガポンの提案した請願書を熱心に討議した。討議のあいだに、労働者の階級的本能とボリシェヴィキの影響とがあらわれた。請願書には、政治的大赦、政治的自由、人民にたいする大臣の責任制、法律のまえでの万人の平等、労働者が資本家とたたかう自由、信教の自由、八時間労働日の要求、そのほか社会民主党の綱領と一致する一連の要求がとりいれられた。請願書は、勤労者の苦しい状態をあますところなくいいあらわす言葉でむすばれていた。「もうこれ以上がまんすることができなくなりました。私たちにとっては、このたえがたい苦難をつづけるよりは、死んだほうがましなほどの恐ろしい時機がやってきました。……私たちには、自由と幸福への道か、墓場への道か、二つの道しかありません。……」と。

一月九日の日曜日、ペテルブルクの一四万人をこえる労働者が、教会旗や聖像やツァーリの肖像をささげて、冬宮にむかって平和な行進をおこなった。ボリシェヴィキは人民から離れないた

めに、行進にくわわった。彼らの警告はあたった。ツァーリの命令によって、軍隊は、武器をもたない労働者やその妻子を、一斉射撃とサーベルと鞭でむかえた。何千という死傷者が出た。怒りが首都の勤労住民をとらえた。「ツァーリを追い払え！」と、凶暴な制裁に衝撃を受けた何千という人々はさけんだ。労働者は武装しはじめた。

このときいらい、一月九日は、血の日曜日と呼ばれている。この日は、ロシアの労働者が政治的にめざめるうえで大きな意義をもっていた。ツァーリとツァーリ政府がだれの利益を守るものであるかを、彼らは理解した。ツァーリにたいする労働者の信頼は、射撃によってうちくだかれた。抗議ストライキが全国にひろがった。一月一〇日、ペテルブルクでは労働者と軍隊の武装衝突がつづいた。モスクワでは、一月一〇日にゼネラル・ストライキがはじまった。リガのプロレタリアートは、一月一三日、ストライキを宣言し、政治的デモンストレーションに出ていった。警官隊との衝突で七〇人が殺され、二〇〇人近くが負傷した。一月一四日、ワルシャワでゼネラル・ストライキが勃発した。一月一八日にチフリスではじまったゼネラル・ストライキは、ザカフカース地方の諸都市の引きつづく政治的ストライキの口火を切った。

レーニンは、一月九日の事件の最初の報道に接して、こう書いている――

「労働者階級は内乱の偉大な教訓をえた。プロレタリアートの革命的教育は、平凡な、日常の、うちのめされた生活が何月、何年かかってもできないほどの前進を、一日でなしとげた。『死か、それとも自由か！』という、英雄的なペテルブルク・プロレタリアートのスローガンは、いまやロシア全土にこだましている」（全集、第八巻、八六―八七ページ）。

一月九日は、全国にわたって労働者大衆をツァーリズムとの闘争に立ちあがらせた。一九〇五

年の一月だけで四四万人の労働者がストライキをおこなった。これは、それにさきだつ一〇年間の総計よりも多い。事件は嵐のように進展した。国には革命がはじまった。

五月一日、「専制をたおせ！」というスローガンをかかげた労働者のストライキが、二〇〇近い都市をまきこんだ。ポーランドのメーデーは、軍隊との大規模な武力衝突におわった。バクーのストライキは二週間つづいた。

プロレタリアの闘争は、農民大衆の深部に激動を呼びおこした。はやくも二月には、オリョール、ヴォローネシ、クールスクの諸県で農民騒擾がおこった。農民行動はつぎつぎに各県にひろがった。春になると、地主の土地をかってに耕作したり、地主の土地に家畜を放牧したり、採草地を占拠したりすることがはじまった。ヴォルガ沿岸地方、バルト海沿岸地方、ザカフカース、ポーランドの運動はとくに強力であった。農村では集会やデモンストレーションがおこなわれた。多くの地方に社会民主主義者の組織した農業労働者のストライキがおこった。

2　革命の性格、推進力および任務についてのボリシェヴィキの評価。第三回党大会

労働者と農民の革命闘争をりっぱに指導するためには、党を強化し革命のなかで正しい方針を立てることが決定的な重要性をもっていた。しかし、当時ロシア社会民主労働党は、メンシェヴィキの組織破壊活動の結果、分裂していた。第二回大会後、党は深刻な危機にあったが、この危機の根底は、レーニンが指摘したように、「第二回大会の少数派が大会の多数派に頑として服従

したがらなかったこと」（全集、第八巻、四四四ページ）にあった。

レーニンは、第三回大会の早期招集をめざしていた。この大会で、はじまった革命のなかでの党の戦術を立て、綱領にもとづいて党を結集する必要があった。

第三回大会は、一九〇五年四月一二日から二七日までロンドンでひらかれた。大会には、二一の委員会を代表する二四人の議決権をもつ代議員と評議権をもつ一四人の代議員が出席していた。大会はレーニンの指導のもとにすすめられた。参加者のなかには、ア・ア・ボグダーノフ、ヴェ・ヴェ・ヴォロフスキー、ペ・ア・ヂャパリッゼ、エル・エス・ゼムリャチカ、ペ・ア・クラシコフ、エリ・ベ・クラシン、エヌ・カ・クルプスカヤ、エム・エム・リトヴィノフ、ア・ヴェ・ルナチャルスキー、エム・エヌ・リヤドフ、ア・イ・ルイコフ、エム・ゲ・ツハカーヤがいた。ロシア社会民主労働党の組織は全部招待されたが、メンシェヴィキは、別個にジュネーヴで会議をひらいた。参加者の数が少なかったため（代議員の出席した委員会は八つにすぎなかった）、メンシェヴィキは自分たちの会議を大会と呼ぶだけの勇気がなく、それを党活動家の協議会と呼んだ。

大会は、革命の根本問題を検討し、革命の指導者としてのプロレタリアートの任務を定めた。武装蜂起の問題、変革前夜の政府の戦術にたいする態度の問題、臨時革命政府の問題、農民運動にたいする態度の問題、党の脱落部分（メンシェヴィキ）の問題、非ロシア民族の社会民主主義組織の問題、ロシア社会民主労働党の公然たる政治行動の問題、その他が討議された。

レーニンの書いた、大会についての通知には、こうのべられている——

「ロシアのプロレタリアートは、その本分を最後まではたすことができるであろう。彼ら

は、人民の武装蜂起の先頭に立つことができるであろう。もしそういう任務を負わされるならば、臨時革命政府に参加するという困難な任務をも、彼らはおそれないであろう。彼らは、あらゆる反革命的企図を撃退し、自由のあらゆる敵を容赦なく粉砕し、身をもって民主的共和制を守りとおし、革命的方法によってわれわれの最小限綱領全体を実現することができるであろう。ロシアのプロレタリアは、このような帰結をおそれるのでなくて、熱望しなければならない。きたるべき民主主義革命で勝利をおさめれば、われわれは、自分たちの社会主義的目標にむかって大きく一歩前進することになろう。われわれは、全ヨーロッパから反動的な軍事強国の重いくびきをはらいのけ、われわれの兄弟である全世界の自覚した労働者がもっとはやく、もっと思いきって、もっと大胆に社会主義にむかってすすむのをたすけるであろう」(同、四四〇ページ)。

第三回大会で立てられた戦略計画はこうであった。革命の第一段階ではプロレタリアートは全農民と同盟し、ブルジョアジーを中立化し、彼らの動揺性を麻痺させ、ブルジョア民主主義革命の勝利のため——専制を打倒して民主的共和制を樹立し、農奴制のあらゆる遺物を一掃するために、たたかう。労働者階級は、革命の勝利のために献身的にたたかうだけでなく、大衆の闘争の先頭に立たなければならない。そのつぎの段階では、プロレタリアートは、ブルジョア民主主義革命をただちに社会主義革命に成長転化させるために、たたかわなければならない。

ロシアのブルジョアジーには、革命の先頭に立って、それを最後までやりとげる能力がなかった。というのは、彼らは、専制を打倒することには関心がなく、ただツァーリの権力を制限し、ツァーリズムと取引きしようとしていただけだからである。彼らにとっては、君主制や農奴制の

遺物を温存して、プロレタリアートとの闘争でそれをよりどころにするのが有利であった。労働者階級の同盟者となることができたのは、農民だけであった。農民は、農村における農奴制の遺物を片づけ、地主の土地を手にいれ、ツァーリや地主への隷属を脱しようとつとめていた。農民は、民主主義革命の完全な勝利の結果としてだけこれをなしとげることができた。

この戦略計画におうじて、大会は、党の戦術方針をも仕上げ、武装蜂起を組織することを前面にかかげた。大会は、「武装蜂起による専制との直接の闘争のためにプロレタリアートを組織する任務は、現在の革命的時機における党のもっとも主要な、さしせまった任務の一つである」と指摘した(『ソ連邦共産党決議集』、第一巻、一一三ページ)。すべての党組織には、蜂起の政治的意義だけでなく、その実践的・組織的な側面をもプロレタリアートに説明せよという指令があたえられた。蜂起の準備には大衆的政治的ストライキが特別の役割をはたす。党は、プロレタリアートの戦闘力を組織するために精力的な措置をとり、まえもって武装蜂起の計画をたて、蜂起の指導を確保し、このために党活動家からなる特別のグループをつくるべきである。

主要な問題の一つは、ツァーリズムが打倒され人民革命が勝利した結果うまれるはずの臨時革命政府の問題であった。臨時革命政府は、勝利した諸階級の執権(ディクタツーラ)の政府、すなわちプロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権(ディクタツーラ)でなければならないと、ボリシェヴィキは考えていた。

大会は、革命の状況のもとでの農民運動にたいする党の方針を決定した。労働者階級は、地主の土地、官有地、教会・修道院の土地、皇族領地の没収(すなわち、無償で収用して農民に利用させること)をもふくめて、農民の革命的要求を断固として支持しなければならない。この要求

には、ブルジョア民主主義革命における労働者階級と全農民の同盟をめざすボリシェヴィキの方針が、具体的に表明されていた。この要求は、専制・地主制度にたいする農民の闘争の発展をうながした。大会は、いたるところでただちに革命的農民委員会をつくって、下から民主主義的改革をおこなうよう呼びかけた。また、農村プロレタリアートを独立に組織し、社会民主党の旗のもとに農村プロレタリアートと都市プロレタリアートとを融合させる措置をとれ、という指令があたえられた。

決議『党の脱落部分について』のなかで、大会は、組織問題と戦術問題についてのメンシェヴィキの日和見主義的な見解を非難した。だが、それと同時に、革命のなかでプロレタリアートの勢力を統一することがさしせまって必要なことを考慮して、大会は、メンシェヴィキ、とくに労働者のメンシェヴィキが党大会の決定と規約にしたがい、党の規律に服するなら、彼らを党組織の活動に参加させてもよいとみとめた。第三回大会の決定をみとめようとしないメンシェヴィキの組織は、これを解散することが、中央委員会に委任された。

大会は、地方の活動の足並みをそろえ、すべての社会民主党が単一のロシア社会民主労働党に統一される条件を準備する目的で、非ロシア民族の社会民主党組織と合意に達するために全力をつくすよう、中央委員会と地方委員会に委任した。

第三回大会は、第二回大会でマルトフの提案にもとづいて採択された規約第一条の定式をとり消して、レーニンの定式による第一条を採択した。このことは、新しい型の党を強化するためのたたかいで、非常に重要な意義をもっていた。こうして、このもっとも重要なレーニン的組織原則がロシア社会民主労働党の規約で確認された。

大会は、二つの党中央部(中央委員会と中央機関紙)の制度を廃止して、レーニンを先頭とする単一の中央指導部――中央委員会を選出した。『イスクラ』が日和見主義的方針をとっていたため、大会は、新しい中央機関紙『プロレタリー』を創刊することを、中央委員会に委任した。中央委員会は、編集責任者にレーニンを任命した。一九〇五年一〇月以降、レーニンは第二インタナショナルの国際社会主義ビューローのロシア社会民主労働党代表になった。

メンシェヴィキは彼らのジュネーヴ協議会で、ブルジョア民主主義革命の性格、推進力および任務について、これとはちがった評価をくだした。彼らの意見では、ロシアの革命は、西ヨーロッパの従来のブルジョア革命と同じように、ブルジョアジーの指導のもとにおこなわれ、勝利したばあいにはブルジョアジーの支配をもたらすはずであった。メンシェヴィキは、革命でプロレタリアートが独自の任務をもつことを否定した。彼らの考えでは、労働者のなすべきことは、ブルジョアジーを支持し、ブルジョアジーを革命からつきはなさないために、大衆に断固たる革命的行動をとらせないようにすることであった。彼らは、革命でプロレタリアートが指導的役割をはたすことに反対し農民の革命的役割を否定した。

メンシェヴィキはとりわけやっきになって武装蜂起を組織することに反対した。蜂起は自然発生的な過程であって、それを準備することは不可能だ、と彼らは言った。プレハーノフ、アクセリロート、マルトフその他のメンシェヴィキ指導者は、蜂起はブルジョアジーを尻ごみさせるだけであり、蜂起の準備にたずさわることは労働者階級の党の仕事ではないということを、論証しようとした。彼らの方針全体でもそうであるように、この点でもメンシェヴィキは、大体において、第二インタナショナルの日和見主義者と同じ立場をとっていた。

第三回大会は、党から脱落したメンシェヴィキをいれずに、彼らとたたかいながら、はじまった革命のなかでの党の方針をつくりあげた。ボリシェヴィキは、事実上、綱領、規約、戦術方針、別個の組織、新聞、中央委員会をもつ、独立の党として存在していた。二つの大会——二つの党、——レーニンは、一九〇五年におけるロシア社会民主労働党内の情勢をこう規定している。

大会の決定、党の戦略計画と戦術方針は、一九〇五年の夏に書かれたレーニンの著書『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』のなかで、全面的に理論的に基礎づけられた。この著作は科学的社会主義の理論に大きな貢献をした。

レーニンは、マルクス主義の歴史上はじめて、帝国主義時代におけるブルジョア民主主義革命の特質、その推進力と見通しの問題を究明した。彼は、理論の問題や革命のなかでの党の理論と戦略戦術の問題についてメンシェヴィキがとっていた、反マルクス主義的な日和見主義的方針や、さらにメンシェヴィキに支持をあたえていた第二インタナショナルの指導者たちの改良主義的方針に、手きびしい批判をくわえた。

レーニンは、ロシア革命を国際情勢と関連させて考察していた。「諸国民、諸国家がたがいに孤立して生きていくことのできた時代はすぎた」と彼は書いた（全集、第九巻、四六一ページ）。ロシアのブルジョア革命は、政治的激変と革命との新しい歴史的時代をひらこうとしていた。こういう状況のもとでは、この革命がヨーロッパにおける社会主義革命の序曲になることも可能であった。ツァーリズムの打倒は、「すべての国の歴史の転換点となり、あらゆる民族、あらゆる国家、地球のあらゆる地方のすべての労働者の事業を容易にするものとなるだろう」（全集、第八巻、八九ページ）。

革命は、その性格と任務からみて、ブルジョア革命で、ツァーリ専制を廃止し、農奴制の遺物をとりのぞくことをめざしていた。それは、資本主義制度を廃止する任務を直接提起してはいなかった。しかし、ロシアのブルジョア革命は、いくつかの新しい特徴や特殊性をもっており、その点で、資本主義の上昇期の西ヨーロッパのブルジョア革命とは根本的にちがっていて、社会主義革命に成長転化する可能性をもっていた。

第一次ロシア革命は人民革命であった。この革命では、西欧のブルジョア革命とはちがって、プロレタリアートが主要な推進力であり、指導者であった。この革命は、その性格からみればブルジョア民主主義革命であったが、プロレタリアートが革命で指導的な役割をはたす点や、闘争方法(武装蜂起に発展するストライキ)からみれば、プロレタリア的な革命であった。

それと同時に、地主的土地所有を一掃することが革命の主要な任務であった点で、革命は農民革命であった。農民も革命の推進力で、プロレタリアートの同盟者であった。なぜなら、農民は、労働者階級に指導されるときにだけ、地主の土地を手に入れ、ツァーリズムと地主の抑圧からの解放をかちとることができたからである。

ブルジョアジーについていえば、彼らの利益はツァーリズムの利益と固くからみあっていた。プロレタリアートの革命性に仰天したブルジョアジーは、革命の推進力ではなかったし、またそうではありえなかった。革命が発展するにつれて、ブルジョアジーは、ますますその反政府性をうしない、ツァーリズムとの直接の協定にのりだし、ツァーリズムとの協定によって革命を解消させようとし、反革命の陣営にうつっていった。

「わが国では、ブルジョア革命の勝利は、ブルジョアジーの勝利としては、不可能である」

とレーニンは書いている。「これは逆説のように聞こえるが、事実である。農民人口が優勢なこと、農奴制的な（半ば）大土地所有によって農民が法外に圧迫されていること、すでに社会主義政党に組織されているプロレタリアートの力と自覚——これらすべての事情が、わが国のブルジョア革命に特殊な性格をあたえている」（全集、第一五巻、四〇—四一ページ）。

ロシア革命の主要な特徴と特殊性の科学的・マルクス主義的な分析にもとづいて、レーニンが、『二つの戦術』のなかで展開し、究明したものには、

ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの問題、

ブルジョア民主主義革命における労働者階級と農民の同盟の問題、社会主義革命におけるプロレタリアートと貧農との、都市農村のすべての半プロレタリア大衆との同盟の問題、

ツァーリ専制を打倒し革命を勝利させる基本的な手段としての武装蜂起の問題、

労働者階級と農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）の問題、この執権（ディクタツーラ）の政治機関としての臨時革命政府の問題、

ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化の問題、

プロレタリアートが人民革命の指導者の役割をはたすための決定的な条件としてのプロレタリアートの党の問題がある。

労働者階級が人民革命の指導者の役割をはたすか、それともブルジョアジーの助手の役割をはたすかどうかに、革命の前途はかかっていた。レーニンは、革命の帰結として二つのばあいがありうることを予見していた。ツァーリズムに決定的な勝利をおさめて、民主的共和制が成立するか、それとも、革命が勝利する力に欠け、ツァーリズムとブルジョアジーとの取引きにおわるか、

ている。だがこういうことが可能なのは、労働者階級が革命の指導者になるばあいである。

ロシアでは、労働者階級は資本主義によって苦しめられるよりも、むしろ資本主義の発展が不十分なことによって苦しめられていると、レーニンは指摘した。農奴制的諸関係の遺物が温存されていたことは、生産力の発展をさまたげ、社会主義革命をめざすプロレタリアートの闘争を展開する障害になっていた。だから、労働者階級は、この国から農奴制のあらゆる遺物をできるだけはやく一掃することに深い関心をもっていた。

実際に革命の指導者になるためには、プロレタリアートは、第一に、革命の決定的勝利を利益とする同盟者をもたなければならず、第二に、労働者・農民を犠牲にしてツァーリズムと取引きすることで革命をおわらせようとしていた自由主義的ブルジョアジーを中立化し、孤立させなければならなかった。

「民主主義のための首尾一貫した闘士になれるのは」とレーニンは書いている。「プロレタリアートだけである。プロレタリアートが民主主義のための勝利の闘士になれるのは、農民大衆がプロレタリアートの革命闘争に合流するばあいだけである」(全集、第九巻、五〇ページ)。

農民は反動的だから、プロレタリアートの同盟者になることはできないというメンシェヴィキの主張とは反対に、レーニンはこう教えている。農民が農奴制の遺物の完全な一掃に切実な利害をもっていることは農民をプロレタリアートの本来の同盟者にし、断固たる民主主義的変革の味方にしている。地主的土地所有をなくし、民主的自由をたたかいとることは、革命的な道によら

なければ不可能である。このたたかいで農民を支持する能力をもっているのは、プロレタリアートだけである。

レーニンは、革命における自由主義的ブルジョアジーのヘゲモニーと革命を小さな改良にすりかえることとを主張していたメンシェヴィキの日和見主義的な立場に手きびしい批判をくわえた。ブルジョアジーにとっては、必要なブルジョア民主主義的改革が、革命の道をとおらずに、改良の道をとおっておこなわれるほうが有利である――とレーニンは書いている――「これらの改革が庶民の、すなわち農民、とくに労働者の革命的な自主活動や創意や精力をできるだけ発揮させないほうが、有利である。なぜなら、そうでないばあいには、フランス人のいうように『銃を一方の肩から他方の肩にになえかえる』こと、すなわち、ブルジョア革命が彼らに供給する武器……を、ブルジョアジー自身にむけることが、労働者にはそれだけ容易になるからである」（同、三九ページ）。

レーニンのこの著書では、革命の勝利を保障するプロレタリア的な闘争形態と闘争手段が、深く論証されている。改良主義的な闘争方法にしがみついていたメンシェヴィキとは反対に、レーニンは武装蜂起こそツァーリズム打倒の決定的な手段であると考えていた。ツァーリズムは武力、すなわち軍隊と警察をよりどころとしていた。この武力を打ち破り、ツァーリズムを打倒し、ロシアに民主的共和制をたたかいとることは、武器の力によらなければ、武装蜂起の勝利によらなければ、できなかった。革命は武装蜂起を必要とするにいたった。マルクスとエンゲルス以後はじめて、レーニンは、革命時の党の全活動を従わせるべき実践的任務として、武装蜂起の組織を提起したのである。

大衆の革命的活動力をたかめ、ツァーリズムとの武装闘争に大衆をひきいれるためには、党は、人民に親しみのある、わかりやすい政治的スローガンをかかげなければならない。ボリシェヴィキがそういうスローガンと考えていたのは、革命的方法による八時間労働日の即時実施、地主の土地の没収をもふくめて農村で民主主義的改革を実施するための革命的農民委員会の樹立、大衆的政治的ストライキ、労働者の武装と革命軍の創設である。

レーニンは、いたるところで、下から労働者自身が八時間労働日を実施し、農民自身が農村で民主主義的改革を実施することが、きわめて重要だと考えていた。これは、大衆の積極性と創意を発揮させる新しい戦術であった。この戦術の適用は、国家権力機関を麻痺させ、革命とたたかう力をうしなわせた。

プロレタリアートに独特な闘争手段である大衆的政治的ストライキは、新しい重要な武器であった。それは、ツァーリズムにたいする闘争に大衆を動員するうえでもっとも重要な役割を演じた。レーニンはまた、革命の基本問題である国家権力の問題を、新しい仕方で解決した。彼は、プロレタリアートを指導者とするブルジョア民主主義革命の勝利は、過去のブルジョア革命のように、ブルジョアジーの権力獲得をもたらすのではなく、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権を必ずもたらすことを、論証した。

「『ツァーリズムにたいする革命の決定的勝利』とは」とレーニンは書いている。「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権である。……

このような勝利は、まさしく執権であろう。すなわち、その勝利は、『合法的な』、『平和的な方法』でつくりだされたなにかある機関をよりどころとするのでなく、かならず軍事

力を、大衆の武装を、蜂起をよりどころとしないわけにはいかないであろう」（全集、第九巻、四五ページ）。

労働者と農民のためにおこなわれる革命的改革は、ツァーリズム、地主、大ブルジョアジーの必死の抵抗をまねくであろう。この抵抗を粉砕し、反革命の企てを撃退し、ブルジョア民主主義革命を最後までやりとげ、革命の獲得物を守りぬき、社会主義をめざす闘争の舞台を完全に掃き清めるためには、執権（ディクタツーラ）が必要である。しかし、それはまだ社会主義的ではなくて、民主主義的執権（ディクタツーラ）であろう。

プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）の政治的機関となるのは、武装した人民をよりどころとする臨時革命政府でなければならない。この政府のしなければならないことは、ロシア社会民主労働党の最小限綱領を実現すること、すなわち、民主的共和制を樹立して、八時間労働日を実施し、地主の土地を没収し、すべての民族に自決権をあたえ、革命をさらに前進させることであった。

レーニンは、革命政府への参加に反対したメンシェヴィキの立場の有害なことを暴露した。この反対は実際には革命の指導権をブルジョアジーにひきわたすことであった。レーニンは、社会民主党の代表が革命政府に参加することは、さしつかえないだけでなく、有利な条件のもとでは必要でさえあると、考えていた。彼らの参加は、反革命と容赦なくたたかい、労働者階級の独自の利益を守り、革命をいっそう発展させる保障となるにちがいない。それとならんで、下から、労働者階級と広範な勤労者層が、臨時革命政府に圧力をくわえるようにすることが必要である。政府への参加も、下からの圧力も、革命の獲得物を固め、拡大し、社会民主党の最小限綱領を実

現するのを助けるであろうし、ブルジョア民主主義革命が社会主義革命に成長転化する条件がととのえられるのを助けるであろう。

この著作のなかで、レーニンは、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化の理論を仕上げた。永続革命についての、またこの革命の必須の条件としてのプロレタリアートと農民の同盟についてのマルクスの思想は、第二インタナショナルの日和見主義者たちによって忘れさられていた。彼らは、マルクスの革命的思想に日和見主義的な図式を対置した。それによれば、ブルジョア革命とプロレタリア革命とは、長い時期でへだてられていた。この反革命的図式の基礎には、農民にたいするプロレタリアートの指導的役割を否定し、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーを否定する考えがあった。

レーニンは、永続革命についてのマルクスの思想を発展させて、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化についての整然たる理論をつくりあげた。この理論によれば、プロレタリアートと農民の同盟のもとでのブルジョア革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーは、プロレタリアートと貧農その他の半プロレタリア分子との同盟のもとでの社会主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーに転化しなければならない。プロレタリアートと農民の民主主義的執権（ディクタツーラ）は、プロレタリアートの社会主義的執権（ディクタツーラ）に転化しなければならない。

「プロレタリアートは、実力で専制の抵抗をおしつぶし、ブルジョアジーの動揺性を麻痺させるために、農民大衆を味方につけて民主主義革命を最後まで遂行しなければならない。プロレタリアートは、実力でブルジョアジーの抵抗を打破し、農民と小ブルジョアジーの動揺性を麻痺させるために住民中の半プロレタリア分子の大衆を味方につけて社会主義革命を

やりとげなければならない」（全集、第九巻、九五ページ）。

レーニンは、ロシアの社会経済制度のなかには、ブルジョア革命が社会主義革命へ成長転化する客観的条件が存在していることをしめした。ロシアに農奴制の遺物が数多くあり、しかも資本主義が比較的高度に発展していたことは、二重の矛盾をうみだしていた。生産力の発展と半農奴制的生産関係との矛盾は、ブルジョア民主主義革命の前提条件となっていた。生産力の増大と資本主義的生産関係との矛盾は、ブルジョア民主主義革命が社会主義革命へ成長転化する客観的条件となっていた。

ここから二つの社会的なたたかいがおこった。一つは、ツァーリと地主に反対し、民主的共和制をめざす全人民的なたたかいであり、もう一つは、ブルジョアジーに反対し、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）をめざし、社会主義的社会組織をめざすプロレタリアートの闘争である。一九〇五—一九〇七年には、ツァーリの打倒をめざす全人民の闘争が前面に出ていた。プロレタリアートの使命は、「完全な自由のため、首尾一貫した民主主義革命のため、共和制のために、全人民、とりわけ農民の先頭に立ち、社会主義のために、すべての勤労被搾取者の先頭に立って」（同、一〇八ページ）行動することであった。

レーニンは、社会主義革命が勝利するまで革命を永続的に発展させることが必要なことを、根気づよく力説した。『農民運動にたいする社会民主党の態度』という論文のなかで、彼はこう指摘している——

「われわれは、民主主義革命からただちに社会主義革命に移りはじめるであろう、しかも、まさにわれわれの力におうじて、自覚し、組織されたプロレタリアートの力におうじて、移

りはじめるであろう。われわれは永続革命を支持する。われわれは中途で立ちどまりはしない」(全集、第九巻、二四三ページ)。

西ヨーロッパの日和見主義者とロシアのメンシェヴィキの見解によれば、社会主義革命ではプロレタリアートは、同盟者をもたずに、ひとりで、すべての非プロレタリア階級および階層とたたかう。資本によって搾取されており、その結果資本主義にたいする闘争でプロレタリアートの信頼すべき同盟者となることのできる都市農村の半プロレタリア大衆の革命的能力を、日和見主義者はみとめていなかった。そこから、プロレタリアートが国民のなかで多数を占めるようになるまでは、社会主義革命の条件が熟したとみることはできないという、あやまった結論がひきだされた。レーニンの社会主義革命理論は、プロレタリアートを無活動におとしいれる、こうした有害きわまる日和見主義的ドグマをくつがえした。

レーニンは、革命闘争の指導者となり、組織者となる使命をもつ、労働者階級の独自の政党の存在が、ブルジョア民主主義革命の勝利する、またそれが社会主義革命に成長転化する主要条件の一つであると考えていた。プロレタリアートがこの革命で指導者の役割をはたすことができるのは、プロレタリアートが、思想的にだけでなく、実践的にも彼らの闘争を指導する革命的マルクス主義党の旗のもとに、統一した独自の政治勢力に結集するばあいだけである。

レーニンの社会主義革命理論は、ロシアのメンシェヴィキと第二インタナショナルの改良主義者との理論をくつがえしただけでなく、トロツキーの「永続革命」理論をもくつがえした。トロツキーは、マルクスの永続革命の思想を改ざんした。彼は、形のうえでは左翼的だが、内容からすれば日和見主義的な、「ツァーリをたおして労働者政府を」というスローガンをかかげた。こ

のように革命のブルジョア民主主義的段階をとびこえることは、何千万という農民大衆からプロレタリアートを孤立させ、革命の敗北をもたらすだけであったであろう。トロツキーは、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーと農民の革命的役割とを否定し、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）を否定したのである。

一九〇五年に仕上げられたレーニンの革命理論は、科学的根拠のある戦略戦術でボリシェヴィキ党を武装させた。そのなかには、はじめはただ一つの資本主義国でも社会主義の勝利は可能であるという、レーニンが一九一五年にくだした結論をだすための主な要素が、ほとんど全部そなわっていた。革命におけるプロレタリアートのヘゲモニー、労働者階級と農民の同盟、革命における新しい型の党の指導的・嚮導的（きょうどう）な役割、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化の各命題がそれであった。すべてこれらの命題と結論でレーニンはマルクス主義革命理論をゆたかにしたので、この理論は、正当にもレーニンの社会主義革命理論と呼ばれている。

3　革命の高揚。全ロシア的政治的ストライキ。ソヴェトの成立。一二月武装蜂起

革命的事件の経過は第三回大会の諸決定が正しかったことを裏書きした。革命運動の波は日ごとにたかまった。ストライキ闘争はますます頑強で攻撃的で組織的になった。

一九〇五年五月にはじまったイヴァノヴォ－ヴォズネセンスクのストライキは、七二日間もつ

づいた。このストライキは、労働者の不撓不屈の精神の模範をしめし、大衆の政治教育のすぐれた学校となった。このストライキを指導するために労働者全権委員（代表）ソヴェトが選出された。このソヴェトは最初の労働者代表ソヴェトの一つであった。ストライキを指導したのは、エフ・ア・アファナシエフとエム・ヴェ・フルンゼにひきいられるイヴァノヴォ－ヴォズネセンスクのボリシェヴィキ組織で、ボリシェヴィキ労働者のエス・イ・バラショフ、イェ・ア・ドゥナーエフ、エフ・エヌ・サモイロフがこれに積極的に協力した。労働者の大衆集会や集まりが公然とひらかれ、そこで要求がまとめられ、工場主にたいする回答が討議され、その後の闘争の計画が立てられた。そこでは、ボリシェヴィキも労働運動の任務について報告した。これは労働者には「社会主義大学」となった。イヴァノヴォ－ヴォズネセンスクの労働者のストライキには、シューヤ、オレホヴォ－ズエヴォその他の都市の繊維労働者が合流した。ツァーリの官憲は労働者に血の制裁をくわえた。

イヴァノヴォの労働者の射殺にたいする抗議がロシア全土にまきおこった。六月、ルージの労働者は、三日間にわたって警官隊や軍隊とバリケード戦をおこなった。これは「革命的熱情と英雄精神の新しい模範であるだけでなく、より高度の闘争形態」でもあった、とレーニンは書いている（全集、第八巻、五四五ページ）。ウラルでは、ペルミとエカテリンブルク（スヴェルドロフスク）の金属労働者、ズラトウストの諸工場の兵器労働者、ナデジヂンスクとニジニ・タギールの鉄鋼労働者、チェリャビンスク、ウファ、エカテリンブルクの鉄道従業員が、ストライキ闘争の先頭に立ってすすんだ。その年の春、アラパエフスク、ナデジヂンスク、モトヴィリハ、ニジニ・タギールその他のウラルの工業中心地に成立した労働者全権委員（代表）ソヴェトは、革

命の発展につれてストライキ組織から革命闘争全般の機関になった。ニコラエフ、エカテリノスラフ、ハリコフ、ルガンスク、その他の地方では、政治的ストライキが警官隊や軍隊との衝突になった。六月には、チフリス、クタイス、バトゥーム、チアトゥルィでゼネラル・ストライキがおこった。八月には、バクーのプロレタリアのゼネラル・ストライキにともなって軍隊との武力衝突がおこった。労働者階級は、ツァーリズムとの決定的闘争の力をたくわえていった。

夏には、各地に半合法的な労働組合組織がうまれはじめた。ボリシェヴィキは労働組合は、労働者の経済的利益を擁護するとともに、政治的要求をかかげた。ボリシェヴィキは労働組合の設立やその活動に積極的に参加したが、このことは、その後労働組合がプロレタリアートの戦闘的な階級組織としてロシアで発展していく過程全体に効果をあらわした。

農民運動の波はたかまった。一九〇五年の春と夏に、農民運動はヨーロッパ・ロシアの郡総数の約五分の一を、秋には半数以上をまきこんだ。ウクライナとバルト海沿岸地方では農業労働者のストライキが勃発した。運動がとくにはげしい勢いになったのは、ヴォルガ沿岸地方、ウクライナの多くの地区、バルト海沿岸地方、グルジアであった。

プロレタリアートの運動と農民の蜂起とが合流したことは、ツァーリの陸海軍を動揺させた。ボリシェヴィキは、軍隊内で骨身をおしまない活動をくりひろげた。ロシア社会民主労働党中央委員会は、この活動のためにイ・エフ・ドゥブロヴィンスキー、イェ・エム・ヤロスラフスキー、エル・エス・ゼムリャチカ、エム・イ・ヴァシーリエフ－ユージンその他のすぐれた活動家を派遣した。ボリシェヴィキは、兵士や水兵のあいだでさまざまな活動形態をもちいた——新聞やり

ーフレットを発行し、集会をひらき、サークルをつくった。この活動の結果、兵士や水兵のあいだでボリシェヴィキ組織の影響力がつよまり、ボリシェヴィキ組織と労働者とのむすびつきができていった。極東でツァーリの軍隊がこうむった敗北は、軍隊内の革命的気運をつよめた。

兵士や水兵の不満の最初の大衆的な表明は、一九〇五年六月の戦艦「ポチョムキン」の反乱であった。史上はじめて軍艦の乗組員が革命の旗をかかげ現存制度反対の闘争に立ちあがった。反乱をおこした軍艦はオデッサに入港した。だが、同市のボリシェヴィキ委員会には統一がなく、検挙のために力をそがれていたし、メンシェヴィキは、「ポチョムキン」の乗組員を支援する労働者の蜂起を組織しなかった。

水兵たちの英雄精神にもかかわらず、正しい指導を受けなかったため反乱は失敗におわった。これは、ツァーリの軍隊内での革命闘争の最初の経験にすぎなかった。けれども、この反乱の事実そのものはきわめて重要な意義をもっていた。ツァーリズムにたいするたたかいで陸海軍が労働者階級と手をむすぶことが必要であり、また可能であるという考えが、労働者、農民、とりわけ兵士や水兵の大衆自身にいっそう理解できるようになり、身近なものになった。革命軍を創設する問題が日程にのぼった。

「ポチョムキン」の闘争のあと、ボリシェヴィキは軍隊内の革命的活動をつよめた。一九〇五年の夏と秋には兵士や水兵の革命的行動が何十回もおこった。労働者、兵士、農民の個々の行動はひろがって、ロシア全土におよぶ革命の火の手となった。

ツァーリズムは、譲歩や口約束で人民を革命闘争からそらそうとした。一九〇五年八月六日、国会(国会開設案の起草者であるツァーリの大臣の名をとってブルィギン国会と呼ばれる)を召

集するという詔書が発布された。ツァーリ政府は戦争の終結をいそいだ。八月末、日本との講和条約が調印された。

国会は、革命を立憲君主制の道にそらせて、これを片づけようとするツァーリズムのくわだてであった。ツァーリズムはまた、国会を召集することで自由主義的ブルジョアジーのあいだの反政府的な動揺も終わらせたいと考えていた。自由主義的ブルジョアジーは、革命をおそれながら、同時に革命をたねにツァーリをおどしていたのである。ブルィギン国会は、地主、資本家、ごく少数の富裕な農民の会議となるはずであった。この国会は、ツァーリの諮問機関としてもくろまれたにすぎなかった。それは国民代議機関のお粗末なにせものであった。

ボリシェヴィキは、労働者と農民に反人民的な国会を積極的にボイコットするよう呼びかけた。ボリシェヴィキの扇動はすべて武装蜂起、革命軍、臨時革命政府というスローガンを中心としていた。メンシェヴィキは、国会を「解放運動の転換点」として歓迎し、この国会選挙の茶番で自由主義者と協力するよう主張し、議会主義的・改良主義的な道を主張した。メンシェヴィキの戦術は、自由主義的ブルジョアジーに力をかし、後者が人民大衆をあざむいて革命闘争からそらす助けになった。

一九〇五年九月、国会戦術を立てるためにリガに集まったロシアの社会民主主義組織の協議会は、ブルィギン国会を積極的にボイコットせよというボリシェヴィキの方針を承認した。国会の積極的ボイコット戦術を支持したのは、労働者だけでなく、農民や、インテリゲンツィアのすすんだ部分もこれを支持した。ボリシェヴィキは、すべての革命勢力を動員するため、大衆的政治的ストライキを遂行して武装蜂起を準備するために、ボイコット・カンパニアを利用した。

一九〇五年の夏と秋、政治的ゼネラル・ストライキの準備はねばりづよくすすめられていた。ボリシェヴィキがおこなった巨大な組織活動と扇動活動は、革命のいっそうの高揚をうながした。九月にはじまったモスクワの印刷労働者のストライキは、他の諸工場の労働者から支持された。このストライキにともなって、大衆集会やデモンストレーションがおこなわれた。モスクワの街頭では、労働者と警官隊や軍隊との武力衝突がおこった。

モスクワ労働者の九月ストライキは、プロレタリアートにとって本格的な政治学校であった。革命的な大衆集会や、デモンストレーションや警官隊との武力衝突をともなう大衆的政治的ストライキは、労働者階級のごく普通の闘争形態となった。闘争のすすむなかで、五つの職種の労働者——印刷労働者、金属労働者、たばこ労働者、指物工、鉄道従業員——の代表者会議がうまれた。ボリシェヴィキの指導のもとに労働者の新しい層がつぎつぎに政治闘争にひきいれられた。

一〇月六日、ロシア社会民主労働党モスクワ委員会はモスクワで政治的ゼネラル・ストライキをおこなうことを決定した。ストライキは、急速にすべての工業中心地をまきこみ、全ロシア的なストライキになった。鉄道は止まった。企業は作業を休止した。郵便や電信も止まった。

一〇月ストライキはプロレタリアートの強大な政治行動となった。ストライキは、専制の打倒、ブルィギン国会の積極的ボイコット、憲法制定議会の召集、民主的共和制の樹立というスローガンをかかげておこなわれた。下級事務員、学生、生徒、弁護士、医師、技師などが、ストライキ労働者に合流した。ストライキ参加者の数は二〇〇万人をこえた。全ロシア的な政治的ストライキは、ボリシェヴィキ党が人民大衆とむすびついていること、ボリシェヴィキのスローガンが切実なものであることを、納得のいくようにしめした。

一〇月ストライキのあいだに、ロシアのさまざまな民族の労働者がむすびつきをますます強めていることが、あきらかになった。ラトヴィア、ポーランド、ウクライナ、アゼルバイジャン、グルジア、ベロルシアの労働者、その他の民族の労働者は、ロシアのプロレタリアと共同して、自分たちの凶悪な敵であるツァーリ専制とたたかった。党は、ロシアの東部地方の勤労大衆を革命闘争に合流させた。ロシアのプロレタリアートは、主力として行動し、タタール、アゼルバイジャン、カザフ、ウズベック、その他の民族の労働者を闘争に立ちあがらせ結束させた。ロシア社会民主労働党バクー委員会には、回教徒の勤労者のあいだで活動するために、「フメット」という組織がつくられた。ボリシェヴィキはタタール語で新聞『ウラル』を、アゼルバイジャン語で新聞『コチーデヴェット』、『テカーミュル』を発行し、これらの新聞をつうじて、ヴォルガ沿岸地方、ザカフカース、中央アジアの民族のしいたげられた大衆のあいだにレーニンの思想を広めた。イランからきていた多くの労働者は、ロシアで革命闘争の試練をへた。彼らのなかで傑出していたのはハイダルで、彼はのちイラン共産党の創立者となり、指導者となった。

レーニンは、大衆的な政治的および経済的ストライキがすばらしい意義をもっていることをあきらかにした。これらの行動は、労働者階級と人民大衆の切実な利益を擁護するうえで、また、より高度の闘争形態であるゼネラル・ストライキや武装蜂起を準備し、こうして権力獲得の闘争を準備するうえで、大きな役割をはたす。後に、レーニンはつぎのように書いている。政治的ストライキと経済的ストライキは、「たがいに支持しあい、たがいに力の源となっている。この二種類のストライキが密接にむすびつかなければ、真に広範で、大衆的な――そのうえ全国民的な意義をおびるような――運動はありえない」（全集、第一八巻、七七ページ）。

経済的ストライキに参加して自分の経済状態の改善をめざすとともに、労働者大衆は政治運動にもひきいれられていく。政治的ストライキでは、労働者階級は、人民大衆の共通の利益を表明する政治的要求をかかげる。労働者階級は、政治的ストライキでは全人民のなかの先進的階級として、人民運動の指導者(ヘゲモン)として行動する。

一〇月の全ロシア的ストライキは、専制に反対する全人民の闘争の先進闘士、組織者、指導者としての労働者階級の威力をしめした。ストライキは、政府の力を麻痺させた。革命の規模はますます大きくなった。革命の成長に仰天したツァーリ政府は、専制制度を救うために、いそいでいくつかの譲歩をおこなった。一〇月一七日、ツァーリは空約束をたくさん盛りこんだ詔書を発布した。言論、集会、結社の自由、人格の不可侵が宣言された。詔書は、「ロシア議会」――立法機能をもつ国会――を開設するとのべていた。

ツァーリの詔書が出たのはある一時的な勢力均衡が生じた結果である、とレーニンは指摘した。労働者と農民はまだツァーリズムを打倒することができなかったが、ツァーリズムも、これまでの手段ではもう統治することができなかったのである。

ブルジョアジーは喜んでツァーリの施し物を受けとった。大資本家や資本主義的経営をいとなむ地主は、引きつづき権力の分有をめぐってツァーリ政府と争いながらも、ツァーリ政府の味方になっていた。ツァーリの詔書は完全に彼らを満足させた。彼らは「一〇月一七日同盟」――オクチャブリスト党に統合した。資本家、地主、ゼムストヴォ活動家、ブルジョア・インテリゲンツィアの一部は、立憲民主党(カデット)をつくった。これは自由主義的・君主主義的ブルジョアジーの指導的政党であった。カデットのめざす目標は、ツァーリと地主がブルジョアジーと権

力を分けあうことであった。大衆をあざむくために、カデットは「人民自由党」と偽称した。ブルジョア諸政党は、詔書のなかに、革命を平穏で立憲的な道にそらせて専制を破滅から救う可能性を見てとって、それをほめたたえた。

ボリシェヴィキは、労働者と農民に、紙上の「憲法」に信をおかず、ツァーリズムを打倒するまで闘争をつづけるよう呼びかけた。政府は人民をあざむいていると、ボリシェヴィキは声明した。約束した自由をあたえるかわりに、政府は、「ロシア国民同盟」とか「ミハイル・アルハンゲル同盟」とかいう、警察の手でつくられ、人民から「黒百人組」というあだ名をつけられていた組織の手を借りて、革命家や先進的な労働者をなぐり、殺害し、大衆集会や会合を解散させた。ちょうどそのころ、ボリシェヴィキ党のすぐれた活動家エヌ・エ・バウマンがモスクワで黒百人組に虐殺された。人民の力を分裂させるために、ツァーリの官憲は、民族間の敵意をあおり、ユダヤ人の流血のポグロムを仕組み、アゼルバイジャン人とアルメニア人の殺しあいをそそのかした。

一〇月の労働運動の高揚は、農民の革命闘争をはげました。

ロシアの農民は自分の党をつくらなかった。革命のなかでうまれた「全ロシア農民同盟」と「勤労グループ」は、政治組織の萌芽にすぎなかった。エヌ・エス（人民社会派）とエス・エル（社会革命派）は、真の農民政党にはならなかった。当時レーニンは彼らについて「トルドヴィキ、エヌ・エス、エス・エルはその階級的性格からみると、小ブルジョア的民主主義者であり、農民的民主主義者である」と書いた（全集、第一二巻、一九四―一九五ページ）。トルドヴィキは、あまりはっきりした形をもたない組織の域を出なかった。エヌ・エスは、小さなグループで、

自由主義者の傾向をもち、ますます農村の富農的上層の利益を代表するようになった。エス・エルは、農村にしっかりした結びつきをもたなかった。エス・エルの活動には、嵩じてのちに彼らを農村の富裕層である富農の利益を擁護する立場にみちびいた傾向がみられた。エス・エルは、農民運動が社会主義的な性格をもっていると称するナロードニキ理論を復活させて、労働者階級が革命で指導的役割をはたすことを否定した。ボリシェヴィキは、エス・エルの綱領のえせ社会主義的な性格を暴露し、農民諸組織が動揺的で一貫性を欠いていることを批判した。それと同時に、ボリシェヴィキは、ツァーリズムにたいするたたかいで、農民組織と一時的な協定をむすんだ。

ボリシェヴィキは、プロレタリアートの前衛部隊であると同時に、農民の政治経済的利益の擁護にもあたった。このことは、革命の勝利をめざすその後のたたかいにとって、非常に大きな意義をもっていた。各地のボリシェヴィキ組織は、農民をプロレタリアートの味方につけるために精力的に活動していた。中部ロシア、ウクライナ、ベロルシア、リトワニアでは多くの党地方委員会のもとに農民グループがつくられ、グルジア、ラトヴィア、エストニアでは党の農村組織がつくられた。ボリシェヴィキ組織は農村でビラをくばり、農民のあいだに革命的サークルをつくった。モスクワ委員会は農民のあいだで活動する党員のために特別の指令をだした。レーニンの小冊子『貧農に訴える』は農民のあいだで非常な好評をえて、地方でなんども版をかさねた。

ボリシェヴィキは軍隊内の活動を強化した。一九〇五年の秋までに、ボリシェヴィキは軍隊内党組織をいくつかつくった。そのうちで最大の組織は、ペテルブルク、モスクワ、フィンランド、リガの組織であった。兵士や水兵むけのリーフレットやアピールの発行がふえた。秋には、ハリコフ、キエフ、タシケント、ワルシャワで兵士の大規模な行動がおこった。クロンシタット、ウ

ラヂオストーク、セヴァストーポリで水兵の反乱が勃発した。

革命が嵐のように進展したこの時期に、労働者の革命的創造力の結果労働者代表ソヴェトが生まれた。ソヴェトは、最初は経済的ストライキや政治的ストライキを指導するために、さまざまな企業の労働者の全権委員や代表者の機関としてうまれたのち、蜂起を準備する機関になった。それは、新しい権力の萌芽であった。ソヴェトは、ツァーリ政府の諸機関を無視して、自分の決定、指令、命令をだし、無断で八時間労働日を実施し、民主主義的自由を確立した。

レーニンは、明敏にも、ソヴェトを革命の勝利のため、社会主義のための闘争の機関、人民執権（ディクタツーラ）の機関であるとみて、ソヴェトのもつ意義を高く評価していた。一一月のはじめに書かれた論文『われわれの活動と労働者代表ソヴェト（編集局への手紙）』のなかで、レーニンはソヴェトの問題を理論的に究明した。こうして、ソヴェトを生みだした労働者階級の革命的創造力と、レーニンと党によるソヴェトの理論的基礎づけとが実践で一体になった結果、労働者階級と勤労農民の政治組織の注目すべき形態がうまれ、革命の勝利のため、社会主義のための闘争で世界史的な役割をはたしたのである。一九〇五年のソヴェトは、労働者階級の最大の歴史的獲得物であって、わが国に一九一七年に樹立されたソヴェト権力の原型となった。

ボリシェヴィキはどこでもソヴェトにはいった。彼らが指導的影響をえることができたところでは、ソヴェトは、革命勢力を動員し武装蜂起を準備遂行する戦闘司令部となり、新しい権力機関の萌芽となった。これに反して、メンシェヴィキは、ソヴェトを、ストライキ委員会か地方自治機関ぐらいにしかみていなかった。

一九〇五年一一月、レーニンは非合法的にロシアに帰ってきた。ペテルブルクで彼はすぐ熱心

な活動をくりひろげた。党中央委員会の活動を指導し、事実上党の中央機関紙であったボリシェヴィキの合法新聞『ノーヴァヤ・ジーズニ』〔『新生活』〕の編集局を主宰し、ペテルブルク・ソヴェトの会議で演説し、党の会議や集会に出席した。

一〇月の全ロシア的政治的ストライキは、最高の闘争形態である武装蜂起のまぎわまで労働者階級を近づけた。ボリシェヴィキは、扇動宣伝活動と蜂起を実際に準備する活動とを結びつけた。革命で重要な役割をはたした武装隊が、ペテルブルク、モスクワ、ソルモヴォ、ヤロスラヴリ、イヴァノヴォ－ヴォズネセンスク、ウラル、ウクライナ、シベリア、カフカース、バルト海沿岸地方で結成された。市街戦や射撃の訓練がおこなわれ、爆弾製造所、兵器庫がつくられた。蜂起の軍事的・技術的準備には党中央委員会所属の戦闘グループがあたった。

ツァーリズムにたいする武装蜂起の旗を最初にかかげたのは、モスクワのプロレタリアートであった。一二月五日にひらかれたモスクワのボリシェヴィキの会議は、労働者の意志にしたがって、ストライキと武装蜂起とに賛成した。モスクワ・ソヴェトは、蜂起に切りかえるために、一二月七日から政治的ゼネラル・ストライキをおこなうと宣言した。

最初の二日間に、モスクワでは一五万人以上がストライキにはいった。工場では盛大な大衆集会がひらかれ、街頭ではデモンストレーションがおこなわれた。カザックや警官隊との衝突がはじまった。当局は急きょ兵力を動員して、攻勢にうつった。モスクワのプロレタリアートはこれにこたえて、バリケードをきずいた。一二月一〇日、ストライキは武装蜂起に発展した。激戦がはじまった。蜂起の中心になったのは、プレスニャ、ザモスクヴォレーチエ、ロゴシスコ－シーモノフ区およびカザン鉄道の地区であった。モスクワの市街には一〇〇〇近いバリケードがきず

かれた。労働者の献身的なたたかいは九日間つづいた。

武力闘争を直接目撃したア・エム・ゴーリキーはこう書いている。「いま街から帰ってきた。サンドゥノフ浴場やニコラエフスク駅のそばで、スモレンスク市場やクドリノで戦闘がおこなわれている。みごとな戦闘！……街ではいたるところで憲兵や警官が武装解除されている。……労働者の態度には驚嘆すべきものがある！」。

プレスニャの労働者は並はずれて勇敢で頑強であった。ここにはモスクワの労働者のもっとも優秀な武装隊が集中されていた。モスクワの労働者は一身をかえりみずにたたかった。全世界は、強大な君主制の土台をゆすぶったこの蜂起の経過を、かたずをのんで見守った。政府は、ツァーリズム全体が危険にさらされていることをさとって、蜂起を鎮圧するために大兵力を投入した。新手の軍隊のモスクワ到着によって、力関係は反革命に有利に変わった。

蜂起した労働者にはまだ武力闘争の経験がなく、武器もたりず、軍隊との連絡も十分組織されていなかった。一二月はじめ、モスクワに駐留していたロストフ連隊が反乱をおこした。モスクワ守備隊は動揺していた。だが、反乱の組織者たちは時機を逸してしまい、軍隊を蜂起した労働者の味方につけるために、軍隊の動揺を利用しなかった。ツァーリ政府は、モスクワ守備隊の部隊を服従させたまま蜂起者たちから隔離することに成功した。ペテルブルクとモスクワをむすぶ鉄道は政府の手ににぎられていた。メンシェヴィキにひきいられるペテルブルク・ソヴェトは、首都で蜂起の旗をかかげず、政府の行動を麻痺させなかった。モスクワの蜂起は全国的な蜂起にはならなかった。

蜂起の指導は、大衆の運動の高まりに立ちおくれていた。蜂起のはじめに、ボリシェヴィキの

モスクワ委員会の指導的活動家で蜂起の組織者であったヴェ・エリ・シャンツェル（マラート）、エム・イ・ヴァシーリエフ－ユージンその他が逮捕された。全モスクワの蜂起は個々の地区の蜂起になってしまった。攻撃戦術ではなくて防禦戦術がとられ、このことが蜂起の敗北を必至にしてしまった。

メンシェヴィキとエス・エルは、蜂起者の戦列を解体させた。労働者の圧力でゼネラル・ストライキと武装蜂起のアピールに署名しておきながら、彼らはまもなく自分たちの武装隊の解散を宣言した。一二月一四日、まだペテルブルクから軍隊が到着しないうちに、メンシェヴィキは、ソヴェトに蜂起を即時中止するよう要求した。メンシェヴィキとエス・エルの降伏主義的な態度は、蜂起の敗北を早めた。

ボリシェヴィキのモスクワ委員会とモスクワ・ソヴェトは、革命勢力を温存するために一二月一九日以後武力闘争を中止するよう呼びかけた。プレスニャの武装隊司令部の最後のアピールは、労働者階級のきたるべき勝利についての不動の信念にみちていた。「われわれははじめた。われわれはいまこれをおえる。……流血、暴力、死がわれわれにつきまとうだろう。だがそんなことはなんでもない。未来は労働者階級のものである。あらゆる国で、世代から世代へと人々はプレスニャの経験によって不屈の精神をまなぶだろう。……労働者の闘争と勝利万歳！」

モスクワについで、他の都市でも蜂起が燃えあがった。一二月一二日、ニジニ・ノヴゴロトのプロレタリアートが立ちあがった。一二月一三日にはロストフ－ナ－ドヌーで蜂起が勃発した。同市のノヴォロシースクで一二月八日にはじまった政治的ストライキは、武装蜂起に発展した。同市の権力は労働者代表ソヴェトの手にうつったが、このソヴェトの指導部ではボリシェヴィキが優勢

であった。当時のノヴォロシースクは歴史上「ノヴォロシースク共和国」として知られている。ウクライナのプロレタリアートも、とくにドンバス、ハリコフ、アレクサンドロフスク（ザポロジエ）で専制にたいする武力闘争に立ちあがった。ウラルの労働者の闘争は、ペルミ（モトヴィリハ工場）とウファでもっとも組織的なものになった。

シベリア、とりわけクラスノヤルスクとチタでは、ボリシェヴィキに指導される労働者の武力闘争が激烈におこなわれた。クラスノヤルスクでは、労働者・兵士ソヴェトがつくられ、革命権力の機関になった。ソヴェトは出版、集会、結社の自由を宣言し、八時間労働日をさだめ、警官隊と憲兵を武装解除した。チタでは守備隊が労働者の側にうつった。兵士・カザック代表ソヴェトは、同市の事実上の権力であった。いわゆる「チタ共和国」がうまれた。

労働者、雇農、農民の武力衝突は、ポーランドとバルト海沿岸地方でおこった。蜂起の波はザカフカースを席捲した。そこでは、ボリシェヴィキ組織が労働者の闘争と農民運動とをたくみに結合した。グーリヤの農民蜂起はとくに頑強であった。ここでは多くの地区が蜂起者の手におちた。フィンランドでもツァーリズムにたいする武力闘争が広く展開された。

武装蜂起は大規模にはなったが、徹底的な攻勢をとったものでも、同時に一せいに起こったものでもなかった。モスクワ武装蜂起の成否は、首都ペテルブルクの労働者がこれを支持するかどうかに、多分にかかっていた。だがペテルブルク労働者代表ソヴェト執行委員会をひきいていたメンシェヴィキ（トロツキー、フルスタリョフ－ノサリ）は、日和見主義的な戦術をとり、労働者が革命的創意を発揮するのをおさえた。ペテルブルク労働者の市街戦は、一二月には、警官隊や軍隊とのばらばらな衝突以上には高まらなかった。メンシェヴィキの日和見主義政策の結果、

ペテルブルク・ソヴェトは、武装蜂起と専制打倒の闘争との機関の役割をはたすことができなかった。

ツァーリ政府は、途方もない残虐さで蜂起を全部鎮圧した。それ以後ツァーリは広く「血帝ニコライ」と呼ばれるようになった。

モスクワ労働者の首唱ではじめられた、ボリシェヴィキにひきいられる一二月武装蜂起は、革命の頂点であった。

ボリシェヴィキとメンシェヴィキは、蜂起の評価の点で根本的に見解が分かれた。メンシェヴィキは、武装蜂起に立ちあがったロシア・プロレタリアートの英雄的闘争を非難した。「武器をとるべきではなかった」と、プレハーノフは声明した。ボリシェヴィキは言った。それどころか、もっと決然と武器をとるべきであったし、ストライキその他の平和的な手段だけではツァーリズムに勝てないこと、革命の勝利は武力闘争によってしかかちとれないことを、大衆に説明すべきであった、と。レーニンは一二月蜂起を高く評価し、その積極的な面と敗因を深く分析し、すべての自覚した労働者に、蜂起の教訓を研究し、新しい戦闘にそなえるよう呼びかけた。

一二月蜂起は、プロレタリアートの政治的自覚と組織性がかつてないほど向上したことをしめした。一月九日いらい大幅な前進がおこなわれていた。労働者階級は武器を手にして革命の勝利のために英雄的にたたかった。ツァーリズムの打倒と半農奴制の一掃という思想は、ロシアの労働者とすべての勤労者のかたい信念となった。

一二月事件は、「自由は巨大な犠牲をはらわずにはあたえられないこと、ツァーリズムの武力抵抗は武力で粉砕し、おしつぶさなければならないこと」（レーニン全集、第八巻、五四七ペー

ジ）を、納得のいくように立証した。

4　革命の状況のもとでのボリシェヴィキ党の建設。ロシア社会民主労働党第四回大会

ボリシェヴィキ党は、一九〇五年まで、地下で成立し、地下で成長してきた。この点に、合法的に発展してきた他の大多数の国の社会民主党とこの党との相違があった。サークルを組織したり、ビラをだしたりする、ごくささやかなくわだてにさえ、革命家は何年もの禁錮や苦役という代償を払わなければならなかった。党員や党委員会は公然と集会をひらくことができなかった。各地の党委員会は、ロシア社会民主労働党の中央委員会または地方委員会によって任命されていた。革命的な新聞や小冊子や書物はおもに外国で印刷されて、ロシアにこっそりおくりこまれていた。地下活動の条件が厳重な秘密保持を必要としていたにもかかわらず、党は閉鎖的な組織ではなかった。党は、その全活動をつうじて労働者その他の勤労者と密接にむすびついていたし、プロレタリアートの多くの行動を指導していた。

革命の高揚は党の活動に新しい状況をもたらした。大衆は革命闘争によって集会、結社、出版の自由をたたかいとった。全国にわたって大衆集会や会合、さまざまな社会団体の代表者の会議や大会がひらかれた。大衆集会をひらくために無断でホールや講堂が占拠された。大集会が戸外でひらかれた。ボリシェヴィキの演説者たちも、他の党の代表者たちも、公然と大衆に訴え、自党の政綱をのべ、この政綱のためにたたかうよう呼びかけた。ボリシェヴィキ党の考えは広くゆ

きわたって、ますます多くの積極的支持者をもつようになった。

「一九〇五年の春には」とレーニンは書いている。「わが党は地下のサークルの連合体であったが、秋にはそれが、何百万というプロレタリアートの党になっていた」(全集、第一五巻、一三七ページ)。

多くのボリシェヴィキ組織は、相対的な自由を利用して、合法的な労働者新聞の発行を軌道にのせた(モスクワの『ボリバ』〔『闘争』〕と『フペリョート』〔『前進』〕、ザカフカースの『カフカースキー・ラボーチー・リストーク』〔『カフカース労働者小新聞』〕、クラスノヤルスクの『クラスノヤルスキー・ラボーチー』〔『クラスノヤルスク労働者』〕、チタの『ザバイカリスキー・ラボーチー』〔『ザバイカル労働者』〕その他)。リーフレットやビラの発行は激増した。革命期にボリシェヴィキ組織は二〇〇〇種以上のリーフレットをだし、その毎月の発行部数は一〇〇万部をこえていた。多くの都市で、大量のマルクス主義文献が発行された。

新しい状況のもとで、党の構造とその組織活動に変更をくわえる必要があった。『党の改組について』という論文のなかで、レーニンは、そういう再編成の計画を述べた。彼は、党の非合法機構を維持しながらも、合法的可能性を極力利用し、公然・半公然の党機関とそれにむすびつく組織の網の目をつくるよう提案した。ロシア社会民主労働党の隊列には多数の新党員、まず第一に労働者出身の党員をひきいれるべきであった。「彼らをつうじて若々しい革命ロシアのさわやかな息吹を流入させせよ」と、レーニンは書いている。できるところではどこでも、党指導機関の選挙制を実施し、地下にあったサークルのかわりに、党の基礎的な末端組織として細胞をつくるべきであった。

党は、活動を立てなおした。民主主義的中央集権制の原則が実際に実施されるようになった。革命のあいだに、党はすぐれた先進的な労働者によって補充された。一九〇五年の末、ペテルブルクの組織には約三〇〇〇人、モスクワの組織には二五〇〇人、イヴァノヴォ－ヴォズネセンスクの組織には約九〇〇人、バクーとハリコフの組織にはそれぞれ一〇〇〇人の党員がいた。のちに有数な党活動家になったエム・エヌ・ポクロフスキー、ヤ・エ・ルズターク、エヌ・エム・シヴェルニク、エル・イ・エイヘが入党した。

党は大衆党となり、地域的・生産的標識にしたがって建設された。多くの大工場には党組織が生まれた。それは党の組織上の基本的な細胞となり、ボリシェヴィキの拠点になった。都市には、小地区、地区、市の各党委員会が活動していた。五〇以上のボリシェヴィキ委員会およびグループがあった。ボリシェヴィキは工業中心地で優勢であった。これに反して、メンシェヴィキは、手工業者、インテリゲンツィア、学生、都市小市民および意識の低い労働者層のあいだで影響力をもっていた。

革命の高揚期には、多数の労働者がロシア社会民主労働党にはいってきた。若い党員は見解と政綱をことにするボリシェヴィキとメンシェヴィキのあることに、徐々にしか気づかなかった。彼らは両者の意見の相違点を理解しようとつとめた。各地に、ロシア社会民主労働党という同じ名称で行動する、ボリシェヴィキとメンシェヴィキの組織が別々に存在していたことは、労働者に奇異の念をおこさせた。労働者は、階級的な本能で、党のこうした状態が労働者階級、党および革命をよわめるものであることを、感じていた。だが、当時はメンシェヴィキも、ひきつづき社会民主主義者であると自任していて、ロシア社会民主労働党の綱領を公然とは拒否せず、自分

たちの組織に新党員をひきいれていた。党員大衆が、自分の経験でメンシェヴィキの日和見主義を確信するようになり、ボリシェヴィキこそ労働者階級の利益と社会主義の唯一の代表者であることを理解するようになるには、ある時間が必要であった。

ロシア社会民主労働党第三回大会のあとまもなく、多くの党員が党の統一を要求しはじめた。党の統一を要望する党員大衆や先進的労働者の下からの運動は、党を強化し、労働者階級の内部で党の権威をたかめようとする、また革命の勝利をめざすたたかいで成功をおさめるため全勢力を結集しようとする、彼らの心づかいをあらわしていた。ロシア社会民主労働党第三回大会で選出された党中央委員会は、この要求を支持した。レーニンとボリシェヴィキは、ロシア社会民主労働党内で結局は革命的マルクス主義の原則が勝利をおさめ、メンシェヴィキが孤立するようになるだろうと、固く確信していた。

レーニンは、ロシア社会民主労働党内の闘争の歴史を述べて、こう指摘している——

「一九〇五年の春と一九一二年の一月のメンシェヴィキとの正式な分裂は、一九〇六年と一九〇七年の、ついで一九一〇年の、半統一および統一といれかわったが、これは闘争の変転によるだけではなく、自分の経験による点検を要求していた一般党員の圧力によるものでもあったと言わなければならない」(全集、第四二巻、五一二ページ)。

レーニンは、ロシア社会民主労働党全体が第三回大会の政綱を承認し、革命的マルクス主義の立場に立ち、ロシアの革命運動を指導するようにしなければならないと、考えていた。ボリシェヴィキは、社会民主主義的労働者のできるだけ広い層を味方に獲得することにつとめていた。レーニンは、ボリシェヴィキがメンシェヴィキに勝つためには、当時の状況のもとでは、迂回と妥

協の戦術を用いることが必要であったこと、「もちろん、それは、メンシェヴィキを犠牲にしてボリシェヴィキの活動をやりやすくし、促進し、確実にし、つよめるような」（全集、第三一巻、六二ページ）迂回と妥協であったことを、指摘している。

統一大会の招集を必要としていたのは以上の理由だけではなかった。ロシアにはボリシェヴィキとメンシェヴィキのほかにポーランド＝リトワニア社会民主党、ラトヴィア社会民主労働党その他の社会民主主義諸党が存在していた。これらの党はロシア社会民主労働党にはいらずに、別々に活動していた。ツァーリズムとたたかうためには、とくに革命の状況のもとでたたかうためには、ロシアのすべての民族が力をあわせること、全国の労働者が民族の別をこえて結束することが必要であった。

統一問題は党の定例大会で解決するはずであった。ボリシェヴィキは、鉄道ストライキとモスクワではじまった武装蜂起のために、予定の期日に大会を召集することができなかった。タンメルフォルスに集まった代議員たちは、ボリシェヴィキの協議会をひらいた。協議会は一九〇五年一二月一二日から一七日まで議事をおこなった。

協議会は党の統一に賛成し、「平等の原則にもとづいて実践上の（中央部）および文筆上の中央機関を即時、同時に合同させること」に賛成した（『ソ連邦共産党決議集』、第一巻、一三五ページ）。協議会は広範な選挙制と民主主義的中央集権制の原則とを実施することを勧告した。この原則からはずれることがゆるされるのは、やむをえない実践上の障害があるばあいにかぎることがみとめられた。協議会は、第三回大会の決定を前進させて、党の農業綱領の「切取地」の条項を、国家、地主および教会の所有するすべての土地の没収という要求に代えることを提案した。

一二月末、合同中央委員会がつくられ、第四回党大会の招集がそれに委任された。ボリシェヴィキがどのような立場をとっているかを労働者がはっきり知って、ボリシェヴィキとメンシェヴィキのどちらかをえらべるようにすることが必要だと考えていた。この目的で彼は、革命のもっとも重要な問題のすべてについて、ボリシェヴィキの政綱――大会の主要決議の草案――を作成した。ボリシェヴィキは専制にたいする新しい革命的襲撃を準備するよう呼びかけた。主要な闘争形態とみとめられていたのは、広範な人民大衆の武力闘争であった。メンシェヴィキも自分たちの戦術綱領を大会に提出したが、そのなかでは、革命闘争は実質上、放棄されていた。両政綱を審議した結果、大多数の党組織は、ボリシェヴィキの政綱に賛成した。レーニンは、ボリシェヴィキの戦術の根拠を『カデットの勝利と労働者党の任務』という労作のなかであきらかにした。そのなかで彼は、大衆が国家生活の新しい諸形態を革命的に創出した経験を概括し、マルクス主義国家学説を前進させた。

ロシア社会民主労働党第四回（統一）大会は、一九〇六年四月一〇日から二五日までストックホルムで議事をおこなった。大会には、六二の組織を代表する、議決権をもつ代議員一一二名と評議権をもつ代議員二二名が出席していた。非ロシア民族の組織も代表を派遣し、ポーランド＝リトワニア社会民主党、ブント、ラトヴィア社会民主労働党から三名ずつ、ウクライナ社会民主労働党とフィンランド労働者党から一名ずつ代表が出席していた。大会にはブルガリア社会民主党の代表も出席していた。

ボリシェヴィキの代議員のなかには、ヴェ・イ・レーニン、アルチョム（エフ・ア・セルゲーエフ）、ア・エス・ブブノフ、ヴェ・ヴェ・ヴォロフスキー、カ・イェ・ヴォロシーロフ、エス・

イ・グセフ、エム・イ・カリーニン、エヌ・カ・クルプスカヤ、ア・ヴェ・ルナチャルスキー、イ・イ・スクヴォルツォフ－ステパノフ、ア・ペ・スミルノフ、イ・ヴェ・スターリン、エム・ヴェ・フルンゼ、エス・ゲ・シャウミャン、イェ・エム・ヤロスラフスキーがいた。ポーランド＝リトワニア社会民主党のエフ・エ・ジェルジンスキー、ヨット・エス・ハネツキ、ア・エス・ヴァルスキ、ラトヴィア辺区社会民主党のヤ・ペ・オゾルは、ボリシェヴィキを支持した。

議決権をもつ代議員のうち四六名がボリシェヴィキで、六二名がメンシェヴィキであった。代議員のうちの少数の者は、はっきりしない立場をとっていた。数のうえでメンシェヴィキのほうが多かったのは、武装蜂起の先頭に立った多数のボリシェヴィキ党組織が、代議員をおくることができなかったためであった。ボリシェヴィキの拠点である中部、ウラル、シベリア、北部からは、少数の代議員がきただけであった。これに反して、国の非工業地区にもっとも大きな組織をもっていたメンシェヴィキのほうが、多くの代議員をおくることができた。大会のこのような構成のため、大会決定の大部分が、メンシェヴィキ的な性格をもつものになった。

大会は、土地問題、現在の情勢とプロレタリアートの階級的任務、国会にたいする態度の問題、党規約その他を審議した。

土地問題についてボリシェヴィキの報告者となったのは、レーニンであった。彼は、地主のすべての土地を没収し、すべての土地を国有化するという要求、つまり土地の私有を廃止して、すべての土地を民主主義国家の所有にうつすという要求を擁護した。ロシアの事情のもとでは、これは農業問題を解決する、ただ一つ正しい方法であった。ボリシェヴィキの農業綱領は、地主とツァーリにたいする闘争に立ちあがるよう、農民に呼びかけていた。土地の国有化も、土地・

農民問題全体の解決も、ツァーリズムを打倒し、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）をうちたてるばあいにだけ実現できる。土地の国有化は、農奴制の遺物を一掃するだけでなく、農民そのものの内部の階級闘争をつよめて、プロレタリアートを中心とする貧農の結束をうながし、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化をはやめるだろう。

大会のボリシェヴィキ代議員の一部（エス・ア・スヴォロフ、イ・ヴェ・スターリンその他）は地主の土地を分割して、農民の私有にするという要求を擁護した。レーニンは分割の綱領は有害ではないが、あやまっていて、革命運動の展開力をよわめると考えた。「分割論者」は、農業問題と政治上の変革のあいだ、土地国有化の綱領とブルジョア民主主義革命の完全な勝利のあいだに深い関連のあることを理解していなかった。彼らは、ブルジョア民主主義革命と社会主義革命のあいだに長い中断期があるというあやまった命題から出発し、ブルジョア民主主義革命が社会主義革命へ成長転化する見通しを念頭においていなかった。

メンシェヴィキは土地公有化の綱領を主張した。これは、地主の土地を地方自治体の管理にうつすことを意味し、農民はこの地方自治体から土地を借りるはずであった。この綱領が政治的に有害なのは、それが革命的行動を呼びかけるかわりに、反動的な中央権力を存続させたままで、平和的な方法で土地問題を解決できるような有害な幻想をいだかせる点にあった。労働者階級と農民との同盟を説くかわりに、メンシェヴィキは、実質的には、農民と地主とが協定することを説いていた。レーニンは、メンシェヴィキの公有化綱領を断固として批判して、それがあやまっていて、革命運動に有害なことを暴露した。大会は多数決でメンシェヴィキの農業綱領を採択した。しかし、ボリシェヴィキは、メンシェヴィキの提案した「収用」という日和見主義的な定式

のかわりに、地主の土地の没収というスローガンを、決議にいれさせることに成功した。

報告『現在の情勢とプロレタリアートの階級的任務について』は、レーニンがおこなった。ボリシェヴィキは、自由主義的ブルジョアジーを暴露すること、ツァーリズムおよびツァーリズムを支持する諸政党とのたたかいで民主主義勢力と同盟をむすぶことを主張した。これに反して、メンシェヴィキは革命の指導権をブルジョアジーの手にひきわたそうとしていた。ボリシェヴィキは、人民のあいだに自由主義的ブルジョアジーがひろめていた国会にたいする立憲的幻想とたたかい、ツァーリ政府の約束や法律にたいする信頼をうちやぶり、国会の多数派であるカデットの二股政策や動揺を暴露するよう呼びかけた。これに反して、メンシェヴィキは、国会は旧制度との闘争の「足並みをそろえる」ことのできる「全国民的な政治的中心」であるとみて、革命の規模を縮小させる方針をとり、革命を議会主義の道に移そうと努力していた。この点に、労働者階級にブルジョアジーの影響を伝えるというメンシェヴィキの役割が、とくにはっきりあらわれていた。

第四回大会は、党規約を採択した。その第一条はレーニンの定式どおりになっていた。民主主義的中央集権制についてのボリシェヴィキの定式が、はじめて規約にとりいれられた。このときいらい、この定式は党規約にはいっている。

大会はポーランドおよびラトヴィアの社会民主党との統合を決定した。これらの党は、それぞれの地区に住むすべての民族のプロレタリアートのあいだで活動する地域的組織の資格で、ロシア社会民主労働党のなかにはいった。大会は、ブントとロシア社会民主労働党との統合条件を承認したが、特別決議で、プロレタリアートを民族別に組織することに断固として反対した。ウク

ライナ社会民主労働党をロシア社会民主労働党に加入させることは保留になったが、その後、この党の小ブルジョア的・民族主義的な性格の結果、この加入は立消えになった。ウクライナの労働者、勤労者の先進分子は、ロシア社会民主労働党の全国的な組織に統合されて、そのなかでたたかった。これらの組織のなかで、彼らは階級闘争とプロレタリア国際主義との精神に立った教育をうけた。

ロシア社会民主労働党第四回大会は、レーニンが宣言し、第二回党大会が確認したプロレタリア国際主義の原則の勝利を示した。非ロシア民族の社会民主主義政党が単一のロシア社会民主労働党に合同したことは、大会の大きな成果であった。この統合によって、ボリシェヴィキが国内のすべての民族の労働者の広範な層に思想的影響をおよぼし、国際主義的教育をほどこし、真に革命的なプロレタリア勢力を固く結束させることが保障されたし、日和見主義者、排外主義者、民族主義者を暴露し孤立化させることがやりやすくなった。

「大会のはたした巨大な実践的事業は」とレーニンは書いている。「非ロシア民族の社会民主主義政党との合同の予定が立てられた（一部はすでに実現された）ことである。この合同はロシア社会民主労働党を強化する。合同は、サークル主義の最後の痕跡をとりのぞくのをたすけるであろう。党の活動に新風を吹きいれるであろう。ロシアのあらゆる民族のプロレタリアートの力を大幅につよめるであろう」（全集、第一〇巻、三六四ページ）。

中央委員会には、三名のボリシェヴィキと七名のメンシェヴィキが選出された。中央機関紙『ソツィアル＝デモクラート』（『社会民主主義者』）の編集局は、メンシェヴィキだけで組織された。

大会で、革命のすべての原則問題についてボリシェヴィキとメンシェヴィキとのあいだにおこ

なわれた激闘は、プロレタリアートを教育し、メンシェヴィキを暴露するうえで、またマルクス主義党、新しい型の党を強化するうえで、重要な意義をもっていた。実生活は革命の決定的諸問題への回答を要求していた。革命の過程で、ボリシェヴィキとメンシェヴィキの意見の不一致は深まった。メンシェヴィキは一段一段と転落して、ますます明瞭に労働運動内のブルジョアジーの手先として行動するようになった。

大会直後、レーニンは、ボリシェヴィキ代議員の名で党へのアピールを書き、大会のメンシェヴィキ的な諸決定に原則的な批判をくわえた。ボリシェヴィキは、つぎの党大会に革命的マルクス主義にもとづく正しい諸決定を採択させ、こうして第四回大会のまちがった、メンシェヴィキ的な諸決議を廃棄させるために、ロシア社会民主労働党内で闘争を展開した。

党の中央機関紙がメンシェヴィキの手ににぎられたので、最大級の地方委員会は、一九〇六年八月以後、レーニンの編集で非合法新聞『プロレタリー』を発行しはじめた。この新聞は事実上ボリシェヴィキの中央機関紙となった。ボリシェヴィキは合法新聞(『ヴォルナ』〔『波』〕、『フペリョート』〔『前進』〕、『エーホ』〔『こだま』〕)の発行をも組織した。

第四回大会でボリシェヴィキとメンシェヴィキは、ロシア社会民主労働党の枠内で形式上統合したにすぎなかった。実際には、両者は、革命のもっとも重要な諸問題について独自の見解、独自の政綱をもっていた。ボリシェヴィキは、ひきつづきメンシェヴィキにたいし、労働運動内の日和見主義にたいして、きわめて原則的な闘争をおこなった。ボリシェヴィキは組織上の自立性と中央指導部とを維持した。メンシェヴィキのほうも彼ら自身の独立の組織をもっていた。レーニンは後に、こう書いている——

「一九〇三年から一九一二年まで、われわれは、メンシェヴィキとともに、何年かのあいだ形式上は単一の社会民主党にはいっていたが、プロレタリアートへブルジョアジーの影響を伝える日和見主義者である彼らと思想的および政治的にたたかうのを、どんな場合にもやめたことはなかった」(全集、第三一巻、五九ページ)。

ボリシェヴィキは、統合政策は、ボリシェヴィキとメンシェヴィキをいっしょくたにすること、両者の思想的および政治的立場をいっしょくたにすることと、混同してはならないというレーニンの命題を指針とした。メンシェヴィキのますます日和見主義的になっていく方針がもたらしていた大害を念頭において、ボリシェヴィキは、この方針にたいする闘争を強めた。

5　ボリシェヴィキの国会戦術。ロシア社会民主労働党第五回大会。革命の敗因

一二月の武装蜂起が敗北したのち、革命はしだいに衰退していった。しかし、革命をうんだ原因は根ぶかいものがあったし、大衆の革命的雰囲気もつよかった。革命闘争は一九〇七年の中ごろまでつづいた。労働者階級と人民大衆は、たたかいながら後退していった。

ツァーリズムは革命にたいする襲撃をつよめた。国内では懲罰隊、戦時軍法会議が活動し、黒百人組のポグロム暴徒があれくるった。ツァーリの死刑執行人は労働者代表ソヴェト、労働組合その他労働者、農民、兵士の大衆組織を破壊した。とりわけ残虐な迫害をこうむったのは、労働者階級の最良の代表者であるボリシェヴィキであった。彼らのなかの数千人が死刑を宣告され、

射殺され、裁判や審理ぬきで絞首刑に処された。シベリアで懲罰隊に射殺された者のなかにはイ・ヴェ・バーブシキンがいた。レーニンは彼を人民の英雄、ボリシェヴィキ党の誇りと呼んでいる。

ツァーリ政府は、行動するにあたって、改良の助けをもかりた。一九〇五年一二月一一日、モスクワでの武装蜂起のたけなわな時、国会選挙法が発布された。ツァーリズムは、大衆のあいだに、「ロシア議会」を通じて平和的な方法で自分たちの要求を実現できるような幻想を、ひろめようとしていた。政府は、国会を通じて地主の土地を手に入れることができると、いまなお信じていた農民をあざむき、彼らを労働者から切りはなし、革命に決定的な打撃をくわえようとしていた。

選挙法は、国民の半数以上に選挙権をみとめなかった。国会選挙は、普通選挙でも、平等な選挙でもなく、直接選挙でも、秘密選挙でもなかった。きたるべき国会では地主と資本家の代表者に圧倒的な優勢が保障されていた。住民は財産・階級の別によって特別の等級――いわゆるクーリア（土地所有者、都市、農民、労働者の各クーリア）――に分けられていた。各クーリアごとに選挙人がえらばれたが、それに要する票数は不平等であった。選挙人は、地主では二〇〇〇人に一人、農民では三万人に一人、労働者では九万人に一人の割合であった。

一九〇六年における勤労者のねばりづよい闘争は、新しい革命的高揚がおこるのを期待させた。こういう状況のもとで、ボリシェヴィキは、革命をさらに深め、拡大する方針を放棄することができなかった。そこで、彼らは、大衆に国会ボイコットを呼びかけ、選挙集会を武装蜂起の扇動に広く利用した。これに反して、メンシェヴィキは、半ボイコット戦術（選挙代表〔各クーリアの選挙集会で、有権者によって、選挙される。ついで選挙代表が選挙人を選挙する〕と選挙人の

選挙には参加するが、国会議員の選挙は拒否すること）を宣言した。メンシェヴィキのこのような中途半端で無原則的な方針は、労働者を分裂させ、有害な立憲的幻想の広がるのをたすけるものであった。

一九〇六年一月―二月に、ロシア社会民主労働党内ではボリシェヴィキの政綱とメンシェヴィキの政綱にもとづいて国会戦術の問題について広範な討論がおこなわれた。地方の党組織の大多数は積極的ボイコットに賛成した。もっとも自覚した革命的な労働者と一部の民主主義的インテリゲンツィアとは選挙をボイコットした。だが、革命的高揚がなかったので、国会選挙をぶちこわすことはできなかった。メンシェヴィキの組織破壊的な方針や、農民のあいだに根づよい立憲的幻想があって、農民のかなりの部分がカデットの媚態にまどわされていたことも、ボイコットの失敗にあずかって力があった。国会で多数をえたのはカデット党であった。のちにレーニンは、革命の経験を分析するさい、第一国会のボイコットはあやまりであったことをみとめた。というのは、このころにはすでに革命の最高潮点がすぎていたことを、実生活はしめしたからである。

ボリシェヴィキは、専制のいちじくの葉として、国会を暴露した。レーニンは、農民の立憲的幻想とたたかうことを、この時期の党のもっとも重要な政治的任務の一つとみていた。労働者階級と農民の同盟を強化するために、ボリシェヴィキは、トルドヴィキ、すなわち、土地のためにたたかう農民大衆の熱望を反映していた第一国会の農民議員を支持した。

メンシェヴィキは、革命の推進力と見通しを日和見主義的に判断していて、国会を革命勢力の「結集の中心」と公言した。メンシェヴィキ的中央委員会は、カデット政府をつくろうという国会の意図を支持するよう呼びかけた。このような呼びかけは、立憲的幻想をつよめ、権力が平穏

に人民の手にうつることができるといったあやまった期待をおこさせるものであった。中央委員会は国会の問題で党の意志を代表していなかった。大多数の党組織は、国会にたいするレーニンの評価と、メンシェヴィキの立場にボリシェヴィキがくわえた批判とをもとにして、中央委員会の日和見主義的方針を非難した。

第一国会の召集は、革命運動を中断させはしなかった。プロレタリアートは、もっとも奥にひかえていた予備軍を革命運動にひきいれながら、攻勢に出てきた反動との困難な後衛戦をたたかっていた。一二月蜂起の経験を考慮して、党は、農民とくに兵士のあいだの活動を強めた。いくつかの軍隊内党組織が兵士と水兵むけの特別の新聞を発行しはじめた。事実上ボリシェヴィキの軍隊内組織の中央機関紙であった『カザルマ』〔『兵営』〕（ペテルブルク）、『ソルダーツカヤ・ジーズニ』〔『兵士の生活』〕（モスクワ）、『ソルダート』〔『兵士』〕（セヴァストーポリ）、『ゴーロス・ソルダータ』〔『兵士の声』〕（リガ）、『ジーズニ・カザルムィ』〔『兵営生活』〕（ヴォローネシ）がそれである。

一九〇六年の夏、農民運動は新たな勢いで燃えあがった。農民騒擾はヨーロッパ・ロシアの郡総数の半数である二一五郡をまきこんだ。軍隊内でも革命的行動がつづいていた。一九〇六年の兵士や水兵の最大の武装行動は、バルチック艦隊で——スヴェアボルク、クロンシタット、レヴェリでおこった。

革命を鎮圧するために、ツァーリ政府は新しい措置をとった。一九〇六年七月八日、第一国会が解散された。この国会では、おもに農業問題で政府は再三、批判をくわえられたのであった。反革命の攻勢はつよまった。

革命の衰退という状況のもとでボリシェヴィキは戦術を変えた。彼らは、革命的扇動をおこない、専制と反革命的ブルジョアジーを暴露する演壇として国会を利用するために、第二国会に参加することを決定した。ボリシェヴィキはプロレタリアートを組織し政治的に啓蒙するために選挙カンパニアを利用した。彼らはトルドヴィキとの「左翼ブロック」の構想を提唱した。ボリシェヴィキは、トルドヴィキの土地要求のもつ革命的・民主主義的な性格を強調した。これらの要求は、小ブルジョア的な限界をもっていたにもかかわらず、「現在の歴史的時機にはある現実的で進歩的なもの」(全集、第一三巻、一二三一ページ)を代表していた。ボリシェヴィキの国会戦術は、農民から自由主義的ブルジョアジーの影響を取りのぞき、労働者階級と農民の革命的ブロックをつくることを、主な目標としていた。

メンシェヴィキは、選挙カンパニアの時にも、国会そのもののなかでも、カデットとのブロックの支持者で、革命なしにも武装蜂起なしにも自由を獲得できるかのようなあやまった期待を、ブルジョアジーが人民のあいだにひろめるのをたすけた。メンシェヴィキ的中央委員会の日和見主義的な立場は、圧倒的多数の地方党組織を憤激させ、これらの組織は、臨時党大会を早急に招集することを要求した。

一九〇七年四月三〇日から五月一九日にかけて、ロンドンでロシア社会民主労働党第五回大会がひらかれた。大会には一五万人の党員から、一四五の党組織を代表して議決権をもつもの三〇三名、評議権をもつもの三九名の代議員が出席していた。議決権をもつ代議員のうち一七七名がロシア社会民主労働党の代議員(ボリシェヴィキ八九名、メンシェヴィキ八八名)、四五名がポーランド社会民主党員、二六人がラトヴィア社会民主党員、五五名がブント派であった。

レーニンをはじめとするボリシェヴィキが日和見主義的潮流や、それとの調停主義にたいして断固としてたたかった結果、また党員のあいだの日常の説明活動の結果、大工業中心地（ペテルブルク、モスクワ、ウラル、イヴァノヴォ－ヴォズネセンスクその他）の代議員の大多数はボリシェヴィキであった。メンシェヴィキの大会代議員は、おもに非工業地区からきていた。

大会では、ボリシェヴィキ代議員の結束したグループ――ヴェ・イ・レーニン、ア・エス・ブブノフ、カ・イェ・ヴォロシーロフ、イ・エフ・ドゥブロヴィンスキー、ゲ・デ・リンド、フェム・エヌ・リャドフ、ヴェ・ペ・ノギン、イ・ヴェ・スターリン、エム・ゲ・ツハカーヤ、エス・ゲ・シャウミャン、イェ・エム・ヤロスラフスキーその他――が発言した。ポーランドとラトヴィアの社会民主主義者は、大会でボリシェヴィキを支持したが、ときによると動揺して、メンシェヴィキに票を投じた。

大会の議事には、プロレタリア大作家ア・エム・ゴーリキーが参加していた。彼は労働運動およびボリシェヴィキ党と緊密にむすびついていた。人民の真の友として、彼は心から革命に共感し、ボリシェヴィキに非常に大きな援助をあたえていた。レーニンはゴーリキーを高く評価し、彼と密接な連絡をたもっていた。ゴーリキーはメンシェヴィキの日和見主義的な方針を公然と非難し、カデットを糾弾し、ツァーリズムにたいして献身的にたたかった。

大会は、主要な問題についてボリシェヴィキの決定を採択した。これらの決定は長期にわたって党の政策を規定していた。

大会のもっとも重要な問題は、ブルジョア諸政党にたいする態度の問題で、この問題について四名の報告者が発言した。非プロレタリア諸党にたいしてボリシェヴィキとメンシェヴィキがこ

となる態度をとっていたことは、同時に革命の根本問題にたいする両者の立場をもきめることになった。ボリシェヴィキの立場は、レーニンが報告のなかで基礎づけた。民主主義革命で指導者の役割をはたすためには、労働者階級は、すべての党の階級的本性をはっきり理解し、これらの党にたいして正しい戦術を立てなければならなかった。黒百人組党(「ロシア国民同盟」、「連合貴族評議会」その他)や、大地主と大ブルジョアジーの党(「一〇月一七日同盟」、商工党その他)とは、容赦なくたたかわなければならない。自由主義的・君主主義的ブルジョアジーとの闘争にあたっては、とくにカデットのにせ民主主義を暴露し、カデットに農民や都市小ブルジョアジーを背後にしたがわさせないようにすべきであった。これに反して、メンシェヴィキは、国会内でカデットとブロックをむすぶことを提案していた。レーニンは、大会で、メンシェヴィキのこの降伏主義的戦術を暴露した。

トルドヴィキには、これとはちがった評価をくだすべきであった。彼らは、自由主義者のヘゲモニーへの追随と、地主的土地所有および農奴制国家にたいする断固たる闘争とのあいだを動揺していた。党は、トルドヴィキのえせ社会主義的な性格を暴露すると同時に、反動派と自由主義的ブルジョアジーにたいする共同闘争にあたっては、彼らと一定の条件で協定をむすぶべきであった。

ブルジョア政党にたいする態度についてのボリシェヴィキの決議案には革命の大量の経験が概括されていた。レーニンの「左翼ブロック」戦術、民主主義統一戦線の戦術は、共同の戦闘行動、ソヴェトの活動、武装蜂起、国会選挙にあらわれ、国会自体にもあらわれていた。レーニンは、「左翼ブロック主義」はすべての革命の経験から生まれているもので、どのブルジョア民主主義

運動でも労働者階級のマルクス主義党にとって必須であると指摘している。大会は、この決議案を採択して、社会民主主義的労働者の大多数が革命におけるレーニン的方針の歴史的な正しさを納得していることを示した。

メンシェヴィキのいわゆる「労働者大会」という構想は完敗を喫した。彼らは、いろいろな労働者組織の代表の大会を招集し、この大会で、社会民主主義者も、エス・エルも、無政府主義者も加入するような「広範な労働者党」を設立することを提案していた。実際には、これは、ロシア社会民主労働党を解消することを意味したであろう。ボリシェヴィキの提案によって、「労働者大会」という構想は、無条件に有害なものであると非難された。

ボリシェヴィキは、国会内の戦術の問題で、日和見主義者に大勝利をおさめた。大会は、社会民主主義者の国会活動よりも、国会外の闘争を重視しなければならないこと、国会はなによりもツァーリ専制やブルジョアジーの裏切り政策を暴露する演壇として、党の革命的綱領を宣伝するための演壇として利用すべきであることを、決定した。

これは、議会内でプロレタリアートの代表がとるべき態度についての新しい、革命的マルクス主義的な方針であった。この方針は、西ヨーロッパの社会民主主義者が、日和見主義の道にずり落ちて、革命闘争を放棄し、議会主義的な方法で権力を獲得できるかのような幻想を労働者階級のなかにひろめていたので、ますます大きな国際的意義をもつようになった。

大会は党と労働組合との関係についても、ボリシェヴィキの決議案を採択した。革命のあいだに、ロシアでは労働組合運動が急激に発展した。一九〇七年当時、労働組合は約六五〇あった。革命闘争のなりゆきは、労働組合がだれに従うかに、多分にかかっていた。メンシェヴィキは労

働組合の「中立」を主張していた。ボリシェヴィキは、階級闘争とプロレタリアートの社会主義的任務との精神に立って労働者を教育していた。第五回大会は、「労働組合が社会民主党の思想的指導を承認するのを、ロシア社会民主労働党の全党員が促進しなければならないと決定した(『ソ連邦共産党決議集』、第一巻、二一九ページ)。

大会は一二名からなる中央委員会を選出したが、そのなかではレーニン的方針の支持者が多数を占めていた。ボリシェヴィキは、第五回大会の決定の精神に立って一貫した革命的方針を実行するために、レーニンをはじめとするボリシェヴィキ中央部を設立した。

大会での勝利もボリシェヴィキを有頂天にはしなかった。レーニンは、日和見主義者たちとの闘争でおさめた成功を自慢してはならないこと、さらに多くの戦闘と試練が前途に待ちうけていることを強調した。この勝利は、ボリシェヴィキ党の力がましていることを言いあらわしていた。党は、革命戦をつうじて、非常に大きな政治的経験をつんでいたからである。

革命は、ボリシェヴィキ党と大衆の結びつきを固めた。多くの先進的労働者、勤労者の他の層のすぐれた分子が入党した。党は、労働者階級のなかでもっとも権威のあるものになった。一九〇七年に警保局がすべての保安課につぎのように命じたのは、意味深長である。『『ボリシェヴィキ派』社会民主党の議員団に……特別な注意をはらえ。なぜなら、メンシェヴィキ・グループは、その士気からみて、現在、ボリシェヴィキほど重大な危険を呈してはいないから』。

革命の時期に、革命の指導者、マルクス主義の天才的な理論家、大衆の傑出した組織者としてのレーニンの才能は並はずれた力強さで発揮された。彼の名は広く知られるようになった。レーニンの革命的マルクス主義的方針と勇敢な活動とは、ロシア社会民主党、労働者大衆、勤労者の

その他の層のあいだでの彼の声望をますます高めた。

第一次ロシア革命は約二年半つづいた。革命の後退は、事実上、一二月の武装蜂起の敗北のあとではじまった。革命は、たたかいながら徐々に後退していった。一九〇七年の中ごろには、ツァーリズムに勝つには、労働者と農民の力が不足していることが明らかになっていた。反動は断固たる攻勢にうつった。

一九〇七年六月三日、ツァーリは第二国会を解散した。国会の社会民主党議員団は逮捕された。それと同時に、新しい選挙法が公布されたが、この選挙法は、第三国会での農奴主的地主と大ブルジョアジーとの完全な支配を保障していた。

労働者の組織は破壊された。反動はボリシェヴィキにおそいかかった。レーニンに制裁をくわえるため、警察当局は血まなこになって彼をさがし求めた。レーニンは忠実な友人たちの警告を受け、生命の危険をおかしてフィンランド湾の氷上をわたって国外にのがれた。彼のこの二回目の亡命は一九一七年四月までつづいた。ロシア国内での党活動は、レーニンとかたく結びついた中央委員会ロシア国内ビューローが直接指導していた。

ロシアの第一次革命は敗北におわった。

革命の敗因の一つは、ロシアの労働者階級がツァーリズムとのたたかいで、まだ農民と強固な同盟をつくることができなかったことにあった。農民の行動はばらばらで、組織性と決断力が十分でなかった。農民のもっとも大規模な革命的行動がおこったときには、すでにツァーリズムは国の工業中心地における革命の主な火元を鎮圧することに成功していた。大多数の農民は、政治的にきわめておくれていて、当時はまだツァーリを信じていた。エス・エルやカデットの影響を

受けていた農民は、ツァーリの国会に期待をかけていた。被抑圧諸民族の勤労大衆も、民族主義諸党のために力をそがれていて、ツァーリズムにむかって協力一致した革命的襲撃をおこなわなかった。

こうしたことはすべて、おもに軍服を着た農民からなっている軍隊の態度にも、わるい影響をおよぼした。一部の部隊は積極的に専制とたたかったが、大多数の兵士はツァーリ政府に忠誠を守っていて、その命令を遂行した。

労働者階級は革命の指導勢力として行動した。だが、労働者も十分協力一致した行動をとったとはいえなかった。労働者の部隊によっては、プロレタリアートの前衛がすでにかなりよわまっていたときに、闘争に立ちあがったのがあった。蜂起を指導する単一の全ロシア的な政治的中心がなかったため、武力闘争はばらばらの地方的な蜂起の性格をおびていた。

ロシア社会民主労働党はメンシェヴィキの分裂主義的・組織破壊的な活動の結果、統一していなかった。ボリシェヴィキは、革命を極力展開することをめざし、武装蜂起によってツァーリズムを打倒することをめざし、労働者と農民の同盟を強化することをめざし、カデット的ブルジョアジーを中立化し孤立させることをめざし、労働者・農民からなる臨時革命政府をつくることをめざしてたたかった。メンシェヴィキは、頑強にボリシェヴィキの革命的方針に反対してたたかい、労働運動内のブルジョアジーの手先として行動した。ロシア社会民主労働党の内部に統一が欠けていたことは、労働者階級の隊列を分裂させ、こうして彼らの攻撃をよわめた。これらの原因のため、プロレタリアートは革命の指導者(ヘゲモン)としての役割を完全かつ徹底的にはたすことができず、革命を勝利にみちびくことができなかった。

ロシアの自由主義的ブルジョアジーは、反革命的な役割を演じ、ツァーリズムとの取引きにおうじた。

外国の帝国主義者がツァーリ政府にあたえた財政的援助も、ロシア革命の敗北を助長した。彼らは、ロシアの鉱工業に投下した資本をうしなうことをおそれ、また革命が他の国々に波及することをおそれたのである。世界帝国主義は、ロシア革命の発足いらいその最大の敵として行動した。

一九〇五年八月に日本との講和条約が締結されたことも、ツァーリズムの立場をつよめるのに役立った。

第一次ロシア革命が敗北したにもかかわらず、専制制度には最初の穴がうがたれた。プロレタリアートは、英雄的な闘争によって、自分のためにも、全人民のためにも一連の政治経済的な成果を獲得した。ロシアではじめて、短期間ではあったが、言論、結社、集会の自由がたたかいとられ、合法的な労働者出版物、教育団体と文化団体、労働組合組織がつくられた。

革命はツァーリズムから最初の代議機関——国会——をかちとった。この国会は、ツァーリズムの無力な付属物でしかなかったが、ボリシェヴィキは、革命的扇動をおこないツァーリズムとブルジョア諸政党を暴露する演壇として、この国会を利用した。

労働者は、自分たちの労働条件のいくらかの改善をかちとった。多くの工業部門で労働者の賃金が引き上げられた。農民は、償還金の支払を廃止させ、借地料や土地の買値を引き下げさせた。

だが、ツァーリズムを打倒するという革命の主目標は達成されなかった。革命は、ツァーリの権力を傷つけるだけでは不十分であり、それを一掃してしまわなければならないことを、納得の

いくようにしめした。

6　革命の国際的意義

一九〇五―一九〇七年のロシア革命は、新しい時代――深刻きわまる政治的激動と革命戦の時代――をひらいた。ツァーリズムの利益は西欧帝国主義の利益とからみあっていたので、革命がツァーリズムにくわえた第一撃は、帝国主義体制全体をよわめた。ヨーロッパ列強の支配者は不安にかられた。彼らは、いつでもツァーリズムの救援にはせつけるつもりでいた。一九〇五年に革命が頂点に達すると、ドイツの巡洋艦と水雷艇がフィンランド湾に入ってきた。イギリスの艦隊も遠征のために集結した。オーストリア軍は、ロシア国境に集結した。ボリシェヴィキは、ヨーロッパ反革命派の駆け引きを暴露した。ロシア・プロレタリアートは、孤立してたたかったわけではなかった。彼らには、国際プロレタリアートという確実な予備軍があった。第二インタナショナルの国際社会主義ビューローは、ロシア革命を支持するよう、全世界の労働者に呼びかけた。ロシアの人民大衆の英雄的な闘争との連帯運動はきわめて大規模のものになり、労働者階級の国際的統一を強化した。

革命は国際労働運動における新時代の端緒をひらき、植民地人民の民族解放闘争の発展に力づよい影響をおよぼした。

革命は西ヨーロッパとアメリカのプロレタリアートに深い印象をあたえ、その熱烈な共感を呼び、その支持を受けた。「革命の都であるパリの勤労者は心から諸君に共鳴しており、諸君に呼

びかける。われわれをあてにしてくれたまえ！　われわれはかならず諸君を援助する！　ツァーリズムをたおせ！　搾取者をたおせ！　社会革命万歳！」と、ロシアのプロレタリアにあてられたある宣言はのべている。

フランスの社会主義者の代表者であるジュール・ゲード、ポール・ラファルグ、ジャン・ジョレース、ドイツ社会民主党の著名な活動家であるアウグスト・ベーベル、ローザ・ルクセンブルク、カール・リープクネヒト、フランツ・メーリング、クララ・ツェトキンは、非常な意気ごみでロシアの革命をむかえた。リープクネヒトは、「ロシアが獲得する自由は、プロイセンにとっても、ザクセンにとっても、ドイツにとっても、同じく自由となるであろう」とのべ、ドイツの労働者に、「ロシア革命の旗のもとに立ちあがれ」と呼びかけた。社会民主党と労働組合の右翼指導者の意向を無視して、ドイツ、イタリア、オーストリア＝ハンガリーその他の国の労働者は、ますます頻繁に政治的ストライキに訴えるようになった。

ロシア革命はボヘミア、モラヴィア、ガリツィアの勤労者のあいだに熱烈な反響を呼んだ。スロヴェニア人とクロアチア人の民族解放闘争がたかまりはじめた。ウィーン、ブダペスト、プラハ、リヴォフでは、一九〇五年一一月に大衆的デモンストレーションがおこなわれた。広範なストライキ運動に動かされて、オーストリア政府はやむなく普通選挙制を実施した。

ブルガリアでは、ロシア革命の影響をうけて「テスニャキ派」社会主義者の指導で頑強な経済闘争と政治闘争が展開された。

ルーマニアの勤労者は、戦艦「ポチョムキン」の革命的水兵に、また彼らを通じて、革命に立ちあがったロシアの人民に、熱烈なあいさつをおくった。一九〇七年にはモルドヴァとワラキア

でルーマニア人の貴族と地主にたいする強力な農民運動がはじまった。

ロシア革命は、東方諸国の民族解放運動にとって並はずれた意義をもっていた。イラン、トルコ、中国では、一九〇五―一九一二年にブルジョア革命がおこった。インド、アフガニスタン、インドネシアでは、民族解放運動がたかまりはじめた。ロシア革命の知らせはラテン・アメリカの岸まで広がった。メキシコに革命が勃発した。アルゼンチン、チリ、ブラジルに革命の波が高まった。北アフリカ諸国にも革命的動揺が感じられた。一九〇五年後にはじまった東洋諸国の民主主義革命は、帝国主義の植民地体制を動揺させた。

レーニンは、一九〇五年の強力な蜂起が深い痕跡をのこしたこと、何億という人々の前進のなかにあらわれているこの蜂起の影響は根絶できないことを、指摘している。

ロシア革命の根本問題――労働者階級の党の指導的役割の問題、労働者階級と農民の同盟の問題、プロレタリアートのヘゲモニーの問題、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権(ディクタツーラ)の問題、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化の問題、民族解放運動の指導の問題、革命闘争の形態と手段の問題――の革命的解決をめざすボリシェヴィキの闘争は、第二インタナショナルの日和見主義者に大打撃をあたえた。ボリシェヴィキは、第二インタナショナルの諸党内で支配的であった見解、ブルジョア革命ではブルジョアジーがヘゲモニーをにぎることは避けられないとか、農民は反動的だとか、ブルジョア革命と社会主義革命のあいだには長期の中断があるとかいう見解をくつがえした。

日和見主義にたいするボリシェヴィキの闘争は、ヨーロッパの社会民主諸党内の革命的潮流と改良主義的潮流とのあいだに、いっそうはっきりと一線を画すのをうながし、左翼的潮流（ドイ

ツ社会民主党左派、イギリス社会党の左派その他）の形成と発展をうながした。第一次ロシア革命の経験は、「テスニャキ派」社会主義者のブルガリア社会民主労働党が革命的な地歩を固めるのをたすけた。ボリシェヴィキは、日和見主義にたいする闘争の模範をしめし、大衆のなかに強固な地歩を獲得する手本をしめした。

レーニンは、第二インタナショナルの中央派をも暴露した。第二インタナショナルの公認の指導者たちは中央派的な立場をとっていた。彼らは、日和見主義者と和解し彼らに譲歩する政策をとっていた。レーニンの批判は、左派が中央派と一線を画すのをたすけた。

要　約

一九〇五—一九〇七年のロシアのブルジョア民主主義革命は、帝国主義時代の最初の人民革命であった。革命は、ロシアのその後の発展全体に絶大な影響をおよぼした。革命は、ロシアのきわめて広範な人民大衆を意識的な革命的行動に立ちあがらせ、大きな政治的経験を彼らにたくわえさせた。

「この時期のひと月ひと月は」とレーニンは指摘している。「大衆にも、指導者にも、階級にも、党にも、政治科学の基礎をおしえこむ点で、『平穏な』、『立憲的な』発展の一年間に相当していた」（全集、第三一巻、一二ページ）。

革命は、ツァーリ専制を打倒し、ついで資本主義のくびきをも打倒することは、大衆の革命闘争によってのみ、ロシアの被抑圧民族の共同闘争によってのみ可能であることを、納得のいくよ

うに証明した。

革命は、すべての階級と党の行動する現場をみせ、彼らの志向、国内における彼らの役割と意義をあかるみにだした。それぞれの党がなにをめざしてたたかっているか、だれがだれの階級的利益を擁護しているかを、人民大衆はみることができた。

革命は、労働者階級の統一が革命の勝利するもっとも重要な条件であることを、はっきり確証した。

勤労農民は、動揺をかさねたにもかかわらず、労働者階級の同盟者として行動した。もっとも、この同盟が形成の過程にあり、まだ自然発生的で、しばしば自覚されていなかったことは、事実である。労働者と農民の力はまだ細分されていて、十分に組織されていなかった。

プロレタリアートは、自由主義的ブルジョアジーから人民大衆にたいする指導権をうばいとって、歴史上はじめて、ブルジョア民主主義革命の指導者、ヘゲモンとして行動した。こうして、資本主義の発展が不十分なためプロレタリアートが国民の少数者であるばあいにさえ、プロレタリアートは革命の指導者となる能力をもっていることが、確証された。それと同時に、革命は、民主主義的な農民大衆が、プロレタリアートをたすけて勝利を獲得させる能力をもっていることを証明した。革命は、ブルジョアジーの反革命性を如実にしめした。

革命は、世界革命運動の中心がロシアに移動して、英雄的なロシア・プロレタリアートが全世界の革命的プロレタリアートの前衛になっていることをしめした。

第一次ロシア革命は、以前の革命にはみられなかった新しい闘争手段と闘争形態をおしだした。武装蜂起に成長転化する大衆的政治的ストライキがはじめてもちいられた。革命の進行中につく

りだされた労働者代表ソヴェトは、蜂起の機関であっただけでなく、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権(ディクタツーラ)の萌芽形態でもあった。これらのソヴェトは、十月社会主義大革命の勝利の結果わが国に確立されたソヴェト権力の原型であった。

革命の全期間を通じて、ウクライナ、ベロルシア、ポーランド、バルト海沿岸地方、ザカフカース、中央アジアその他ロシアの辺境地方の労働者・農民は、ロシアの労働者・農民とともにツァーリズムと地主にたいして英雄的にたたかった。革命の経験は、民族的解放と社会的解放をめざす共同闘争のために、ロシアのすべての民族の勤労者がプロレタリアートの指導のもとに戦闘的な同盟をむすぶことが必要であり、また可能であることを、確証した。

レーニンは、マルクス主義を革命の巨大な経験でゆたかにした。彼の著作では、マルクス主義の革命理論と国家学説が、ブルジョア民主主義革命と社会主義革命で労働者階級が指導的役割をはたすのを保障する革命的政策が発展させられている。

革命期は、ボリシェヴィキとメンシェヴィキの二つの政治方針の吟味であった。革命闘争の経過は、ボリシェヴィキの戦略計画と戦術が正しかったことを確証した。数次の党大会で、メンシェヴィキとはげしくたたかいながら、党の集団的思考は、大衆の革命闘争の具体的な方法と手段を、革命的国会戦術の基礎を、プロレタリア国際主義の原則にもとづいて非ロシア民族の社会民主諸党と統合する形態を仕上げた。

一九〇五—一九〇七年のロシア革命は、労働者階級のマルクス主義党が独自の綱領をかかげ、独自の戦略戦術をもって自主的な政治勢力として登場した、世界史上最初の革命であった。ボリシェヴィキ党は、大きな政治的試練を経て、大衆のなかでの組織活動の膨大な経験を身につけた。

一九〇五年までは、ボリシェヴィキを知っていたのは比較的小範囲の人々にすぎなかったが、革命の結果、広範な大衆がボリシェヴィキを知るようになった。党は大衆党となった。ボリシェヴィキは人民の利益のために献身的にたたかい、戦闘がもっともはげしく、もっとも危険な闘争場面にいた。すべてこういうことは、人民大衆の意識に深い印象をのこし、その影響は、後に、二月革命と十月革命のさいにあらわれたのである。

「一九〇五年のそれのような『総稽古』がなかったなら、一九一七年の革命は、二月のブルジョア革命も、一〇月のプロレタリア革命も、ともに不可能だったにちがいない」(レーニン全集、第二九巻、三〇八ページ)。

第四章　反動期におけるボリシェヴィキ党（一九〇七―一九一〇年）

1　ストルィピンの反動

革命の敗北後ツァーリズムは、国中を黒百人組のテロルでしめつけた。いたるところで懲罰隊や戦時軍法会議が猛威をふるった。それらは、革命運動にくわわった疑いのある者に、だれかれの区別なく残虐な懲罰をくわえた。革命闘争の参加者は何千人も処刑され、何万人も苦役に処せられた。監獄は超満員になっていた。搾取者は、革命に立ちあがった勤労者に、残忍な報復をおこなった。ツァーリの大臣ストルィピンは「絞刑吏」というあだ名をもらい、人民は、彼が国中に設けた絞首台をさして「ストルィピンのネクタイ」と呼んだ。

専制がもっとも残忍におそいかかったのは労働者階級とその組織にたいしてであった。一九〇六年から一九一〇年にかけて、ツァーリ政府は労働組合を約五〇〇解散し、六〇〇以上の労働組合の登録を拒否した。合法的な労働組合の組合員の数は、一九〇七年はじめの二四万五〇〇〇人から一九〇九年末の一万三〇〇〇人に減った。ツァーリの保安課は盛んに挑発者をもぐりこませ、それらの挑発者は革命組織の内部でスパイ活動をおこない、革命家を売りわたした。

労働者階級は資本の攻勢にも苦しんでいた。企業家団体は労働者と猛烈なたたかいをおこなった。工場主はロックアウトを宣言し、企業を閉鎖し、労働者を大量に馘首(かくしゅ)した。積極的な労働者は「ブラック・リスト」にのせられ、企業家団体に加入している企業主は、どの企業にも彼らをやとわなかった。革命前にあった工場規則の多くがまたもや復活され、労働日は延長され、賃金は切り下げられ、罰金がさかんに適用された。「さあ、われわれの時代がきた。こんどは、われわれが思いどおりにふるまう番だ」と、企業家たちはずうずうしく労働者にうそぶいた。

しかし、革命前の秩序に完全にもどることはツァーリズムにはできなかった。ロシアはもう一九〇五年以前のロシアではなかった。すべての階級が革命をへていたし、どの階級も各自の教訓をひきだしていた。

ツァーリズム、農奴主的地主は、自分たちの権力と所得を維持するためには、ロシアの資本主義的発展に順応しなければならないことを理解して、都市と農村のブルジョアジーのあいだに同盟者をもとめていた。そこで、ツァーリズムは新しい政策をとりはじめた。この政策は、ストルィピン政策という名をつけられた。その特徴は、六月三日の政治体制と新しい農業政策であった。

国会は、地主とブルジョアジーの反革命的同盟を固め、おくれた住民層をだますためにツァーリズムに必要だった。だが、政府には、従順な国会が必要だった。新しい選挙法は、人民の権利をますます切りちぢめた。地主と資本家は選挙人総数の四分の三以上を選出し、労働者と農民は総数の四分の一以下を選出することになっていた。被抑圧民族の代表選出権は大幅に削減された。中央アジアの土着の住民は選挙権をまったくうばわれ、ポーランド、カフカースその他の少数民族地区から選出される議員の数は、ほとんど三分の一に減らされた。ゆがめられた選挙法は、支

配者の一味徒党に望みどおりの結果をもたらした。第三国会の議員の三分の二は、地主、ツァーリの官吏、僧侶で占めていた。

ツァーリズムは、土地問題をも自分流に解決しようと企てた。土地をあたえても、全部の農民にあたえるのではなく、地主を犠牲にするのでもないという仕方で、解決しようと企てたのである。上層支配者は、「父なるツァーリ」への農民の忠誠心にはまったく望みをすてて、富農を自分の支柱にしようとしはじめた。その現われがストルィピンの農業政策であった。この農業政策は、一九〇六年一一月九日付の勅令と一九一〇年六月一四日付の法律で確認された。

ツァーリの新しい土地法は地主と富農の利益を擁護していた。地主の土地は全然そのままであった。各農民は、共同体から脱退して、自分の分与地を私有する権利を手にいれた。共同体から脱退した農民には、一箇所に土地があたえられた（フートルまたはオートルプ）。共同体は強制的に破壊され、そのさい富農は優良な農民地を手にいれた。農民が、土地整理委員会を適切にも「土地略奪委員会」と呼び、ストルィピンの土地整理そのものを「土地混乱」と呼んだのは、むりもなかった。

九年間（一九〇七―一九一五年）に約二五〇万戸の農家が共同体から脱退し、ほぼ一七〇〇万デシャチーナの土地が私有を確認された。共同体からの脱退をだれよりも利益としていたのは、農村ブルジョアジーであった。一部の貧農、とりわけ都市に出稼ぎに行っていた貧農は、自分の分与地を売りはらって、農村と完全に縁を切った。富農は農民銀行のたすけで、貧農からその分与地を安く買い占めた。大多数の農民は、共同体から脱退することを困窮と隷属からの救いの道とはみていなかった。ツァーリ政府がひどい圧力をくわえたにもかかわらず、ヨーロッパ・ロシ

アでは共同体から脱退したのは、だいたい農家総数の約四分の一にすぎなかった。

ストルィピンの農業政策は農民をいっそう零落させ、農村の階級矛盾をするどくした。困窮におしひしがれた農民経済は、いぜんとしておくれていた。農民はあいかわらず、古い原始的な農具と生産方法を用いながら、取るにたりない一片のやせた劣等地で苦しんでいた。一九一〇年に、農民経営にはほぼ八〇〇万個の木製の鋤（すき）と二〇〇万個以上の木製のプラウがあった。

ストルィピン政策は、ツァーリズムがブルジョア君主制に転化していく道で、一八六一年の改革につぐ、第二歩をふみだしたことを意味していた。これは革命を防止し、農奴主的地主の権力、所有、特権を維持するために、最後の安全弁をひらこうとするこころみであった、とレーニンは書いている。しかし、ツァーリズムはブルジョア君主制にはならずに、大ブルジョアジーと固く同盟してロシアを支配していた農奴主的地主の執権（ディクタツーラ）を現わしていた。農村では、ストルィピンの改革は農民内部の闘争を激化させたが、基本的矛盾――農民全体と地主との矛盾――をなくしはしなかった。ツァーリズムはいぜんとして全人民の主要な敵であった。

革命後のロシアの階級闘争は、第三国会におけるさまざまな政党の立場にあらわれた。農奴主的地主の利益をまもっていたのは、ツァーリ専制の公然たる支持者である、いわゆる右翼であった。彼らは、労働者、農民にたいする血の制裁、ユダヤ人ポグロム、非ロシア民族の迫害、革命家や進歩的活動家の殺害の組織者であった。人民が右翼を黒百人組と呼んだのは正しかった。

地主やツァーリの官僚と何千もの経済的な絆でむすびついていたブルジョアジーは、革命とプロレタリアートが革命で指導的役割をはたしているのにおびえて、反革命的な立場をとっていた。このことが、オクチャブリスト党やカデット党の国会内の行動を決定した。オクチャブリストは、

ストルィピンの政策を熱心に支持して、与党の一つになっていた。カデットは、野党の役割を演じて、ツァーリ政府の個々の方策を批判することもときにはあった。カデットは、欺瞞によって、大衆を自分の思想的・政治的影響にしたがわせようとしていた。実際には、カデットは反動にこびへつらう反革命的自由主義者であった。すべての基本的な政治問題――予算にかんする政策、新戦争準備のための支出、農民を零落させた農業政策、革命圧殺の措置――について、カデットは国会でツァーリ政府の提案を支持した。一九〇九年にカデットの有力著作家のグループが出版した論集『道標』のなかで、彼らは、「この権力を祝福しなければならない。この権力だけが、その銃剣と牢獄によって人民の激怒からいまなおわれわれをふせいでくれている」と、あけすけに言明した。

農民は地主的土地所有の一掃をめざしていた。農民は革命のなかで多くのことをまなびとっていたが、それでも、勝利はプロレタリアートの指導をうけてはじめて可能だということ、いわゆる「人民自由党」が人民の自由を裏切る者の党だということを、まだ完全に理解したわけではなかった。国会で農民を代表していたトルドヴィキは、その組織がよわく、意識も不十分で、その政策はきわめてふらふらしたものであった。小経営主という階級的地位が、カデットと社会民主主義者のあいだでの彼らの動揺を規定していた。

国会で労働者階級を代表していたのは社会民主主義者である。彼らのなかにはボリシェヴィキとメンシェヴィキがいた。勤労者の確固不動の擁護者はボリシェヴィキだけであった。国会内での労働者階級の党の任務は、よわい小ブルジョア民主主義者をたすけ、彼らをカデットの影響からひきはなし、ツァーリ君主制とたたかうに当たって、専制の公然たる支持者だけでなく、反革

命的自由主義者にも対抗して、民主主義陣営を結束させることである、とレーニンは指摘した。

反動は社会生活のあらゆる分野に、科学、哲学、芸術にあらわれた。ツァーリズム、地主、ブルジョアジーとその党は気違いじみた排外主義的な扇動をおこなった。坊主主義が活発になった。インテリゲンツィアのあいだでは、反革命的気分、背教思想、神秘主義と宗教への熱中が広範にひろがった。それは人民の記憶から革命をぬぐいさろうとする企てであった。

革命が敗北して反革命が勝利するとともに、大衆のたたかいはよわまった。労働運動の波は急激におとろえた。ストライキ参加者の数は、一九〇七年の七四万人から一九一〇年の四万六五〇〇人に減った。農村ではするどい闘争が一時鳴りをしずめた。革命的緊張の数年をへて疲れがあらわれてきた。この疲れがとれるには時間が必要だった。しかし労働者と農民は英雄的なたたかいの時期をわすれたわけではなかった。大衆のあいだにはひとしれず醱酵がおこっていた。黒百人組政府の愚弄と工場主の圧迫にこたえて、労働者たちは「いまにみろ、また一九〇五年がやってくるぞ！」と話していた。

2 解党派、召還派、トロツキー派に反対して、党を守るためのボリシェヴィキの闘争

黒百人組的地主の政府は、労働者階級の革命党にとりわけ凶暴におそいかかった。党員の一斉検挙がはじまった。中央委員が何人も検挙された。労働者出版物は圧殺された。党中央機関紙『ソツィアル－デモクラート』の発行が軌道にのったのは、やっと一九〇九年になってからであ

った。各地の委員会で警察の手で破壊されなかったものは一つもなかった。多くの党活動家が、苦役についていたり、牢獄や流刑地にいた。小ブルジョア・インテリゲンツィアは党からにげだした。一部の動揺的な労働者は非合法の党活動から身を引いた。党員数は激減した。一九〇七年にはペテルブルクにほぼ八〇〇〇人の党員がいたが、一九〇八年には約三〇〇〇人にすぎなかった。エカテリンブルクでは、一〇七〇人の党員が二五〇人になり、イヴァノヴォ－ヴォズネセンスクでは、二〇〇〇人のうちのこったのは六〇〇人をでなかった。党組織のあいだのむすびつきはよわくなった。

反動期の地下活動は革命前の地下活動の何倍も困難であった。革命前には、党組織は革命の機が熟していく情勢のもとで活動していたが、いまでは革命が敗北した情勢のもとで活動していた。攻撃をおこなうのと、退却をよぎなくされるのとではちがう。退却するさいには、特別の不撓不屈と忍耐が必要である。ロシア社会民主労働党の組織の弱まりにくわえて、党内には重大な思想的混乱が生じていた。

革命の敗北はメンシェヴィキの士気をすっかり沮喪させた。彼らはあわてふためいて退却し、あらたな革命のことなど考えても仕方がないと、ますます大声でわめいた。彼らは恥しらずにも党の革命的綱領と革命的スローガンをなげすててしまった。彼らは、ブルジョアジーと協定をむすぶよう、ストルィピンの黒百人組体制と事実上妥協するよう、労働者階級に呼びかけた。つまり社会主義を裏切っただけでなく、民主主義も裏切ったのである。メンシェヴィキは、非合法の党組織を解消し、非合法の革命的活動をやめさせようとしていた。彼らは労働者階級の革命党、革命的マルクス主義の党を解消することをめざしていた。解党派は、党の綱領と戦術、党の革命

的伝統を放棄することを代償として、合法的な存在の許可をツァーリの警察から買いとろうとのぞんでいた。だから、彼らが「ストルィピン労働者党」という異名をつけられたのは、まったく当然であった。アクセリロート、ダン、マルトフ、マルトィノフ、ポトレソフのようなメンシェヴィキの指導者は、ボリシェヴィキ攻撃に血道をあげた。

しっかりしていない一部のボリシェヴィキは、この時期に危険な動揺を示した。彼らは革命的言辞に夢中になって、こう言った。バリケード戦を呼びかける者だけが革命家である。黒百人組的国会にはいっていることは革命家にふさわしくない、と。彼らは合法的な活動形態を放棄するよう、社会民主党議員団を国会から召還するよう党に呼びかけた。このいわゆる召還派は、ボグダーノフを先頭として別派を結成し、レーニン的方針に反対した。また最後通告派は、レーニンの表現では、臆病な召還派で、国会議員団を辛抱づよく教育するかわりに、欠陥をすぐ全部ただすか、そうでなければ国会からすぐ脱退せよという最後通告を議員団につきつけた。召還派はボリシェヴィキのあいだではほんの少数であった。解党派は非合法の党の解散をおおっぴらに提案したが、召還派は非合法の党の存在を暗々裡におびやかした。合法的に活動する可能性を利用することをこばめば、党と大衆とのむすびつきは断たれるであろうが、このむすびつきがなければ、党はセクト的な組織となる。だからこそレーニンは、召還派を裏がえしの解党派と呼んだのである。

こういうわけで、この時期にロシア社会民主労働党内には二つの日和見主義的主潮流——重点をもっぱら合法的な組織にうつそうとしていた解党派と、非合法的な党組織にうつそうとしていた召還派——が表面化した。これらの潮流の出現には、階級的な根元があった。革命期には多数

の小ブルジョア的同伴者がロシア社会民主労働党にくわわった。革命の敗北は小ブルジョアジーのあいだに分解と退廃をうみだした。これらすべてのことが党内に反映した。メンシェヴィキはおとなしく自由主義的ブルジョアジーのあとにしたがった。自由主義的ブルジョアの影響を受けて、メンシェヴィキの日和見主義は解党主義に転化した。解党派も召還派も、プロレタリアートとその党の小ブルジョア的同伴者であり、労働運動内のブルジョアジーの手先であった。

革命が敗北し大衆が疲れている情勢のもとでは、思想的な動揺はとくに有害であり、マルクス主義党と労働者階級にとってゆゆしい危険を呈していた。解党派はツァーリズムへの降伏のイデオロギーを広めていた。召還派は人々を暴発主義、冒険主義的行動へかりたてようとしていた。解党派も召還派も、大衆の革命的能力への不信、労働者階級の勝利への不信を広めていた。彼らは党の存立そのものさえ危くしようとしていた。

党にとって困難なこの時期に、レーニンの声が力づよくひびきわたった。国外にいってから書いた最初の論文で、レーニンは党に呼びかけ、きたるべき勝利を予言した。

「われわれは革命のまえ多年のあいだ活動するすべを知っていた。われわれが頑固派というあだ名をつけられたのも理由のないことではない。社会民主主義者はプロレタリア党をつくりあげた。この党は、最初の軍事的強襲に失敗したからといって意気沮喪もせず、度をうしなうこともなく、冒険に熱中しもしないだろう。この党は、ブルジョア革命のどれかある時期の結末と運命をともにすることなしに、社会主義にむかってすすんでいる。だからこそこの党は、ブルジョア革命のよわい面をもまぬがれているのである。こうして、このプロレタリア党は、勝利にむかってすすんでいるのである」（全集、第一三巻、四五八—四五九ページ）。

レーニンは、はっきりした見通しを党にあたえ、新しい発展条件のもとでの党の任務と戦術をさだめた。

革命をひきおこした根本原因はいぜんとして働いていた。人民はいままでどおり無権利で、農民は地主に隷属しており、労働者は工場主と憲兵という二重のくびきのもとにおかれていた。革命のあらたな高揚は避けられなかった。ボリシェヴィキの基本的な政治目標は、一九〇五年当時と同じく、ブルジョア民主主義革命の完全な勝利、それの社会主義革命への成長転化であった。党の革命的な綱領的要求、すなわち民主的共和制、農民のための地主の土地の没収、八時間労働日、民族自決権、その他人民の利益にかなった要求は、そっくりそのままであった。

しかし革命闘争は、変化した状況のもとでつづけられていた。だから党の戦術がそのままであるわけにはいかなかった。労働者階級と勤労大衆をうまずたゆまず教育し組織して新しい革命を準備するために、退却して、直接の革命闘争の方法から回り道の方法にうつる必要があった。だがそのためには、非合法の党は合法的可能性、つまり国会の演壇、労働組合、協同組合、クラブその他の合法組織を極力利用しなければならなかった。レーニンは、情勢が有利になりしだい新しい革命的攻勢にうつるために、力を温存し結集することをめあてとした柔軟な戦術を立て、それを基礎づけた。

革命的マルクス主義党は、秩序整然と退却し、合法的な活動形態と組織形態を革命的に利用するという、これまで党がまだ解決する必要のなかった任務に当面していた。これらの形態を正しく利用する問題は、国際労働運動のもっともさしせまった必要と密接な関係があった。国際労働運動には二つの基本的な偏向があった――無政府主義者は、政治闘争を、したがって議会闘争を

も否定していたが、社会民主主義者は、ブルジョア国家にますます順応していって、ブルジョア合法性のとりこになっていたのである。

召還派は、合法的可能性に否定的な態度をとっている点で、無政府主義者と近親関係にあった。解党派がツァーリズムのもとで合法性をめざしていたことは、とくに醜態であったが、原則的な本質は西ヨーロッパの社会主義諸党のばあいと同様であった。ボリシェヴィキは、マルクスとエンゲルスの見解から生じるただ一つ正しい解答である、ブルジョア議会その他の合法的可能性の革命的利用を主張していた。帝政ロシアの情勢のもとでは、これは、レーニンの定式化した原則、すなわち、非合法党の指導のもとでの非合法活動と合法活動との結合という原則に現われていた。

レーニンのこの方針を遂行することは、大衆と固くむすびついた非合法の党にしかできなかった。そこで、ボリシェヴィキは、こうした党を維持し強化するために、解党派に反対し、また召還派に反対して、二つの戦線でたたかいをくりひろげた。

反動期の党の発展の転換点となったのは、一九〇八年一二月にパリでひらかれたロシア社会民主労働党第五回全国協議会であった。協議会の活動にはボリシェヴィキ、メンシェヴィキ、ポーランドとリトワニアの社会民主党員、ブント派が参加した。協議会には、ペテルブルク、モスクワ、中部工業地方、ウラル、カフカースの党組織というような、党の最大級の組織の代表が出席していた。主報告『現在の情勢と党の任務について』をおこなったのはレーニンであった。この報告の趣旨にそって、解党派メンシェヴィキとの激闘のなかで、反動期全体を通じる党の革命的方針と組織政策をさだめた決議が採択された。協議会はこう声明した。新しい革命的危機は避けられないし、党はいぜんとして古くからの革命的目標を求めている。日程には、まず第一に、プ

ロレタリアート、農民、軍隊を教育し、組織し、団結させ、合法的可能性を利用する長期の活動がのぼされている、と。協議会は解党主義を非難し、この反党的な潮流とできるだけ非妥協的にたたかうよう、すべての党組織に呼びかけた。同時に、協議会は召還主義ともきっぱり一線を画した。ボリシェヴィキは、メンシェヴィキに反対して党をまもるたたかいで大きな勝利をおさめた。

召還主義にたいする闘争は、ボリシェヴィキにとって重大な意義をもっていた。モスクワ、ペテルブルク、オデッサその他いくつかの都市の一部の労働者のあいだには、黒百人組的国会に参加することに反対する気分がひろがっていた。レーニンは労働者が黒百人組的国会やこの国会内の社会民主党議員団の活動に不満をもっていることと、政治的傾向としての召還主義とは別物である、と指摘した。「しかしわれわれは、不満が正当だからといって、それにおぼれて、正しくない政策をとるようなことはしないだろう」(全集、第一五巻、二八八ページ)とレーニンは書いている。労働者たちのこうした気分はまもなくおさまるだろう。国会の利用が必要なことは、実生活が証明し、ボリシェヴィキが説明するであろう。他方、政治的傾向としての召還主義についていえば、それには非妥協的な戦いを布告しなければならない、と。レーニンは、「革命的空文句」をにくむ心をボリシェヴィキのうちにやしない、真の革命家はどんなに困難で、めだたない、平凡な日常活動でも自分の義務をはたすすべを知らなければならない、とボリシェヴィキにおしえた。

ロシア社会民主労働党をまもるため、ボリシェヴィキを結束させ、彼らの闘争上の地歩を強化するために、一九〇九年六月、パリにボリシェヴィキの新聞『プロレタリー』(事実上、ボリシ

ェヴィキ中央部）の拡大編集局会議が招集された。会議の活動にはペテルブルク、モスクワ地方組織、ウラルの代表が参加した。会議は、召還主義がボリシェヴィズムとあいいれないことをみとめ、召還派をボリシェヴィキの隊列から除名し、革命的マルクス主義からのこうした逸脱と断固としてたたかうよう、すべてのボリシェヴィキに呼びかけた。召還派は独自のフペリョート分派（彼らの発行した機関紙の名称『フペリョート』〔『前進』〕にちなんで）をつくった。

党生活に新しい現象が生じたのにともなって、会議は、党を守るたたかいにおけるボリシェヴィキの新しい任務をさだめた。というのは、一連の組織（ペテルブルクのヴィボルク区、モスクワ、エカテリノスラフ、キエフ、バクー、ウファその他）でメンシェヴィキ派労働者が解党派に反対したからである。このようなメンシェヴィキは党維持派メンシェヴィキと呼ばれるようになった。プレハーノフも解党派を批判した。そこで、原則的な意見の相違を指摘するとともに、会議は、非合法の党を守るたたかいではボリシェヴィキと党維持派メンシェヴィキとのブロックをつくる戦術を提案した。

当時、ボリシェヴィキとメンシェヴィキとの闘争の本質がよくわからずに、メンシェヴィキの影響下にあった労働者はまだ少なくなかった。しかし彼らは、解党派が社会主義と民主主義を裏切っていること、労働者階級がその最良の働き手をささげた非合法党の破壊者として彼らが行動していることを、理解しはじめた。これらの労働者は、ボリシェヴィキだけが困難な反動期にも頑強に、不撓不屈に党の利益を守っており、断固として非妥協的に解党派とたたかっていることを、ますます確信するようになった。労働者はボリシェヴィキを中心として団結していった。

ロシア社会民主労働党内の闘争は激しくなった。解党派、ゴーロス派、トロツキー派、フペリ

ョート派その他の分派主義者は、非合法党の存立をおびやかした。レーニンを先頭とするボリシェヴィキだけが、不屈の革命家としての真価を発揮し、勇敢に党派性をまもった。レーニンは、非合法党をまもるたたかいを原則として党勢力全体を結集する計画をかかげた。この計画は、ロシア社会民主労働党の革命的性格を確立し、党から反党分子を一掃し、ボリシェヴィキの勝利を定着させるものであった。

レーニンの計画に反対したのは、ロシアの労働運動に中央主義を広めていたトロツキーであった。中央派は、口先ではマルクス主義に忠誠を誓いながら、実際にはマルクス主義をゆがめていた。彼らはプロレタリア分子を小ブルジョア分子に従わせる方針をとることによって日和見主義が勝利する道をひらこうとしていた。トロツキーは、労働者の統一への欲求につけこんで、「分派を超越した」統一論者と自称した。ウィーンで発行されていた自分の新聞『プラウダ』〔『真理』〕で彼は革命家と日和見主義者を一つの党内に同居させるという、有害な「理論」を説き、無原則的な両者の統合をめざしていた。レーニンはトロツキーを暴露し、自分が分派を超越しているかのようにいうトロツキーの主張が嘘八百であることを示した。実際には彼の立場は、メンシェヴィキを支持するものであり、解党主義の一形態であった。レーニンは、激昂して、トロツキーをユダと呼んだ。「トロツキーは下劣きわまる出世主義者、分派主義者としてふるまった。……彼は、党を喋々するが、他のどんな分派主義者よりも悪質なふるまいをしている」と彼は書いている（全集、第三四巻、四五三ページ）。

トロツキー主義は、自分の日和見主義的な裸体を「統一」の空文句でおおっていたので、とくに大害をきたしていた。トロツキー主義を暴露することは、ボリシェヴィキの重要な課題であっ

た。これをさまたげていたのは、一部の著名なボリシェヴィキの調停派的な雰囲気であった。ドゥブロヴィンスキーは動揺を示した。自分の行動によって党に特に大きな害をおよぼしていたのは、中央委員のルィコフとノーギン、『ソツィアル－デモクラート』編集局員のジノヴィエフとカーメネフで、彼らは、あらゆるものを統一しようとするトロツキーの計画にかたむいていた。すべてこうしたことは、党から解党派を一掃しようとするレーニンとレーニン派のたたかいを困難にしていた。レーニンは、党をまもるたたかいでの自分の方針を、党基幹活動家に辛抱づよく説明した。

こういう情勢のもとで、一九一〇年一月、パリで中央委員会総会がひらかれた。総会の活動には、ボリシェヴィキ、メンシェヴィキ以外に、ポーランドとラトヴィアの社会民主党員、ブント派もくわわっていた。三週間、激闘がつづいた。レーニンは、総会に、解党主義と召還主義を、プロレタリアートにおよぼすブルジョアジーの影響のあらわれとして非難させることに成功した。これは重大な勝利であった。

それと同時に、トロツキー派、ブント派、調停派の同盟は、総会の諸決定に痕跡をのこした。決定では、はっきり解党主義と召還主義と言われずに、「両偏向」が非難されていた。中央機関には党維持派メンシェヴィキではなく解党派メンシェヴィキが選出された。トロツキーの『プラウダ』が財政的援助をあたえられ、その編集局には中央委員会の代表としてカーメネフがいれられた。この決定は、トロツキーの新聞を中央委員会の機関紙にすることにつうじていた。

総会の調停主義的決定は党に大きな損害をあたえた。レーニンがまさに予言していたように、調停派は解党派を利したのである。ボリシェヴィキは総会の呼びかけにしたがって自派の新聞

『プロレタリー』を停刊したのに、メンシェヴィキは、その分派機関紙『ゴーロス・ソツィアルーデモクラータ』の停刊を拒否した。解党派はロシアで雑誌『ナーシャ・ザリャー』(『われわれのあかつき』)を合法的に発行しはじめ、アクセリロート、ダン、マルトフがそれに協力した。メンシェヴィキは、中央委員会の仕事を妨害し、中央委員会は不必要で有害だと声明した。総会の誤りをただすためには、レーニンの懸命な活動が必要であった。

実生活は、レーニンの正しさを党基幹活動家と自覚ある労働者に納得させた。ボリシェヴィキは、あらゆる色合の日和見主義者と妥協せずにたたかって、党の利益を守った。そのさい彼らは、ロシア社会民主労働党の全党員に拘束力をもつ、全党協議会の決定と中央委員会総会の決定をよりどころとしていた。ボリシェヴィキは、党破壊者に反対し、非合法の党を守ってたたかう能力のある者をすべて結束させるという政策をとった。この政策に害をおよぼしたのは、党とは別個のボリシェヴィキ大会を招集せよという扇動であった。こうした大会の招集を支持する者たちにレーニンはこう答えた。「君たちは、独自のボリシェヴィキ大会をひらくように扇動することによって、党の維持にまったく絶望したことを示している。われわれは、第二回大会以来いつも党の維持を支持してきたし、いまもこの方針だけをつづけている。ところで君たちは、下部の分裂を説いているのだ」(全集、第四一巻、二七〇ページ)。党派性を確固たる態度で守ったことが、党を守るたたかいで、ロシア社会民主労働党全体を革命的マルクス主義の立場に立たせるためのたたかいで、新しい地歩を獲得するのを、ボリシェヴィキに、保障したのである。

3　ヴェ・イ・レーニンによるマルクス主義哲学の擁護と発展。ヴェ・イ・レーニンによる党学説のいっそうの仕上げ

ボリシェヴィキは、革命の経験でいっそうゆたかになったマルクス主義理論の強固な思想的基礎に立って党をつよめていった。

反動期に、イデオロギーの分野では、党の理論的基礎であり、党の世界観であるマルクス主義哲学を擁護することが、もっとも重要になった。それにはいくつかの理由があった。

反動の攻勢は、イデオロギー戦線でもおこなわれていた。ブルジョア学者、著作家、ジャーナリストは、マルクス主義、まず第一にその哲学的基礎を、手をかえ品をかえて「論駁」した。弁証法的唯物論は流行おくれで、古くさくなったと公言され、宗教が人間精神の「最高の成果」とみとめられた。とりわけ熱心にマルクス主義を攻撃していたのは、ブルジョア・インテリゲンツィアのあいだのかつては革命の同伴者であった多くの人たちであった。彼らは革命を軽蔑し、革命の放棄を賛美した。彼らは、人民の利益を守ることを「人民崇拝」だといってあざわらい、人民を裏切ることを勇敢だといってほめたたえた。人民の意識を毒し、人民を革命闘争からそらすために、ブルジョア・インテリゲンツィアは、坊主主義と神秘主義を説きまわり、厭世主義とデカダンスを賛美し、淫蕩をひろめた。

思想的混乱は革命家のあいだにもはいりこんだ。マルクス主義者と自任しながら、マルクス主

義をあまり会得していなかった一部のインテリゲンツィア党員は、マルクス主義からはなれ、哲学上の修正主義の立場に転落した。メンシェヴィキ文筆家（ヴァレンチノフ、ユシケヴィチ）や以前ボリシェヴィキのなかにいた一部のインテリゲンツィア（ボグダーノフ、バザーロフ）は、マルクス主義哲学の根本命題を攻撃した。しかし彼らのマルクス主義反対は、おおっぴらではなく、マルクス主義を「改善」し、「是正」したいのだといった偽善的な言明のかげにかくれていた。一部の者は、マルクス主義と宗教とをむすびつけることさえ要求した。彼らは、「社会主義は宗教である」（ルナチャルスキー）とか、自分たちは未来の、新しくより高度な宗教をうちたてようとしているのだとか主張した。科学的社会主義を宗教的信仰とみなそうとしていた、このような宣伝者たちは、「創神派」と呼ばれるようになった。

マルクス主義哲学とたたかい、観念論を説くために、ブルジョア学者とその亜流の修正主義者は、自然科学の成果をゆがめて解釈して利用しようとこころみた。それはこういうことであった。物理学その他の自然科学でいろいろな発見があり、それらの発見が、ながいあいだ確立していた見解や観念をうちくだいた。以前には科学者は原子を、物質の究極的な、分解できない微粒子とみ、化学的元素を不変なものとみていた。ところが電子や放射能の発見は、原子が分解されること、化学的元素が可変的で、相互に変換しうるものであることをしめした。古い自然科学では、物体の質量は一定していて、物体が静止していようと運動していようとそれにはかかわりないと考えられていた。物理学者は電子を研究して、物体の質量が運動の速度に依存することを確認した。その他にも大発見があって、物質の構造と運動についての見解を根本的に一変させた。

多くの科学者はこれらの発見を正しく評価することができなかった。物質が崩壊し、科学その

ものがほろび、知識の基礎がくつがえされかけているように、彼らには思われた。「自然科学の危機」がうんぬんされはじめた。宗教を説く者、あらゆる色合の観念論者は、まさにこれに乗じることにきめた。彼らは、自然科学の成果を観念論的に解釈し、それにもとづいてマルクス主義哲学に攻撃をかけた。

オーストリアのブルジョア哲学者マッハの追随者である、西ヨーロッパとロシアの修正主義者は、自然科学上の諸発見は物質の「消滅」を証明するものであり、したがって哲学的唯物論は時代おくれになっている、弁証法は「神秘説」であるなどと論証しはじめた。マッハ主義者は、自分の観念論哲学を、あいたたかう哲学上の両陣営——唯物論者と観念論者——を超越した「中立」哲学だと称した。マッハ主義者の学説では、観念論はとくに手のこんだ、みがきのかかった形をとっていた。

こういうわけで、自然科学上の最新の発見の正しい唯物論的な概括の欠けていたことが、マルクス主義の世界観の基礎そのものをおびやかしていた。

革命が膨大な人民層を政治生活に立ちあがらせただけに、マルクス主義の理論的基礎の思想的純潔を守るたたかいは、ますます緊急なものとなった。革命戦争の参加者である多くの労働者が入党していた。彼らは、マルクス主義の研究をはじめようとしていた。唯物論と弁証法を否定する哲学的見解が党の隊列と労働者のあいだにひろまることは、非常な危険を呈していて、党員の思想的鍛練と大衆の政治教育とにとりかえしのつかない損害をおよぼす恐れがあった。マッハ主義の哲学、とくに創神主義は、政治上の反動とむすびついていた。修正主義哲学者の見解は、ロシアの既存の秩序との和解にみちびき、たたかいを放棄させ、「神慮に望みをかけ」させるもの

であった。いいかえれば、哲学問題における修正主義は、政治的には大衆を従順と無活動におとしいれるものであった。

国際労働運動内の状態も、マルクス主義哲学を守り、さらに発展させることを必要としていた。帝国主義は、全般にわたって反動の強化をもたらした。反動派は、労働者階級のイデオロギーにも攻勢をかけていた。西ヨーロッパの日和見主義者は、政治上のマルクス主義と哲学上の観念論とを和解させることは完全に可能であると主張していた。また社会民主諸党には理論問題にたいする無関心、マルクス主義哲学の歪曲を大めにみる態度が支配していた。労働者党のマルクス主義世界観を折衷主義的な雑炊にすりかえようとしたデューリングにたいして、エンゲルスが熱烈にたたかったことは、忘れられていた。カウツキーのお手本にならって、哲学論争は「私事」であり、政党はそれに干渉すべきでないという信条が生まれていた。ロシアでマルクス主義からの背反とたたかうことは、国際社会民主主義内の修正主義とたたかうことでもあった。

労働者階級の党は、マルクス主義世界観の反対者に断固たる反撃をくわえ、自然科学の成果を科学的、哲学的に概括することが党の義務であると考えた。この歴史的な任務の遂行にとりかかったのはレーニンであった。彼は著書『唯物論と経験批判論』を書き、同書は一九〇九年に出版された。

レーニンの著書はマルクス主義哲学の発展に一時代を画した。同書の歴史的意義はつぎの点にある。

レーニンは、マルクス主義哲学にたいするブルジョア思想家と修正主義者のあらゆる攻撃を撃退した。彼は、観念論哲学のすべての流派の反科学性をあばきだし、それらの流派が理論的にな

りたたないことを立証した。膨大な資料をもとにして、科学的な世界像をあたえる哲学は弁証法的唯物論だけであって、これが自然、社会、思惟のもっとも普遍的な発展法則の知識を人類にあたえるということが、納得のいくようにしめされた。これにもとづいてのみ、われわれをとりまく世界を正しく認識し、改造することができる。レーニンは、どのマルクス主義者もとりくまなかった課題を解決した。——自然科学の最新の発見をマルクス主義的に概括したのである。彼は、これらの発見を、反動的イデオロギーに都合のいいように、観念論的に解釈しようとするマルクス主義の敵の企てを粉砕した。自然科学におこった急激な変化は、マッハ主義者が主張していたように、世界の物質性と唯物論を否定するものではなく、物質とその特性との観念がさらに変化し、深まったことを意味する。「自然科学の危機」を脱するには、弁証法的唯物論の道によるほかはない。「自然科学の危機」の本質と、それを脱する道についてのレーニンの分析が正しいことは、完全に立証された。レーニンの著書は、自然科学の方法論的基礎として、いまでもその意義をもちつづけている。

レーニンは、精神的隷属状態を脱する道をプロレタリアートにしめしたマルクス主義の哲学的唯物論を守りぬき発展させた。自然科学の最新の発見にもとづいて、彼はマルクス主義の物質観を発展させ、世界の物質性を示す新しい論拠を提出した。

レーニンは、世界の認識可能性についての学説を守りぬき発展させ、認識過程の複雑なことをあきらかにし、認識の発展をしめした。人間の認識は、客観的な物質的世界の現象と法則についての正確な知識を、徐々に、一歩一歩もたらす。こうして、無知識を脱して知識が発展し、不完全で不正確な知識はますます完全で正確な知識になる。観念論哲学は、結局のところ、宗教にた

いする科学の屈服を説くものであった。マルクス主義哲学は、科学は全能で、その発展にはかぎりがないと宣言した。

「人知は」とレーニンは書いている。「自然のなかに珍しいものをたくさん発見したし、今後もなお多くのものを発見し、こうして、自己の自然支配を拡大するであろう」(全集、第一四巻、三四〇ページ)。

レーニンは、実践を認識の基礎であり、真理の基準であるとみるマルクス主義的見解を発展させ、基礎づけた。科学、知識は人類の実践から、経験から、人間の生産活動と社会活動から発展し、成長する。実践で確かめられた、科学の結論だけが、客観的真理の意義をもつ、確実な知識である。実践は科学をたえずゆたかにし、前進させる。

レーニンはマルクス主義の唯物弁証法を守りぬき、発展させた。この弁証法は、プロレタリアートとその党の革命的活動にとって最大の重要性をもっている。著書『唯物論と経験批判論』では、唯物弁証法が発展についてのもっとも全面的で、内容のゆたかな、深遠な学説であることがしめされている。唯物弁証法は、世界が不動かつ不変なものでないことを証明した。世界はたえず発展し、一新されている。この発展の源は、それぞれの事物、それぞれの過程や現象に固有な内部矛盾である。こうした矛盾は、発生し、激化の一定段階に達し、ついで解決される。これらの矛盾をみてとり、いち早く解決する能力こそ、弁証法の偉大な技術である。

あらゆる発展過程における矛盾、対立物の統一と闘争についての唯物弁証法のもっとも重要な命題が、弁証法の基本法則または「核心」である。

「要するに」とレーニンは言っている。「弁証法は対立物の統一についての学説と規定する

ことができる」（全集、第三八巻、一九一ページ）。

唯物弁証法は、自然と社会の諸過程のうちに生じる漸進的な、たえまない変化が根本的な変化、発展上の飛躍をもたらすことを正しく理解させる。

レーニンは、社会発展の法則についての科学である史的唯物論を守りぬき発展させた。彼は、マッハ主義者のボグダーノフが存在と意識についてのべているひねくった言いまわしのかげに、社会発展の客観的法則の否定がかくされていることをしめした。人間社会の発展は生理学その他の生物科学の法則にしたがうものであって、人間社会に固有な、それ自身の法則にしたがうものではないというマッハ主義者の主張が、科学的にまったくなりたたないことを、レーニンは証明した。党はこれらの法則を知ることによって、社会発展の歩みを予見し、革命闘争のさしせまる任務を科学的に規定し、それらの任務をはたすために人民大衆を動員する。

レーニンは、哲学の党派性の原則をおしすすめ、基礎づけた。レーニンは、マルクス主義哲学を修正しようとする企てを全面的に批判し、その階級的根源をあきらかにした。哲学上の諸傾向のたたかいには、結局のところ、現代社会の敵対する諸階級のイデオロギーが表明されていることを、彼は明快にしめした。マッハ主義者についていえば、観念論のあらゆる支持者と同じように、彼らの客観的役割は坊主主義と反動に忠勤をはげむことに帰着する。

レーニンは、党の世界観と政策とのあいだには直接の、じかのむすびつきがあることを証明した。

「マルクス主義の政治方針は、」とレーニンは書いている。「その哲学的基礎と切ってもきれないようにむすびついている」（全集、第一五巻、三九五ページ）。

マルクス主義哲学を放棄することと日和見主義とのあいだにも、これと同じむすびつきがある。とくにこのことは、哲学上の修正主義者で、政治上の解党派であったメンシェヴィキや、政治上は召還派で、メンシェヴィズムの立場に転落したボグダーノフ派の例をみればわかる。

レーニンは、マルクス主義の哲学学説をゆたかにし、科学の新しい水準におうじて、さらに高い水準にこの学説を引き上げ、これによって社会思想全体を前進させた。彼の著書『唯物論と経験批判論』は、ボリシェヴィキ党を思想的に向上させ、党の基幹活動家を理論的にきたえ、党の理論的基礎を擁護し発展させるうえですぐれた役割をはたした。この著作によって、全世界で革命的基幹活動家が教育されたし、また、現に教育されている。マルクス主義イデオロギーの純潔をまもるレーニンのたたかいは、すべての国の革命的労働運動の活動家の模範である。

一九〇九年のボリシェヴィキ新聞『プロレタリー』の拡大編集局会議で、マルクス主義哲学の分野における修正主義者は反撃に会った。会議は、創神主義を反マルクス主義的潮流として断固非難した。この決定は大きな原則的意義をもっていた。党は哲学の問題で中立ではありえず、自分の偉大な思想的な資産であるマルクス主義を細心の注意をもって守らなければならないと、ボリシェヴィキははっきり声明した。ボリシェヴィキは、マルクス主義の世界観をありとあらゆる侵害からうまずたゆまず守っていくことを、党の重要な任務の一つとみなした。

レーニンがマルクス主義の党学説を擁護し、さらに前進させたことは、党の思想生活で巨大な意義をもっていた。第一次ロシア革命は、党の意義が非常に大きいことを、はっきり裏付けた。歴史上はじめて、マルクス主義党は革命の経過に重大な影響をあたえ、幾百万の労働者をたたかいにみちびいた。だからこそ労働者階級の敵は、その党をなくそうとしていたのである。

反動期の諸著作のなかで、レーニンは、大衆の闘争にはたす党の指導的役割についてのマルクス主義の見解を発展させた。経験が明瞭にしめしていたように、大衆は、党の必要性と階級闘争におけるその役割を一挙に理解するようになるものではない。大衆の自覚がたかまればたかまるほど、大衆が社会の階級的グループ分けをはっきりと知れば知るほど、彼らは党の意義をそれだけ深く理解し、党派性をそれだけ高く評価するようになる。ブルジョアジーは大衆の政治的自覚をにぶらせようとして、あらゆる仕方で党派性にたいする否定的態度を説き、極力無党派性をほめちぎる。マルクス主義者は、無党派性というブルジョア思想にプロレタリア党派性の思想を対置する。

「ほんとうの意味で政治をおこなうことができるのは大衆だけである」とレーニンは書いている。「だが、強力な党にしたがっていない無党派の大衆は、ばらばらの、無自覚な、がんばりのきかない大衆であり、『手ごろな』機会に乗じるために、いつでも支配階級のなかから『適時に』あらわれてくる抜け目のない政治屋のもてあそびものになる大衆である」(全集、第一九巻、四六四ページ)。

レーニンは、プロレタリアートの階級組織の最高形態として党のはたす歴史的役割についてのマルクス主義的理解を守り、労働運動にとって組織のもつすぐれた意義をみとめることを党におしえた。

「労働者階級の力は組織である。大衆を組織しなければ、プロレタリアートは無である。組織されたプロレタリアートはすべてである」(全集、第一一巻、三二四ページ)。

革命期にプロレタリアートの多種多様な組織がうまれたが、それらの組織は、プロレタリアー

党とこれらの組織との相互関係の問題は、ロシアの労働運動のさしせまった問題の一つとなった。ブルジョアジーは労働者組織をマルクス主義党からひきはなし、それを党に対立させようとつとめていた。ブルジョア出版物に気ままに執筆する党員著作家の「権利」を主張し、国会議員団の「独立性」、それどころか労働運動内のブルジョアジーの手先は、労働組合や協同組合の「中立」を説き、ブルジョア出版党にたいする国会議員団の主導権まで要求した。このような道をすすむことは、マルクス主義党を最高の担い手とする階級的自覚をこれらの組織から根こそぎすることを意味していた。無自覚的な組織性とはすくなくとも無意味である、なぜなら、そういう組織性は敵のもてあそびものとなるからである、とレーニンはおしえた。ボリシェヴィキは、党からの「独立」というブルジョア思想にたいして、党が労働者階級のその他すべての組織を思想的・政治的に指導するというマルクス主義の原則を対置した。

レーニンは、日和見主義の社会的根源についての、また労働運動内の闘争と党内闘争の性格および意義についてのマルクス主義の見解を発展させた。二〇世紀のはじめ、わけても一九〇五―一九〇七年の革命後、労働運動のなかでは革命的分子と日和見主義分子のたたかいが激化した。このたたかいには深い階級的根源があった。労働と資本の衝突が激化し、労働運動が成功をおさめたことは、プロレタリアートにたいするブルジョアジーのたたかいをつよめる結果になった。ブルジョアジーは労働運動に浸透する道、労働運動を自分の影響にしたがわせる方法をさがし求める。階級闘争と社会主義革命の思想に対抗して、階級協調と社会改良の思想をもちだす。こうしたブルジョア思想を労働者階級のなかにもちこむものが、日和見主義者である。

プロレタリアートは、他の諸階級から切りはなされてはいない。プロレタリアートは、小ブルジョアジーと境を接しており、大資本によって零落させられる小ブルジョア層からたえず補充されている。ブルジョアジーは、生活様式の点で小ブルジョアジーに近い、労働者階級の上層を不断に買収し、堕落させる。小ブルジョア分子は、労働運動にブルジョアの影響を伝える者である。この影響の現われは二通りあり、公然たる形では、労働者階級とブルジョアジーの協調を直接に説き、カムフラージュした形では、「左翼的な」空文句、プロレタリアートの革命的階級闘争で柔軟な戦術をとりあらゆる可能性を利用する必要を否定する空文句に現われる。ここから、右翼的であれ「左翼的」であれ、すべての変種の日和見主義者にたいする二つの戦線での革命家のたたかいがおこる。

日和見主義とのたたかいは、労働運動の合法則性である。このたたかいは社会主義革命を準備し、それを勝利させるもっとも重要な条件である。革命的マルクス主義者が日和見主義者にたいして断固としてたたかわなければ、プロレタリア党は発展することができない。革命家と日和見主義者を一つの党内に平和的に「同居」させる政策は、実際には日和見主義の勝利につうじる。だから、党は日和見主義者にたいして非妥協的でなければならないばかりでなく、中央派のように日和見主義者との和解を呼びかける者にたいしても非妥協的でなければならない。党は日和見主義分子を党から取りのぞくことによって強くなる。レーニンは「このたたかいなしには」、プロレタリアートの社会革命にさきだって、革命家と日和見主義者のあいだに「はっきりした原則的な一線を画することなしには、またこの革命のあいだに、新しい歴史的勢力のなかのプロレタリア的・革命的分子と日和見主義的・小ブルジョア的分子とが完全に決裂することなしには、プ

ロレタリアートの社会革命は考えることとさえできない」と指摘している（全集、第一七巻、二三三ページ）。

革命前の時期と革命期のきわめてゆたかな経験にもとづいて、レーニンは、革命を準備するうえで党の活動がきわめて重要な意義をもつことをあきらかにした。彼はこう言っている。党がふたたび小さな非合法組織になって、めだたない、一見したところ取るにたりない活動を大衆のあいだでしているからといって、がっかりする必要はない。この活動はけっしてむだにはならない。大衆を組織し、政治的に教育するための多年にわたるねばりづよい活動が革命の成熟を大幅にうながしたことを、ロシア革命はしめした、と。

革命の経験を概括して、レーニンはこう書いている——

「ロシアの旧専制に致命的な打撃をあたえた幾十万の労働者の決起にさきだって、プロレタリアートの力を育成し、彼らを教育し、組織するながい時期があった。ほんとうの大衆闘争の爆発にさきだって、プロレタリアートの階級闘争のあらゆる形態を指導する長期のめだたない活動が、強固な、堅忍不抜な党をつくる活動がおこなわれ、そのような活動が、この爆発を革命に転化させる条件を保障したのである。いまや、人民の先進的闘士として、プロレタリアートは、自分の組織を強固にし、インテリゲンツィアの日和見主義のあらゆるかびを自分の体からこそぎおとして、同じように堅忍不抜な、ねばりづよい活動をおこなうために自分の勢力を結集しなければならない」（全集、第一三巻、一〇九—一一〇ページ）。

レーニンの思想は、ストルィピン反動の深夜のなかでつづけられるボリシェヴィキの献身的な活動を偉大な目標のあかるい光で照らしていた。

4　労働者大衆を獲得し新しい革命を準備するための党の闘争

ボリシェヴィキは革命後のロシアが発展する上で二つの可能な道に当面していることを理解していた。国の完全な民主主義的な改造か、それとも君主制と地主支配を存続させるような、国のブルジョア的進化か、がそれである。ツァーリズム、地主、ブルジョアジーは新しい革命を防止しようと百方手をつくした。ボリシェヴィキは国の革命的発展の道を主張していた。この道は人民の切実な利益にかなうものであった。だが、どの道を国がすすんでいくかという問題を解決できるのは、人民だけであった。ストルィピンもこのことを理解していて、自分の計画を実現するためには、「平穏な二〇年」が、つまり、二〇年間大衆がおとなしくして闘争しないことが、必要であると声明した。しかし革命の試練をへていた人民はツァーリ政府にこの「平穏な二〇年」をあたえなかった。

ボリシェヴィキは、国内でただ一つの組織された革命勢力であった。メンシェヴィキの地下組織は崩壊してしまった。エス・エルは思想的にも組織的にも崩壊状態にあった。革命の敗北もボリシェヴィキをうちくだかなかった。マルクス主義的鍛練、社会発展の法則の知識にもとづいた、革命のきたるべき勝利にたいする不動の信念、プロレタリアートの利益にたいする心からの献身、日和見主義と妥協しない態度――こういうものが、はなはだしい困難を切りぬけ、秩序整然と退却し、戦闘力ある中核体を維持するうえでボリシェヴィキをたすけた。憲兵隊がたえず強盗じみ

た手入れをおこなっていたにもかかわらず、党組織はほとんどすべての場所で無事に生きのこった。すべての大都市と工業地区で、党委員会が活動していた。大企業には党細胞か、労働者とのむすびつきが存続していた。多くの地方でリーフレットや非合法の党新聞が発行されていた。中部工業地方、ヴォルガ沿岸地方、ウラルで地方党会議がひらかれ、またペテルブルク、モスクワ、イヴァノヴォ－ヴォズネセンスク、ニジニ・ノヴゴロトその他の都市では、同地の党組織の会議がひらかれた。

動揺的な小ブルジョア分子がロシア社会民主労働党からにげだしたことは、同時に党を清掃することでもあった。党は動揺分子、同伴者を厄介ばらいした。すべて危機は、ある者をくじき、他の者をきたえる。反動期の重大な危機はボリシェヴィキの党組織をきたえあげた。先進的な労働者の新しい基幹部隊が成長し、地方の党活動のすべての重荷が彼らの肩にかかっていた。

地下活動のきびしい試練、革命の戦火、敗北の日々、ツァーリズムやブルジョアジーとの戦闘、無数の敵との格闘――これらのなかで、勤労者の利益を守る不屈の勇敢な戦士であるボリシェヴィキの非凡な資質が形づくられていった。「われわれが頑固派とあだ名をつけられたのは理由のないことではない」とレーニンは言っている。

このように鍛練された人々については、詩人のことばを借りてこうのべることができよう――

こういう人々で釘をつくれば、
それより強い釘は世界にあるまい

ボリシェヴィキは、警察の犬に追われながらも、プロレタリアートを教育し、組織し、団結させる活動をやめなかった。ボリシェヴィキは農民にむかって、労働者階級とともに、その指導の

もとでツァーリズム打倒のためにたたかうよりほかには、困苦と窮乏を脱する道はないということを、うまずたゆまず説明した。

党のきわめて重要な任務は、大衆とのむすびつきを維持し、つよめることであった。ロシアの発展がストルィピンの道をすすまずに、革命の道をすすむ最大の保障はここにあった。だがこのためには、大衆のあいだで活動するあらゆる機会、極反動国会の演壇から任意の禁酒協会にいたる、あらゆる合法的な手がかりを利用する必要があった。

党は国会の演壇を、プロレタリアートを革命的マルクス主義で教育し、組織するため、また人民を政治的に啓蒙するために利用した。警察のテロルにもかかわらず、労働者階級は依然として自分の党に忠実で、社会民主主義者だけを第三国会におくった。

ボリシェヴィキは、議会戦術をたてるにあたって独自の道をすすまなければならなかった。西ヨーロッパの社会主義者の経験には、批判的な態度をとる必要があった。彼らの国会議員団の活動では、日和見主義が優勢であった。早くも革命中にレーニンは、第一国会と第二国会の経験にもとづいて、党の国会戦術の原則をすえていた。彼は、反動期にこの原則をおしすすめ、具体化した。国会議員団と党指導部の相互関係を円滑にする問題には、大きな注意がはらわれた。国会議員団は、中央委員会に直属する党機関の一つとみられていた。メンシェヴィキが、国会のいわゆる立法活動に参加するよう議員団に呼びかけたことを批判するとともに、レーニンは、国会議員に一貫して人民の利益を守り、国会の演壇から大衆をわきたたせている問題についてかたらせようとした。議員は国会内の活動にとどまるべきではなく、国会のそとでも活動し、労働者大衆とむすびつき、党の非合法生活全体に参加しなければならない。ボリシェヴィキ派議員は、レー

ニンのこの教えを指針にしていた。

情勢は第三国会内のボリシェヴィキの活動にとってきわめて困難であった。国会議員団にはわずか一九名しかおらず、しかもその隊列は大幅に縮小した。黒百人組的国会は、ボリシェヴィキのヴェ・イェ・コソロトフ――ウラル労働者の代表――を警察にひきわたしたし、五名のメンシェヴィキ派議員は敵の陣営に脱走した。国会議員団そのもののなかではメンシェヴィキが優勢であった。彼らはおもに小ブルジョア的な選挙民の票で国会に当選したものであった。はじめ、議員団は多くの重大なあやまりをおかした。自分の階級的・社会主義的な性格を強調せず、一貫して民主主義的な諸要求を主張せず、カデットの反革命的政策を暴露しなかったのである。議員団のあやまりにたいする党や労働者諸組織の批判はしだいにその効力をあらわし、議員団の活動は改善された。

黒百人組的国会のかびくさい雰囲気のなかでボリシェヴィキの戦闘的な声がとどろいた。国会議員団のなかでめざましい役割をはたしたのは、ペテルブルク労働者の代表でボリシェヴィキのエヌ・ゲ・ポレターエフである。労働者議員たちはツァーリズムの内外政策を、ツァーリズムがイランの革命の鎮圧に参加したこと、警察や軍隊をまかなうために屈辱的な借款を受けたこと、警察のテロル行為、勤労者に重税を課していること、フィンランド人民を抑圧していることを、批判した。ボリシェヴィキは、労働者の切実な利益にたいするツァーリ政府と黒百人組的国会の攻撃に、精力的に反対した。彼らは八時間労働日の法案や、労働組合およびストライキの自由についての法案を作成し、ストルィピンの農業政策に反対し、地主の土地を買取金なしで農民にわたすことを主張した。ボリシェヴィキは、カデットの裏切り行為を暴露し、トルドヴィキと協力

し、農民を獲得するために多くのことをなしとげた。

反動の情勢のもとでは各種の合法的な大会は少なからぬ重要性をもっていた。これらの大会の活動には労働者組織の代表であるボリシェヴィキが参加して、人民の生活の重要問題について党の見解をのべた。人民大学活動家大会では、労働者グループが教育が警察の後見を脱する必要をかたり、授業要綱や講師の顔触れを労働者組織が自分できめる権利を得ようと努力した。婦人大会では、婦人労働者の代議員が、労働運動に参加することによってはじめてプロレタリア婦人は解放をかちとることができる、と言明した。工場医大会には、ペテルブルク、モスクワ、中部工業地区、ウクライナ、ザカフカースの労働組合を代表する労働者グループが出席した。ボリシェヴィキは、プロレタリアートの利益と資本家の利益が和解できないことを、具体的事実にもとづいてあきらかにした。警察の行動にたいする抗議のしるしとして、労働者代議員全部と医師の一部は大会から退場し、ついで大会の主宰者は大会を閉会せざるをえなかった。禁酒大会では労働者グループが断固たる態度をとって、いくつかの決議を採択させることができたので、ツァーリ政府は激怒した。これは「大酒飲みとたたかう大会ではなく、政府とたたかう大会だ」と反動新聞はわめきたてた。労働者代議員はほとんど全部逮捕された。これに関連して国会議員団はすぐさま質問をおこない、ツァーリの官憲の行動を暴露した。

国会、合法組織、各種の大会は、党の政治活動に豊富な材料を提供した。すべて、これらの活動の中心には、党の非合法組織があった。党の非合法組織は、ボリシェヴィキの合法活動に革命的な方向をあたえた。合法的な施設のなかで党の代表者があからさまに言えなかったことを、非合法的な党組織は、そのリーフレットや秘密集会や労働者との話合いのなかで語り、組織された

力に団結してツァーリズムを革命的に打倒しなければならないという結論を、労働者にくださせた。

ペテルブルク、モスクワ、バクーその他の工業中心地では、党活動が着々と展開された。試練をへた多くの革命家が、牢獄や流刑地からの脱出に成功すると、これらの都市にきて活動していた。ペテルブルクでは、イ・エフ・ドゥブロヴィンスキー、エム・イ・カリーニン、ヴェ・ヴェ・クイブィシェフが活動していた。モスクワでは、ア・エス・ブブノフ、デ・イ・クルスキー、ヤ・エム・スヴェルドロフ、イ・イ・スクヴォルツォフ－ステパノフが活動していた。バクー組織の指導者のなかには、メシャヂ・アジズベコフ、ペ・ア・ヂャパリッゼ、ゲ・カ・オルヂョニキッゼ、エス・エス・スパンダリャン、イ・ヴェ・スターリン、エス・ゲ・シャウミャンといった有力な活動家がいた。残忍きわまる反動にもかかわらず、党内には新しい献身的な働き手が現われた。そのなかにはア・ヴェ・アルチューヒナ、エリ・イ・カルトヴェリシヴィリ、ヴェ・ゲ・クノーリン、エス・ヴェ・コシオル、カ・イ・ニコラエヴァ、ヴェ・ヤ・チュバーリがいた。ペテルブルクとモスクワのボリシェヴィキは、国会議員団や各種の合法大会の労働者グループの活動にともなう仕事のおもな重荷をひきうけた。彼らは労働組合内で強力な立場を占めており、そこには党グループがつくられていた。バクーのボリシェヴィキは、石油産業労働者組合も、労働組合の機関紙『グドーク』〔『汽笛』〕も、労働者の独習団体「知識は力なり」も、人民会館も指導していた。党は、合法的可能性を革命的に利用するというむずかしい仕事で、いちじるしい成果をあげた。ボリシェヴィキは、しだいに解党派を追いだし、合法組織内で有力な勢力となった。

革命の経験を大衆のなかにひろめることは党活動で重要な地位を占めていた。カデットと解党派は人民の念頭から革命の考えをねこそぎにしようとつとめていた。彼らは革命的な闘争方法から大衆をそらそうとこころみ、「立憲的な道」を極力ほめたたえた。レーニンは、革命は自由主義者やメンシェヴィキにとっては、実行すべきでないものの見本であるが、労働者階級の党にとっては、実行すべきものの模範である、と書いた。党は、ロシア革命のもたらした、大衆の闘争の世界史的模範によって闘士の新しい世代をそだてていった。

レーニンは革命の経験と教訓に多くの著作をあてた。『一九〇五―一九〇七年の第一次ロシア革命における社会民主党の農業綱領』という著書のなかで、彼は革命理論の一連の問題を究明した。同書では、プロレタリアートに指導される農民革命の概念がさらに深められ、農村における農奴制の遺物の革命的破砕の綱領やボリシェヴィキの土地国有化のスローガンの根拠が明らかにされ、革命闘争における労働者と農民の同盟を強化する方法と手段が解明されている。

一貫したプロレタリア国際主義者として、ボリシェヴィキは、国際生活に積極的に参加した。地球のどの地方におこっているものであれ、抑圧に反対する大衆の闘争は、つねにロシアの先進的労働者の熱烈な支持をうけた。彼らは、ロシア革命の影響のもとで勃発した、植民地人民の闘争を心から歓迎した。イラン革命の闘士のあいだでたたかったロシアの社会民主主義者は一人にはとどまらなかった。イギリスとロシアの帝国主義者が革命を圧殺しはじめると、社会民主党国会議員団は、ツァーリズムの暴露に乗り出した。

ヨーロッパ社会民主主義の日和見主義指導者は、ボリシェヴィキに公然たる敵意を示していた。公認の社会党新聞は、あらゆる種類のボリシェヴィキ中傷に愛想よく紙面を提供した。事態は、

コペンハーゲンの国際社会主義者大会（一九一〇年）でロシア代表団が、ロシア社会民主労働党内の情勢についてのトロツキーの中傷的論文が『フォルヴェルツ』に掲載されたことについて、ドイツ社会民主党指導部に抗議するまでに立ちいたった。ボリシェヴィキは、自分の立場と闘争について真実をヨーロッパの労働者につたえるために多くの努力をはらった。

ボリシェヴィキは、革命的マルクス主義をまもる闘士の第一線に立ってすすんだ。レーニンは、国際労働運動内の日和見主義の批判に、多くの著作をあてた。論文『マルクス主義と修正主義』のなかで彼は、修正主義の本質と階級的根源を特徴づけ、修正主義の思想的および政治的原則が科学的にみて成りたたないことを明らかにした。レーニンは、マルクス主義と労働運動の根本問題についてカウツキーの中央派的立場を断固として批判した。

革命家と日和見主義者のあいだのとくにするどい闘争は、第二インタナショナルのシュトゥットガルト大会（一九〇七年）で、植民地問題や戦争の脅威の問題のような、焦眉の問題が討議されたさいにくりひろげられた。ボリシェヴィキは、大会が日和見主義者の恥ずべき提案を否決するのに大きな役割をはたした。この提案は、帝国主義諸国家の植民地政策の支持に帰着するものであった。大会は戦争についての決議にレーニンとR・ルクセンブルクの修正案をとりいれた。この修正案は、諸国人民間の同胞殺しあい戦争をおこさせようとする帝国主義者の企てと断固としてたたかい、また戦争がおこったばあいには、これから生じる危機をブルジョアジー打倒のために利用する責務を、社会主義者におわせていた。

シュトゥットガルト大会とコペンハーゲン大会で、レーニンは国際労働運動内の革命勢力を結束させるために、社会民主主義者の左派の協議会をひらいた。

解党派は、プロレタリアートのヘゲモニーはほうむられたと公言していた。しかし実生活は、広範な大衆のあいだで労働者階級の影響力がつよまったことをものがたっていた。党は勤労者の利益を一貫して守り、民主主義のために不撓不屈にたたかうことによって、大衆を味方に獲得していった。ボリシェヴィキはカデットを暴露し、トルドヴィキの動揺を批判して、農民が自分の間違った考えを克服するのをたすけた。党の働きかけによってトルドヴィキは、国会で再三カデットと一線を画し、社会民主主義者と共同行動をとった。一九〇九年のペテルブルクの国会補欠選挙では、第二都市クーリア（これには小ブルジョアジー、インテリゲンツィア、商店員、自分の住居をもっている労働者がはいっていた）の社会民主主義者の候補者の得票率は、一九〇七年の選挙のときよりも大きかった。各種の合法大会では、労働者グループを中心にすべての民主主義的分子が結束するのが普通であった。ロシアの労働者階級の党は、反動の空前に困難な状況のもとで、プロレタリアートのヘゲモニーのために着々とたたかい、国内でのあらたな革命的高揚を準備した。こうした高揚のきざしは、一九一〇年末にははっきりあらわれてきた。

要　約

革命が敗北するとともにこの国の歴史と人民の生活には多難な時期がやってきた。反政府党とか革命党とかと自称していた政党が、どれもきびしい試練にたえられなかった。どの政党も反動に屈服し、革命を断念し、人民を裏切ったのである。ボリシェヴィキ党だけが、動揺せず、意気沮喪せず、ひきつづきねばりづよく自分の隊列を固め、ねばりづよく力を結集して新しい革命的

戦闘にそなえた。ボリシェヴィキは、人民への献身、革命への忠誠を、行為によって証明した。彼らはプロレタリアートに革命の見通しをあたえ、勤労者の日常の要求と利益を断固として守った。多難な時期に、労働者階級は、ボリシェヴィキを忠実な友、たのもしい指導者とみて、いっそう緊密にボリシェヴィキに近づいた。

反動期に、労働者階級の党はあらゆる種類の背教者や堕落分子から猛攻撃をうけた。解党派、召還派、トロツキー派その他の日和見主義的分派主義者は、非合法のマルクス主義党を破壊しようとした。マルクス主義の敵は、党の理論的基礎——党の世界観である弁証法的唯物論——にとくに凶暴におそいかかった。ボリシェヴィキは、あらゆる毛色の日和見主義者と非妥協的にたたかって党を、党の革命理論を、党の革命的原則と伝統を守りぬいた唯一の勢力であった。このたたかいで、ボリシェヴィズムは、革命の裏切者やマルクス主義の敵を思想的に粉砕し、党組織内であらそう余地のない権威と完全な優位とをかちとり、党組織は、レーニンとレーニン派を中心として結束した。革命党を維持するためにたたかいながら、レーニンは、この時期にマルクス主義の党学説を発展させた。

反動期は、新しい政治的経験、新しい闘争方法、新しい組織形態で党をゆたかにした。革命期に、ボリシェヴィキは攻撃することをまなんだが、革命の敗北は、彼らに、主力を温存しながら秩序整然と退却することをおしえた。党は直接の革命的な闘争方法から回り道の闘争方法にうつった。ボリシェヴィキは、黒百人組体制のもとで合法的活動を革命的におこなう能力を、ねばりづよく身につけてゆき、合法的活動と非合法的活動を結びつける仕方をまなんだ。この経験は、革命のきたるべき勝利にとって、きわめて重要な意義をもっていた。レーニンが指摘したように、

正しく攻撃し正しく退却する仕方をまなびとらなければ、勝利はおぼつかない。ボリシェヴィキは、マルクス主義党がブルジョア的合法性を革命的に利用する模範を国際プロレタリアートにしめした。反動期にボリシェヴィキのおこなったあらゆる毛色の日和見主義者にたいする闘争のもつ世界史的意味は、なによりもまず、国際労働運動で最初の、当時としては唯一の、新しい型の党をまもった点にある。

暗黒のストルィピン反動期に、ボリシェヴィキは非合法のマルクス主義党——労働者階級の基本的な指導勢力——を維持した。彼らは、革命の旗をしっかりかかげながら、新しいたたかいにそなえて大衆を教育し、組織した。

第五章　あらたな革命的高揚の時期における ボリシェヴィキ党　（一九一〇—一九一四年）

1　ストルィピン政策の破綻と大衆の革命的行動のはじまり

一九一〇年の中ごろからロシアには新しい情勢が生じた。産業の停滞にかわって、産業の繁栄がはじまった。年ごとに採炭量、銑鉄と粗鋼の生産高、織物の生産高はふえ、砂糖の生産も増大した。

革命後の時期にロシアでは帝国主義の発展が急歩調ですすんだ。生産と資本の集中はいちじるしくつよまった。鉱工業のほとんどすべての部門と運輸では、資本家の独占団体が支配していた。一二の巨大銀行が、株式銀行の資金総額の八〇％以上を集中していた。金融寡頭制は、ますます国の経済生活を支配するようになり、国家機関の官僚的上層部にますますぴったりと接近していった。

外国資本のロシアへの流入がつよまった。一九一四年当時、工業株式会社の資本金の約三分の

一とロシアの主要銀行の資本金の四〇%以上が、西ヨーロッパのブルジョアジーのものであった。外国資本家は採炭、採油、金属加工といった、きわめて重要な経済部門を支配していた。彼らは、年々数億ルーブルの借款利子と利潤を手にいれていた。帝政ロシアの西ヨーロッパ帝国主義への依存度はたかまった。

ヨーロッパとロシアのひとにぎりの大資本家は富を積み、人民大衆は貧乏になった。国の国民所得の約四分の三は、地主、資本家、富農がよこどりしていた。数十万の勤労者が幸福を求めて他国へ去った。二〇世紀の最初の一〇年間に、ロシアから他国へ出稼ぎに行ったものは一五〇万人をこえた。

生活費の高騰ははげしくなり、労働者の状態は悪化した。官庁の工場調査のしめすところによると、労働者は年平均二四六ルーブルをもらい、資本家に二五二ルーブルの利潤を提供していた。したがって、労働者が一日のうち自分のために労働していた時間より、資本家のために労働していた時間のほうが長かったのである。ブルジョア・地主の帝政ロシアでは、労働者の生活と健康は安く評価されていた。これについては、オブホフ工場で実施されていた「労働者身体傷害査定表」が雄弁にものがたっていた。すなわち、両眼の視力を喪失した労働者には一〇〇ルーブル、片眼の視力喪失には三五ルーブル支払われることになっており、完全な聴力喪失には五〇ルーブル、言語障害は四〇ルーブルと値ぶみされていた。だが労働者が視力も聴力も言語もうしなったばあいですら、つまり完全な廃疾者になったばあいですら、一〇〇ルーブル以上支払われることはなかった。

農村には途方もない窮乏が支配していた。ストルィピンの農業政策の直接の結果として、農民

は大量に零落し、搾取者の富農はますます富裕になった。馬をもたない農家と馬一頭をもつ農家の数は、一九世紀末から一九一二年までにほぼ二〇〇万戸ふえた。農奴主的地主の無制限の権力が維持され、富農の経営が地歩を固め、多数の中農が貧乏になり、土地をなくしてプロレタリアになった農民の数が大幅にふえたこと――これが当時の農村の姿であった。数百万の農民をヨーロッパ・ロシアからシベリアに移住させて、農村における矛盾を緩和しようとするツァーリズムの企ても破産してしまった。農民は、自分の全財産を売りはらってシベリアへいったが、ついで、新しい土地に落ちつく資力をもたないため、なにもかもうしない、怨みをのんで逆もどりしてきた。

農村の矛盾はいっそう深刻になり、するどくなった。農民の主な敵は、これまでどおり、農奴主的地主であった。だが、富農と貧農の闘争もつよまった。一九一〇年いらい、農民は、ますます頻繁に地主屋敷や富農の農場に放火しはじめた。一九一一年には、おそろしい飢饉がおそって、約三〇〇〇万の農民に波及した。農村の情勢は、ストルィピン政策の破綻を証明していた。

ストルィピン政策の失敗は、ロシアの社会政治制度全体の深刻な矛盾をさらにはっきり表面化し、ツァーリ政府には主要な社会経済問題を解決する能力がないことをしめした。

農奴制の遺物は、国の発展の耐えがたい障害であった。ロシアは、資本主義の道を発展していきはしたが、年ごとに先進資本主義諸国からますますおくれていった。レーニンは一九一三年に、農民解放後の半世紀のあいだに、ロシアでの鉄の消費は五倍に増大したが、それでもロシアはいぜんとして後進国であり、近代的な生産用具の装備ではイギリスの四分の一、ドイツの五分の一、アメリカの一〇分の一以下であった、と書いている。人民の貧困、抑圧、無権利、人民にたいす

る侮辱――すべてこれらは、生産力の状態とも、一九〇五―一九〇七年の革命によってめざめさせられた大衆の自覚度や要求の度合とも、はなはだしい不一致をきたしていた。新しい革命だけがロシアを救うことができた。

ストルィピンの反動がどんなに荒れくるっても、それは、自由と生活条件の改善を求める熱望を人民のあいだから根こそぎにすることはできなかった。大衆のあいだの疲労はとれはじめた。抑圧者にたいする憎しみが新しい勢いでせきを切りはじめた。

最初に攻撃に移ったのは労働者階級だった。革命期とついではじまった反動期とは、労働者に多くのことをおしえ、彼らの階級意識をたかめていた。賃金労働者の数はこの世紀のはじめと比較していちじるしく増加していた。一九一三年には、工業だけでも約三五〇万人の労働者がいた。労働者の集中度では、ロシアは、世界のすべての国の先頭を切っていた。アメリカ合衆国では、労働者数五〇〇人以上の企業には労働者総数の約三分の一しか働いていなかったのに、ロシアでは半数以上が働いていた。

一九一〇年の夏、モスクワの労働者のストライキが勃発した。これらのストライキは大衆を元気づけた。その年の末に、ペテルブルク、モスクワその他の都市で政治的デモンストレーションがおこなわれた。学生の会合やストライキがはじまった。一九一一年にも、大衆の動揺はひきつづきたかまった。ストライキには前年の二倍の労働者が参加した。年末には、第二国会の社会民主党議員にたいする裁判の挑発的な性格について社会民主党国会議員団が質問をおこなったのにともなって、ペテルブルクの工場で激烈な大衆集会がひらかれた。労働者は、ボリシェヴィキの呼びかけにおうじて、議員たちの釈放を要求した。

新しい革命のたかまりは避けられないというボリシェヴィキの見通しは確証された。いたるところで、人民の不満と憤激がもりあがった。一九一〇年末からペテルブルクで発行されだしたボリシェヴィキの合法的な週刊新聞『ズヴェズダ』〔『星』〕は、大衆のあいだでの活動に非常に貢献した。

革命的な活気がうまれた情勢のもとでとくに有害で、恥さらしな役割を演じたのは、日和見主義者であった。解党派とトロツキー派は、労働者を革命闘争からそらさせようと考えていた。彼らは、「団結の自由」（結社、集会、ストライキその他の自由）をもとめる請願書に署名するよう労働者に呼びかけたが、これはついで国会にそれを提出することを目的としていた。ボリシェヴィキは、黒百人組的地主が国を支配しているかぎり、どんな自由もありえないこと、ツァーリ君主制の打倒だけが人民に自由をあたえることを労働者に説明した。こうして、新しい情勢のもとで、革命的方針と日和見主義的方針の二つの方針が表面化した。ボリシェヴィキは、革命闘争の新しい高揚への転換の始まりを見ていたのに、解党派は六月三日体制の枠内で自分たちの状態を改善しようとする労働者の意欲しか見ていなかった。ここから、旧体制全体とたたかうか、それとも旧体制を部分的な改良で制限するかという、二つの根本的にちがった戦術が生じた。解党派のもくろんだ「請願運動」は、失敗におわった。彼らは一三〇〇の署名しかあつめることができなかった。労働者は、ボリシェヴィキの革命的スローガンを自由とよりよい生活をめざす自分たちの熱望をはっきり表明したものと考えて、これらのスローガンにしたがった。

労働者のストライキ、政治的デモンストレーションや集会、地主と富農にたいする農民の闘争、都市の民主主義的青年の運動――すべてこれらは、あらたな革命の接近をしめす徴候であった。

プロレタリアートが人民大衆のもりあがる革命闘争のなかで指導者の役割をはたすことができるかどうかは、ロシアの労働者階級のマルクス主義党の態勢に決定的にかかっていた。

2　プラハ党協議会

開始された革命戦は、党を強化する問題、大衆の革命運動を指導するうえでの新しい任務の問題をするどく提起した。

ボリシェヴィキとメンシェヴィキが単一のロシア社会民主労働党の枠内で形式的に統合していたことは、特異な情勢をつくりだし、ボリシェヴィキの党内での任務を規定した。ボリシェヴィキは、党を守りぬいて維持し、党から日和見主義分子を一掃することを目的としていた。彼らは、すでに多くの成果をあげていた。非合法の党組織は、ほとんどすべてボリシェヴィキ派であった。地方ではボリシェヴィキ、党維持派メンシェヴィキ、フペリョート派が、党派性をまもり解党主義とたたかうために協力して活動していた。解党派がプロレタリアートを途方もなく裏切っていたため、党員大衆は、解党派と完全に手を切り彼らを党から放逐する必要があることを、ますますはっきりさとってきた。

ボリシェヴィキは、精力的に党協議会の準備にとりかかった。解党派、トロツキー派、調停派は協議会をぶちこわし、ボリシェヴィズムの原則にもとづく党の団結をさまたげようと必死になったが失敗した。一九一一年の夏、ゲ・カ・オルヂョニキッゼ、イ・イ・シヴァルツ（セミョン）その他の党活動家がロシアに派遣された。いくつかの最大級の委員会の会議でロシア組織委員会

がつくられ、この委員会が協議会を招集した。

ロシア社会民主労働党第六回全国協議会は、一九一二年一月五日から一七日にかけてプラハでおこなわれた。協議会には二〇以上の地方の党組織（ペテルブルク、モスクワ、中部工業地方、カザン、サラトフ、チフリス、バクー、ニコラーエフ、キエフ、エカテリノスラフ、ドヴィンスク、ヴィリノ）が代表をおくっていた。警察の追及のために、ウラル、サマラ、ニジニ・ノヴゴロト、ソルモヴォ、ルガンスク、ロストフ－ナ－ドヌーの党組織の代表は協議会に出席することができなかった。

中央委員会発行の会議『通報』には、困難な反動期と日和見主義者の裏切りにもかかわらず、プロレタリアートとその党は、ツァーリズム、地主、資本家にたいする新しい階級戦の用意をととのえた、と指摘されていた。

「ロシア社会民主党の旗、その綱領、その革命的遺訓が無事にのこったばかりでなく、その組織も無事にのこった。どんな迫害も、この組織を傷つけ、よわめることはできても、それを一掃することはできなかった」（『ソ連邦共産党決議集』、第一巻、三二四ページ）。

協議会には、ロシアで活動していたほとんどすべての党組織が代表をおくっており、協議会の活動にはボリシェヴィキとともに、党維持派メンシェヴィキがくわわっていたので、「本協議会は、党の最高機関であるロシア社会民主労働党全国協議会として成立する」と協議会が声明したのは、まったく正当であった。協議会は、事実上、党大会の役割をはたした。

協議会のもっとも重要な仕事は、党から日和見主義者を一掃したことであった。協議会の諸決定は、党派性の基盤にたっていたすべての勢力を結束させる心づかいにみちていた。雑誌

『ナーシャ・ザリャー』と『デーロ・ジーズニ』〔『生活問題』〕を中心にしてあつまっていた解党派は、自分たちの合法的なストルィピン「労働者」党を急ごしらえした。トロツキーは、自分の新聞で解党主義を労働者のあいだに密輸入した。レーニンは、協議会の席上、いま「われわれのあいだには二つの党がある――これは事実である」と言った。協議会の採択した決議『解党主義と解党派について』と『国外の党組織について』は、原則的にも実践的にも大きな意義をもっていた。「『ナーシャ・ザリャー』と『デーロ・ジーズニ』のグループは、その行動によって、最後的に党を脱退した」と協議会は声明した。こうして、解党派は、ロシア社会民主労働党から除名された。

公然たる解党派のほかに、偽装した解党派とそのさまざまな擁護者がいた。この役割を演じたのは、労働者大衆とのむすびつきがなく、ロシアの非合法組織からも支持されていなかった国外のグループ（ゴーロス派メンシェヴィキ、トロツキー派、フペリョート派）である。協議会は、中央委員会に服従せずに、組織攪乱をおこなっている国外のグループは、ロシア社会民主労働党を名のることができないことをみとめた。すべてこれらのグループは、協議会の決定に服することを拒絶して、その反党性を暴露した。

結局のところ、日和見主義者はすべて、実際には党に所属していなかったのである。

協議会には、非ロシア民族の社会民主党も招請されていた。だが、解党派にたいして調停主義的な立場をとっていたその指導者たちは、協議会に参加することを拒絶した。協議会は、「あらゆる障害をものともせず、ロシアのすべての民族の労働者、社会民主主義者は協力一致し、手をたずさえて、プロレタリアの事業のため、労働者階級のあらゆる敵とたたかうだろう」という希

望を表明した（『ソ連邦共産党決議集』、第一巻、三二八ページ）。

協議会は、流派と色合いの別なく、すべての党維持派に、解党主義とたたかい、非合法のロシア社会民主労働党を再建し強化するために努力するよう、呼びかけた。党から日和見主義者を一掃した結果、党は強固になり、党の規律と戦闘力はたかまり、党の真の統一がつくりだされた。枯枝を適当な時に切りおとすとかしの大木がいっそうつよくなるのと同じように、労働者階級の党も、メンシェヴィキを除名した結果、いっそう強固になり、つよくなった。ボリシェヴィキは日和見主義にたいする闘争を徹底的に――メンシェヴィキを党から放逐するまで――おこなったが、このことは、ロシアにおける民主主義革命と社会主義革命の勝利にとってきわめて大きな意義をもっていた。

協議会は、戦術問題に大きな注意をはらった。協議会は、大衆の革命的気運がもりあがっていることを確認した。新しい型の党を今後も建設していくことや国内の革命的高揚にたいする指導について、決定が採択された。プロレタリアートは、民主主義革命で農民をひきいていく指導者としての役割をはたさなければならなかった。主要スローガンとして、最小限綱領の要求、すなわち、民主的共和制、八時間労働日、地主のすべての土地の没収がかかげられた。党の任務は、これらのいわゆる「三本の柱」を民主主義派全体の要求とし、人民革命のスローガンとすることであった。この旗印のもとに党は第四国会の選挙カンパニアをくりひろげた。

飢饉とたたかううえでの党の任務にかんする決議には、党組織は、飢饉とツァーリズムの政策とのつながりを農民に説明し、大衆の目ざめをツァーリ君主制にたいする組織だった闘争の軌道にむけなければならない、と述べてあった。党組織は、さまざまな合法的労働者団体の網の目に

とりまかれた非合法細胞を強化し、その数をふやすよう、求められた。

党は国際生活上の新しい現象である、ヨーロッパ諸国の階級闘争の激化、アジア諸国人民の目ざめを考慮にいれた。協議会は、イランと中国の革命を支持し、アジア諸国人民を圧迫するツァーリズムの政策を非難した。フィンランド人民を圧殺しようとする政策を糾弾して、協議会は、ツァーリズムと反革命的ブルジョアジーにたいする闘争でロシアとフィンランドの労働者が統一されていることを強調した。ロシアの労働者階級のマルクス主義的前衛は、東洋諸民族の心につうじる道をひらき、ヨーロッパのプロレタリアートとアジアの植民地人民が、帝国主義、植民地主義とたたかううえでの同盟の最初の礎をすえたのである。

プラハ協議会はボリシェヴィズムの戦略を的確に定式化した。ロシアにおける民主主義革命とその社会主義革命への成長転化、すべての国のプロレタリアとの兄弟的連帯の強化と全世界の民族解放運動の支持という方針がそれである。協議会の諸決定には、プロレタリア国際主義の原則が反映していた。

その当時ロシアで活動していたすべての政党のうち、ボリシェヴィキ党だけが、労働者階級と全人民の利益に完全にかなった政綱をもっていた。

協議会が中央委員会を選出したことは、重大な意義をもっていた。ロシア社会民主労働党第五回大会で選出された中央委員会は、メンシェヴィキの破壊活動の結果、事実上存在しなくなっていた。一九一〇年一月の総会以後、中央委員会はもうひらかれたことがなく、ロシア社会民主労働党には、正式の中央指導部がなかった。

党の最高機関である協議会は、レーニンを先頭とする、ロシア社会民主労働党の権威ある中央

委員会を選出した。中央委員会には、困難な反動期にきたえあげられ、革命的勇気と不撓不屈の精神を発揮した地方の党活動家たちが選出された。中央委員会に選出された者のなかには、ヴェ・イ・レーニン、エフ・イ・ゴロシチェキン、ゲ・カ・オルヂョニキッゼ、エス・エス・スパンダリャン、デ・エム・シヴァルツマンがいた。中央委員のだれかが検挙されたばあいにそなえて、ア・エス・ブブノフ、エム・イ・カリーニン、ア・ペ・スミルノフ、イェ・デ・スタソヴァ、エス・ゲ・シャウミャンが中央委員候補として承認された。中央委員会は、イ・エス・ベロストツキーとイ・ヴェ・スターリンを中央委員に補充し、その後ゲ・イ・ペトロフスキーとヤ・エム・スヴェルドロフをも補充した。

プラハ協議会は、新しい型の党を建設するうえですぐれた役割をはたした。協議会は、メンシェヴィキにたいするボリシェヴィキの闘争の歴史的な一時期を総決算し、ボリシェヴィキの勝利を確認し、その手にロシア社会民主労働党の旗を確保した。ロシア社会民主労働党とその指導部である中央委員会内では分派がとりのぞかれたが、このことは、党を発展させ、革命闘争にはたす党の役割をつよめるうえで、並はずれた意義をもっていた。レーニンは、プラハ協議会の決定を評価して、つぎのように書いている。

「一九一二年いらい、すでに二年以上にわたって、ロシアでは組織されたマルクス主義者のあいだに分派はなく、単一の組織内や、単一の協議会や大会では、戦術についての論争はない。あるのは、一九一二年一月に、解党派は党に所属するものではない、と正式に声明した党と、解党派との完全な絶縁状態である」（全集、第二〇巻、三四九ページ）。

協議会は、党を全ロシア的組織として強化した。各地の党組織は、協議会の決定にもとづいて

結束をかためた。日和見主義の重荷を取りのぞいた党は、大衆の革命闘争のあらたな強大な高揚の先頭に立つことができた。

レーニンは一九一二年のはじめに、プラハ協議会の結果について、ゴーリキーにあててつぎのように書いている。

「とうとう――解党派の悪党どもをおしきって――党と党中央委員会を復活させることに成功しました。あなたも、われわれといっしょに、このことをよろこんでください」（全集、第三五巻、三ページ）。

プラハ協議会は、国際労働運動の歴史上でも重要な地位を占めている。

第二インタナショナルの諸党は、ますますはっきりと変質しつつあった。国際労働運動内の日和見主義者にたいする革命家の闘争は、第一次世界戦争の前夜に激化した。ロシアのボリシェヴィキはこの闘争に精力的に参加した。第二インタナショナルの大会や、国際社会主義ビューロー！の会議や、出版物で、レーニンは理論と実践の面でのマルクス主義からの逸脱と断固としてたたかい、日和見主義、改良主義の増大する危険に断固たる反撃をくわえる必要を強調した。ボリシェヴィキは、ドイツ、イタリア、オランダその他の国の左派を支持し、左派に団結と統合を呼びかけた。最大の革命戦の時期が近づきつつある。――とレーニンは書いている――この状況のもとで労働者階級にとくに必要なのは、強固な、原則的に一貫した、社会主義に忠実な党組織である、と。

しかし、第二インタナショナルの諸党の革命家たちは、当時はまだ日和見主義の非常な危険性を理解していなかったし、労働運動内のブルジョアジーの手先とたたかうに当って一貫性と決然

たる態度がたりなかった。だから、メンシェヴィキにたいするボリシェヴィキの勝利は、国際的な意義をもっていた。日和見主義者を党から放逐することによってボリシェヴィキは、日和見主義と非妥協的にたたかい、この闘争を、完全に組織的に絶縁するところまでもっていかなければならないということを、他の党の革命的分子にしめしたのである。

3　ボリシェヴィキの新聞『プラウダ』。第四国会のボリシェヴィキ派議員団

革命的高揚が進展しているというプラハ協議会の声明は、はやくも三ヵ月後には裏書きされた。大衆の革命的気運が革命的高揚にうつっていくきっかけになったのは、シベリアのレナ金鉱におこった惨劇であった。

この金鉱の経営者はイギリスの資本家で、ロシアの資本家、皇族、ツァーリの高官たちが共同出資者になっていた。金鉱の所有者たちは、年々約七〇〇万ルーブルという莫大な利潤を手にいれていた。資本家とその手下たちは、シベリアの人里はなれた密林のなかでは、とくに乱暴にふるまっていた。労働者の苦役労働には取るにたりない賃金を支払い、くさったものをくわせ、労働者の妻や娘をなぶりものにした。途方もない虐待にたまりかねて、労働者はストライキをおこした。彼らは、一致団結した組織だった行動をとった。だが、彼らの要求はすべて、にべもなく拒絶された。彼らは、経営者は労働者を丁寧にとりあつかってもらいたいという要求さえ、「政治的犯罪」とみなされた。警察当局は暴力で労働者の抵抗を打ち破ることにきめた。一九一二年四月四日、

憲兵将校の命令で、軍隊は、鉱山当局と交渉するためにやってきた労働者の平和な群衆に発砲した。五〇〇人以上の死傷者が出た。

レナ射殺事件の報道は全国にとび、労働者の怒りに火をつけた。大衆的ストライキ、デモンストレーション、大衆集会がはじまった。ボリシェヴィキの新聞『ズヴェズダ』は運動にスローガンをあたえた。この新聞は、ブルジョア新聞がツァーリズムの血なまぐさい犯罪をかくそうとしてもちいた、巧妙なうその霧を、真実のあかるい光でふきはらった。警察はこのころの『ズヴェズダ』を毎号没収したが、それでも印刷部数の一部は労働者の手にとどいた。国会の社会民主党議員団は、レナ射殺事件についてツァーリ政府に質問した。「そのとおりであったし、今後もそのとおりだろう！」というツァーリの大臣マカロフのずうずうしい回答は労働者の憤激をつのらせた。抗議ストライキには、約三〇万人の労働者が参加した。それにつづいて、メーデーのストライキは約四〇万人の労働者を参加させた。

レナ事件のときに、プロレタリアートにとって合法新聞のもつ意義がきわめてはっきりあらわれた。『ズヴェズダ』は、先進的な労働者をめあてにした週刊新聞であった。党には、できるだけ広範な労働者大衆のための日刊新聞が必要であった。そして労働者は、勤労によってえた金でこのような新聞の創刊を援助してほしいとボリシェヴィキが呼びかけたのに一斉に呼応した。

一九一二年四月二二日（五月五日）、ペテルブルクで、レーニンの創刊したボリシェヴィキの新聞『プラウダ』〔『真理』〕第一号が発行された。それは、ロシアにおける大衆的なマルクス主義的日刊労働者新聞であった。『プラウダ』の発行された日、五月五日は、一九一四年いらい、労働者出版物の祝日となった。

『プラウダ』は、党の全国的な合法機関紙で、労働者階級の生活で大きな役割をはたした。
革命闘争が勃発し、『プラウダ』が発行されたのにともなって、レーニンをはじめとする中央委員会在外ビューローは、ロシアにできるだけ近いようにと、クラクフにうつった。革命前の『プラウダ』がつづいていた期間に、レーニンは、党の活動と党の政治方針に方向をあたえる論文を、二八〇以上も同紙に発表した。いろいろな時期の同紙の編集局員と積極的な協力者は、エヌ・エヌ・バトゥーリン、デ・ベードヌィ、カ・エス・エレメーエフ、エヌ・カ・クルプスカヤ、ヴェ・エム・モロトフ、エム・エス・オリミンスキー、エヌ・イ・ポドヴォイスキー、エヌ・ゲ・ポレターエフ、カ・エヌ・サモイロフ、ヤ・エム・スヴェルドロフ、エヌ・ア・スクルイプニク、イ・ヴェ・スターリンであった。党のすべての最良の人材が『プラウダ』に協力した。『プラウダ』には、ア・エム・ゴーリキーがその作品を発表した。
『プラウダ』は新しい型の合法的な労働者新聞であった。このような新聞を発行することは、容易な仕事ではなかった。レーニンは、『プラウダ』に多くの注意をはらった。彼は、新聞が戦闘的・革命的な精神で運営され、原則的なボリシェヴィキ的方針をとるようにねばりづよい努力をはらった。レーニンは注意ぶかく編集局の活動を見まもり、その誤りを批判した。彼は、調停派、とくに一九一二年に編集局書記であったモロトフを手きびしく批判した。レーニンは、調停派が『プラウダ』編集局の仕事から排除されたことを歓迎した。
ボリシェヴィキの『プラウダ』は、毎日、党を広範な労働者大衆とむすびつけた。新聞の各号には、数十通の労働者の通信が掲載された。これらの通信には、労働者の苦しい、希望のない生活がのべられ、警察の専横や経営者の虐待の具体的な事実があげられていた。これらの通信は、

ツァーリ制度と資本主義制度にたいするきびしい起訴状であった。二年あまりのあいだに『プラウダ』には一万七〇〇〇通以上の労働者通信が掲載された。新聞を中心として、多数の労働者通信員が形成された。彼らは、大衆のあいだにレーニンの思想とボリシェヴィキのスローガンを断固として大胆に普及させた人たちであった。

労働者階級のストライキ闘争を組織するうえで『プラウダ』のはたした役割は、とくに大きかった。毎日のストライキ報道は、労資の闘争戦線からの正式の報告であった。それらは、労働者をいっそうしっかりと団結させ、彼らを鼓舞して階級闘争をつよめさせた。『プラウダ』は、労働者の要求をまとめ、他の企業や都市の労働者がストライキ労働者を支援するのを組織し、労働者の新しい層をつぎつぎに闘争にひきいれた。『プラウダ』は、労働者大衆のなかに階級的連帯感をそだてた。『プラウダ』は、たたかうプロレタリアートの魂であった。

労働者階級のあいだの『プラウダ』の権威は絶大であった。労働者は『プラウダ』を血のつながった自分の新聞、自分の利益の確固たる擁護者とみていた。『プラウダ』へは、熱烈な愛情と心からの感謝の言葉がロシアの隅々からきた。労働者は、自分たちの新聞を支持しようとあくまで覚悟をきめていることを表明した。『プラウダ』が約四万部出ていたのに、解党派の新聞『ルーチ』〔『光』〕はやっと一万六〇〇〇部であった。プロレタリア出版物のための労働者グループの醵金総額の五分の四は、このボリシェヴィキ新聞あてのものであった。一九一四年の夏には、ロシアの九四四の地点に『プラウダ』の予約者がいた。彼らは大衆のなかに『プラウダ』の思想を宣伝した人たちであった。

『プラウダ』は、農民に多大の注意をはらっていた。『プラウダ』には、「農民生活」という特

別な欄があった。新聞には、ヨーロッパ・ロシアのほとんどすべての県とシベリアの多くの県からおくられてきた農民の通信が掲載された。農民自身が、その絶望的な困窮、地主の抑圧、富農への隷属について、単純な飾りけのない言葉で書いていた。

このボリシェヴィキ新聞は、農民生活のさまざまな側面について書いたレーニンの論文を何十も発表した。農民の状態のおおよそのありさまはつぎのとおりである、――とレーニンは書いている――二〇〇〇デシャチーナ以上をもつ一人の地主のまわりに、同じ大きさの土地をもっている農家約三〇〇戸が生活している。この地主的大土地所有こそ、農民の貧困と飢えの根源である、と。『プラウダ』は、隷属状態からの唯一の活路は、労働者階級の指導のもとに、ツァーリと農奴主的地主にたいしてたたかうことである、と農民におしえた。

『プラウダ』は、党のイデオロギー活動で目立った地位を占めていた。レーニンは、ブルジョア・イデオロギーと修正主義にたいする闘争を、同紙のきわめて重要な任務と考えていた。同紙は、日和見主義者が労働運動内のブルジョアジーの手先として裏切り的な役割をはたしていることを断固として暴露した。『プラウダ』の編集局には、党の組織活動のかなり大きな部分が集中していた。ここで各地の党細胞の代表との会合がひらかれ、工場の党活動の情報はここへとどき、党のペテルブルク委員会と、中央委員会の党指令は、ここから伝達された。『プラウダ』は、企業に新しい党組織をつくるのをたすけた。

ツァーリズムは、『プラウダ』がおそるべき革命的力であることを知って、あらゆる手段でその発行をとめようとした。だが労働者は、頑として自分の新聞を支持した。新聞が差し押えられるときにも、警察の手にわたったのは、普通、発行部数の一部にすぎなかった。新聞は、いちは

やく労働者地区に配布してあったからである。新聞には莫大な罰金が課せられたが、労働者は、零細な金をもちよって必要な金額をあつめた。そこで、ツァーリ当局は、『プラウダ』の発行を禁止するようになった。新聞は八回禁止されたが、『ラボーチャヤ・プラウダ』（『労働者の真理』）、『セーヴェルナヤ・プラウダ』（『北方の真理』）、『プラウダ・トルダー』（『労働の真理』）、『ザ・プラウドゥ』（『真理のために』）、『プロレタールスカヤ・プラウダ』（『プロレタリアの真理』）、『プーチ・プラウディ』（『真理の道』）、『ラボーチー』（『労働者』）、『トルドヴァヤ・プラウダ』（『労働の真理』）、など別の名称で再刊された。このようにして、そのつどボリシェヴィキの『プラウダ』は復活し、その呼びかけの声はふたたび労働者街にひびいたのである。

『プラウダ』はほんとうの労働者新聞であった。ボリシェヴィキが、黒百人組的警察体制のもとで、非合法党の機関紙で、労働者大衆を一貫した革命的精神で教育した合法的日刊新聞を発行するという大胆な計画を実現できたのは、労働者の支持があったからにほかならない。

ボリシェヴィキ党と革命の歴史上『プラウダ』の意義は並はずれて大きい。当時、ボリシェヴィキはプラウダ派と呼ばれていた。『プラウダ』は、革命的労働者の一世代をそだて、革命のため、労働者階級の事業のため、人民の利益のためにたたかう先進的で献身的な闘士をそだてた。『プラウダ』は、党の大幅な成長、党の隊列の結束、党と大衆とのむすびつきの強化を促進した。

プラウダ派のあいだからは、イ・エム・ヴァレイキス、イ・デ・カバコフ、ゲ・エヌ・カミンスキー、エ・イ・クヴィリング、ユ・エム・コツュビンスキー、エヌ・ア・ラコバ、エム・エム・ハタエヴィチ、ベ・ペ・シェボルダエフ、ヤ・ア・ヤコヴレフのような、ボリシェヴィキ党の活動家が出てきた。

党のもう一つの全国的な合法機関は第四国会のボリシェヴィキ派議員団であった。

国会選挙は、一九一二年の秋、労働者にとってきわめて困難な情勢のもとでおこなわれた。警察は先進的な労働者を狂気のように追及し、破廉恥きわまる偽造をあえてした。黒百人組と自由主義者は、しばしば社会民主党の候補をむこうにまわして連合した。解党派は、プロレタリアートの隊列を分裂させようとした。

警察の妨害があったにもかかわらず、党は、最小限綱領の主要要求を中心にして、大衆のなかで政治活動をくりひろげ、それらの要求を社会主義をめざす闘争の任務とむすびつけた。ボリシェヴィキの立場は、レーニンの書いた選挙綱領にのべてあった。この綱領をもとにして各地の委員会は、自分の議員にたいする労働者の要望書を作成した。『プラウダ』は、首尾一貫した、不撓不屈な民主主義的労働者、つまりボリシェヴィキに投票するよう労働者に呼びかけた。『プラウダ』は、カデットを暴露し、解党派を非難した。

ツァーリ政府は、選挙カンパニアでボリシェヴィキのおさめた成功を不安の目でみまもっていた。政府は、まず第一に首都の労働者の闘争意欲をくじこうと企て、ペテルブルクの多くの大工場での選挙代表の選挙を取りやめた。そこで、ボリシェヴィキ派のペテルブルク委員会の呼びかけにおうじて、一〇万の労働者がストライキをおこなった。ツァーリズムは後退して、自分の決定を撤回せざるをえなかった。ペテルブルクの勝利は、ほかの地方の労働者をも勇気づけた。

選挙法は、ペテルブルク、モスクワ、ヴラヂーミル、コストロマ、エカテリノスラフ、ハリコフという六つの工業県でだけ、労働者クーリアからの国会議員の選出を保障していた。ロシアのプロレタリアートの五分の四が集中していた六つの主要工業県のすべてから、ボリシ

ェヴィキが議員として選出された。このすばらしい勝利は、労働者階級の大多数がボリシェヴィキ党にしたがっていることを雄弁にものがたっていた。国会には、ア・イェ・バダーエフ、エム・カ・ムラノフ、ゲ・イ・ペトロフスキー、エフ・エヌ・サモイロフ、エヌ・エル・シャゴフ、エル・ヴェ・マリノフスキー（あとで、挑発者であったことがわかった）が選出された。ボリシェヴィキのほかに、国会には非工業県から選出された七名のメンシェヴィキがいた。

ボリシェヴィキ派議員は、ツァーリの国会で、人民の生活のもっともさしせまった問題について党の立場を大胆に主張した。彼らは、労働者の苦しい状態、農民の窮乏、民族的抑圧、無料小学校についての勤労者の切実な要求、ツァーリ政府の盛んな戦争準備について真実をかたった。

第四国会では、政府にたいする質問は、第三国会のときよりもさらにするどいボリシェヴィキの武器になった。質問規則によれば、少なくとも三〇名の署名が必要であったが、普通、社会民主党員には、トルドヴィキやほかのグループのなかの個々の進歩的思想をもった議員が合流していた。質問には、なにか具体的な事実——労働組合の禁止、労働者新聞の迫害、鉱山での大惨事、工場での爆発事故、ストライキ参加者の逮捕、村巡査の農民殺害等々がとりあげられた。すべてこれらは、国会の演壇から、警察の専横と勤労者の途方もない搾取の姿をえがきだす機会を、ボリシェヴィキ派議員にあたえた。労働者議員の声は大衆にとどき、ツァーリズム、地主、資本家にたいする彼らの憎しみをつよめた。

労働者階級の国会代表たちは、八時間労働日、社会保険、民族同権にかんする三つの法案を準備した。これらの法案は『プラウダ』に発表された。

ボリシェヴィキ派議員は、国会内の活動にとどまってはいなかった。彼らは、国会のそとでも

大活躍をしていた。工業地区を遊説し、たびたび工場に出かけ、労働者集会で自分の活動報告をおこない、労働者と話合い、『プラウダ』に寄稿した。彼らは、ストライキ労働者にたいする他の企業の労働者の援助を組織した。議員たちは、非合法党の生活に積極的に参加して、地下の党集会で演説し、各地の党組織の活動をたすけ、中央委員会のいろいろな委託をはたした。

ボリシェヴィキの小グループは国会で迫害された。彼らの痛烈な暴露演説は激昂した黒百人組派のために中断された。議長は、再三ボリシェヴィキ弁士の発言を封じた。ボリシェヴィキ派議員団は、勇敢な行動によって、労働者のあいだで深い信頼を得、高い声望をもつようになった。ボリシェヴィキ派議員団は、国の政治生活で重要な役割をはたした。農民大衆も被抑圧民族も、労働者議員を自分たちの真の擁護者とみていた。「われわれカジノ村の農民グループは、労働者新聞をみて国会内の状態を知ってから、自分の使命をはたす能力をもっているのは六名の労働者議員だけであり、彼らだけが全勤労大衆の利益をしっかりと首尾一貫して守っていると思っている。われわれは、あなたがたが困難な活動で成功をおさめるよう心からねがっている。われわれはあなたがたとともにある」——ある農民グループはこう書いている。これこそ大衆の声であった。

党中央委員会は、議員団の活動に方針をあたえていた。議員たちは、しばしば国外のレーニンをたずねて、彼と相談した。レーニンは、ボリシェヴィキ派議員たちが国会の演壇からおこなった、たくさんの演説の草稿を書いた。党の指導のもとに、大衆と緊密な連絡をたもちながら、合法活動と非合法活動を結合することによって、労働者階級の真の代表者である新しい型の革命的国会議員がそだてあげられた。

『プラウダ』とボリシェヴィキ派議員と非合法党組織は、相互に固くむすびついていた。一九一二年一二月に、議員団は労働組合にたいする迫害について質問をおこなった。党は、プロレタリアートの状態についてのこの最初の質問を中心に労働者の世論を組織した。『プラウダ』には、労働組合にたいする迫害についての報道が発表された。ペテルブルク委員会は、二四時間ストライキでこの質問を支持するよう非合法ビラで労働者に呼びかけた。国会でバダーエフがツァーリ当局の行動を暴露していたときに、いくつかの大工場の労働者は、仕事をやめ、自分たちの議員をこぞって支持した。

一九一四年三月、リガの「プロヴォドニク」工場とペテルブルクの「トレウゴーリニク」工場で婦人労働者の集団中毒がおこった。ペテルブルク委員会は、抗議ストライキを呼びかけた宣伝ビラをひそかに大衆のあいだにまいた。『プラウダ』は、婦人労働者の途方もない搾取にかんする多数の資料を掲載した。ボリシェヴィキ派議員団は質問をおこなった。国会では、ボリシェヴィキ派議員が演説した。婦人労働者へのひどい侮辱行為にたいする抗議ストライキには、およそ一二万人が参加した。

こうしてボリシェヴィキは、『プラウダ』や国会議員の活動を党の非合法活動とたくみに結合したのである。

4　革命闘争の先頭に立つ党

労働運動は引きつづき発展した。一九一二年には一〇〇万人以上の労働者が、一九一三年には

一二七万二〇〇〇人の労働者が、ストライキをおこなった。経済闘争と政治闘争のからみあいが、革命的な大衆的ストライキをうみだした。労働者階級はふたたび、資本家とツァーリズムにたいして攻勢に転じた。

ストライキは全人民的な反響を呼んだ。それは広範な大衆をめざめさせ、闘争に立ちあがらせた。あきらかに低めな数字によっても、一九一〇年から一九一四年のあいだに、一万三〇〇〇件以上の農民行動がおこった。農民は、地主屋敷や富農の農場を破壊し、穀物、家畜、農具を取り上げた。ツァーリの軍隊内でも不満が爆発しはじめた。一九一二年七月に、トゥルケスタンで工兵の武装反乱がおこり、一九一三年一月に、キエフで兵士の騒擾がおこった。バルチック艦隊と黒海艦隊で反乱の機が熟していった。

ロシアは新しい革命がもりあがる時期にはいった。

革命的高揚は、資本主義の急速な発展、各階級間と各党間のするどい分界、ストルィピン政策の破綻という、新しい歴史的状況のもとですすんでいた。プロレタリアートの数は大幅に増加し、その自覚は高まっていた。革命でめざめさせられ、三次の国会の教訓をえた農民も、多くの点で変化していた。インテリゲンツィアのあいだには新しい民主主義的勢力が現われた。ロシアにおける革命戦は、ヨーロッパの労働運動が強まりアジアがめざめるという状況のもとで発展していた。非合法のボリシェヴィキ党——日和見主義者を一掃し、結束をかため、先進的労働者のあいだから指導者層を育成し、大衆に強い影響力をもっていた党は、活動の新しい可能性をもつようになった。

実生活はプラハ協議会の方針の正しかったことを、完全に裏付けた。新しい状況のもとでの党

の活動経験を総括し、革命にそなえる当面の任務をさだめる必要があった。この課題をはたしたのは、中央委員会と党活動家との二回の合同会議であった。一回は、一九一二年一二月にクラクフでおこなわれ、もう一回は、一九一三年九月にポロニン村でおこなわれた。これらの会議にはボリシェヴィキ派国会議員や、ペテルブルク、モスクワ、中部工業地方、ウクライナ、ウラル、カフカースの党組織の代表が参加した。レーニンの指導のもとに、党活動の重要問題にかんする決定が採択された。会議は、党組織が大衆の革命的行動、とくに大衆的ストライキや街頭デモンストレーションを組織し発展させ、労働者の行動と同時に、それとできるだけ歩調のとれた、広範な行動に農民をひきいれなければならない、と強調した。

合法・半合法の労働者団体の網の目にとりまかれた非合法細胞の総和としての非合法党が組織建設の唯一の正しい型であることが、承認された。すべての工場には、もっとも積極的な労働者からなる党委員会をつくる必要があった。すべての合法的労働者団体には、厳密な党精神で活動する党グループをつくらなければならなかった。

ポロニン会議にかんする通報で、中央委員会は、党組織に訴えて、こう書いている――

「道は定められた。党は今日の過渡期の主要な活動形態を見いだした。革命の古い旗にたいする忠誠は、新しい情勢、新しい活動条件のもとでためされ、証明された。同志諸君、もっとも困難な時期はすぎさった。新しい時期が来ようとしている。わが祖国の運命を決する最大の重要性をもつ事件がせまっている。仕事にとりかかれ！」（『ソ連邦共産党決議集』、第一巻、三八〇ページ）。

プロレタリアートの闘争が成功するための条件は、その隊列の戦闘的統一であった。中央委員

会クラクフ会議は、党の主要任務の一つとして、労働運動の統一のための闘争をかかげ、非合法組織と革命的戦術との承認にもとづいて、労働者自身によって実現される下からの統一というスローガンをあたえた。

下からの統一というスローガンは、労働者大衆の気分にぴったりしていた。一九〇五年の革命の経験にもとづいて、労働者は、分裂の害を理解し、あらたな革命戦に立ちあがるとともに、統一の問題をねばりづよく提起した。プロレタリア軍の統一という偉大な原則のもつすべての意義を、ボリシェヴィキ以上によく理解していたものはだれもなかった。これについてレーニンは、「ばらばらな労働者は無である。団結した労働者はすべてである。」と力説している（全集、第一九巻、五五九ページ）。プロレタリアートの統一の基礎は、階級的利害と目標の共通性に、階級的規律に、多数者の意志の承認にある。労働運動の統一についてのマルクス主義の見解を説明して、レーニンはこう書いている――

「統一は労働者階級にとって不可欠である。統一は、すべての自覚した労働者によって誠実に実行されるような決定をくだす単一の組織によってしか実現されない。問題を審議し、さまざまな意見をのべ、またそれらに耳をかたむけること、組織されたマルクス主義者の多数者の見解を知ること、この見解を文書の決定のなかでいいあらわすこと、この決定を誠実に実行すること――これこそ、世界中いたるところで、分別のあるすべての人々のあいだで統一と呼ばれているものである。そして、こういう統一は、労働者階級にとってかぎりなく貴重であり、かぎりなく重要である」（同）。

労働者階級の統一は、なによりもまず思想的・政治的統一である。それは、労働者組織の、第

一に、党の統一がなければ不可能である。この統一を破壊したのは、解党派とトロツキー派であったが、彼らは、自分の分裂活動を自分たちは統一に賛成だという偽善的な言明でかくしていた。だから、彼らがこの偉大なスローガンをぺてん師的にもてあそんでいるのを暴露し、統一の破壊者としてさらしものにする必要があった。

解党派が非合法の党に反対し、革命的「地下活動」を非難し、「公然の」党をつくるよう扇動することは、ますます露骨になった。彼らは労働者の英雄的なストライキ闘争をののしり、それを「ストライキ熱」と呼んだ。彼らは独自の新聞をもち、いくつかの地方、とくにペテルブルク、モスクワ、エカテリノスラフでは、いわゆる「イニシアティヴ・グループ」という独自の組織をもっていた。事実上、解党派は、あまりはっきりした形のものではなかったが、自分の別個の党をつくったのである。彼らはまだ、さまざまな合法組織のなかに頑張っていて、あらゆる方法で労働者の行動の統一に害をあたえていた。

解党派に反対し、労働運動の統一をめざす闘争でとくに大きな意義をもっていたのは、ボリシェヴィキが国会で独自の議員団を結成したことである。労働者階級は、自分の国会代表団の統一を大切に思っていた。そこで、ボリシェヴィキがプロレタリアートのためにとった措置の正しいことを、大衆に説明する必要があった。

ボリシェヴィキとメンシェヴィキは、はじめ、国会で共同の社会民主党議員団を結成していた。この議員団には、きわめて正常でない状態が生じた。六名のボリシェヴィキは、一〇〇万人以上の労働者のいる工業県から選出されていたが、七名の解党派メンシェヴィキは、一三万六〇〇〇人の労働者しかいない非工業県から選出されていた。ところが、解党派は、一票偶然に優勢なの

に乗じて、ボリシェヴィキ派議員の基本的権利を侵害した。その結果、ごく少数の労働者を代表していた解党派議員が、労働者階級の圧倒的多数の意志を無視し、労働運動の統一をぶちこわすことになった。党はこの問題を労働者の審判にゆだねた。新聞紙上や党組織や労働者集会ではげしい闘争が展開され、その結果、自覚した労働者の三分の二以上がボリシェヴィキの「六人組」を支持することを表明した。一九一三年の秋に独自のボリシェヴィキ派議員団が結成されてからは、労働者の大多数が連絡をたもっていたのは、解党派の「七人組」とではなく、この議員団とであった。これは、ボリシェヴィキの大きな勝利であった。

ボリシェヴィキは、合法組織内で解党派を「解任」させることができた。ボリシェヴィキは、労働組合を味方に獲得した。ペテルブルクでは、ボリシェヴィキがほとんどすべての労働組合を指導し、解党派にしたがっていたのは、事務員、製図工、薬剤師の組合にすぎなかった。モスクワでは、すべての労働組合がボリシェヴィキ派であるか、さもなければボリシェヴィキに同調していた。

ボリシェヴィキは、保険カンパニアでも、すなわち、労働者の圧力で国会が採択した労働者国家保険法によってつくられた傷病保険組合の選挙でも、大きな成功をおさめた。ボリシェヴィキと解党派のあいだの激闘は全国的保険機関とペテルブルクの保険機関の選挙でくりひろげられた。『プラウダ』は、要望書と候補者名簿を発表した。選出代表の八〇％以上はプラウダ派であった。

労働者階級は、ボリシェヴィキの旗のもとに結束した。地下の革命党にたいする反対行動が労働者のあいだで成功をおさめなかったので、ボリシェヴィズムの敵は、あらたな駆引に訴えた。

トロツキーが、「統一」の美名にかくれて、ボリシェヴィズムに敵意をもついろいろなグループのブロックをつくりはじめた。トロツキー派は「分派を超越したもの」という美名にかくれて、破廉恥きわまるやり方で労働者をあざむき、そうすることで解党派の暴露を困難にした。だから、彼らは公然たる解党派よりも有害であった。

一九一二年八月、トロツキーは会議を招集し、その席上で反ボリシェヴィキ・ブロックが結成された。このブロックの日和見主義的性格は、会議で採択された政綱には、民主的共和制の要求も、農民のための地主の土地没収の要求も、民族自決権の要求もはいっていなかったことに、はっきりしめされていた。ロシアに中央派的な、実質的には解党派的な党をつくろうとする企ては、労働者に支持されなかった。ポーランドの社会民主主義者とプレハーノフ派は、この反党ブロックへの参加をこばんだ。フペリョート派はすぐブロックから脱退し、それにつづいてラトヴィアの社会民主主義者が脱退し、ついでのこりのものも四散してしまった。八月ブロックは、ボリシェヴィキの打撃をうけて、はやくも一年ないし一年半後には、事実上崩壊してしまった。

解党派のストルィピン「労働者党」は、辛うじて存在をたもっていたし、トロツキー派の反ボリシェヴィキ・ブロックのたくらみは、完全な失敗におわった。この第一の原因は、レーニンの指導のもとにボリシェヴィキがつねに日和見主義と容赦なくたたかい、日和見主義者が労働者階級の利益にどんなに害をあたえているかを労働者階級にしめし、あらゆる日和見主義的醜類にたいする敵意を労働者階級のうちにやしなったことにあった。ツァーリズムの警察の横暴と資本家の圧迫にたいする多年の頑強な闘争は、ロシアのプロレタリアートをきたえ、彼らのなかにすばらしい戦闘的・革命的な資質をそだてあげた。だから、国内に革命的危機が熟すると、労働者は

あらたな革命に立ちあがり、闘争をやめるように呼びかけた解党派や、その受売りをしていたトロツキー派には、憤然として背をむけた。その結果、ボリシェヴィキは、自覚した労働者の五分の四、つまりプロレタリアートの圧倒的多数を味方に獲得した。ボリシェヴィキは、労働運動の統一を達成したが、それはなによりもまず、日和見主義者を一掃した党の統一を守りぬいたからである。

日和見主義者には第二インタナショナルの指導者が救いの手をさしのべた。一九一四年七月、彼らは、ブリュッセルにロシア社会民主労働党内の統一を復活させる問題について「意見を交換するため」と称して協議会を招集した。ボリシェヴィキは、この会議に応じて、つぎの条件を提出した。解党主義についての党の諸決定を断固として無条件に確認すること、非合法党の隊列内で地下活動と革命的大衆ストライキに反対する言動はゆるされないことを承認すること、合法的な労働者党と綱領的スローガン（民主的共和制と地主の土地の没収）の放棄とを宣伝するのは許されないこと、がそれであった。どんなマルクス主義党であれ、自分の綱領、革命的原則、党派性を尊重するなら、こうした要求を主張することは必須であった。日和見主義者はレーニンの統一条件につよく反対した。こうしてボリシェヴィキは、彼らの反党的振舞を暴露し、独自のボリシェヴィキ党を解消しようとするもくろみをぶちこわしたのである。

高揚期には、労働運動のインタナショナルな統一の問題が緊急なものになった。帝国主義は、民族的圧迫をつよめ、民族問の敵意をあおった。ブルジョアジーは、民族の線にそっても労働者階級を分裂させようとした。多民族的なロシアで抑圧民族の労働者と被抑圧民族の労働者との階級闘争を合流させるという任務は、きわめて重要な意義をもっていた。革命後の時期の特徴は、黒百人組的排外主義が横行し、すべての民族のブルジョアジーのあいだに民族主義が広がったこ

とであった。辺境地方の一部の労働者組織には、民族主義的傾向がつよまった。あらゆる民族主義的偏向者——ブント派、グルジアのメンシェヴィキ、ウクライナとアルメニアの社会民主主義者（いわゆる「特有派」）は、また彼らと一体になって解党派とトロツキー派は、党の民族綱領をはげしく攻撃した。すべてこれらは、労働運動の一貫した階級的性格と戦闘的統一とをそこなうおそれがあった。

民族問題は、当然、党の活動のうえで重要な地位を占めていた。中央委員会のクラクフ会議とポロニン会議は、この問題について決定を採択した。レーニンは、論文『民族問題についての論評』と『民族自決権について』のなかで、民族問題についてのマルクス主義的綱領と党の民族政策を詳述し、基礎づけた。民族問題については、多くのボリシェヴィキ著作家が書いている。そのなかで第一にあげなければならない労作は、イ・ヴェ・スターリンの『マルクス主義と民族問題』、エス・ゲ・シャウミャンの『民族的文化的自治について』、ペ・ペ・ストウチカの『ロシアとラトヴィアのプロレタリア統一』である。

レーニンは、ブルジョア民族主義とプロレタリア国際主義が二つの和解しがたく敵対する世界観であることを解明した。民族主義者にとっては、狭い民族的利益が至上であり、国際主義者にとっては、労働者の国際的な階級連帯が至上である。

民族問題は、——とレーニンは書いている——革命の一般的問題の一部である。資本主義のもとで民族的和合が可能であるかぎりでは、これは首尾一貫した、徹底的に民主的な共和制国家組織のもとではじめて達成される。ロシアの完全な民主化のためには、ブルジョア民主主義革命の勝利が是非とも必要である。ボリシェヴィキは、革命を念頭において、つぎのような綱領的要求

を主張する。民族の自決権、つまり分離して、独立の国家を創設する権利、なんらかの理由で当該国家のなかにとどまることをのぞむ民族のための地域的自治、すべての民族と言語の完全な同権が、それである。

このような民族綱領は社会主義をめざす労働者階級の闘争の成功を助けるであろう。資本主義とたたかうプロレタリアートの利益からして、すべての民族の労働者のできるだけ緊密な統一を達成し、彼らを単一のプロレタリア組織に合同させる必要がある。ごくわずかな民族的不信をもとりのぞくために、労働者階級は、諸民族の完全な同権をめざさなければならない。なぜなら、これにもとづいてはじめて、プロレタリアートの階級闘争における同志的統一がきたえられるからである。民族自決権という綱領的スローガンは、労働者を国際主義的に教育し、被抑圧民族の勤労大衆をプロレタリアートを中心に結束させる強力な武器である。党の民族綱領の核心はつぎの点に帰着する、とレーニンは書いている――

「諸民族の完全な同権、民族自決権、すべての民族の労働者の統合――マルクス主義も、全世界の経験も、ロシアの経験も、労働者にこの民族綱領をおしえている」(全集、第二〇巻、四八八―四八九ページ)。

民族問題のボリシェヴィキ理論は、労働運動内の民族主義にきわめて強力な打撃をあたえた。プロレタリアートのイデオロギーと政策の国際主義をまもりながらも、それと同時にボリシェヴィキは、被抑圧民族のブルジョア民族解放運動、民族的・植民地的圧迫にたいする彼らの闘争を進歩的なものとみて、熱心にこれを支持した。レーニンはこう書いている。「被抑圧民族のブルジョアジーが抑圧民族とたたかうかぎり、そのかぎりでわれわれは、いつどんな場合にも、他の

だれよりも断固として彼らを支持する。なぜなら、われわれは抑圧にたいするもっとも勇敢で、もっとも一貫した反対者だからである。被抑圧民族のブルジョアジーが自分たちのブルジョア民族主義の味方をするかぎり、われわれはそれに反対する」（同、四三九ページ）。

民族問題についてのレーニンの綱領は、国際的意義をもっていた。この綱領は、被抑圧民族をあなどり、帝国主義列強の植民地政策をますます公然と支持するようになっていた、第二インタナショナルの諸党のブルジョア民族主義的および反マルクス主義的な理論と実践に鋒先をむけていた。レーニンがこの時期に発展させた、労働運動のインタナショナルな統一、プロレタリア組織のインタナショナルな型についての原則的命題は、党の学説をいちじるしく豊かにした。

民族的抑圧の些細なあらわれにたいしても、またあらゆる種類の民族主義にたいしても容赦なくたたかうなかで、ボリシェヴィキは、ロシアのあらゆる民族の労働者の統一をかちとり、労働運動の基本的な中核体であり、指導勢力であるロシアの労働者を中心として彼らを団結させた。党は、民族のすぐれた息子をすべて吸収した。国のさまざまな地区のボリシェヴィキ組織は、多くの民族の勤労者のあいだで革命的活動をおこなった。ザカフカースの党組織は、プロレタリア国際主義の模範であった。この党組織は、ロシア人、グルジア人、アルメニア人、アゼルバイジャン人というさまざまな民族の労働者を統合していた。

非ロシア民族の社会民主主義組織のあいだで、ボリシェヴィキはすばらしい成功をおさめた。ポーランドのマルクス主義者は、ポロニン会議に参加し、ボリシェヴィキを支持した。ラトヴィア社会民主党の大会は解党派を非難した。エストニアとリトワニアのマルクス主義者は、プラウダ的傾向の合法新聞を発行した。

労働運動がたかまると同時に、ボリシェヴィキ党も成長し、つよくなった。重苦しい反動期ののちに、非合法生活の困難な事情のもとで、ボリシェヴィキは、中央委員会、中央委員会国内ビューローおよび中央委員会在外ビューローという強固な指導部、大きな日刊新聞と独自の国会議員団、いくつかの地方委員会と一連の市委員会、多くの工場細胞、合法組織内の党グループをもった大衆的な党を再建した。中央委員会は、ウラヂオストークからワルシャワ、ヴォログダからタシケントまで、一〇〇近い組織やグループと連絡をたもっていた。国内生活のすべての主要事件にこたえて、中央委員会と各地の党組織はビラを出した。それと同時に党は、不断の迫害のもとで、『プラウダ』のほかに合法的な雑誌『プロスヴェシチェーニエ』〔『啓蒙』〕、『ヴォプロスィ・ストラホヴァーニヤ』〔『保険問題』〕、『ラボートニツァ』〔『婦人労働者』〕を発行し、いくつかの労働組合の機関紙をボリシェヴィキの趣旨にそって運営することができた。

ボリシェヴィキ党は、プロレタリアートの闘争のあらゆる現われと形態を指導していた。党は、労働者の「部分的要求」のための闘争を組織し、プロレタリアートの経済的必要と政治的利益を結びつけて、不可分の一体にした。党は、ツァーリズムのはなはだしい専横行為や犯罪に反応をしめすことを労働者におしえた。

革命の方針を一貫してとるとともに、党は、労働者の地位のどんなささいな改善でも獲得しようと努力した。のちレーニンは、ボリシェヴィキのこの戦術についてこう書いている――「われわれは、改良のためのこの闘争を労働運動の革命的方法と結合しない社会主義政党は、セクトになる恐れがあり、大衆から遊離する恐れがあること、そしてそれは、真の革命的社会主義の成功にとってもっとも重大な脅威であることを、つねにおしえている」（全集、第二一巻、四三八

ページ)。

プロレタリアートを革命的・階級的に教育するうえで特別の地位を占めていたのは、メーデー、一九〇五年一月九日の記念日、レナ射殺事件の記念日であった。これら闘争の記憶すべき道標を記念するさい、党は、まえもって大衆のあいだで活動をくりひろげ、これらの日にストライキやデモンストレーションをおこなうよう労働者に呼びかけた。警察のどんな弾圧も、ボリシェヴィキの呼びかけのもとに労働者大衆が結束するのをさまたげることはできなかった。一九一三年一月九日には約二〇万人の労働者が、一九一四年一月九日には二五万人の労働者がストライキをおこなったし、一九一三年のメーデーには四二万人の労働者が、一九一四年のそれには五〇万人以上の労働者が参加した。

大衆的ストライキでも、街頭デモンストレーションでも、工場門前の集会でも、いたるところでボリシェヴィキは、革命が現状打開の唯一の方法であることをかたり、人民の宿望を表明するスローガンである、民主的共和制、八時間労働日、農民のための地主の土地の没収をかかげた。労働者の革命的ストライキや革命的要求の知らせは、百姓家にも、兵営のなかにも広がっていった。地主への隷属のために絶望にかられていた農民と、自分の無権利をいきどおっていた兵士は、労働者の革命闘争を自分の模範とみていた。労働者階級は、革命の旗をかかげて革命のために人民大衆を啓蒙し組織する、人民の指導者として行動した。

ボリシェヴィキ党はうまずたゆまず一貫して帝国主義戦争の脅威とたたかった。一九一二年一〇月にバルカン戦争がはじまると、中央委員会は、レーニンの書いたアピール『ロシアのすべての市民へ』を出した。そのなかで彼は、バルカン半島における帝国主義的陰謀、まず第一にロシ

っきり示されていた。

さしせまる戦争にたいする闘争には、労働者階級が全国民の利益をまもっていることがとくには、労働者階級の組織的な、自覚ある運動である」と強調した（全集、第一九巻、七一ページ）。禍をもたらし、地主と資本家には大儲けをもたらすだろう、と。レーニンは「平和の唯一の保障て糾弾し、準備中の戦争についての真相を大衆に明らかにした。この戦争は人民には未曽有の惨国の労働者に知られるようになった。『プラウダ』は多くの論文のなかで帝国主義者を憤然としアのツァーリズムのそれを暴露した。このアピールはヨーロッパの主な言葉で発行され、多くの

労働運動の波はますますたかまった。一九一四年の前半には、約一五〇万人の労働者がストライキをおこなった。ストライキは間断なく発生した。一月九日を記念するストライキといれかわりに、ペテルブルクのいくつかの企業におこった婦人労働者の集団中毒をきっかけとするストライキがおこなわれた。メーデーのあとには、バクー労働者のゼネラル・ストライキがはじまった。彼らの勇敢な闘争を支持するため、ペテルブルク、モスクワその他の都市の労働者が立ちあがった。一九一四年七月三日、警官隊がプチロフ工場の労働者の大衆集会に発砲した。血の制裁は、全国ではげしい憤激を買った。ペテルブルク委員会は、首都のプロレタリアにストライキを呼びかけた。七月四日には九万人、七日には一三万人、一一日には二〇万人の労働者がストライキをおこなった。デモンストレーションがはじまった。労働者は、ツァーリ官憲の行動や、戦争準備に抗議した。モスクワの労働者がストライキをおこなった。ペテルブルク、ルージにはバリケードが出現した。ボリシェヴィキ党の指導のもとにストライキ運動は、一九一四年の夏には、一九〇五年の夏よりも高まっていた。

ロシアにはすでに革命的危機があった。地主とブルジョアジーは、革命の火の手を消しとめる能力がないことをたがいに非難しあった。黒百人組の新聞は、『バダーエフを絞首台へ』という意味深長な標題のポグロム使嗾論文で、労働運動の活動家たちに肉体的制裁をくわえるよう呼びかけた。ツァーリ政府は「非常」手段をとった。ペテルブルクは戦陣を思わせた。七月八日『プラウダ』は閉鎖された。ボリシェヴィキの一斉検挙がはじまった。

革命的高揚は世界戦争によって中断された。

要　約

あらたな革命的高揚の時期（一九一〇—一九一四年）にボリシェヴィキ党は、国の生活における最大の政治勢力として行動した。

労働運動の根本問題全般についてメンシェヴィキにたいしてボリシェヴィキがおこなってきた非妥協的な闘争は、プラハ協議会で労働者の事業の裏切者であるメンシェヴィキをロシア社会民主労働党から放逐したことでおわった。党が日和見主義者と完全に手を切ったことは、ロシアにおける専制と資本主義を打倒するうえに、また国際労働運動の前途にとって、きわめて大きな意義をもっていた。協議会は、革命的高揚のもとでの党の政治方針と戦術をきめた。

ボリシェヴィキは、解党派、トロツキー派、民族主義的偏向者を粉砕し、非合法活動と合法活動とを結合して、労働者階級の多数者を獲得した。これは、労働運動の統一をかちとった党の歴史的勝利であった。この勝利は、労働運動からブルジョアジーの影響を一掃するための断固とし

たたかいをつうじて、プロレタリアートのすべての革命的勢力を結集する正しい政策をとった結果、達成されたのである。

『プラウダ』は、党と労働者階級とのむすびつきを密にし、強固にした。先進的なプラウダ派労働者の世代は、十月社会主義大革命と社会主義建設ですぐれた役割をはたした。ボリシェヴィキ党は、大衆を革命的に教育するために、合法的出版物と議会の演壇とをたくみに利用した。

党の活動できわだった地位を占めたのは、民族問題であった。労働運動内で民族主義の宣伝がつよまっていた情勢のもとで、ボリシェヴィキ党は、プロレタリア国際主義の模範であり、大国的排外主義と民族主義にたいする一貫した闘士であった。ロシアの少数民族地区のボリシェヴィキ組織は、民族主義的な政党や潮流とたたかい、大衆をプロレタリア国際主義の精神に立って教育した。民族問題にかんするレーニンの綱領と党の民族政策は、ボリシェヴィキだけが被抑圧民族の利益と権利の真の擁護者であることを、彼らに確信させた。

ボリシェヴィキ党は、労働運動のあらゆる闘争形態と組織形態に習熟して、それをたくみに利用し、ある形態から他の形態へす早くまたたくみに移っていった。党は、国内に革命的危機が成熟しつつある状況のもとで、プロレタリアートの戦闘を指導した。ボリシェヴィキを先頭とする労働者階級は、全人民の解放をめざす革命闘争の指導者として行動した。

ボリシェヴィキ党は、その革命的、国際主義的な活動全体によって、世界帝国主義戦争の最大の試練にたえる準備をととのえていた。

第六章　世界帝国主義戦争の時期におけるボリシェヴィキ党。ロシアの第二次革命（一九一四―一九一七年二月）

1　第一次世界戦争の勃発とその原因。第二インタナショナルの崩壊

世界帝国主義戦争は、一九一四年七月一九日（八月一日）にはじまった。それは、帝国主義のするどい矛盾によってひきおこされたものであった。

資本主義の最高で最後の段階である帝国主義の特徴は、独占体すなわちシンジケート、トラスト、百万長者の資本家の団体が支配していることである。ひとにぎりの独占資本家の手には、莫大な資本が蓄積された。資本は、利潤を追及して、植民地に、経済的発展のおくれた国々に殺到した。二〇世紀のはじめには、地球全体が、いくつかの資本主義列強のあいだに分けられていた。

巨大独占体の支配している帝国主義のもとでは、経済生活でも、政治生活でも、発展の不均等性は急激にはげしくなる。不均等性は、飛躍性をもつようになる。諸国家間の均衡はたえず破壊される。経済上、軍事上の力関係は変動する。先に出た国は、いっそう広い市場、いっそう大き

な植民地を要求する。だが、全世界がすでに大国家のあいだに分割されている以上、世界の新しい再分割は、どれかある国家を犠牲にして、すなわち戦争によって、おこなわれるほかはない。

帝国主義者はみな、はやくから世界再分割のための戦争を準備してきた。だが、とくに好戦的であったのは、植民地の分配にあずからなかったと考えていたドイツ軍国主義者であった。ドイツは、前世紀のおわりには工業発展の点でイギリスを追いこし、この競争相手をその旧来の市場からしめ出しはじめた。ドイツは世界を自分に有利に、根本的に再分割することを渇望していた。ロシアイギリス帝国主義者とドイツ帝国主義者の対立こそ、戦争の主因となったものであった。ロシアとドイツのあいだの対立も、戦争の誘発に大きな役割をはたした。ロシアの資本家は、ロシア市場でのドイツ商品の競争を、きわめてねたましく思っていた。ロシアの支配階級には、競争者を全部排除した新しい市場が必要であった。彼らは、コンスタンチノープルや、黒海から地中海に通じる海峡を強奪したがっていたし、アルメニア全土を占領する、すなわちアルメニアのうちトルコに支配されていた地方をも強奪するつもりでいた。ところが、ドイツ帝国主義者自身も近東をねらっていた。はやくも一八七九年から一八八二年にかけて、ドイツは、オーストリア＝ハンガリーおよびイタリアと、ロシアとフランスに対抗する同盟をむすんでいた。これにこたえて、この両大国は両大国で、同盟をむすんだ。ドイツが世界を支配するようになることをおそれて、イギリス帝国主義者は、ドイツにたいする共同闘争の協定（フランス語ではアンタント）をフランスとむすんだ。イギリスとフランスの同盟は「協商国（アンタント）」と呼ばれるようになった。ロシアは協商国に加盟した。イタリアも、戦争中に協商国がわに寝返った。こうして、ヨーロッパには、二つの敵対する帝国主義陣営が最終的にできあがった。

この一〇年間に成長をとげていた強力な革命運動を抑圧しようという、帝国主義者の欲求も、戦争の重大な原因であった。一九〇五—一九〇七年のロシア革命は、ヨーロッパとアメリカの労働者階級の闘争をつよめ、東方諸民族の民族解放運動をめざめさせた。革命の成長をおそれる列強政府、まず第一にツァーリ政府は、戦争が人民大衆の注意を革命闘争からそらすだろうと考えた。帝国主義者は、各国の労働者をたがいにけしかければ、国際プロレタリアートの統一を分裂させ、彼らを排外主義で毒し、先進的労働者のかなりの部分を屠殺し、こうして人民大衆の革命的強襲を鎮圧するか、少なくともよわめるかすることができるものと思っていた。

戦争は世界戦争となった。一五億以上の人口をもつ三八ヵ国が、一歩一歩この戦争にまきこまれた。約七四〇〇万人が戦争に動員された。

すべての国でブルジョア政党は、戦争を支持するよう国民に呼びかけた。ドイツでは、ロシアのツァーリズムがドイツ国民の民主主義的成果を破壊するおそれがある、と書いていた。フランスでは、プロイセン軍国主義がフランス民主主義をふみつぶすだろう、と断言していた。ロシアでは、ドイツ人が最初にわが国を攻撃した、彼らはわが国を隷属させようとしている、とくりかえしていた。一言でいえば、ブルジョア政党は、戦争があたかも民族を救うためにおこなわれているかのように、国民を説得することにつとめ、ブルジョアの祖国を擁護するよう呼びかけたのである。彼らは、これが最後の戦争であるというおとぎ話で、人民をねかしつけようとした。小ブルジョア政党は小ブルジョア政党で、ブルジョアジーを支持して、戦争を是認した。

第二インタナショナルのほとんどすべての党も、労働者の利益にそむいて、戦争支持にのりだした。多年第二インタナショナルの先進的な党であったドイツの社会主義者は、戦費を政府にあ

成したばかりでなく、反動的なブルジョア政府にはいりさえした。
ロシアでは、メンシェヴィキ派国会議員団が戦費にいったんは反対投票した。ロシア・プロレタリアートの反戦気分は、それほどつよかったのである。だが、これは、労働者階級のあいだに彼らがもっていた影響力のなごりをうしなうことをおそれるところからきた駆引であった。その後、メンシェヴィキは、祖国擁護というブルジョアのスローガンを支持した。エス・エルの党は、戦争の問題で分裂した。同党の大多数も祖国擁護派になった。同党の左翼は、はじめのうちは戦争に反対し、社会主義者の国際反戦諸会議に参加したほどであったが、祖国擁護派と手を切ることを拒絶した。
第二インタナショナルは破産し、崩壊した。ロシアのメンシェヴィキとエス・エルもふくめて協商諸国の社会主義者は、一九一五年にロンドンでひらいた会議で、他方、ドイツ・ブロックの社会主義者はウィーンの会議で、自国ブルジョアの祖国の擁護を是認した。
これは、労働者階級の利益を公然と裏切るものであり、社会主義の事業をまっこうから裏切るものであった。社会民主党の指導者は、一度ならず反戦決議を採択しており、帝国主義戦争に反対する義務を自国の労働者と国際労働運動におっていた。そればかりでなく、シュトゥットガルト大会（一九〇七年）とバーゼル大会（一九一二年）で、第二インタナショナルは、すべての社会主義政党の名で厳粛に労働者に呼びかけ、戦争の勃発に反対するか、すでにおきた戦争を中止させるためにたたかうだけでなく、戦争の結果生じた危機を利用してブルジョアジーの打倒をはやめるためにもたたかうよう呼びかけていたのである。プロレタリアートの事業を裏切り、自国

のブルジョアジーを支持することによって、第二インタナショナルは、帝国主義者がきわめて破壊的で長期にわたる血なまぐさい戦争を人類にもたらしたことに政治的な責任をおった。

では、社会主義諸党が、社会主義を裏切ったのはなぜであろうか？

植民地の略奪によって、独占資本家は、自分の利潤の一部を勤労者の小グループと分けあうことができるようになった。数十年のあいだに、一連の先進資本主義国には、労働貴族、合法的労働組合の役員、社会民主党の議員と、彼らの御用をつとめる機構とが出てきた。これらグループの代表者は階級協力を主張し、階級闘争を否定した。彼らは、革命的な闘争手段を拒否して、自国ブルジョアジー、自国政府をたすけた。こうして第二インタナショナル内には、小ブルジョア的日和見主義者の潮流がうまれた。ボリシェヴィキは、第二インタナショナルの国際大会で日和見主義者に断固として反対し、この闘争をつうじて左翼分子を結集した。レーニンは、社会民主党の指導者は日和見主義との闘争を口先でみとめているにすぎず、実際には彼らはブルジョアジーに寝がえるであろうと、再三警告した。

社会民主主義者が議会で戦費に賛成投票し、一連の国で社会主義者が政府にはいったことは、これらの党が帝国主義的ブルジョアジーと公然と階級協力していること、国内平和の政策を実行していること、略奪戦争で自国の帝国主義政府を支持していることを、意味していた。日和見主義者とブルジョアジーの秘密のブロックは、戦時には公然たる同盟になった。ロシアでこうした政策を実行したのは、メンシェヴィキ（プレハーノフ、ポトレソフ、チヘイゼその他）とエス・エルであった。日和見主義は、排外主義に、国際的原則のまっこうからの裏切りに、ブルジョアジーの公然たる支持に成長転化した。社会排外主義者は、労働者にブルジョアの祖国を擁護する

よう呼びかけ、自国の労働者を他の国々の労働者にけしかけ、勤労者にたがいに殺しあうよう呼びかけた。

ブルジョアジーを公然と擁護していた右翼のほかに、第二インタナショナルのすべての党には、日和見主義の他の形態も存在していた。すでに戦前にあらわれていた中央派の潮流がそれであった。中央派は、公然たる日和見主義者を党内にとどめておくことに賛成した。こうして、彼らは、後者を仲介としてブルジョアジーとの同盟を維持していた。中央派の潮流を代表していたのは、カウツキー、トロツキー、マルトフであった。レーニンは、彼らが公然たる日和見主義者よりも「労働運動にとって百倍も有害で危険である」と考えていた。なぜなら、彼らは、自分が労働者を裏切っていることを、左翼的な空文句でおおいかくしていたからである。トロツキーは「勝利でもなく、敗北でもなく」というスローガンをかかげたが、これは万事をもとのままにしておくこと、したがってツァーリズムもそのままにしておくことを意味していた。それは、あきらかに排外主義的なスローガンであった。なぜなら、実際にはそれは、ツァーリ政府の防衛、ツァーリズムの擁護を意味していたからである。

> 「『勝利でもなく、敗北でもなく』というスローガンに味方する人は」とレーニンは書いている。「意識的にしろ無意識的にしろ、排外主義者である。そういう人は、いくらひいき目に見ても妥協的な小ブルジョアであり、いずれにせよプロレタリア的政策の敵で、現在の政府、現在の支配階級の味方である」（全集、第二一巻、二八三ページ）。

ただ一つの党、ボリシェヴィキ党だけが、戦争と平和の問題について革命的マルクス主義の一貫した政綱を作成し、それを実行にうつすために英雄的にたたかっていた。ブルガリア社会民主

労働党（「テスニャキ派」）も戦争に反対した。同党は、デ・ブラゴエフ、ゲ・ディミトロフ、ヴェ・コラロフを先頭として、軍隊内や銃後で活発な宣伝をくりひろげ、大衆のあいだに戦争にたいするにくしみをめざめさせた。セルビア社会民主党も戦争に反対した。イタリア社会党は、戦争のはじめには国際主義的な立場をとった。しかしイタリアが参戦すると、同党は実質上、中央主義の立場をとった。ドイツで帝国主義戦争にあくまで反対したのは、K・リープクネヒト、R・ルクセンブルク、K・ツェトキン、F・メーリングであった。しかし、彼らも、レーニンとボリシェヴィキのかかげた、自国政府の敗北と帝国主義戦争の内乱への転化というスローガンを正しく理解していなかったので、これを支持しなかった。

帝国主義戦争賛成、したがって帝国主義賛成か、帝国主義戦争反対、したがって革命賛成か——これが、この時期の諸政党のあいだに引かれる一線であった。第二インタナショナルの諸党の圧倒的多数は、基本的には、戦争賛成、自国ブルジョアジーと自国政府支持、他国民にたいする戦勝賛成であった。

レーニンを先頭とするボリシェヴィキ党は、流れに抗してすすみ、戦争に反対し、帝国主義戦争を内乱に、すなわち自国政府、自国のブルジョアジーと地主にたいする戦争に転化するためにたたかうよう呼びかけた。帝国主義者の召使どもが戦争賛美を合唱するなかに、社会主義の闘士、人民の利益の闘士の雄々しい声がひびいた。国際労働運動全体を長期にわたって水びたしにするようにみえた、滔々たる日和見主義のなかで、レーニンとボリシェヴィキ党は、マルクス主義の旗、国際主義の旗を高くかかげ、プロレタリアの国際連帯にたいする忠誠の模範をしめした。

2　帝国主義戦争の時期における大衆のあいだでの党の革命的活動

戦争がはじまったとき、レーニンは、オーストリア＝ハンガリーのポロニン村におり、そこで憲兵に逮捕された。牢獄から釈放されたのち、彼は、スイスのベルン市にうつった。一九一四年の八月末、レーニンは、戦争についてのテーゼを、同地のボリシェヴィキ・グループにしめした。テーゼは、国会議員エフ・エヌ・サモイロフを通じてロシアにおくられた。一九一四年一〇月、党中央機関紙『ソツィアル－デモクラート』に、レーニンの書いた、ボリシェヴィキ党中央委員会の宣言『戦争とロシア社会民主党』が発表された。

大多数の党は、だれが最初に戦争をはじめたかで戦争の性格を規定し、この見地から戦争を攻撃戦争と防衛戦争とに分けていた。別の党は戦争がだれの領土でおこなわれているかで戦争の性格を規定しようとしていた。ブルジョア平和主義者は、あらゆる戦争に反対する闘争を呼びかけた。なぜなら、彼らの意見によると、どの戦争も暴力、略奪、他国領土の侵略をもたらすだけだからである。レーニン、ボリシェヴィキは、戦争を攻撃戦争と防衛戦争とに分けることは、あやまった分けかたであるとして排撃した。どの戦争にも、防禦もあれば、攻撃もある。侵略軍も、ときとすると防禦にうつらざるをえないし、それとまったく同じように、解放戦争でも攻撃が広くもちいられる。戦争の性格を規定するさいには、だれが最初に戦争をはじめたか、だれがだれを攻撃したかということも、重要ではない。帝国主義者たちはみな、世界戦争を準備していた。

そしてドイツは、もっとも有利な時機にこれをはじめたのである。

肝心な点は、どの階級が戦争をおこなっているか、戦争はどういう政治をつづけているか、支配階級はその戦争でどういう政治的目的を求めているか、にある。この見地から、革命的マルクス主義者は、戦争を正義の戦争と不正義の戦争に分ける。抑圧階級にたいする被抑圧階級の戦争、すなわち奴隷所有者にたいする奴隷の、地主にたいする農奴的農民の、ブルジョアジーにたいする賃金労働者の戦争、民族解放戦争、民族的隷属の危険にたいする人民の戦争、勝利したプロレタリアートが社会主義を守って、帝国主義諸国家に反対しておこなう戦争——こういう戦争をマルクス主義者は正義の戦争とみとめる。

世界帝国主義戦争は、支配階級が戦前におこなっていた政治の継続であった。国内での帝国主義者の政治は、要するに、自分の地位を固め、勤労者の搾取を強化することであった。この政治の国際舞台での継続は、世界支配のための、最強国に有利に世界を再分割するための闘争であり、新しい市場、新しい植民地を求めることであり、従属諸国の略奪をつよめることであった。だから、世界戦争は、どちらのがわについても帝国主義的な戦争であった。

この戦争にたいするボリシェヴィキ党の態度も、戦争の帝国主義的な性格からきていた。労働者階級の利益と社会主義の理想とに忠実なボリシェヴィキ党は、中央委員会の宣言のなかで、反戦闘争を大衆に呼びかけただけでなく、戦争から生じる危機をツァーリズム打倒のために利用するよう呼びかけた。党の基本的なスローガンは、帝国主義戦争を内乱に、支配階級にたいする革命に転化せよというスローガンであった。この目的をとげるために、党は一連の措置をかかげた。

（一）戦費に賛成投票することを絶対に拒否し、社会主義政党の代表者はブルジョア政府からか

ならず脱退すること、(二) ブルジョアジーとの協力、「国内平和」を完全に拒否すること、(三) 非合法組織がない国、合法組織内での活動が困難になっている国では、非合法組織をつくること、(四) 戦線での兵士の交歓を支持すること、(五) プロレタリアートのあらゆる革命的な大衆的行動を支持すること、がそれである。

最初のスローガンと固くむすびついた第二のスローガンは、帝国主義戦争におけるツァーリ政府の敗北というスローガンであった。これは、党が人民に破壊行為を、倉庫の爆破やそれに類する行為を呼びかける、という意味ではまったくなかった。敗北のスローガンは、プロレタリアートの党に、政府を強化することになるような政府の方策をけっして支持しないことを要求していた。帝国主義戦争における自国政府の敗北という政策は、革命闘争の継続を意味していた。敗戦はツァーリズムをよわめることによって革命闘争を促進し、ツァーリズム打倒と革命の勝利とを容易にした。ボリシェヴィキの戦術に反対した連中は、ツァーリズムの敗北をめざした政策はドイツの勝利を意味するかのように、主張した。だが彼らは、レーニンが戦争における自国政府の敗北というスローガンをロシアの社会主義者についてだけではなく、すべての参戦国の社会主義者について必須なものと考えていたし、この点にこそボリシェヴィキの戦術の国際主義があらわれていたということに口をとざしていた。

実際には敗北のスローガンは、党にしろ、個々の革命家にしろ、その真の革命性と国際主義とを確かめる試金石であった。敗北のスローガンを採用することによってのみ、帝国主義戦争を内乱に転化するための闘争が、現実の基盤にすえられたのである。

最後に、戦時に党のかかげた第三のスローガンは、破産した第二インタナショナルと完全に手

ーとの同盟を維持することであったろうから。レーニンは、新しい第三インタナショナルを創設する任務をかかげた。

ブルジョア政党や小ブルジョア政党は、ボリシェヴィキを非難して、祖国の利益に無関心だとか、裏切りだとか、愛国心に欠けているとか言った。反人民的な政策によってこの偉大な国を帝国主義国家――イギリス、フランス――の手ににぎられた玩弄物にかえた連中が、ボリシェヴィキは民族的誇りの感情をもたないといって中傷したのである。レーニンは、こうした中傷を憤然としてしりぞけた。論文『大ロシア人の民族的誇りについて』のなかで、彼はこう書いている――

「民族的誇りの感情は、われわれ大ロシア人の自覚したプロレタリアには縁のないものであろうか？　もちろん、そうではない！　われわれは、自分の言語と自分の祖国とを愛する。われわれは、なによりも、祖国の勤労大衆（すなわち祖国の人口の一〇分の九）を民主主義者と社会主義者の自覚した生活に引き上げるために、活動している。ツァーリの絞刑吏、貴族、資本家どもが、美しいわが祖国をどのような暴行と抑圧と愚弄に会わせているかを、見たり感じたりすることは、われわれにとってなによりも心のいたむことである。これらの暴行がわれわれのあいだ、大ロシア人のあいだからの反撃をひきおこしたこと、この社会が、ラヂーシチェフや、デカブリストや、七〇年代の雑階級出の革命家を輩出させたこと、大ロシア人の労働者階級が一九〇五年に大衆の強大な革命政党をつくりだしたこと、そして大ロシア人の農民が、これと時を同じくして民主主義者となりはじめ、坊主と地主を倒すことに着手したこと、これらのことをわれわれは誇りとする」（全集、第二一巻、九四ページ）。

ボリシェヴィキの行動は、祖国一般に反対するものではなく、地主・ブルジョアの祖国に反対し、地主と資本家が勤労者を抑圧している帝政ロシアを祖国のようにみせかけようとすることに反対するものであった。党は、ブルジョアの祖国解釈の嘘八百を、大衆にあきらかにした。

レーニンは、プロレタリア国際主義と愛国主義との相互関係をマルクス主義者がどう理解しているかをしめした。愛国者というのは、地主とブルジョアジーの利益のための略奪戦争に賛成したり、支配階級の特権の維持に賛成したりする者ではなく、人民のためにたたかい、「その隣人との関係を、偉大な民族をはずかしめるような、特権という農奴制的原則のうえにうちたてるのでなく、平等という人道的原則のうえにうちたてる、自由で、独立した、自主的で、民主主義的で、共和主義的な、誇り高い大ロシア」（全集、第二一巻、九五ページ）をのぞむ者である。「共産主義革命の主要な推進力」であるロシアのプロレタリアートは、人民をツァーリズムの打倒に立ちあがらせ、社会主義のためにたたかうとともに、自由で、独立した、民主主義的な祖国のためにたたかった。

「大ロシア人の民族的誇り（奴隷的に理解した誇りではなく）の利益は」とレーニンは書いている。「大ロシア人（と他のすべての民族）のプロレタリアの社会主義的な利益と一致する」（同、九七ページ）。

一九一五年二月、ベルンでボリシェヴィキ在外支部会議がひらかれ、同会議は、党の戦術を審議して、戦争についてのスローガンを承認した。

レーニンの方針にもとづいて、ボリシェヴィキは、大衆のあいだで革命的活動を広く行なった。ツァーリの官憲は、ボリシェヴィキ党におそいかかって、前代未聞の弾圧をくわえた。破壊さ

れないような党委員会は一つもなかった。ペテルブルク委員会は戦争中に三〇回以上の逮捕にあった。モスクワ組織も、警察の打撃をまぬがれなかった。モスクワ委員会を再建しようとするくわだてはなんどか挫折した。サマラ委員会は、戦争の一年間に六回も壊滅させられた。

ボリシェヴィキの出版物は、合法雑誌『ヴォプロスィ・ストラホヴァーニヤ』もふくめて、みな禁止された。まだのこっていた労働組合も大部分解散させられた。サマラの「健全な気晴し」協会、モスクワの「教養」クラブ、ペトログラートの「独学協会」のような文化啓蒙団体すら、革命的宣伝の本拠や党活動家の集合所になるかもしれないという懸念から、閉鎖された。

だが、警察のテロルも、挑発も、資本家の弾圧も、党の意志をくじくことはできず、党の活動を中止させもしなかった。開戦後一週間に、ペトログラート、エカテリノスラフ、ハリコフ、キエフ、モスクワ、ウファ、トゥーラ、サマラのボリシェヴィキ組織は、反戦ビラを出した。

ボリシェヴィキ派国会議員は、一連の工業中心地をまわって、党委員会を再建したり、組織したりし、また労働者集会をひらいて、反戦決議をおこなったりした。一九一四年一一月二—四日に、ボリシェヴィキ派議員は、ペトログラート近郊のオゼルキ村で会議をひらき、これにはペトログラート、イヴァノヴォ-ヴォズネセンスク、ハリコフ、リガのボリシェヴィキ組織の代表が参加した。会議は、レーニンの戦争についてのテーゼを審議し、これを完全に支持した。

挑発者が会議の場所をばらした。一一月四日、警察は出席者を全員逮捕した。国会議員は捜索をうけたのち釈放されたが、一一月五日の夜半、逮捕された。ツァーリの官憲は、ボリシェヴィキ派議員を裁判にかけた。裁判は一九一五年二月にひらかれた。ボリシェヴィキ派議員は、法廷の演壇を党の反戦スローガンを公然とのべるために利用した。ツァーリの法廷は、ボリシェヴィ

キ派議員をトゥルハンスク辺区（東シベリア）に終身流刑に処する判決をくだした。

会議に参加していたカーメネフも、勇敢な議員たちといっしょに、裁判にかけられた。カーメネフは戦争における自国政府の敗北という党のスローガンを否認した。彼は、自分がレーニンや党と意見のちがうことを立証するために、祖国防衛派のメンシェヴィキを引合いにだした。この男は、カーメネフが党の政策と意見をことにしていたことを裏書きできるというのであった。党は、カーメネフの態度を裏切り的な態度として非難した。

ボリシェヴィキ派議員たちの裁判は、帝国主義戦争のもとで真に国際主義的な党はどういう行動をとらなければならないかを、全世界のプロレタリアートにしめした。第二インタナショナルの日和見主義者は、ブルジョア政府にはいって物笑いになったが、ボリシェヴィキ派議員は、苦役についても社会主義の旗に忠誠を守るほうをえらんだのである。

ボリシェヴィキ派議員の逮捕は、党の活動を困難にはしたが、中止させることはできなかった。一九一五年の秋には、長期間ではなかったが、中央委員会国内ビューローを再建することができた。党組織と党グループは、中断しながらではあったが、二〇〇以上の都市で活動していた。追及にもかかわらず、ボリシェヴィキは、一九一五年にペトログラードおよびハリコフ市党会議、イヴァノヴォ―ヴォズネセンスク近くでの中央工業地区党会議、キエフ、エカテリンブルクでの協議会、ザカフカース党組織協議会をひらいた。ラトヴィア辺区社会民主党中央委員会は、一九一五年の夏まで活動していた。ペテルブルク委員会は、戦争中に九〇種以上のビラを、三〇万部以上だした。一九一五年の春と夏だけでも、六〇以上の党組織がビラを出した。全部で六〇〇種以上のビラがだされた。

ボリシェヴィキ党は、革命的宣伝のためにあらゆる機会を利用しようとした。ボリシェヴィキは、非合法の労働組合や、労働者協同組合や、疾病保険組合や、警察がまだ閉鎖していなかった文化啓蒙団体で活動していた。これらの組織のなかでは、大衆を獲得するために、社会排外主義者との闘争がおこなわれた。警察は祖国防衛派のメンシェヴィキをたすけた。ある集会の参加者たちが逮捕されたあとで、祖国防衛派は放免されるが、ボリシェヴィキは苦役にやられるという例がしばしばあった。たえまない迫害のもとで、ボリシェヴィキは、労働組合その他の労働者組織のなかで優勢な影響力をかちとることに成功した。

ボリシェヴィキが労働者の公認の指導者であったことを、もっともはっきりと立証したのは、ストライキ闘争の経過であった。

戦争は、勤労者に、飢え、寒さ、無数の犠牲をもたらした。戦争は、国民経済の崩壊をひきおこした。国民の必要はみたされなかった。運輸は、食糧の輸送を遂行できなかった。パンがたりなかった。すべての商品の価格が急騰したが、賃金は以前の水準にあったか、ほんのわずか上がったにすぎなかった。ブルジョアジーは空前の利潤をえていたが、広範な人民大衆は戦争のすべての重荷をせおわされていた。

戦線では、ツァーリの軍隊は、緒戦で勝利をおさめたのち、敗北をなめはじめた。ドイツ軍は、ポーランドや、バルト海沿岸地方とベロルシアとの一部を占領した。数百万の人々が安住の地をはなれて、ロシアの奥地にうつった。避難民の状態は、その他の住民の状態よりも苦しかった。

人民大衆のなかには、戦争とツァーリ専制の政策にたいする不満が、ますますつよくなっていった。最初に動きだしたのは労働者であった。ストライキの数は増加した。一九一四年（戦争が

はじまったあと）には約七〇件のストライキがおこり、約三万七〇〇〇人の労働者が参加したにすぎなかったが、一九一五年には低めにみつもられた官庁資料によってさえ、一〇〇〇件以上のストライキがおきて、五〇万人以上の労働者が参加した。ツァーリの官憲は、ストライキを残酷に弾圧した。一九一五年六月、警官隊はコストロマでストライキ労働者のデモに発砲した。五〇人以上の死傷者が出た。八月のはじめ、警官隊がイヴァノヴォ-ヴォズネセンスクのストライキ労働者の大衆集会に発砲した。一四〇人以上の死傷者が出た。ペテルブルク委員会は、これらの発砲に抗議するストライキを組織した。

ストライキ運動が成長し、しかもそれを鎮圧する力がツァーリズムにないことに仰天した資本家は、労働者をなだめて自分たちの影響下におくために、巧妙な駆引を企てた。一九一五年に官憲の許可をえて、戦時工業委員会が設置された。これらの委員会の創設は、ブルジョアジーがツァーリ政府を支持して戦争のための工業活動をさかんにすること、労働者の搾取を強化すること、さらにまた巨額の利潤をもたらす軍需発注の割当てに資本家が口をいれることができるようにすることを、目的としていた。ブルジョアジーは委員会のもとに「労働者部会」をもうけ、こうして、ロシアにはブルジョアジーとプロレタリアートの「階級平和」が確立されていることをしめすことにきめた。メンシェヴィキは、ブルジョアジーの助手として行動し、労働者が「労働者部会」に参加することに賛成した。実質的には、彼らの立場は、ブルジョア政府にはいった西ヨーロッパの社会主義者の立場とすこしもちがわなかった。なぜなら戦時工業委員会は半政府機関だったからである。

ボリシェヴィキは、労働者が戦時工業委員会に参加することに、断然反対した。ボリシェヴィ

キに反対して、ツァーリの行政当局、ブルジョアジー、エス・エル、メンシェヴィキが、統一戦線をはって行動した。それにもかかわらず、ボリシェヴィキは、ブルジョアジーの企みをぶちこわすことに成功した。労働者階級の圧倒的多数は、戦時工業委員会に参加することに反対した。二三九の地方戦時工業委員会のうち、労働者代表の選挙がおこなわれたのは七〇委員会にすぎず、代表が選出されたのは三九委員会にすぎなかった。ロシアのプロレタリアートは、戦争熱にうかされていなかった。

ボリシェヴィキは、兵士のあいだで大々的な活動をおこなった。軍隊には工業労働者が動員されており、そのなかには、革命闘争に積極的に参加した者が数万人もいた。この層こそ、軍隊内の党の主柱であった。

ペトログラート、モスクワ、ハリコフ、キエフ、エカテリノスラフ、リガその他多くの工業中心地の党委員会は、兵士むけのビラを発行した。軍隊には、農民、主として貧農の数百万の大衆が集中されていた。ボリシェヴィキは、革命をめざす闘争のために労働者と農民の勢力を統合するために、このことを利用した。ボリシェヴィキは、ビラのなかで、平和の問題だけでなく、土地の問題をも提起した。彼らは、銃後におけるストライキ運動や、革命的な不満が広範な大衆のあいだに高まっていることや、ツァーリズムに反対して共同闘争しなければならないことやを兵士に話してきかせ、戦線での交歓を呼びかけた。交歓の個々の例は、すでに一九一四年のおわりにみとめられたが、一九一五年の春には、軍当局がロシア＝オーストリア戦線での交歓について再三報告している。つぎの年には、交歓は頻繁なできごとになった。いくつかの部隊には、党組織がつくられた。陸海軍で活動していたのは、エヌ・ヴェ・クルィレンコ、ア・エフ・ミャスニ

コフ（ミャスニキャン）、エム・ヴェ・フルンゼ、エス・ゲ・ロシャリその他のすぐれたボリシェヴィキであった。

海軍でも党の大々的な政治活動がおこなわれた。艦隊の兵員は、主として熟練労働者から徴募されていた。バルチック艦隊では、各軍艦に党グループがつくられていた。これらのグループを統合していたのは、「クロンシタット軍事組織中央集団」であった。クロンシタット集団はボリシェヴィキのペテルブルク委員会の軍事組織と連絡をつけた。

一九一五年一〇月、戦艦「ガングート」号に水兵の反乱がおきた。だが同艦の司令部は、この反乱をてばやく片づけることに成功した。約一〇〇人の水兵が逮捕された。一二月に、裁判所は二六名の水兵に懲役を宣告した。ペテルブルク委員会は、陸海軍にアピールをだして、革命的軍隊が革命的プロレタリアートおよび全人民と一体となるよう呼びかけた。一九一六年一〇月、ボリシェヴィキ水兵の別のグループにたいする裁判がおこなわれたとき、ペテルブルク委員会は、ふたたび労働者に抗議ストライキを呼びかけた。ペトログラートで三日間約一三万人の労働者がストライキをおこなった。労働者の大衆行動は政府を非常におじけづかせたので、軍法会議は、水兵に死刑の適用をあえてしなかった。労働運動と兵士の行動とのむすびつきは、プロレタリアートと農民の同盟が強化したことを、はっきり立証していた。

レーニンを先頭とする中央委員会は、この時期には新聞『ソツィアル－デモクラート』をつうじて党を指導していた。同紙には、レーニンの論文、中央委員会や党会議の決議や指令、全国にわたる党の活動の資料が発表された。中央委員会と党組織との連絡は、往復文書で取られていた。中央委員会の指令や指示は、特派された代表者か、レーニンをおとずれる活動家をつうじてつった

えられていた。国外ではいくつかの理論上の論集——『コムニスト』第一—二号、『ソツィアル-デモクラート』論集』の二号が出版された。ロシア国内では、ビラ以外に、合法・非合法の新聞雑誌が一〇種以上発行されていた。

テロルにもかかわらず、党の成長は中断しなかった。逮捕された者にかわって、ツァーリズムとの闘争には新しい党員がはいってきた。一九一六年末ペトログラートには二〇〇〇人以上の党員がいた。戦時に入党した者のあいだには、ア・ア・アンドレーエフ、ア・イ・ミコヤン、ア・ア・ジダノフ、エヌ・エヌ・デムチェンコ、ヤ・ベ・ガマルニク、ヴェ・カ・ブリュッヘルがいた。ボリシェヴィキが活動していた捕虜のあいだからは、ハンガリーの革命家ベラ・クンが党にはいった。

一九一六年の秋には、中央委員会ロシア国内ビューローがふたたび再建された。同ビューローはレーニンと連絡をもっていた。地方組織も活動していた（モスクワ、イヴァノヴォ-ヴォズネセンスク、ドンバス、カフカースで）。一九一六年にはサマラとエカテリノスラフで全市会議がひらかれ、マケーエフ委員会の招集したドンバス・ボリシェヴィキ地区会議が二回ひらかれた。

党はあらゆる機会を利用して、国際プロレタリアートにボリシェヴィズムの思想を知らせ、こうして社会民主主義的労働者が日和見主義者の影響を脱するのをたすけた。

一九一五年三月、ボリシェヴィキは、ベルンの国際社会主義婦人会議に参加した。この会議には、八ヵ国から二五名の代表が出席していた。同会議は、ボリシェヴィキ婦人組織の主唱で招集されたものであった。ボリシェヴィキ中央委員会の代表団（イ・エフ・アルマンドとエヌ・カ・クルプスカヤ）は、決議案を提出したが、そのなかで代表団は、社会排外主義を非難し、帝国主

義戦争を内乱に転化せよというスローガンを採択するよう提案した。ボリシェヴィキは、一九一五年の三月末、これもベルンでひらかれた国際社会主義青年会議で発言した。会議には一〇ヵ国の代表が参加していた。国際青年デーを毎年実施することが決定された。これらの会議は、ボリシェヴィキの提案を完全に採択したわけではなかったが、ボリシェヴィキの発言は、国際革命運動の発展につよい影響をあたえた。

一九一五年の八月末、スイスのベルンに近いツィンメルヴァルト村で、国際社会主義者会議がひらかれた。一九一五年の夏、社会主義者のツィンメルヴァルト会議のひらかれるまえに小冊子『社会主義と戦争』が出版された。このなかでレーニンは、革命的マルクス主義者の戦争にたいする態度を基礎づけた。小冊子はドイツとフランスで非合法に配布され、ノルウェーで印刷された。国外でロシア語で発行された小冊子は、ロシア国内に密送された。

ツィンメルヴァルト会議には、一一ヵ国の三八名の代表が出席していた。代表の大多数は、カウツキーと見解を同じくする中央派であった。会議は宣言を採択した。その主要求は平和のための闘争であった。だが宣言には、帝国主義戦争を内乱に転化せよというスローガンも、自国政府の敗北というスローガンも、日和見主義者と完全に手を切れというスローガンも、はいっていなかった。

会議では不徹底な分子あるいは動揺分子が優勢ではあったが、ボリシェヴィキはこの会議の活動に参加した。ボリシェヴィキは、社会排外主義者との闘争でこれらの分子と接近することが可能であり、また必要であると考えていた。だが、レーニンは、これらの分子の立場に合致し、彼らに受けいれられることだけにかぎらずに、彼らの動揺を批判し、彼らの中途半端な態度を指摘

するよう、提案した。

レーニンの主唱で、会議では、八名の代表からなるツィンメルヴァルト左派が結成された。同グループは、レーニンのスローガンを基本的に支持する決議案を提出し、また特別な声明で、宣言に欠けている点を指摘し、宣言の起草者が日和見主義と手を切るつもりのないことを指摘した。だが、宣言が反戦闘争の第一歩を意味していたので、グループはこれに賛成投票した。

会議がおわってから、ツィンメルヴァルト左派は、特別の会合で組織的にはっきりした形をとり、指導機関であるビューローを選出した。このグループは声明をだして、自分たちはツィンメルヴァルト連合のなかにとどまりながらも、左派の名で会議に提案された決議案と宣言案とにもとづいて、国際的な規模で独自の活動をおこなうであろう、とのべた。左派は、ドイツ語の機関誌『フォルボーテ』(『先駆者』)を発行した。左派の指導勢力は、ただ一つ首尾一貫した立場をとっていたボリシェヴィキであった。

ほかならぬツィンメルヴァルト左派を中心として、すべての国で国際主義的運動がおこりはじめた。この運動の成果は、一九一六年四月にスイスのキーンタール村でひらかれたツィンメルヴァルト派の第二回国際社会主義者会議にあらわれた。この会議では、四三名の代表のうちツィンメルヴァルト左派は一二名であったが、多くの問題について、左派は票数のほぼ四五%をあつめた。

ボリシェヴィキは自分の国際的な責務をはたした。彼らの献身的な活動は、のちにすべての資本主義国に共産党がうまれるのをたすけた。

3 ヴェ・イ・レーニンによる社会主義革命理論の発展

帝国主義は、人類を社会主義革命にぴったり近づけた。戦争は、革命の前提条件の成熟をはやめた。プロレタリアートの階級闘争の新しい条件は、革命の問題の新しい取りあげ方、変化した情勢にマルクス主義の基本原則を創造的に適用する能力を、マルクス主義党に要求していた。

マルクス主義の創始者たちは、資本主義制度が発生し、発展し、没落する法則をあきらかにした。レーニンは、マルクス主義者のなかではじめて、新しい時代を深く分析し、マルクスとエンゲルスの社会主義革命の学説を発展させた。一九一六年に彼は、労作『資本主義の最高の段階としての帝国主義』を書いた。歴史上の膨大な具体的材料を分析して、レーニンは、二〇世紀のはじめに資本主義は新しい段階である帝国主義に成長転化したという結論に達した。

「帝国主義は」とレーニンは書いている。「独占体と金融資本との支配が成立して、資本の輸出が顕著な重要性をもつようになり、国際トラストによる世界の分割が始まり、巨大な資本主義国による地球の全領域の分割が終わった、そういう発展段階の資本主義である」(全集、第二二巻、三〇八ページ)。

帝国主義は、資本主義のすべての矛盾を極度に激化させた。激化したのは、まず第一に、その基本的矛盾であった。生産はますます社会的なものになったが、取得はいぜんとして私的なものであり、生産手段はひとにぎりの独占資本家の私有財産であった。生産力の発展における長足の

進歩は、勤労者のためではなく、独占資本家のためにおこなわれた。莫大な富をその手に集中した全能の独占体は、事実上全国家権力を自由にしていた。いたるところで、政治的反動がつよまった。独占体の支配が勤労者にもたらしたものは、急激な物価騰貴、失業、軍隊と国家機関を維持するための重税であった。抑圧と搾取の前代未聞の強化は、労働と資本、ブルジョアジーとプロレタリアートの矛盾を異常に激化させた。

それと同時に、世界の再分割をめぐって、個々の帝国主義国家あるいは国家群間の対立が、ひどく激化した。その結果、世界戦争がおこったのである。

最後に、ひとにぎりの帝国主義国家と、多くの植民地・半植民地との対立も、大幅に激化した。資本主義的関係が発展した結果、植民地には、人民大衆の先頭に立つ能力をもった民族プロレタリアートが登場した。

帝国主義のもとですべての矛盾が極度に激化することこそ、資本主義の最後の段階という帝国主義の性格を規定するものである。帝国主義は「死にかけている資本主義」である、とレーニンは書いている。

レーニンは、その革命的活動の当初から、革命理論のきわめて重要な問題を究明することに専念した。プロレタリアートのヘゲモニーの問題、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートと全農民との同盟および彼らの革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）の問題、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化およびプロレタリアートと貧農の同盟の問題、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の問題、革命における党の指導的役割の問題が、それである。戦争中に、レーニンは、帝国主義の分析にもとづいて社会主義革命の理論を発展させ、この理論を新しい命題でゆたかに

した。その命題は、基本的にはつぎのようになる。

一　帝国主義は、社会主義革命が実現される客観的な前提条件をつくりだした。「帝国主義はプロレタリアートの社会革命の前夜である」と、レーニンは資本主義の最後の段階を規定した（全集、第二二巻、二二三ページ）。だが、革命は、できあがった形でうまれてくるものではないし、それを人為的にひきおこしたり、他の国から輸入したりすることができるものでもない。革命は社会の内部で熟してゆき、客観的に成熟した危機からうまれる。革命は、国民のあらゆる層をまきこむ、政治全体の危機なしには考えられない。こういう危機が、この帝国主義戦争からもうまれたのである。

戦争は、資本主義のすべての矛盾の激化を特徴とする帝国主義から生まれた。この帝国主義戦争は、それはそれで、帝国主義のすべての矛盾を異常に激化させ、表面化した。戦争は、資本主義の発展をはやめた。レーニンは、戦争中に独占資本主義は国家独占資本主義に転化しはじめ、独占資本家は国家権力をますます自分に従属させていったことを証明した。戦争は、勤労者の全力を尽くさせたので、彼らは、帝国主義の権力のもとで死滅するか、それとも社会主義にうつるために指導権をプロレタリアートにゆだねるか、どちらかをえらばなければならないようになった。こうして、この戦争は資本主義の全般的危機のあらわれとなり、はじまりとなった。それは大多数の国に革命的情勢をうんだ。

二　革命的情勢のあることは、三つの主要な徴候で示される。第一に、支配階級がこれまでどおりの仕方で自分の支配をつづけることができないこと。レーニンはこう書いている。「革命がはじまるには、通常、『下層』がこれまでどおりに生活することを『のぞまない』だけではたり

ない。さらに、『上層』がこれまでどおりに生活していくことが『できない』ということが必要である」(全集、第二一巻、二〇八ページ)。第二に、危機の結果として、勤労大衆の欠乏と困窮が並はずれてひどく激化すること。第三に、支配階級の行動によって不満と憤激がいちじるしく高まり、それが広範な人民大衆の積極的な革命的行動にあらわれること。

以上が、革命的情勢をうみだす客観的な条件、すなわち個々の人々や政党や階級の意志とはかかわりのない条件である。

だが革命的情勢も、かならずしも革命に転化するわけではない。革命的情勢が革命に転化するためには、客観的な原因のほかに、主体的な原因も必要である。すなわち、支配階級をうちたおすために立ちあがる先進階級の能力と覚悟が、必要である。そしてこれらの資質は、レーニンがすでにその初期の労作で指摘しているように、革命的マルクス主義の立場に立つ労働者階級の党によって育成され、きたえられる。

そのばあい、かならずしも、革命がもっとも発達した資本主義国におきるというわけでは、けっしてない。帝国主義の鎖は、適当な客観的および主体的な前提条件があるならば――資本主義が一定の発展水準に達していて、非プロレタリア大衆、まず第一に農民の先頭に立つ能力のある、プロレタリアートとその党とがあるならば、――この鎖のもっともよわい一環で突破されるであろう。矛盾がもっともするどくあらわれたところ、そして準備のととのった勢力があるところ――そういうところにこそ、社会主義革命のおきる可能性がある。

三　帝国主義の時代には、革命勢力の新しい組合せが生じた。レーニンは、新しい時代を特徴づけ、世界革命の発展の合法則性をあきらかにし、種々の革命的な流れが世界革命の総過程のな

かで互いに結びつき、協同しあっていることを論証した。資本主義の生成期に西ヨーロッパと北アメリカに典型的であったのは、ブルジョア民主主義革命と民族解放革命であった。これらの革命の先頭に立っていたのは、封建制度の支配とたたかうブルジョアジーであった。新しい帝国主義時代には、資本主義諸国のブルジョアジーは反動的な勢力になった。国際革命運動の主力は、プロレタリアートになった。国際的規模で帝国主義の支配を片づけることは、すべての国の被搾取被抑圧大衆の力をあわせることによってしかできなかった。

いろいろな国の革命の展望を論じて、レーニンはこう指摘している。西ヨーロッパと北アメリカの先進資本主義諸国で日程にのぼっているのは、社会主義革命であり、発達がおくれていて、封建制度の残存物がまだつよい国々、たとえばロシアでは、日程にのぼっているのはブルジョア民主主義革命である。また、植民地・従属国の直面しているのは、反帝民族解放革命である。これら各種の社会運動のすべてがあつまって、世界革命の単一の反帝国主義的な流れになっていた。帝国主義は、社会主義革命実現の客観的前提条件をつくりだすことによって、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化を早める可能性をもつくりだしたのである。

四　社会主義革命のためには、日和見主義者がくりかえしいっていたのとはちがって、プロレタリアートが国民の多数者になることは、必要でない。社会主義革命はまた、一回きりの行為でも、一回きりの戦闘でもない。それは、階級戦（経済的・政治的・思想的な）の一時代である。レーニンがおしえているように、革命は、国民のなかのすべての抑圧され不満をもつ階級、グループ、なによりもプロレタリアートとその同盟者である農民が支配階級にたいしておこなう一連の戦闘から、地主の抑圧、ブルジョアの抑圧、民族的抑圧その他の形態の抑圧に反対する半プロ

レタリア大衆の運動から、また植民地人民の蜂起その他の大衆闘争形態からなるであろう。プロレタリアートの任務は、すべてこれらの戦闘を指導して、それを単一の目標――帝国主義を打倒して社会主義革命を実現すること――にむけていくことである。レーニンは、「『純粋の』社会革命を待っている人は、いくら待ってもけっして革命にめぐりあえないだろう。そういう人は、真の革命を理解しない、口先きだけの革命家である」と書いている（全集、第二二巻、四一七ページ）。各国プロレタリアートの任務は、植民地・従属国の被抑圧民族が自分の解放をめざしてたたかうのを断固として支持することである。なぜなら、マルクスがおしえているように、「他の国民を抑圧する国民は自由ではありえない」からである。

五　帝国主義に鋒先をむけた民族解放運動は、帝国主義をぐらつかせ、その力をよわめて、先進諸国の労働者が帝国主義を強襲するのを容易にする。他方、資本主義諸国の労働者の革命闘争は、被抑圧民族の民族解放闘争の成功を保障する。

第二インタナショナルの破産した諸党の指導者は、民族解放運動を社会主義革命の構成部分とみとめず、こうして、革命から強力な支援を取りのぞいた。トロツキー派も、すべての中央派的分子も、帝国主義時代の民族解放戦争を否定した。ブハーリン、ピャタコフも、帝国主義のもとでは民族解放戦争は不可能であると考え、民族自決権という綱領的要求に反対した。

レーニンは、帝国主義のもとでの民族解放戦争を承認しないことは、実際には帝国主義を擁護し、是認することであり、被抑圧民族の反帝国主義闘争のような、革命の重要な構成部分を考慮しないことを意味するということを証明した。一九一六年にレーニンは、党は「社会主義革命のために、帝国主義に反対するあらゆる民族運動を利用することに味方する」と書いている（全集、

第二二巻、四〇〇ページ)。

六　帝国主義と帝国主義戦争は、新しい情勢をうんだ。戦前にマルクス主義者はみな、社会主義はすべての資本主義国あるいは大多数の資本主義国で同時に勝利するという、マルクスとエンゲルスの命題を指針にしていた。この命題からは、ただ一つの国で社会主義が勝利することは不可能であるという結論が出てきた。これは、資本主義の発展が上向線をたどっていた、帝国主義以前の資本主義の時期には正しかった。当時は、社会主義革命の成功は、すべての資本主義国あるいは大多数の資本主義国のプロレタリアートが、資本の支配にたいして同時に革命的な行動にでるばあいにのみ、確実なものとなりえた。

この方針は、帝国主義的資本主義の時代にはあてはまらなかった。それは古くさくなったので、とりかえる必要があった。帝国主義の研究にもとづいて、レーニンは、資本主義の経済的および政治的発展の不均等性が帝国主義のもとではとくに破局的で、飛躍的なものになることを証明した。自分の明らかにしたこの法則から出発して、レーニンは、帝国主義の時期には社会主義がすべての資本主義国で同時に勝利することはできない、社会主義の勝利ははじめはただ一つの国、またはいくつかの国ででも可能である、という結論に達した。レーニンは、この見解を『ヨーロッパ合衆国のスローガンについて』(一九一五年)、『プロレタリア革命の軍事綱領』(一九一六年)という論文のなかで説明した。

「経済的および政治的発展の不均等性は」とレーニンは書いている。「資本主義の絶対的な法則である。ここからして、社会主義の勝利は、はじめは少数の資本主義国で、あるいはただ一つの資本主義国ででも可能である、という結論が出てくる」(全集、第二一巻、三五二

ページ)。

革命のすべての条件(客観的および主体的な)が熟した国のプロレタリアートは、他の諸国家に同じ情勢が生じるのを待たずに、帝国主義の戦線を突破して、自分の執権(ディクタツーラ)を樹立する。これによってこのプロレタリアートは、世界プロレタリアートにたいする自分の国際的な義務をはたす。一国での革命の勝利は、国際的運動に非常に大きな影響をおよぼすが、後者のほうでも、勝利したプロレタリアートの地位をかためらくにする。プロレタリア国際主義、勤労者の国際連帯はこの点にあらわれる。

レーニンはこう強調している。革命に勝利したプロレタリアートはすべての国で、あるいは多くの国で革命が勝利するのを待たずに、打倒された資本家を収奪し、自国に社会主義生産を組織する。社会主義の着実な建設、生産手段の私的所有の廃絶、国内の全勤労者の生活の根本的改善は世界プロレタリアート全体に、帝国主義者の圧政を脱する道を示し、抑圧者とのたたかいに立ちあがらせるよう彼らを勇気づけるであろう。

一国で社会主義が勝利するとともに、世界革命運動を強化し発展させ、他の国々のプロレタリアート、人民大衆を支援し援助する土台がつくられる。のちに、一国で勝利したプロレタリアートの国際的任務を説明するさい、レーニンは、この任務は「す、べ、て、の国で革命を発展させ、支持し、めざめさせるために一国で実行できるかぎりのことを実行する」ことであると規定している(全集、第二八巻、三二二ページ)。

論文『プロレタリア革命の軍事綱領』のなかで一国で社会主義が勝利する問題を再論して、レーニンはこう強調している——

「資本主義の発展は、国を異にするにつれてきわめて不均等におこなわれる。商品生産のもとでは、それ以外ではありえない。そうだとすると、社会主義はすべての国で同時に勝利することはできないという結論が避けられないものとなる。社会主義ははじめは一国または数ヵ国で勝利するが、他の国々は、なおしばらくのあいだ、ブルジョア的な国か、あるいは前ブルジョア的な国にとどまるであろう」（全集、第二三巻、八二ページ）。

七　社会主義革命に勝利したプロレタリアートは、自分の執権（ディクタツーラ）を樹立する。それなしには階級の廃絶と社会主義の建設とは考えられない。経済発展の水準や、階級の相互関係や歴史的伝統やにおうじて、各国には社会主義へ移る形態のうえであれこれの独自性がありうる。

「すべての国民は社会主義にいきつくであろう。それは避けられない。しかしすべての国民がかならずしも同じ経路でいきつくわけではない。それぞれの国民は、民主主義のあれこれの形態に、またプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のあれこれの変種に、また社会生活のいろいろの側面の社会主義的改造のあれこれの速度に、独特なものをくわえるであろう」とレーニンは書いている（同、七一ページ）。

資本主義から共産主義への過渡は、多数の、多種多様な政治形態をもたらさざるをえないことを指摘するとともに、レーニンは、すべてこれらの過渡形態の本質はただ一つ、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）であろうと、強調している。

「ただ一つの徹底的に革命的な階級としてプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）は」とレーニンは書いている。「ブルジョアジーを打倒し、彼らの反革命的な企てを撃退するために必要である」（同、七〇ページ）。

八　一国での社会主義の勝利は、社会主義国家を破壊しようという帝国主義者の欲求を呼びおこすであろう。そこで、プロレタリアートは、武器を手にして社会主義国家を守らなければならない。

レーニンは、『プロレタリア革命の軍事綱領』のなかで、一国における社会主義の勝利についてこう書いている——

「このことは、摩擦をひきおこすだけでなく、社会主義国家の勝利したプロレタリアートを破壊しようとする、他の国々のブルジョアジーの直接の欲求をも呼びおこさずにはおかない。このようなばあいには、われわれのがわについてみれば、戦争は正当であり、正義であろう」(同、八二ページ)。

以上のように、社会主義国家の武力防衛についての、勝利した社会主義を守る正義の戦争についてのマルクス主義の命題は、一国内でも社会主義の勝利が可能であるという学説から直接に出てきて、レーニンの社会主義革命理論の構成部分となっている。

これは、マルクス主義革命理論の発展における新しい段階であり、レーニンの新しい社会主義革命理論であった。

この理論は、マルクス主義を創造的に発展させるうえで、『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』その他レーニンの著作にのべられた思想を発展させるうえで、一歩すすめたものであった。レーニンの理論は、帝国主義のつくりだした新しい情勢や、世界プロレタリアートの革命闘争の新しい経験を考慮したものであって、すべての国の労働者階級に、革命の推進力、革命の勝利の条件とその発展の見通しについて明瞭な観念をあたえた。レーニンの社会主義

革命理論の強みは、この理論が自国ブルジョアジーとの闘争で労働者の創意を自由に発揮させ、各国の労働者階級に、帝国主義のもたらす無数の災厄（さいやく）をまぬがれる道をさししめしている点にある。

4　二月ブルジョア民主主義革命。労働者・兵士代表ソヴェトの成立。国内の二重権力

歴史の客観的な経過は、戦争が革命的情勢をつくりだしたというレーニンの主張がまったく正しかったことを裏付けた。戦争はロシアにとくにひどくひびいていた。ロシアでは、まず第一に土地問題で、ブルジョア民主主義革命の課題が解決されていなかった。ロシアのプロレタリアートはとくに革命的で試練をへたレーニン党に指導されていた。すべてこうしたことの結果、ロシアは帝国主義の世界的な鎖のもっともよわい一環であった。戦争の二ヵ年は、帝政ロシアの力をそぐのに十分であった。一九一六年には、都市に飢えがはじまった。戦争を遂行するのに金がたりなかった。ツァーリズムは、約八〇億ルーブルにのぼる対外借款を締結せざるをえなかった。その結果、イギリスおよびフランス帝国主義にたいするツァーリズムの依存度はつよまった。民族的自立性をうしなう危険がせまってきた。地主とブルジョアジーは、自国の人民に対抗するため、外国帝国主義者に支持を求めた。プロレタリアートの肩には、国を荒廃から救いだし、外国帝国主義者の半植民地になる危険を取り除くという任務がかかっていた。

ボリシェヴィキ党は、革命がまぢかにせまっていることを理解していた。レーニンは、はやくも一九一五年に論文『いくつかのテーゼ』のなかで、きたるべき革命の深い分析をあたえた。彼は、きたるべき革命が、性格からすればブルジョア民主主義革命であろうということをしめした。その直接の任務は、いぜんとしてツァーリズムの打倒、農奴制のありとあらゆる遺物の一掃であった。だが、一九〇五―一九〇七年の第一次ブルジョア民主主義革命後の一〇年間に、多くの変化がおこっていた。農村における階層分化はいっそう深まっていたし、プロレタリアートは成長し強化していたし、帝国主義戦争は国内のすべての矛盾を激化させ、それを表面化していた。歴史的発展は、ブルジョア民主主義革命が社会主義革命にいっそう急速に転化するのに有利な条件をつくりだしていた。なによりもこの点に、第二次ロシア革命と第一次ロシア革命との相違があった。

国内では労働運動が急激にもりあがった。一九一六年には一五〇〇件以上のストライキがあり、一〇〇万人以上の労働者、すなわち前年の二倍の労働者がストライキをおこなった。労働運動の影響を受けて、兵士の行動が頻繁になり、いっそう大きな規模をおびるようになった。戦線では何連隊もが上官の命令の遂行を拒否することがまれでなかった。数千の兵士が戦線をすてて後方に逃亡し、自分に関係のない利害関係のためにたたかうよりも、脱走罪で処罰されるほうをえらんだ。多くの戦区で交歓がさかんになった。

農村では、農民が地主の穀物と農具を奪取しはじめたが、地主家敷に放火して、にくむべき地主を貴族の巣からいぶりだすことも多かった。

被抑圧民族も動きだした。一九一六年の中ごろ、中央アジアとカザフスタンに暴動が勃発し、

数百万の人々をまきこんだ。革命的危機のはっきりした成熟がみられた。

革命の接近に不安を感じ、革命を防止するために、ツァーリズムは弾圧を急激につよめた。革命とたたかうために行動の自由をえようとして、ツァーリ政府は、単独講和についてドイツと秘密交渉をはじめた。

ドイツとの講和の準備は、協商国の帝国主義者とロシアの帝国主義者とを不安にした。協商国はロシア軍の援助をうしなうのをおそれた。ロシアのブルジョアジーをおそれさせたのは、利潤が自分のふところに流れこんでくるのがとまり、自分の帝国主義的な計画が挫折することであった。イギリス、フランスおよびアメリカ帝国主義者に支持されたロシア・ブルジョアジーのほうでは、ツァーリを交代させて革命を未然に防ごうときめた。ニコライ二世を逮捕して、年少の皇太子に位をゆずって退位させ、摂政に皇弟ミハイル大公をすえる予定であった。

二つの陰謀はともに革命に鋒先をむけていたが、革命がやってくるのを防ぐことはできなかった。ストライキの波は、日ごとにたかまった。一九一七年の一月には二五万人の労働者がストライキをおこなったが、二月には四〇万人以上がストライキをおこなった。情勢は極度に緊迫した。どの大ストライキも革命に成長転化しかねなかった。

一九一六年の秋に再建された中央委員会ビューローは活発な活動をくりひろげた。ビューローは、ペトログラートの党組織をよりどころにしていたが、他の都市の党委員会とも連絡をつけた。

とくに緊迫した情勢が生じたのは、首都であった。二月一七日、プチロフ工場のある職場がストライキをおこなった。工場首脳部は、企業を二月二二日から閉鎖することにきめた。あくる日、二月二三日、勤労者は、国際婦人デーを祝った。ボリシェヴィキのペテルブルク委員会は、この

日を政治的大衆集会で祝うよう呼びかけた。プチロフの労働者は、デモを組織して都心にむかった。途中で他の工場の労働者がプチロフの労働者に合流しはじめた。この日、一二万八〇〇〇人の労働者が、ストライキをおこなった。食糧の行列にならんでいた婦人が、デモにくわわった。「パンをよこせ!」、「戦争をやめろ!」、「専制をたおせ!」という要求をかかげたプラカードがあらわれた。

つぎの日、デモは新しい勢いでひろがった、首都では、約二〇万人がストライキをおこなった。ボリシェヴィキは、ストライキをつづけ、これをゼネラル・ストライキに転化させ、それを蜂起にもっていくことにきめた。二月二五日は、特筆すべきゼネラル・ストライキの日であった。警官隊との衝突がはじまった。死傷者が出た。事件の拡大をおそれたツァーリ政府は、戦線からの援軍を要請した。ニコライ二世は、最高総司令部から、直通電話で、「首都における騒擾をあすにも停止させることを命ずる……」という命令をつたえた。二月二五日の夜半、保安課は、労働者住宅で一斉検挙をおこなった。保安課は、ボリシェヴィキのペテルブルク委員を数名逮捕することに成功した。

二月二六日、労働者は朝から、ボリシェヴィキの呼びかけにしたがって、政治的ストライキから蜂起にうつりはじめた。彼らは、警官隊を武装解除し、みずから武装した。警官隊は、デモ参加者に銃火をあびせた。ズナメンスカヤ広場だけでも、約四〇人が殺された。

革命的事件に影響されて、兵士は動揺しだした。ペテルブルク委員会は、革命に合流するよう兵士に呼びかけた。「労働者階級と革命的軍隊の兄弟のような同盟だけが、奴隷化された人民に解放をもたらし、兄弟殺しの無意味な屠殺をおわらせるであろう」と、ビラには書いてあった。

ペトログラードの予備部隊には、首都の労働者が大勢いて、自分の企業との連絡をたっていなかった。労働者は兵営にはいっていき、革命を支持するよう兵士を説得した。パヴロフスク連隊の一中隊は、人民に発砲するのを拒否した。

あくる二月二七日、蜂起は全市をまきこんだ。蜂起した労働者は、兵器庫を占領して武装した。兵士は、革命のがわにうつりはじめた。夕方までに、守備隊の兵士六万人以上が、蜂起した人民に合流した。こうして、労働者と軍服を着た農民との同盟ができあがった。牢獄は占領され、政治犯は解放された。党中央委員会ビューローのだした宣言は、ツァーリズムを片づけ、臨時革命政府の樹立をめざすよう呼びかけた。この臨時革命政府は、民主的共和制を樹立し、八時間労働日を実施し、農民のために地主の土地を没収し、全世界の労働者とともに、帝国主義戦争を即時やめさせるはずであった。

ボリシェヴィキは、人民に革命的政綱をしめし、ツァーリズムを決定的に粉砕するよう大衆に呼びかけた唯一の党であった。ボリシェヴィキに激励された人民大衆の打撃を受けて、ロマノフ家の君主制は瓦解した。

蜂起が勝利した日に、ボリシェヴィキは、労働者代表ソヴェトを創設するよう、労働者に呼びかけた。ボリシェヴィキは、ビラにこう書いた――

「勝利するためには、われわれには組織性が必要であり、運動の指導的中心が必要である。即時、各工場で工場ストライキ委員会の選挙に着手せよ。これら委員会の代表が労働者代表ソヴェトを組織し、このソヴェトが運動における組織的役割を担い、臨時革命政府を創設するであろう」。

二月二七日の夕刻、タヴリーダ宮殿には、企業と部隊で選出された最初の代表たちが姿をあらわした。ペトログラートの街頭や広場ではじまった労働者と兵士の戦闘的団結は、単一の革命的組織、労働者・兵士代表ソヴェトの創設——ソヴェトが別々に存在していた一九〇五年の革命とちがって——となって現われた。

ペトログラートにおける蜂起の勝利は、全国の革命的変革に支持された。すべての県で、また大部分の郡庁所在地で、労働者・兵士代表ソヴェトが選出された。多くの工業地区——中部工業地方、ウラル、ドンバス——で、ソヴェトは、無断で八時間労働日を実施し、警官隊を追いはらって、企業の保全と革命の防衛のために赤衛隊をつくり、ツァーリの裁判官を罷免して、新しい人民裁判官を選出した。ソヴェトが、労働者にたいしてとくに残酷であった工場首脳部を罷免して、労働者統制を実施し、食糧難とのたたかいをひきうけ、雇主との紛争で労働者を支持したことも、まれではなかった。守備隊はソヴェトの下に所属させられた。労働者と農民の同盟の機関としてのソヴェトは、蜂起の機関であり、革命で勝利した労働者と農民の権力機関であった。

だが、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）の具現であるソヴェトとならんで、ブルジョアジーと地主の支配機関である臨時政府がうまれた。首都で革命が勝利したという報道がとどくやいなや、国会は臨時委員会を選出し、この委員会に同市の「秩序を確立する」ことが委任された。委員会は、権力をにぎろうとは全然考えなかった。委員会は、代表団を戦線のニコライ二世に派遣して、皇太子に位をゆずって退位するよう説得させた。すべての戦線の司令官たちがこの要求を支持し、ニコライ二世に自分たちは軍隊のことは保障できないと声明した。ツァーリは、自分も皇太子も権力を放棄して弟のミハイルに権力をゆずるという詔書に署名した。

君主制を温存しようとするブルジョアジーの企ては成功しなかった。権力の問題が解決されたのは、国会のなかでではなかった。それに決着をつけたのは、蜂起した労働者と兵士だった。国会臨時委員会の一員であるカデットのミリュコフが、ある大衆集会で君主制の維持に賛成すると、憤激の嵐が人々をまきこんだ。ブルジョアジーは、革命をこれ以上深刻にさせないために権力をにぎることにきめた。

国会臨時委員会は、ペトログラート労働者・兵士代表ソヴェトと交渉をはじめることにした。同ソヴェト、とくにその幹部会では、エス・エルとメンシェヴィキが優勢であった。エス・エルとメンシェヴィキのほうでも、ブルジョア諸政党におとらず革命の拡大をおそれて、人民の革命闘争をできるだけはやく中止させようとしていた。エス・エルとメンシェヴィキの指導者は、国会臨時委員会がつくったブルジョア政府を支持することにきめた。しかし、エス・エルとメンシェヴィキは、大衆の信頼をうしなわないために、この政府に公然と参加するのを避けた。

三月二日、この協定にもとづいて、ゲ・イェ・リヴォフ公を首班とするブルジョア臨時政府がつくられた。大臣の大多数は、オクチャブリストやカデットの党にぞくしていた。政府にはトルドヴィキのケレンスキーがはいったが、彼はだれの代表としておくられたのでもなく、大衆をあざむくために、ブルジョア新聞の言葉によれば「民主主義の人質」として、ブルジョアジーが入閣させたものであった。地方では、県知事と郡警察署長とが、人民によって更迭させられた。彼らのかわりとして、臨時政府は、ツァーリの旧法律によって選出された、ゼムストヴォ参事会の議長を、自分の司政官（コミサール）として任命したが、彼らは通例カデットやオクチャブリストからなっていた。政府は、旧国家機関からできるだけ多くを温存しようと懸命になっていた。

こうして、国内には臨時政府と労働者・兵士代表ソヴェトの二重権力が樹立された。ソヴェトのエス・エル＝メンシェヴィキ派指導者は、ブルジョアジーに権力を自発的にゆずりわたし、ブルジョア臨時政府を支持する義務をおった。二つの執権（ディクタツーラ）、ブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）とプロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）とが、きわめて独特な形でからみあうようになった。

ブルジョアジーが国家権力を掌握したのは、いくつかの事情があったからである。二月革命は、ツァーリズムの不法とテロルから広範な政治的自由への急転換であった。それまで政治に参加せず、政治的経験をつんでいない数千万の人々が、一挙に政治活動にひきいれられた。ロシアの住民のなかでは、ブルジョアジーとプロレタリアートのあいだを動揺する小ブルジョアジーが大多数を占めていた。このことが、広範囲の労働者に決定的な影響をおよぼした。

「小ブルジョアの巨大な波が」とレーニンは書いている。「あらゆるものをまきこみ、数のうえだけでなく、思想上でも、自覚したプロレタリアートを圧倒している。すなわち、きわめて広範囲の労働者に小ブルジョア的な政治的見解をうつし、それにまきこんでいる」（全集、第二四巻、四五ページ）。

この小ブルジョアの波は、大多数のソヴェトの顔ぶれを規定し、そのなかでエス・エルとメンシェヴィキの代表者を優位に立たせた。ソヴェトに代表される勝利した労働者と農民が、ブルジョアジーの代表者に権力を自発的にひきわたした理由は、ここにある。

ボリシェヴィキは、大衆の先頭に立ってツァーリズムとたたかったのに、エス・エルとメンシェヴィキは、大いそぎで人民の勝利に乗じ、革命の波の波頭に乗ってソヴェトの指導部にもぐり

こんだ。

ブルジョアジーが権力を掌握したもう一つの原因は、プロレタリアートと農民の組織性と自覚が不十分であったことである。ツァーリズムの弾圧は、その重みをあげて労働者組織にふりかかってきた。ボリシェヴィキ党の指導者の大多数は、投獄されるか、流刑されるか、亡命するかしていた。レーニンは、国外でくらさなければならなかった。彼とロシアとの連絡は、きわめて困難になっていた。ところが、ブルジョアジーの政治組織は迫害をこうむらなかった。ブルジョアジーは、戦争中に経済的・政治的につよくなった。ブルジョアジーは、その当時、人民大衆よりも組織されていた。プロレタリアートは、ツァーリズムの弾圧のために、あまり組織されていなかった。プロレタリアートのうち政治的にもっともすすんだ部分は、軍隊に動員され、一部は戦死した。動員された人々にかわって企業にやってきたのは、農村出身の新しい人々であった。彼らを再教育するには、時間が必要であった。

ブルジョアジーの勝利には、外国資本家の援助も、それなりの役割をはたした。

要約

一九一四―一九一八年の世界帝国主義戦争は、帝国主義の矛盾からうまれたものであった。それは、資本主義の発展の不均等性の結果として、また世界再分割のための独占資本家の闘争と革命運動を鎮圧しようという彼らの野望の結果として、勃発した。

戦争は諸国民に無数の災厄をもたらした。この戦争で一〇〇〇万人が殺され、二〇〇〇万人が

負傷した。戦争は帝国主義のすべての矛盾をつよめた。戦争は資本主義の全般的危機の明瞭なあらわれであった。戦争は帝国主義の支配がなににみちびくかを、まざまざとしめした。戦争は、独占資本主義の国家独占資本主義への成長転化をはやめた。こうして、それは革命の客観的な前提条件をつよめた。レーニンは、戦争は革命の全能な「舞台監督」であった、と書いている。

第二インタナショナルの党の大多数は、社会主義を裏切り、帝国主義擁護に立ちあがり、こうして、血なまぐさい戦争のおそるべき結果について人類に責任をおった。第二インタナショナルは崩壊した。ボリシェヴィキ党だけが、社会主義の事業にたいする忠誠の模範、大衆のあいだでの革命的活動の模範、軍隊をもふくめて、大衆に革命の準備をととのえさせる模範をしめした。ボリシェヴィキ党だけが、各交戦国で帝国主義戦争に反対してたたかい、労働者階級が自国政府の打倒をめざしてたたかうための正しいスローガンをあたえた。党は、マルクス主義を発展させ、レーニンの帝国主義学説、社会主義がただ一つの国で勝利する可能性についての学説で、マルクス主義をゆたかにした。

革命戦の接近を正しく考慮して、レーニンは、帝国主義の時代の状況に応じ、革命闘争の新しい経験にもとづいて、マルクス主義革命理論を発展させた。彼は、ロシアのきたるべき革命に分析をくわえ、それを規定して、新しい時代の状況のもとでは急速に社会主義革命に成長転化するブルジョア民主主義革命であるとした。

二月ブルジョア民主主義革命は、レーニンの打ち出した党のスローガンが正しかったことを裏付けた。それは、帝国主義戦争の内乱への転化のはじまりであった。革命は、自国政府の敗北をめざした、党の立場がまったく正しかったことをしめした。ツァーリズムの敗北は、大衆の革命

的進出をたすけた。まさにこの大衆が専制を打倒したのである。革命は、メンシェヴィキと手を切り、メンシェヴィキを党から追放したことが正しく、時宜にかなっていたことを確証した。

二月革命では、大衆自身の創造力によって、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権(ディクタツーラ)の機関である労働者・兵士代表ソヴェトが創設された。だが、大多数のソヴェト内で優勢であったメンシェヴィキとエス・エルは、労働者・農民の利益を裏切って、ブルジョアジーの執権(ディクタツーラ)の機関である臨時政府に国家権力をゆだねた。国内には二重権力が樹立された。党は、全権力をソヴェトにうつさせるという任務に直面した。

第七章　十月社会主義大革命の勝利の鼓舞者・組織者としての党（一九一七年三—一〇月）

1　ツァーリズム打倒後の国際情勢と国内情勢。党の地下からの出現

一九一七年の二月革命は、国際舞台でのロシアの立場にいろいろな変化をもたらした。全世界の勤労者は、帝国主義戦争の時期に最初に蜂起の旗をかかげたロシアの労働者階級を歓迎した。ロシア革命の影響を受けて、他の国々、とくに交戦諸国で労働運動や反戦運動がつよまった。

革命は、両帝国主義ブロック——協商国と、ドイツおよびその同盟諸国と——の支配階級に非常な不安をおこさせた。交戦列強の立場は同じではなかった。ドイツは戦線では大勝利をおさめていたが、四苦八苦していた。同国の工業は前線の補給をはたすのがやっとで、国民は飢えていた。二つの戦線で——イギリス、フランス両国にたいしても、ロシアにたいしても——戦争をつづけていけば、ドイツは敗北するおそれがあった。ドイツとその同盟諸国の政府は、ロシアに単独講和をおしつけ、ついで全力を協商国にむけるために、ロシアの革命を利用することにした。

また革命が深刻化すればロシアのブルジョア政府が廃止され、その結果、ドイツもふくめて全世界で革命運動がつよまるかもしれないということも懸念していた。

イギリスとフランスの立場は、ドイツとその同盟国よりいくらかよかった。膨大な工業力をもつアメリカは独自の帝国主義的な目的をもとめて、一九一七年四月、協商国がわにくわわった。だが、協商国は、革命が拡大すると協商国の銃後の労働運動に影響をおよぼし、ロシアを戦争から離脱させる結果になり、したがってドイツに勝つのがむずかしくなりはしないかとおそれていた。協商国の帝国主義者は、臨時政府を支持し、ロシアに戦争をつづけさせることにした。同時にアメリカ、イギリス、フランスの帝国主義者は、ロシアを経済的にいっそう隷属させるために、戦争でロシアがよわまるのを利用するつもりでいた。

どの交戦国のブルジョアジーも、臨時政府がロシアの革命を鎮圧するのをたすけ、こうして自国の銃後に革命がおこるのを防ごうとしていた。

革命をおこしたロシアの勤労者の願いは、平和、土地、パン、自由を獲得することであった。だが、臨時政府は戦争をやめることなど念頭になかった。それどころか、革命を利用して、自分の略奪計画を実行するつもりでいた。政府は、ロシアを協商国に結びつけていた、ツァーリの諸条約を確認した。ブルジョアジーは、戦争の継続が国内の二重権力をなくすのをたすけて、全権力が自分の手にうつってくるものと期待していた。彼らのスローガンは、「最後の勝利までたたかえ！」であった。

臨時政府には、土地問題を解決するつもりもなかった。農民に土地をあたえることは、地主的所有だけでなく、資本主義的所有にも打撃をあたえることを意味していた。なぜなら、土地の大

部分は銀行の抵当にはいっていたからである。この土地の没収は、何十億という銀行資本をうしなうことを意味していたであろう。農民に土地をあたえるつもりはないと公然と声明するだけの勇気が出ないので、臨時政府は農民をあざむいて憲法制定議会が召集されるまで土地問題の解決を延期し、農民が地主の土地をとりあげようとするのを弾圧した。

ブルジョアジーは、勤労者の状態を改善しようとも思わなかった。権力を手にいれたブルジョアジーは、自分の利潤をふやすためにあらゆる手をうった。ブルジョア政府は銀行の発展や株式会社の創立や独占体の発展をおさえていたこれまでの法律を全部廃止した。

臨時政府は、民族的抑圧をとりのぞくつもりもなかった。性格上帝国主義的な臨時政府は、植民政策をつづけた。現地では、抑圧機構全体がそのままのこっていた。

しかし、革命の状況のもとでは、臨時政府は、大衆を味方にしていたソヴェトとのたたかいを公然とはじめることはできなかった。臨時政府は、公然と行動する力をたくわえるために、時をかせごうとしながら、大衆の革命運動にたいする暗闘をおこなっていた。

自分の単独権力をめざしてたたかうにあたって、ブルジョアジーは、エス・エルやメンシェヴィキの支持をあてにしていた。後者は、ツァーリズムが打倒されてブルジョアジーが権力をにぎった以上、革命はおわり、革命の目的は達成されたものと考え、社会主義革命への移行などは論外だと考えていた。彼らは、革命が勝利するとともに、戦争の性格もかわって、この戦争は帝国主義戦争ではなくなったと人民に請合い、ブルジョアの祖国の防衛をよびかけた。人民をあざむこうとして、彼らは「革命的祖国防衛派」と自称した。政治にひきいれられたばかりの人民大衆の大部分は、すぐにはこの欺瞞がわからず、エス・エルやメンシェヴィキの言うことを信じてい

た。

レーニンは、幾百万の農民や労働者をまきこんだ「祖国防衛主義」の気分と、メンシェヴィキやエス・エルの諸党の祖国防衛主義とを、峻別した。労働者や勤労農民は、戦争を利益としてはいなかった。大衆の「祖国防衛主義」的な気分は、彼らの善意の思いちがいの結果であった。エス・エルやメンシェヴィキのばあいは、そうでなかった。彼らの祖国防衛主義は、彼らが代表していた小ブルジョアジーのある部分が、戦争によって資本家が手にいれる超過利潤からいくらかの分け前をもらうことを利益としていたためであった。

エス・エルとメンシェヴィキは、臨時政府の活動にたいする統制を確立すると約束した。彼らは「是々非々」を標榜した。つまり、政府が革命の諸任務を解決しようとするかぎり、そのかぎりでは政府を支持すべきであり、政府が旧体制に逆行しようとするなら、政府を批判すべきだが、けっしてこれを打倒してはならない、というのである。これは大衆をあざむくことであった。なぜなら、権力がなければ統制することはできないからである。実際には、このような統制は、ブルジョア政府との協定を意味し、ブルジョア政府を信任し支持することを意味していた。それは、ソヴェトを縮小し全権力をブルジョアジーの手にゆだねることを意味していた。

エス・エルとメンシェヴィキも、ブルジョア臨時政府と同じように、憲法制定議会まで平和、土地、パンの問題の解決を待つよう人民を説得していたが、自分では憲法制定議会の召集をいそがなかった。エス・エルとメンシェヴィキは、公然とブルジョアジーとの協定の党になり、資本主義制度を維持し、強化することをめざしていた。

ボリシェヴィキ党は、地下から出てきて、はじめて自由に活動をくりひろげることができるよ

うになった。三月五日、ボリシェヴィキ党の中央委員会とペテルブルク委員会の機関紙である新聞『プラウダ』が発行されはじめた。

レーニンの社会主義革命理論で武装された党は、勝利を固め、革命をさらに深めるためにたたかっていた。党は、ブルジョア臨時政府を信任することに反対した。三月四日、中央委員会ロシア国内ビューローは、政府とどんな協定をむすぶことにも反対する決議を採択した。党は、政府にたいする統制という、エス・エルとメンシェヴィキのスローガンを暴露した。一九一七年三月九日の『プラウダ』はこう書いている。「臨時政府にたいする統制？　この統制は彼ら（すなわち労働者）に、なにをあたえるだろうか？　自明なことだが、ブルジョアジーは、たとえ労働者の統制のもとにあっても、プロレタリアの綱領の遂行をひきうけるはずがないから、労働者には、ブルジョアジーにみならって、ひとの力で角力をとろうなどとあてにするいわれはなく、彼らは自分で行動しなければならない」。

ボリシェヴィキ党は、平和のための闘争、反戦闘争をつづけていた。戦争は新しい政府のもとでもいぜんとして帝国主義戦争だったからである。ボリシェヴィキは、革命をつづけ、労働者親衛隊をつくるよう労働者に呼びかけた。「プロレタリアートは、武器を手にしてこそはじめて自分の獲得物を固め、革命を最後まで遂行することができるということを、おぼえていなければならない」と、『プラウダ』は書いた。

党委員会は、民主主義的中央集権制にもとづいて改組された。上から下まで、党機関の選挙制が確立された。モスクワその他の工業地区で、ボリシェヴィキの新聞が出はじめた。ツァーリの官憲に逮捕されていたボリシェヴィキは牢獄から釈放された。党中央委員や有数な党活動家、ア

・エス・ブブノフ、エフ・エ・ジェルジンスキー、ペ・ア・ヂャパリッゼ、エス・ヴェ・コシオル、ヴェ・ヴェ・クイブィシェフ、ゲ・カ・オルヂョニキッゼ、オ・ア・ピャトニッキー、ヤ・エ・ルズターク、ヤ・エム・スヴェルドロフ、エヌ・ア・スクルイプニク、イ・ヴェ・スターリン、エス・ゲ・シャウミャン、イェ・エム・ヤロスラフスキーその他多くの者、さらに国会議員ゲ・イ・ペトロフスキー、エム・カ・ムラノフ、ア・イェ・バダーエフ、エフ・エヌ・サモイロフ、エヌ・ペ・シャゴフが流刑地や牢獄や亡命先から帰ってきた。

ツァーリズムの打倒によって、国の歴史上の一時期がおわり、新しい時期がはじまった。だが新しい情勢は、新しい方向決定、新しい戦略計画、別の戦術、別のスローガンをも、党に要求していた。これらの問題の解答をくだしたのは、レーニンであった。革命の当初、亡命地にありながらも、彼は『遠方からの手紙』を書き、そのなかで、二月革命後に党が実行しなければならない方針をしめした。レーニンは、革命はまだおわっておらず、おわったのは革命の最初の段階にすぎない、労働者は英雄精神を発揮して、革命の第二の段階で勝利をおさめなければならない、と書いた。レーニンは、ブルジョア政府に警察を復活したり、君主制を救ったりさせないために、労働者民兵または労働者義勇軍を創設するという任務をかかげた。レーニンは、つぎの戦術をとるように主張した――

「新政府をまったく信頼せず、いっさい支持しないこと。とくにケレンスキーに疑いをもつ。プロレタリアートの武装が唯一の保障。ペトログラート市議会の選挙を即時おこなうこと。他党との接近はいっさい不可」(全集、第二三巻、三二四ページ)。

レーニンは、メンシェヴィキと統合しようとする一部の党活動家を、とくに手きびしく非難し

た。こうした意図は、革命の発展にとってゆゆしい危険であった。

ボリシェヴィキは、大衆のあいだで大々的な活動をくりひろげた。党が主な注意をはらっていたのは、社会の先進勢力であるプロレタリアートを組織し結束させることであった。ボリシェヴィキは、ロシア全土にソヴェトを創設するよう呼びかけ、労働者・兵士代表ソヴェトや、軍隊内の委員会や、農村の農民組織を組織することに、積極的に参加した。ボリシェヴィキは、労働者のなかから革命の戦闘力である赤衛軍部隊をつくった。

党は、できるだけ多くの労働者を統合する大衆組織として労働組合をつくるよう呼びかけた。ボリシェヴィキの目標は、労働組合がプロレタリアートの思想的・政治的指導者である党と固く団結して活動することであった。

ボリシェヴィキは工場委員会をつくっていったが、この工場委員会は、どの労働組合に加入しているかには関係なく、企業内の全労働者をふくんでいた（当時、工場では、たとえば金属労働者には金属労働者の組合があり、大工のほうは木工労働組合にはいっていた）。工場委員会は、大部分が革命のはじめからボリシェヴィキ党の指導のもとにあった。

軍隊内の政治活動を指導するため、革命のはじめに、中央委員会とペテルブルク委員会のもとに、エヌ・イ・ポドヴォイスキーを長とする軍事組織（「ヴォエンカ」）が設けられた。

婦人のあいだでも大々的な活動がおこなわれた。ボリシェヴィキの雑誌『ラボートニツァ』が復刊された。青年の組織もつくられはじめた。

党は、大衆のいるところで活動するという、自分の原則に忠実であった。

新しい重要課題が即座に全党に明らかになったわけではなかった。党は、二重権力という歴史

上まれな事態に直面していた。ソヴェトの階級的意義と役割は、すべての人に即座に理解されたわけではなかった。

一部のボリシェヴィキ委員会と一連の有力な党活動家は、臨時政府にまちがった態度をとった。彼らは臨時政府の活動にたいする「大衆の統制」を確立するよう呼びかけたが、この統制を、革命の諸問題の解決をひきのばそうとする臨時政府のくわだてに反対するカンパニアやデモンストレーションや声明を組織することであると理解して、全権力をソヴェトにうつす任務を提起しなかった。このような立場は、権力をブルジョア臨時政府の手にそのままのこしておくことを意味したであろうし、また臨時政府が革命の利益になる行動をとることができるかのようなあやまった観念を、大衆のあいだにつくりだしたであろう。「統制」というあやまった方針は、のちに中央委員会ロシア国内ビューローも支持した。

臨時政府と戦争にたいして、半メンシェヴィキ的な立場をとったのは、流刑地から帰ってきたカーメネフであった。彼は『プラウダ』に論文を発表し、そのなかでブルジョア臨時政府を条件つきで支持するよう呼びかけた。カーメネフは、戦争が臨時政府のもとでもいぜんとして帝国主義戦争であることを一言もいわずに、「銃弾には銃弾で、砲弾には砲弾でむくいる」よう、つまり戦争をつづけるよう、兵士に呼びかけた。カーメネフのこの発言は、ただちに中央委員会ビューローのメンバーや党のペテルブルク市委員の手きびしい批判をまねいた。カーメネフは『プラウダ』のつぎの号で支持の問題を取り下げ、臨時政府に講和締結の提案をもちださせるようこれに圧力をかけることを主張した。

イ・ヴェ・スターリンは臨時政府に「圧力」をかけて平和交渉をすぐはじめるよう要求すると

いう政策を支持した。

「これはひどくまちがった立場であった」とのちにスターリンは言っている。「というのは、この立場は平和主義的幻想をうみだし、祖国防衛主義を利し、大衆の革命的教育を困難にしたからである。当時わたしは、他の同志とともに、このまちがった立場をとっていた。そしてやっと四月の中ごろになって、レーニンのテーゼに賛成してこの立場を完全にすてた」（大月書店版全集、第六巻、三四七ページ）。

四月三日、レーニンはペトログラートに到着した。人民大衆は熱狂して、自分の指導者をむかえた。首都の各区から、多数の労働者から成る代表団が派遣された。代表団の先頭には赤衛軍部隊がすすんだ。守備隊の各連隊は兵士代表団をおくった。装甲自動車工場の兵士たちは装甲車をくりだした。クロンシタットからは水兵がやってきた。四月三日の夜、フィンランド駅まえの広場は、九年間亡命地で苦労してきた指導者をむかえにやってきた労働者や兵士でうずまった。レーニンは装甲車のうえから演説して、革命の参加者たちにあいさつをおくるとともに、社会主義革命の勝利をめざしてたたかうよう呼びかけた。

2　ヴェ・イ・レーニンの四月テーゼ。第七回（四月）全国協議会。ブルジョア民主主義革命を社会主義革命に成長転化させる党の方針

一九一七年四月四日、レーニンは、党中央委員、党ペテルブルク市委員、労働者・兵士代表ソ

ヴェト全ロシア協議会のボリシェヴィキ派代議員のまえで、『現在の革命におけるプロレタリアートの任務について』という報告をおこなった。四月七日、この報告の要綱が『プラウダ』に発表された。これが天才的な四月テーゼであり、このテーゼにはブルジョア民主主義革命を社会主義革命に成長転化させる党の方針がたてられていた。

革命の基本問題は、権力の問題である。革命の鋒先がどの階級にむけられているか、どの階級の手に権力がうつるか——この基本的な標識にもとづいて、革命の性格が規定される。二月革命の結果、ロシアには二重権力が樹立された。だが、歴史がおしえているように、社会で敵対的な立場にある階級の二つの執権（ディクタツーラ）が、長期にわたって併存することはできない。二重権力は、かならず、ブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）とプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のどちらかにおわらざるをえない。二重権力がどの執権（ディクタツーラ）におわるかをきめるものは、階級闘争である。レーニンは、臨時政府をまったく信頼せず、これをいっさい支持しないよう主張するとともに、大衆の闘争の先頭に立ちこの闘争を社会主義革命にむけるよう、党に呼びかけた。

「ロシアにおける現情勢の特異性は」とレーニンはテーゼのなかで書いている。「プロレタリアートの自覚と組織性とが不十分なために、権力をブルジョアジーにわたした革命の最初の段階から、プロレタリアートと貧農層の手に権力をわたすに相違ない革命の第二の段階へ移ろうとしている点にある」(全集、第二四巻、四ページ)。

革命の新しい段階には、新しい階級関係もうまれていた。社会主義革命の推進力、すなわち革命を最後まで遂行することを利益としている階級は、プロレタリアートと貧農であった。中農は、勤労者としては貧農のほうにかたむき、所有者としては富農を支持した。この二重の地位のため、

中農は動揺していた。そこで党は、社会主義革命における中農の中立化というスローガンをかかげた。レーニンは、すでに労作『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』のなかでこれを基礎づけている。

だが、社会主義革命での中農の中立化は、ブルジョア民主主義革命のさいのブルジョアジーの中立化とは全然ちがっていた。ブルジョアジーの中立化は、ツァーリズムとブルジョアジーの結託を暴露し、ブルジョアジーを孤立させ、こうして、ブルジョアジーが「人民自由党」と偽称して農民をあざむくことができないようにすることを意味していた。中農の中立化とは、中農を革命から孤立させることを意味するものでは全然なかった。それどころか党は、中農を革命にひきいれ、中農を協調主義者からたたかいとり、富農からひきはなし、中農をプロレタリアートの同盟者にすることに全力をつくした。

ブルジョア民主主義革命を社会主義革命に成長転化させる方針を立て、新しい革命の推進力を特徴づけた上で、レーニンは、国家権力の政治形態をも規定した。マルクスは、パリ・コミューンの経験にもとづいて、「パリ・コミューン型」の国家権力の新しい形態を論じた。しかし、第二インタナショナルの指導者であるカウツキー、プレハーノフらは、マルクスの国家思想をゆがめて、社会主義に移るための最良の国家形態は議会制的な共和国である、と主張していた。レーニンは日和見主義者を暴露し、実生活が議会制民主共和国よりも「高度な」新しい「型の民主主義国家」をもちだしたこと、この新しい国家の萌芽がパリ・コミューンとソヴェトであったことを証明した。一九〇五年と一九一七年の革命の経験の研究にもとづいて、レーニンは、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の政治形態としてソヴェト共和国を発見した。

「議会制共和国ではなくて——労働者代表ソヴェトからそこへもどるのは、一歩後退であろう——、全国にわたる、上から下までの労働者・雇農・農民代表ソヴェトの共和国」とレーニンはのべている（全集、第二四巻、五ページ）。

これは、資本主義から共産主義への過渡期の社会の政治組織の諸形態についてのマルクス主義学説を、レーニンがいっそう発展させたものであった。これは、ロシアで社会主義革命が勝利するうえに非常に大きな役割をはたした、科学的大発見であった。

「全権力をソヴェトへ！」——これが党のかかげたスローガンであった。「全権力をソヴェトへ！」というレーニンのスローガンは、人物の更迭、臨時政府内でエス・エルとメンシェヴィキがカデットに代わるというだけのものではなかった。このスローガンをそのように解すれば、旧国家機関はそのままのこることになり、代わるのは大臣だけということになろう。どんな大臣が政府の首班になるにせよ、たとえソヴェトの推した大臣が首班になるとしてさえ、旧機関が維持されることは、実際には、ブルジョアジーの権力が維持されることをも意味していた。「全権力をソヴェトへ！」というスローガンは、二重権力をなくし、ソヴェトの単独で全一の権力をうちたて、新しい型の国家を組織し、人民のうえに立つ旧国家機構をなくし、ソヴェトを土台にして、人民の利益に完全にかなった新しい国家機関を上から下まで造り上げることを意味していた。

当時の状況のもとでは、「全権力をソヴェトへ！」というスローガンは、臨時政府の即時打倒を呼びかけることや武装蜂起を呼びかけることを意味してはいなかった。力ずくで臨時政府を打倒することは、ブルジョア政府と協定をむすんでこの政府を支持していたソヴェトにも反対することを意味していた。レーニンも、マルクスと同じように、武装蜂起を革命の通則とみていた。

というのは、時代おくれになったどの階級も、自発的に、武力闘争をまじえずに自分の権力を他の階級にゆずりわたすものではないからである。だが、二月革命後のロシアの具体的な歴史的状況のもとでは、レーニンが書いているように、「例外として」、全権力が平和的にソヴェトにうつる可能性がうまれていた。ブルジョアジーにはまだ、大衆に暴力をくわえる勇気も可能性もなかった。力は人民のがわにあった。これまでのどの革命ともちがって、人民の手には労働者・兵士代表ソヴェトという既成の権力機関があった。人民の圧倒的多数である労働者・農民を代表していたソヴェトが、自分で全権力をにぎると声明したとすれば、あえてソヴェトに反対するような者はなかったであろう。

その上、革命の平和的発展とは、権力が当時のソヴェトに平和的にうつることだけを意味するものではなかった。ボリシェヴィキ党は、つぎのことを考慮していた。エス・エル＝メンシェヴィキ的なソヴェトに権力がわたされても、エス・エルやメンシェヴィキの党の本質はかわらないであろうし、彼らの動揺や協調主義はつづくであろう。だが、それはすでに、ブルジョアジーと手を切ったソヴェトの内部で、また信頼にそわなかった代表をソヴェトから召還する権利をもっている広範な勤労大衆の眼のまえで、おこなわれることになろう。権力をにぎっていながら、平和、土地、パン、自由を人民にあたえる能力のない小ブルジョア諸党の動揺は、エス・エルとメンシェヴィキの信用を失墜させることになろう。ソヴェトのなかでボリシェヴィキは、政府にはいらずに野党の地位にとどまり、エス・エルとメンシェヴィキを批判し、暴露するであろうし、彼らに革命のすべての基本的問題の解決を要求するであろう。人民大衆は、自分の経験にもとづき、またボリシェヴイキの説明活動の影響を受けて、メンシェヴィキとエス・エルにいだいてい

る幻想を克服し、彼らの裏切り的な役割を納得するようになり、平和、土地、パン、自由を勤労者に確保する能力をもつ唯一の党であるボリシェヴィキ党に、国家の指導権をゆだねるであろう。政府の交代は、全一の権力をもつ、唯一の国家権力機関になったソヴェトの内部での平和的闘争を通じておこなわれるであろう。こうして、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）は、プロレタリアートの社会主義的執権（ディクタツーラ）に成長転化するであろう。

レーニンは、革命の平和的発展の可能性を「歴史上きわめてまれで、きわめて貴重なもの」と考えていた。だが、この可能性をうんだ情勢は変化するおそれがあったし、党は武力で権力をにぎる必要にせまられるかもしれなかった（まさにそのとおりになったのであるが）。平和的発展の可能性を十分に利用するよう主張しながらも、レーニンは、ブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）を武装蜂起で打倒しなければならない、革命発展の別の道のことも、一瞬もわすれなかった。党は、革命の平和的発展の状況のもとでも、社会主義革命の勝利をめざす武力闘争のためにうまずたゆまず力をやしなった。

ソヴェトに権力がうつり、ソヴェトの内部でプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）のための闘争がつづけられるという意味で、革命の平和的発展の可能性をみとめたことは、戦時中かかげられた、帝国主義戦争を内乱に転化せよというスローガンを、党が一時留保したことを意味していた。このスローガンは、二月革命の結果としてある程度すでに実現されていた。このスローガンをおろさずにおくことは、革命の平和的発展という党の方針と矛盾することになったであろう。革命の現在の時期には「この内乱は、われわれにとっては平和的な、長期にわたる、忍耐づよい階級的宣伝にかわる」とレーニンは書いている（全集、第二四巻、二三六ページ）。

四月テーゼのなかで、レーニンは、ツァーリズムの打倒後にボリシェヴィキは戦争にたいしてどういう態度をとるべきか、をしめした。新政府のブルジョア的性格とその侵略的な目的とのため、新政府のもとでも、戦争はロシアについてみて帝国主義戦争でなくなりはしなかった。だから、ボリシェヴィキは略奪戦争の継続に反対してたたかわなければならなかった。だが、二月革命後にはボリシェヴィキは敗戦主義者ではなくなった。なぜなら、専制が打倒されて、ロシアには戦争を利益としない労働者と農民を代表するソヴェトが創立されているからである。同時に党は、祖国防衛主義の立場にも立たなかった。なぜなら祖国防衛主義の立場に立つことは、帝国主義戦争を支持し、ブルジョア・地主の権力を防衛することを意味したであろうから。ボリシェヴィキ党は戦争の問題を、全権力をソヴェトに、労働者階級と貧農にひきわたすことと結びつけた。権力をにぎったこれらの階級だけが、資本家のためでなく、人民のために講和の締結を保障することができるであろう。資本と帝国主義戦争とのあいだには切りはなせない関連があること、資本の権力をたおさずには、民主主義的な講和で戦争をおわらせることはできないことを、「善意の祖国防衛派」に根気づよく説明してやる必要があった。戦争の性格を説明する大がかりな活動を軍隊内でおこなわなければならなかったし、戦線での兵士の交歓を極力奨励する必要があった。なぜなら、この交歓は、交戦諸国の兵士大衆を革命化したからである。

テーゼが産業の分野で予定していたのは、物資の社会的な生産と分配にたいするソヴェトの統制の実施、国内のすべての銀行をただちに単一の全国的銀行に統合し、その活動にたいするソヴェトの統制を実施することであった。土地問題では、地主所有地を没収し、この没収にもとづいて国内のすべての土地を国有化し、土地の処分を農民・雇農代表ソヴェトにゆだねることが、提

案されていた。レーニンは、農村の貧農層の結束に特に留意した。
党生活の分野では、党大会をただちに招集すること、最初の綱領が採択された一九〇三年いらいの革命運動の経験がもたらしたあらゆる新しいものを考慮し、一九一七年の二月革命後に党の当面した新しい課題を考慮して、党綱領を改正することが提案されていた。レーニンは党名の変更を提案した。すなわち、ほとんど全世界で社会民主党の指導者が社会主義を裏切り、ブルジョアジーのがわにうつってしまったので、社会民主党というかわりに党を共産党と呼ぶよう提案した。このような名称は、党の闘争目標である共産主義の建設を正しく特徴づけている。レーニンは、日和見主義、社会排外主義を知らない新しい、第三共産主義インタナショナルの創設を呼びかけた。
レーニンのテーゼは、ブルジョア民主主義革命から社会主義革命に移るための闘争のあらゆる面にわたっていた。このテーゼは、プロレタリア革命の推進力を規定し、移行の諸段階をしめし、党の経済綱領、とくに農業綱領をもりこんでいた。レーニンのテーゼには、ソヴェト共和国がプロレタリアートの執権(ディクタツーラ)の政治形態として規定されていた。テーゼは、社会主義革命に移る理論的根拠を示した具体的な計画をあたえていた。
レーニンのテーゼは、すべてのブルジョア政党や協調主義政党から敵意をもってむかえられた。ブルジョアジーは、レーニンが国の歴史や利益を無視しているかのように人民を説得しようとした。レーニンと彼の社会主義革命思想とをにくむあまり、ブルジョアジーは、メンシェヴィキやエス・エルの指導者の支持を受けて、レーニンはドイツの参謀本部と結託しているという、途方もない中傷までするようになった。メンシェヴィキは、レーニンが「反動派の御用をつとめてい

る」とわめきたてた。プレハーノフは、四月テーゼをたわごとだと極言した。トロツキーは、二月革命後も、「ツァーリをたおして労働者政府を」という自分の古いスローガンを支持していた。レーニンは、『戦術にかんする手紙』のなかで、自分のテーゼはトロツキーに鋒先をむけたものであり、トロツキーの「永続革命」という図式は、ブルジョア民主主義革命が社会主義革命に成長転化していく過程をとびこえていると、わざわざ強調した。党内で四月テーゼに反対したのは、カーメネフ、ルィコフ、ピャタコフとそのひとにぎりの支持者で、彼らは、ロシアはまだ社会主義革命ができるほど成熟していないと主張した。

二、三週間のあいだに、全党がレーニンの思想を中心に団結した。党には、それまでの党の歴史全体により、日和見主義にたいする断固たる闘争全体によって、その準備ができていたのである。ボリシェヴィキは、ブルジョア民主主義革命を社会主義革命に成長転化させるという、レーニンの理論で武装していたし、社会主義は最初はただ一つの国でも勝利するというレーニンの学説をよりどころにしていた。

党の思想的団結をはっきりしめしたのは、レーニンがテーゼを発表してから一〇日後の四月一四日にひらかれたボリシェヴィキのペトログラート全市協議会であった。協議会の代議員の圧倒的多数は、レーニンの報告を聞いて、テーゼの趣旨で起草されたレーニンの決議案に賛成した。

レーニンのテーゼを中心にして全党を全国的規模で最後的に団結させたのは、一九一七年四月二四日から二九日まで、ペトログラートでひらかれたボリシェヴィキ党第七回（四月）全国協議会であった。協議会には議決権をもつ一三三名の代議員と評議権をもつ一八名の代議員が出席していた。彼らは八万の党員を代表していた。協議会は、現在の情勢の問題（戦争、臨時政府その

他）、労働者・兵士代表ソヴェトにたいする態度、党綱領の改正、インタナショナル内の状態と党の任務、土地問題、民族問題その他を審議した。レーニンは、現在の情勢の問題、土地問題、党綱領改正問題といった主要な問題について報告した。これらの報告の基礎には、四月テーゼがおかれていた。全国協議会は全員一致でレーニンの諸決議案を採択したが、このことは、党の政治的一致団結を証明していた。

協議会でレーニン反対の副報告をおこなったのはカーメネフであった。彼は、ロシアのブルジョア民主主義革命はおわっていないとか、ロシアは社会主義革命ができるほど成熟していないとかのべた。カーメネフは、臨時政府と手を切ることに反対し、政府を統制するというメンシェヴィキの提案を支持した。カーメネフは、ロシア一国で社会主義が勝利する可能性を否定して、社会主義革命の問題を日程からはずそうとした。ルィコフはカーメネフを支持して、ロシアには社会主義革命の客観的条件はないとか、社会主義革命への衝撃をあたえるのは西欧でなければならないとかのべた。レーニンは、カーメネフやルィコフや、その少数の支持者の降伏主義的立場を暴露し、ロシアで社会主義が勝利する可能性を否定することにはげしく反対してこう言った――

「ルィコフは、社会主義はもっと発展した工業をもつ他の国々からやってこなければならない、とのべている。だが、これはちがう。だれが火蓋（ひぶた）を切り、だれが仕とげるかは、だれも言えない。それはマルクス主義ではなく、マルクス主義のもじりである」（全集、第二四巻、二四七ページ）。

協議会は、レーニンの報告にもとづいて現在の情勢についての決議を全員一致で採択し、「実践的に機の熟した、社会主義をめざす一連の諸方策が猶予できないものとなっていること」を人

民に説明するうえで、プロレタリアートがはたす指導的役割を強調した。こうした方策とは、土地の国有化、単一の中央銀行にすべての銀行を統合するとともに、それらの銀行にたいする国家統制をうちたてること、保険機関および資本家の巨大シンジケートにたいする統制をうちたてることである。ソヴェトは、これらの方策の実施とならんで、全般的労働義務制の実施にとりかかることができるであろう。

「以上にあげた方策やこれに類する方策は」と決議はのべている。「全権力がプロレタリアと半プロレタリアにうつったばあいに全国をつうじて実施するために、これを審議し準備することができるし、またそうしなければならないだけではない。それらはまた、可能性のあるところでは、地方の全人民の革命的な権力機関の手で実施することができるし、またそうしなければならない」(『ソ連邦共産党決議集』、第一巻、四五五ページ)。

決議は、ただ一国ででも社会主義の勝利が可能であるという、レーニンの学説をよりどころにしていた。

四月協議会は、レーニンの書いた、戦争にたいする態度についての決議を採択した。そのなかでは、ロシアで権力が地主と資本家の政府にうつったことは戦争の帝国主義的性格をかえなかった。だからプロレタリア党は戦争をも、政府をも、戦争のための政府公債をも支持してはならないと、指摘されていた。協議会は、ボリシェヴィキがドイツとの単独講和に賛成しているという、資本家の言いふらしている中傷に抗議した。決議はこうのべている。「われわれは、ドイツの資本家を、ロシア、イギリス、フランスその他の資本家と同じような強盗であると考えており、皇帝ヴィルヘルムは、ニコライ二世やイギリス、イタリア、ルーマニアその他すべての国の君主と

同じような、王冠をいただく強盗であると考えている」(『ソ連邦共産党決議集』、第一巻、四三九ページ)。戦争をおわらせることは、全国家権力を労働者階級と貧農の手にうつすことによってのみ可能である。

土地問題についての報告で、レーニンは、地主の土地を没収し、すべての土地を国有化するという要求の階級的意味に、とくに論及した。地主の土地の無償没収は、まず第一に農民の宿望をみたすものであるが、同時に、地主とブルジョアジーの支配の土台を破壊する。地主の土地の没収は、君主制の復興を防ぐ保障である。地主の土地は銀行の抵当にはいっているから、地主の土地を没収することは、ブルジョア的所有にも手いたい打撃をあたえることになる。すべての土地の国有化は、土地用益から農奴制のあらゆる遺物をとりのぞくであろう。党は、憲法制定議会まで土地問題の解決をひきのばそうとする臨時政府と協調主義者の意図に断固として反対し、ただちに組織的に土地をとりあげるよう、農民に勧告した。

社会主義革命の勝利は、プロレタリアートが被抑圧諸民族の勤労者をひきいていくことができるかどうかに多分にかかっていた。協議会では、イ・ヴェ・スターリンが民族問題について報告した。レーニンの書いた決議では、ツァーリズムのおこなっていた民族抑圧政策は、地主と資本家と小ブルジョアジーに支持されている。民族的抑圧は、彼らが階級的特権をまもり、種々の民族の労働者を分裂させることを可能にする、と強調されていた。決議では、今日の帝国主義は民族的抑圧を激しくしていると指摘されていた。

決議の基本的な条項は、ロシアにくわわっているすべての民族に自由に分離して独立の国家をつくる権利をみとめることであった。こういう権利をみとめることによってはじめて、さまざま

な民族の労働者の連帯が保障された。「こういう権利を否認したり」と決議には書いてあった。「この権利が実際に実現されるのを保障する方策をとらないのは、征服または併合の政策を支持するに等しい」(同、四四八ページ)。それと同時に決議には、自決権と、ある民族の分離が適切かどうかという問題とを混同することはゆるされない。党は、この問題を、一つ一つのばあいについて、社会的発展全体の利益と社会主義をめざすプロレタリアートの闘争の利益との見地から、解決しなければならない、とのべられていた。

党は、単一の国家の境界内にとどまることを希望する諸民族のために、もっとも広範な自治を要求し、また特別な法律を公布して、少数民族の自由な発展を保障し、ある一つの民族の特権や少数民族の権利の侵害は、どんなものもみな無効であると宣言するよう、要求した。

協議会は、メンシェヴィキとブント派の「文化的民族的自治」を非難して、これは一地方に住んでいる労働者を、それどころか同一企業に働いている労働者さえ、人為的に区分し、個々の民族の労働者とブルジョア文化とのむすびつきをつよめるものである、とのべた。労働者階級の利益は、すべての民族の労働者を単一のプロレタリア組織――政治組織、労働組合組織、協同組合組織、啓蒙団体など――に融合させることを要求している、と決議は強調した。

「いろいろな民族の労働者を単一の組織に融合させてはじめて」と決議はのべている。「プロレタリアートは、国際資本にたいし、ブルジョア民族主義にたいして勝利の闘争をおこなうことができる」(同、四四九ページ)。

協議会で党の民族政策に反対したのは、ピャタコフであった。彼は、民族国家はすでにとおりすぎた段階で、帝国主義のもとでは不可能であるから、分離をもふくむ民族自決権は反動的なス

地に徹底的な批判をくわえた。協議会は圧倒的多数の票で、ピャタコフの決議案を否決した。
協議会は、ソヴェトの問題に大きな注意をはらい、ロシア各地の労働者・兵士代表ソヴェトではたらいていた同志たちの報告と情報を聞いた。レーニンが書いて、協議会が採択した決議には、こう強調されている——

「幾多の地方で、プロレタリアートと農民が自発的にソヴェトを組織し、自発的に旧官憲を一掃し、プロレタリアと農民からなる民兵を創設し、すべての土地を農民に引き渡し、労働者の工場統制を実施し、八時間労働日を実施……することによって、革命は前進しつつある」(『ソ連邦共産党決議集』、第一巻、四五六ページ)。

ウラルの諸地区、モスクワ近郊、ドンバスの炭鉱の労働者のあいだでは、レーニンの規定によると「単独権力が樹立されていた」。

レーニンの報告にもとづいて、協議会は、党綱領改正の必要をみとめ、この改正の方向を指示した。せまりつつある社会主義革命とむすびつけて、帝国主義と帝国主義戦争の時代に評価をくだすこと、綱領のなかの国家についての命題を改正すること、ソヴェト共和国を樹立せよという要求をいれること、綱領の古くさくなった部分を削除あるいは改正し、とりわけ採択された土地問題についての決議にあわせて農業綱領を書きかえること、そのための準備がもっともととのっている独占体の国有化の要求をいれること、などがそれであった。

インタナショナルの問題では、レーニンは、ツィンメルヴァルト連合と手を切って、新しいインタナショナルの創設にすぐ着手するよう提案し、やむをえないばあいには情報をえる目的でだ

け連合内にとどまるべきである、とのべた。この提案にはジノヴィエフが反対し、ツィンメルヴァルト派が祖国防衛派とのつながりをたっていなかったにもかかわらず、彼らとのブロックを維持するよう主張した。協議会は、ツィンメルヴァルト・ブロックにとどまり、そのなかでツィンメルヴァルト左派の戦術を擁護することにきめた。レーニンはこの決議をあやまったものと考えていた。その後、彼の見地は党によって採用された。

協議会は、第三インタナショナルを創設するイニシアティヴをとってその創設に着手することを中央委員会に委任した。協議会は、レーニンを先頭とする中央委員会を選出した。

四月協議会は、ロシア国内でひらかれたボリシェヴィキ党の最初の合法的な協議会であった。それは、大会に匹敵する重要性をもっていた。協議会は、ブルジョア民主主義革命を社会主義革命に成長転化させる闘争の計画で、党を武装した。協議会は、革命を敗北の運命におちいらせるカーメネフ、ピャタコフその他の者の日和見主義的方針を暴露し、排撃した。四月協議会の諸決定は、ロシアを戦争と経済的崩壊からぬけださせ、搾取をまぬがれさせ、ロシアが外国帝国主義者に隷属する危険を一掃する唯一の道、ロシアにおける社会主義革命の勝利をめざす闘争の道を労働者階級と勤労者全体にしめした。

3　二重権力の時期における大衆獲得をめざす党の闘争。七月事件

四月協議会の諸決定で武装した党は、大衆のあいだで大々的な活動をくりひろげた。党は、平

和と土地とパンを獲得するにはどうすればよいかをのべた、明確で整然たる綱領をかかげて、人民のなかにはいっていった。

ボリシェヴィキ党は、すべての搾取される不幸な人々の利益の守り手、彼らの指導者として行動した。ボリシェヴィキは、勤労者のすべての層を闘争に立ちあがらせて、さまざまな革命的な流れを、資本主義に反対し社会主義をめざす闘争という、単一の方向にむけていった。

全権力をソヴェトにうつすための闘争では、勤労者の直接の主要な階級敵は、レーニンが強調したように、ブルジョアジーであった。ブルジョアジーは、ソヴェトの内部で優位を占めていた協調主義者の支持をよりどころにしていた。エス・エルとメンシェヴィキは、ブルジョアジーの主要な支柱であった。任務は、ブルジョアジーからのこの支柱をとりのぞくことにあった。エス・エルとメンシェヴィキの手から、ソヴェトその他の大衆組織の指導権をうばいとり、彼らを大衆から孤立させる必要があった。だから当時ボリシェヴィキは、主敵のブルジョアジーを粉砕するために、ブルジョアジーの支柱、レーニンの書いているところでは、「もっとも身近な敵」である協調主義者に、主要な打撃をくわえた。

党の主な活動は、大衆組織のなかで、なによりもまず労働者・兵士代表ソヴェト、農民代表ソヴェトおよび兵士委員会のなかでおこなわれた。労働者代表ソヴェトは、すでに三月中に、ほとんど全国にわたってつくられていた。農民代表ソヴェトは、労働者代表ソヴェトよりおくれて県や郡の中心地にあらわれた。一九一七年の夏ごろ、それは約四〇〇になっていた。軍隊では、前線でも守備隊でも、すべての中隊と連隊内に、さらに上位の編隊内に、兵士委員会が組織された。軍隊むけの新聞『ソルダーツカヤ・プラウダ』〔『兵士の真理』〕、『オコープナヤ・プラウダ』

〔『塹壕の真理』〕が発行された。活動は、労働組合、工場委員会、その他の大衆組織のなかでおこなわれた。こうして党は、一歩一歩、ボリシェヴィキの考えが正しいことを、勤労者に確信させ、自分の政治的軍隊をつくりあげていった。ボリシェヴィキが正しいことは、早くも四月協議会の直前や協議会の最中に国内でおこった諸事件が、これをしめしていた。

四月一八日（旧暦）、ロシアの勤労者はメーデーを祝った。この日、外相ミリュコフは同盟諸国に覚書をおくって、臨時政府はツァーリ政府のむすんだあらゆる条約を守るであろうし、ロシアは勝利をおさめるまで戦争をつづけるであろう、と確約した。四月二〇日、わずか二日まえ講和のスローガンをかかげてデモンストレーションをおこなった労働者と兵士は、ミリュコフの覚書のことを知った。午後になると、ペトログラート守備隊の兵士が街頭にあらわれ、臨時政府のおかれていたマリア宮殿にむかった。彼らは、「全権力をソヴェトへ！」、「戦争をやめろ！」「ミリュコフをたおせ！」、「グチコフ」（陸相）「をたおせ！」という要求をかかげたプラカードを手にしていた。兵士には労働者が合流しだした。市内では大衆集会がはじまった。

労働者と兵士の行動にこたえて、臨時政府の支持者たちは、政府を信頼せよ、というスローガンをかかげて、対抗デモンストレーションを組織した。

この同じ四月二〇日、ボリシェヴィキ党中央委員会がひらかれた。レーニンの書いた決議のなかで、中央委員会は、その階級的性格からしてブルジョア的な臨時政府は帝国主義戦争をおわらせることができない、と指摘した。それと同時に中央委員会は、「ミリュコフをたおせ！」とか「グチコフをたおせ！」とかいうスローガンに警告を発した。ブルジョアジーとその同盟者であるエス・エルやメンシェヴィキは、駆引をするかもしれない。すなわち、彼らは、政府の顔ぶれ

をいくらかすげかえて、人民にむかって、これで政府の政策も変わった、というであろう。大多数の人民の支持をえて国家権力を自分の手ににぎった革命的プロレタリアートだけが、全世界の労働者の信頼をよせる政府、早めに戦争をおわらせることができる唯一の政府を、ソヴェトの形でうちたてるであろう、と。

ボリシェヴィキ党の呼びかけにこたえて、四月二一日、ペトログラートの労働者は、仕事をやめ、デモンストレーションに出かけた。一〇万人以上のデモ参加者は、平和の要求をかかげてすすんだ。

ブルジョア出版物と小ブルジョア出版物はみな、ボリシェヴィキが内乱を準備しているといって非難した。四月二一日、ボリシェヴィキ党中央委員会は、この中傷を断固として反駁した。中央委員会は、すべての労働者に、ソヴェト代議員の改選をおこない、協調主義者を追放して、人民の真の代表をそこへおくれ、と呼びかけた。

四月二一日のデモンストレーションのさいに、ペテルブルク市委員の小グループ（エス・バグダチエフその他）は、同委員会の同意をえずに、「臨時政府をたおせ！」というスローガンをかかげた。中央委員会は、四月二二日、このスローガンをあやまった、冒険主義的なスローガンとして非難したレーニンの決議案を採択した。このスローガンは、蜂起の呼びかけを意味しており、革命を平和的に発展させるという、党の方針に反するものだったからである。

デモンストレーションは、モスクワ、ウラル、ウクライナの都市やその他の地区でもおこなわれた。

四月事件は、ありきたりのデモンストレーションではなかった。四月事件のときには、プロレ

タリアートとブルジョアジーが同時に登場して、広範な大衆のまえに、だれといっしょにいくかという問題を提起したのである。「善意の思いちがい」をして、協調主義者を信用していた人々の多くは、権力をにぎったプロレタリアートだけが戦争をおわらせることができることを確信した。四月のデモンストレーションは、レーニンの規定によれば、中間分子を「洗いながす」結果となった。すなわち、動揺分子が革命的プロレタリアートのがわにうつるのをはやめた。こうして、このデモンストレーションは、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化をたすけた。

デモンストレーションは、権力の危機の端緒となった。陰謀によって単独権力をかちとるつもりだった臨時政府は、その力のないことを暴露した。臨時政府は、外国帝国主義者の入知恵で新しい駆引をすることにした。それは、人民をあざむくために、閣僚をふやして、エス・エルとメンシェヴィキを入閣させるというのであった。五月五日、臨時政府とペトログラート・ソヴェトのエス・エル＝メンシェヴィキ的執行委員会とのあいだに、いわゆる連立政府をつくる協定がむすばれ、エス・エルからヴェ・チェルノフ、メンシェヴィキからイ・ツェレテリとエム・スコベレフ、その他が入閣した。一九〇五―一九〇七年には、革命政府への参加がさしつかえないことを否定していたメンシェヴィキが、こんどは、反革命政府に入閣したのである。この連立は、革命の初めにすでに事実上できあがっていた大ブルジョアジーと小ブルジョアジーとのブロックを、確認したものであった。ブルジョア政府は、ブルジョアジーのがわに公然とうつったエス・エルとメンシェヴィキによって救われた。

連立政府は、危機の原因をとりのぞきはしなかった。革命のずっとまえからはじまっていた経

済的崩壊は、ひきつづき悪化の一途をたどった。五月には、すべての工業地区で、経済状態を改善せよというスローガンのもとに、たえずストライキがおこなわれた。労働者は、資本家の抵抗を打破して、無断で八時間労働日を実施した。農村では農民が、憲法制定議会を待たずに、地主から空地をとりあげて作付をした。農民は、ソヴェトに腰をすえたエス・エルの指導者のいうことをきかずに、地主に抗して立ちあがった。広範な農民大衆を獲得するうえで大きな役割をはたしたのは、五月二二日、第一回全ロシア農民代表大会の席上でレーニンがおこなった演説であった。この演説のなかで、彼は土地問題についてのボリシェヴィキの行動綱領を説明した。労働運動と農民運動は、軍隊に影響をおよぼした。戦争の継続は兵士の憤激を買い、彼らの革命的気分をつよめた。

兵士のあいだでのボリシェヴィキの活動の進展をたすけたのは、一九一七年六月に中央委員会が招集した、ボリシェヴィキ軍事組織の全ロシア会議であった。会議には前線と銃後の六〇の軍隊内組織の代表が出席した。これらの軍隊内組織は、約二万六〇〇〇人の党員を統合していた。レーニンは会議で、現在の情勢についての報告と土地問題についての報告をおこない、プロレタリアートと革命的軍隊の勢力が、ソヴェトへの権力移行の準備を精力的にととのえるよう呼びかけた。

革命が深まれば深まるほど、ますますブルジョアジーは、唯一の救いの道と彼らの考える手段をもちいようとするようになった。それは、前線で軍隊を攻勢にうつらせることであった。ブルジョアジーの胸算用は簡単であった。もし成功すれば、この攻勢は、政府の権力をつよめるだろうし、政府はボリシェヴィキにおそいかかって、ソヴェトを解散させることができるだろう。ま

た攻勢が失敗したばあいには、責任をボリシェヴィキに転嫁し、彼らが軍隊を腐敗させたのだといって非難し、彼らの活動を禁止し、ついでソヴェトをも解散することができるだろう、というのであった。

だが、ブルジョアジーには、力だけでは兵士に戦争をつづけさせるわけにはいかないことがわかっていた。陸相に任命されたケレンスキーは、あらかじめ攻撃命令を準備していたが、攻勢をはじめる期日をしめさなかった。彼は、六月三日にひらかれた第一回全ロシア・ソヴェト大会に、自分の決定を承認させるつもりでいた。大会の活動には一〇〇〇名以上の代議員が参加していたが、そのうち、ボリシェヴィキ代議員は一〇五名にすぎなかった。大会で大多数を占めていたエス・エルとメンシェヴィキは、ブルジョアジーとのブロックを維持することに賛成した。メンシェヴィキの指導者ツェレテリは、ロシアには単独で全権力を引き受けるような政党は一つもない、と言明した。これにこたえてレーニンは、「そういう党はある！」と言明した。彼は、発言をゆるされて、代議員にボリシェヴィキの綱領をくわしく説明し、全権力をソヴェトにひきわたすよう呼びかけた。

協調主義者は、「全権力をソヴェトへ！」というスローガンが実現できないことを証明しようとした。彼らは、ブルジョアジーとの連立を是認し、臨時政府の政策を正しいものとみとめた決議を通過させた。

ボリシェヴィキは、大会多数派の立場が、プロレタリアートや軍隊の先進的な層の意見とどれほどくいちがっているかを、大会にしめすことにした。ボリシェヴィキ党中央委員会は、「全権力をソヴェトへ！」、「一〇人の資本家大臣をたおせ！」、「労働者による生産の統制を実施せ

よ！」、「攻勢政策反対！」のスローガンをかかげて、六月一〇日にデモンストレーションに出かけるよう、ペトログラートの労働者と兵士に呼びかけた。

だが、六月九日、エス・エルとメンシェヴィキに指導されるソヴェト大会は、デモンストレーションを禁止する決議を採択した。

デモンストレーションをとりやめるのはむずかしかった。だが、大会の決定に服さないのは、自分を大会に対立させることであった。六月九日の夜おそく、党中央委員会は、大会の決定に服することにきめて、街頭進出をとりやめるよう、労働者と兵士に呼びかけた。この決定にしたがって、デモンストレーションに出かけた工場や連隊は、一つもなかった。このことは、党の影響力が増大したことを立証しており、また、党が大衆とのむすびつきを維持し、必要なときには後退する能力をもっていることを立証していた。

その翌日、すべての新聞がボリシェヴィキ狩りをはじめた。メンシェヴィキの指導者たちは、大会で、ボリシェヴィキが陰謀をくわだてたと非難し、ボリシェヴィキの武装解除を要求した。大会は、デモンストレーションをとりやめさせたあとで、代議員たちに工場や兵営を視察するよう委任したが、そこにいってみて彼らは、問題がボリシェヴィキの「陰謀」にあるのではなく、首都のプロレタリアートと守備隊との気分にあることを確信した。大会幹部会は、大衆のあいだでの影響力をすっかりなくしてしまうのをおそれて、デモンストレーションを組織すること、ただし自分の指導のもとで組織することにした。デモンストレーションの日取りは、六月一八日ときめられた。ほかならぬこの日がえらばれたのは、偶然ではなかった。あらかじめ大会の支持を得ておいて、ケレンスキーは、六月一八日に西南戦線で攻勢を開始せよという命令をだした。

デモンストレーションは、ブルジョアジーの計画をごまかし、戦線での攻勢を是認するはずであった。

六月一八日、ペトログラートでは大規模なデモンストレーションが展開され、約五〇万人がこれに参加した。デモ参加者の圧倒的多数は、「全権力をソヴェトへ！」というスローガンをかかげてすすんだ。臨時政府信任のスローガンをかかげてすすんだのは、小人数の一団にすぎなかった。

デモンストレーションが非常に大規模なものであったこと、また、そのなかでボリシェヴィキのスローガンが大多数を占めていたことは、首都のプロレタリアートと守備隊がボリシェヴィキにしたがっていること、大衆が臨時政府を信任していないだけでなく、エス・エルやメンシェヴィキのとっている、ブルジョアジーとの協調政策をも信用していないことをしめしていた。

戦線におけるロシア軍の攻勢は失敗した。そこで反革命派は、ボリシェヴィキに自分の責任を転嫁するという、攻勢が失敗したばあいのために考えておいた計画をただちに実行に移しはじめた。七月二日、攻勢失敗の報道がペトログラートにつたわるやいなや、カデットは政府から脱退すると声明した。この行動は、協調主義者が単独で権力についているのをおそれてカデットの条件を受けいれるのを、あてこんだものであった。その条件とは、労働者の武装解除、革命的軍隊のペトログラートからの撤退、なによりも、ボリシェヴィキ党の禁止であった。

だが、カデットは、人民の気分を計算にいれていなかった。彼らは、政府危機をひきおこそうと考えていたが、首都で、ついで全国でも、政治的危機が熟していたことを見のがしていた。七月三日、ペトログラート第一機関銃連隊でひらかれた、中隊および連隊委員会の集会で、兵士た

ちは憤慨しながら、にくむべき戦争はつづいている、人民は飢えているのにブルジョアジーはもうけている、政府は国を破局にみちびこうとしている、とのべた。武装行動と臨時政府打倒の問題を審議せよ、と要求する声があがった。兵士は、ほかの連隊や工場に代表を派遣して、行動に参加するよう申し入れた。代表たちは、いたるところで支持を得た。

党は、大衆のあいだの革命的な気分を支持していたが、即時行動をおこすことには反対であった。ペトログラートの労働者と兵士は、臨時政府を打倒して、国家権力をその手ににぎる力を十分にもっていたであろう。しかし、この権力を維持することはできなかったであろう。なぜなら、当時はまだ国民の大多数が、エス・エルとメンシェヴィキにしたがっていたからである。だから、七月三日、中央委員会は、行動とデモンストレーションをさしひかえることを決定した。しかし、大衆をおさえることはもはや不可能であった。大衆が街頭に出ていき、ブルジョア政府がデモンストレーションを武装蜂起と宣言して、これに発砲する、という危険がせまってきた。

中央委員会は、その決定をとりけして、この行動を、「全権力をソヴェトへ!」というスローガンのもとにおこなわれる、平和的で組織立ったデモンストレーションにするために、これに参加することにした。その翌日、大規模なデモンストレーションがおこなわれ、五〇万人以上が参加した。

デモ参加者は、九〇名の代表をえらび、これらの代表は、全権力をソヴェトの手ににぎれという要求をソヴェト中央執行委員会につたえた。だが、エス・エルとメンシェヴィキは、別のことを考えていた。彼らは、デモンストレーションを粉砕することを政府と打ち合わせた。臨時政府に忠実な部隊を戦線から呼びよせる命令がだされた。いくつかの市区で――ネフスキー通りとサ

ドヴァ通りの街角、リテイヌィ大通り、その他の地点で、士官学校生徒とカザックが、デモ参加者に発砲した。

戦線からは、わざわざ呼びよせられた部隊が到着した。ブルジョア政府は弾圧にうつった。労働者の住宅地では、軒並に家宅捜索がおこなわれた。反革命派は、労働者から武器をとりあげた。デモンストレーションに参加した連隊の武装解除がはじまった。反革命派は、とくににくにくしげにボリシェヴィキにおそいかかった。七月六日、「トルート」印刷所が破壊された。この印刷所は、労働者がボリシェヴィキ党のためにあつめた金で買いいれられたものであった。『プラウダ』は禁止された。この同じ日に、反革命派は、『プラウダ』のかわりに党が発行した『小型版プラウダ』を印刷所からはこびだしたというだけの理由で、労働者ヴォイノフを殺害した。

ボリシェヴィキの逮捕がはじまった。是が非でもレーニンをさがしだし、拘留せよという命令がだされた。はやくから用意されていたでっちあげ――ボリシェヴィキはドイツとむすんでいるという中傷がばらまかれた。ペトログラート軍管区司令官ポロフツェフ将軍は、レーニンを捜索するために特設された部隊の隊長に、レーニンをその場で射殺せよという命令をくだした。

党は、自分の首領を地下にかくした。レーニンは、はじめのうちはペトログラートにかくれていたが、その後、ラズリフ湖のほとりにかくれた。カデット、エス・エル、メンシェヴィキのあらゆる新聞は、レーニンの裁判所出頭を要求した。反革命派は、エス・エルとメンシェヴィキの支持をうけて、ボリシェヴィキ党の頭をはねようとねらっていた。全国で反革命派が横行しはじめた。陸相ケレンスキーは、戦線で死刑を制定した。エス・エルやメンシェヴィキ系の兵士委員会の援助で、政府は、前線ばかりでなく、銃後でも、革命的部隊の武装を解除しはじめた。コル

ニーロフ将軍が最高総司令官に任命されてからは、弾圧はとくにはげしくなった。

七月事件は、国内の情勢と階級間の力関係を一変させた。メンシェヴィキとエス・エルは、反革命の陣営に決定的にうつることによって、ブルジョアジーとの協調政策を最後までやりとげた。エス・エルとメンシェヴィキは、ブルジョアジーとの協調の党から、反革命派の手先の党になってしまった。二重権力はおわった。ブルジョアジーは単独権力をかちとった。エス・エル＝メンシェヴィキ的ソヴェトは、ブルジョア政府の付属物となった。

だが、ブルジョアジーは、革命的大衆をおしつぶすことはできなかった。ボリシェヴィキはいち早く後退して、その主力に打撃をまぬがれさせることができた。

4　第六回党大会。党の武装蜂起方針。コルニーロフ陰謀の粉砕

国内の情勢と力関係の変化にともなって、党の戦術もスローガンも、変化しなければならなかった。レーニンは、七月四日以後のロシアの政治情勢が、二月二七日から七月四日にいたる時期の情勢とは、根本的にちがっていることをしめした。そのころには可能でもあり、もっとも望ましくもあった革命の平和的発展の段階はおわった。エス・エルとメンシェヴィキは、その裏切りによって、平和的な発展の道をぶちこわしてしまった。全権力が反革命派の手にうつったいまでは、労働者階級は、武装蜂起によってのみ権力をにぎることができた。

それと同時にレーニンは、即時反政府行動に出るのはあやまりであろうと警告し、断固たる強

襲は大衆自身のあいだに新しい革命的高揚がおこったばあいにはじめて可能である、と言った。レーニンは、「全権力をソヴェトへ！」というスローガンを、一時おろすことを提案した。これは、新しい型の国家であるソヴェト共和制を放棄することを意味するものではなかった。それは、その手を人民の血でけがしたエス・エルやメンシェヴィキに指導される現在の構成のソヴェトは、人民の権力機関にはなりえない、ということであった。

「この新しい革命のなかで」とレーニンは書いている。「ソヴェトはおそらく出現するだろうし、またかならず出現するであろうが、それはいまのソヴェトではなく、ブルジョアジーとの協調の機関ではなくて、ブルジョアジーとの革命闘争の機関である。そのばあいでも、国家全体の構造をソヴェト型にすることにわれわれは賛成するだろうというのは、そのとおりである。だが、これは、ソヴェト一般の問題ではなく、いまの反革命とたたかい、いまのソヴェトの裏切りとたたかう問題なのである」（全集、第二五巻、二〇六ページ）。

情勢の変化におうじた新しい戦術の作成に当たったのは、第六回党大会であった。大会は、一九一七年七月二六日から八月三日にかけて、ペトログラートでひらかれた。大会の活動は、半合法的におこなわざるをえなかった。ブルジョア出版物や小ブルジョア出版物では、ボリシェヴィキ狩りがつよまった。外国の大使は、大会を解散し代議員を逮捕することを要求した。

反革命派の計画は失敗した。労働者は、自分たちの党の大会を用心ぶかく守った。

レーニンは、大会に出席することができなかったが、その討議を指導した。中央委員たちは、ラズリフ湖の対岸に彼をたずねていった。レーニンは『政治情勢について』というテーゼを準備した。レーニンのこのテーゼと彼の労作『スローガンについて』、『革命の教訓』その他は大会の

諸決議の基礎になった。

最初の議題の一つとして代議員が審議したのは、レーニンの裁判所出頭の問題であった。一部の代議員は最初は、レーニンの安全が保障され、裁判が民主的におこなわれるならばレーニンが裁判所に出頭してもよいとみとめていた。だが大会の討議がすすむあいだに、彼らは自分たちの決議案を取りさげた。大会は、レーニンが裁判所に出頭しないことに全員一致で賛成し、革命的プロレタリアートの首領にたいする言語道断な迫害に抗議した。大会はレーニンにあいさつをおくった。

レーニンの論文をよりどころにして、中央委員会の政治報告と政治情勢についての報告をおこなったのは、イ・ヴェ・スターリンであった。これらの報告にもとづいて決議が採択されたが、その基礎にはレーニンの方針がおかれていた。

「現在」と決議『政治情勢について』にはのべられている。「平和的発展と権力のソヴェトへの円満な移行は不可能になった。なぜなら、権力はすでに実際に反革命的ブルジョアジーの手にうつっているからである。

現在正しいスローガンとなりうるものは、反革命的ブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）の完全な一掃だけである。革命的プロレタリアートだけが、貧農に支持されるばあいに、あらたな高揚の課題であるこの課題をはたすことができる」（『ソ連邦共産党決議集』、第一巻、四八八ページ）。

こうして第六回党大会は、武装蜂起によってのみ、ブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）を打倒することによってのみ、権力はプロレタリアートと貧農の手にうつることができることを指示したのである。

党の社会主義革命方針に反対したのは、ブハーリンであった。彼は、農民はブルジョアジーとブロックをむすんでいるから、労働者階級のあとについてはこないであろう、と主張した。スターリンは、この日和見主義的な主張を反駁するとともに、ブハーリンがマルクス主義の基盤をすてて、階級的分析をおこなわずに農民の問題をとりあつかっていることをあきらかにした。農民にもいろいろある。富農は帝国主義的ブルジョアジーを支持しているが、貧農は、革命の勝利をめざしてたたかうプロレタリアートを支持している、と。大会では、決議の修正を提案したプレオブラジェンスキーに反論がくわえられた。この修正提案では、ロシアで社会主義革命が勝利する可能性は否定され、西欧にプロレタリア革命がおきたばあいにはじめて、国を社会主義の道にむけることができるだろう、とのべられていた。スターリンはこれに答えて、レーニンが四月協議会でルィコフに反対してのべた、ロシア一国で社会主義が勝利するという命題をくりかえした。

「ほかならぬロシアが」とスターリンはのべた。「社会主義への道を切りひらく国となる可能性は、ないわけではない。……ヨーロッパだけがわれわれに道をしめすことができるという、古くなった考えをすてなければならない」（全集、第三巻、二一九ページ）。

大会は、プレオブラジェンスキーとブハーリンの日和見主義的な提案をしりぞけた。決議は、棄権四名をのぞいて、全員一致で採択された。

中央委員会の組織活動について報告をおこなったのは、ヤ・エム・スヴェルドロフであった。四月協議会から第六回大会までの三ヵ月間に、党は三倍になり、党には二四万人の党員を擁する一六二の組織があった。大会の活動には、ポーランド、ラトヴィア、リトワニアのボリシェヴィキの代表が参加していた。彼らは、各地のボリシェヴィキ党組織に所属しているばあいもあった

が、多くは各地の委員会の当該支部として活動していた。

大会は、「党の統合」の問題を審議した。祖国防衛主義から出発したメンシェヴィキは、帝国主義の手先になって、プロレタリアートの敵の陣営に最後的にうつっていた。大会は、帝国主義者であるメンシェヴィキの裏切り政策を暴露することを党の重要任務とみとめ、彼らと統合しようとするいっさいの企てを非難し、帝国主義者のメンシェヴィキと実際に手を切ったすべての国際主義者の統一というスローガンをかかげた。

大会は、ボリシェヴィズムのすべての命題に同意すると声明したので、トロッキーを先頭とする「メジライオンツィ」を入党させた。このグループは、日和見主義者にたいして妥協的な気分をもっていた一部の動揺的なボリシェヴィキと、トロッキー派メンシェヴィキとによって、すでに戦前に結成されていたものであった。戦時には、「メジライオンツィ」は中央派的な立場をとって、メンシェヴィキとボリシェヴィキのあいだを動揺していた。彼らは、戦争を帝国主義戦争とみとめ、祖国防衛主義に反対していたが、メンシェヴィキと完全に手を切ることには同意しなかった。いまや彼らは祖国防衛派と手を切った。事実がしめしているように、たとえばヴォロダルスキーやウリッキーのような一部の「メジライオンツィ」が、実際にその中央派的動揺と手を切ったのにたいして、トロッキーとその少数の支持者は、党内にあってレーニン主義とたたかい、自分たちの日和見主義的・反党的な政策を党におしつけるために、一時ボリシェヴィズムにたいする闘争を中止して入党したにすぎなかった。

地下から出てきたのち党の活動条件が変化したうえに、党が急激に成長したため、党規約にいくつかの補足をくわえることが必要になった。新しい規約の第一条は、党の綱領をみとめ、党組

織の一つに所属し、党費をおさめる者はすべて党員とみなされる、と規定していたが、大会は、これに「党のすべての決定に服する者」と補足した。新党員の採用は、党員二名の推薦にもとづいて地方の党組織によっておこなわれ、その組織の党員総会によって確認されることになった。規約では、すべての党組織は民主主義的中央集権制の原則にもとづいて建設されることが強調され、党組織は地区別および地方別に統合されることが指示されていた。大会は年一回、中央委員会総会はすくなくとも二ヵ月に一回招集されることがきめられた。

大会は、党と労働組合との相互関係についての決議を採択した。メンシェヴィキの労働組合中立論に反対する党の諸決定を確認して、大会は、労働者の全員が労働組合に結集するのを極力促進すること、全党員は労働組合に加入し、そのなかに党グループをつくること、帝国主義戦争支持を拒否して、階級闘争の見地に立つ労働組合が加入する国際組織の創立のためにたたかうことを決定した。

青年のあいだの活動の問題について大会は、組織上では党に従属していないが、思想的には党に指導される青年同盟を創立することに賛成した。党はこれらの同盟をその活動の当初から社会主義的なものにするよう努力すべきである。これらの同盟の任務は、青年労働者の階級的自覚を向上させるとともに、彼らがプロレタリアートの革命的前衛と歩調をあわせるようにすることである、と。

第六回大会は党の経済行動綱領を審議した。大会の決議にはこう指摘されていた。国は深刻な経済的危機にあり、「最後的な経済的崩壊と破滅の深淵におちこみつつある」。ブルジョアジーは、経済的危機を利用して革命とたたかおうとして、意識的にこの危機を深めている。この危機的な

状況を打開するただ一つの方法は、権力をプロレタリアートと貧農の手にうつすことである。これらの階級だけが、権力をにぎったのち、つぎのような革命的方策を講じて国を救うことができる。銀行業を国有化し集中すること、一連の独占体（石油、石炭、砂糖、冶金、運輸の）を国有化すること、小所有者の利益を守りながら内外の債務の支払を拒否すること、労働者統制を確立しこれを徐々に完全な生産規制に切りかえていくこと、都市に必要な農産物を供給し、農村に工業製品、農機具を供給するために、協同組合と食糧委員会との力をかりて、都市と農村のあいだの正常な交換を組織すること、がそれである。決議は、労働者組織――労働組合、工場委員会、ソヴェト――に、これらの措置の実施を支持するよう、この仕事で創意を発揮し、全国的規模での実施をめざすよう、呼びかけた。

第六回大会は、プロレタリアートと貧農に武装蜂起と社会主義革命の勝利との準備をととのえさせるという主目標に、すべての決定を従わせた。大会は、すべての勤労者、すべての労働者、兵士、農民に宣言を発して、ボリシェヴィキ党の旗のもとにブルジョアジーとの決戦にそなえよ、と呼びかけた。

単独権力をかちとったブルジョアジーは、革命を一掃してロシアに君主制を復活するという計画をしとげようとくわだてた。その手段の一つは、ブルジョアジーが工業をいっそう混乱させることであった。「飢えの骨ばった手」が革命ののどもとをつかんで、その息の根をとめるにちがいない――、百万長者リャブシンスキーは、あつかましくもこう言明した。資本家たちは、工場を閉鎖し、何万という労働者を街頭にほうりだした。投機が全国にわたって異常な勢いで横行した。物価は急騰した。国は完全な経済的破局と外国資本への隷属の危険にさらされた。

反革命派は、経済的な措置だけにとどまらずに、軍事独裁をしく準備をととのえた。アメリカ、イギリス、フランス各代表の同意をえて、軍事独裁者の役割は、総司令官コルニーロフ将軍におわされた。反革命的クーデターの準備をごまかすために、臨時政府は、すべての有産者層の代表者からなる国政会議を召集することにした。ブルジョアジーは、ペトログラートの革命的労働者を懸念して、情勢がそこよりおだやかだと彼らに思われたモスクワで国政会議をひらくことにした。

ボリシェヴィキ党中央委員会は、モスクワ委員会に、ブルジョアジーの陰謀にたいする二四時間の抗議ストライキを組織するよう指令した。国政会議のひらかれる八月一二日、モスクワの四〇万人をこえる労働者が、ストライキをおこなった。モスクワの労働者が一斉におこなったストライキは、反革命派の計画を挫折させた。武力による以外には、反革命派はその計画を遂行できないということが、あきらかになった。ブルジョアジーは人民に内乱をおしつけることにした。コルニーロフは兵力の動員にとりかかった。アメリカ、イギリス、フランスは、彼を援助すると約束した。コルニーロフは、前線から軍隊を引きあげることについて将軍連と話合った。祖国の裏切者たちは、敵にロシアの奥ふかくはいる道をあけてやることさえ、はばからなかった。彼らは自国の勤労者が外国の征服者よりも危険な敵だと考えていたのである。

八月二五日、コルニーロフは、第三騎兵軍団を前線からペトログラートに移動させた。情勢を複雑にしたのは、コルニーロフが臨時政府反対と称して反乱をおこしたことであった。エス・エルとメンシェヴィキは、事態をまさにそのようにみせかけようとした。彼らは臨時政府を擁護せよと呼びかけた。レーニンは党に賢明な戦術を提案した。党は、コルニーロフに反対して大衆を

立ちあがらせるとともに、これは、コルニーロフの行動の共犯者である臨時政府を擁護せよという呼びかけではないことを、説明した。党は、臨時政府とその助手であるエス・エルやメンシェヴィキとを暴露することをやめずに、コルニーロフにたいする闘争をおこなった。

ボリシェヴィキの呼びかけにおうじて、首都の労働者は武器をとった。赤衛軍の新しい部隊が急速につくられた。コルニーロフの行動は、ボリシェヴィキ党によって組織された労働者、兵士、水兵の手で鎮圧された。コルニーロフとその共犯者は、大衆のつよい要求によって逮捕された。革命をおしつぶそうというくわだては失敗した。

5 武装蜂起の準備。十月社会主義大革命の勝利

大衆運動の高揚と多くのソヴェトがコルニーロフに反対して立ちあがったこととを念頭において、レーニンは、エス・エルとメンシェヴィキに、ソヴェトの手に権力をにぎるよう申しいれた。だが、彼らは、ソヴェトに権力を平和的にひきわたす、この最後の機会を拒否してしまった。生じていた情勢の唯一の打開策は、武装蜂起によって臨時政府をたおし、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を樹立することにあった。

コルニーロフの反乱を粉砕したことは、国内情勢を一変させた。労働者は、ブルジョアジーと地主を事実上かばい、擁護していた協調主義者の本質を見ぬいた。農民は、将軍たちの背後には、土地をひきわたすつもりのない地主がいることを理解した。前線の兵士は、自分たちに四度目の冬を塹壕ですごさせるつもりでいること、ブルジョアと地主の政府が戦争をながびかせるだろう

という ことを、確信した。被抑圧民族の勤労者には、コルニーロフ派が勝てば、民族的抑圧を一掃することなどのぞめないということが明らかになった。人民の大多数は、自分の経験から、ボリシェヴィキの思想が正しいことを納得した。勤労者は、ソヴェトからエス・エルやメンシェヴィキの代議員を召還し、かわりにボリシェヴィキをおくった。ソヴェトの無党派代議員は、ボリシェヴィキを支持するようになった。八月三一日、ペトログラート・ソヴェトは、その成立以来はじめて、権力をソヴェトにうつすというボリシェヴィキの決議案を採択した。九月五日には、ボリシェヴィキの決議案がモスクワ・ソヴェトによって採択された。両首都のソヴェトにつづいて、キエフ、ハリコフ、カザン、ウファ、ミンスク、レヴェリ（タリン）、タシケント、サマラ、ブリャンスク、クラスノヤルスク、さらにウラルやドンバスの多くの都市のソヴェトが、ボリシェヴィキ的な決議をおこなった。ソヴェトのボリシェヴィキ化の急激な過程がはじまった。

党は、「全権力をソヴェトへ！」というスローガンを、ふたたび日程にのぼせた。いままではこのスローガンは、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の樹立をめざして、ブルジョア政府にたいして武装蜂起をおこすことを意味していた。全国の二五〇以上のソヴェトが「全権力をソヴェトへ！」というボリシェヴィキのスローガンに賛成した。

国は全国民的な危機にあった。国民経済は急坂をすべりおちていた。支配階級は破局を阻止することができなかった。それどころか、その政策によって破局を急速に近づけていた。人民大衆は、これまでどおりに生活し、ブルジョアジーとその腰巾着がわがもの顔にふるまうのをがまんしようとは思わなかった。危機のはっきりした証拠は、人民のあらゆる闘争形態が激化していたことであった。労働者は工場首脳部を罷（ひ）免し、企業の支配人を逮捕し、生産の管理をその手にに

ぎりはじめた。労働運動は権力の問題のまぎわに近づいていた。革命の指導者、ヘゲモンとして、プロレタリアートは、全人民を闘争に立ちあがらせた。

「革命の前衛、人民の前衛であり、大衆の心をひきつける能力をもつ階級の多数者が、われわれにしたがっている」とレーニンは九月に書いている（全集、第二六巻、九ページ）。

農民運動の性格も変化した。農民は地主を追いはらい、土地と農具を奪取して自分たちのあいだに分配し、地主屋敷を焼きはらった。農民運動は全国にわたって蜂起に成長転化していった。ヨーロッパ・ロシアの大半が、農民蜂起にまきこまれた。「人民の多数者がわれわれにしたがっている」とレーニンは指摘した（同）。

コルニーロフの反乱後、軍隊のなかにも新しい闘争形態があらわれた。兵士は、反動的指揮官を追いはらい、そのかわりに彼らの信頼する新しい指揮官をえらんだ。兵士は、戦争をつづけるのを拒否した。兵士の不満はいまにも反乱に転化しそうであった。ペトログラートやモスクワにごく近い戦線――北部戦線と西部戦線――では、兵士の大部分がボリシェヴィキにしたがった。モスクワ守備隊の兵士はみなボリシェヴィキに投票した。兵士の大多数は、貧農のもっとも先進的で積極的な部分であった。バルチック艦隊の水兵は、完全にボリシェヴィキ党を支持していた。

被抑圧民族のあいだでも、運動の性格が変わった。彼らのたたかいは、ブルジョア組織が抵抗したにもかかわらず、全労働者の運動、農民の運動に合流して、単一の戦線となったのである。ボリシェヴィキ党は、ロシアのすべての民族の勤労者のあいだで活動していただけでなく、ポーランドやバルト海沿岸地方からの避難民のあいだでも、ドイツ人、ハンガリー人、ポーランド人、

チェコ人、スロヴァキア人、クロアート人の捕虜のあいだでも、活動していた。ボリシェヴィキは、それらの人々のあいだに共産主義グループをつくるのを援助した。

国際情勢も変化した。自国の銃後に成長してきた革命運動におびやかされて、イギリス、フランスの帝国主義者は共同して革命とたたかうため、ドイツ帝国主義者と講和について話合いをつけようとした。ロシアの支配階級は、ドイツ人にリガをあけわたしたが、革命圧殺の援助を受けるのと引きかえにペトログラートをもひきわたしかねなかった。これは、ブルジョアジーの反愛国主義と売国的役割の明白な証明であった。ブルジョアジーの裏切り計画をぶちこわすことは、売国政府を打倒してのみ、可能であった。

全国民的危機は、メンシェヴィキとエス・エル両党にも影響をおよぼした。両党のなかでは軋轢がつよまった。メンシェヴィキ党は崩壊して、いくつかのグループにわかれた。国際派メンシェヴィキは、ボリシェヴィキにますます引きつけられていった。エス・エル党内には左派が結成され、のちみずから独立の党であると宣言した。エス・エル左派は、エス・エル党に失望してプロレタリアートのほうに向きをかえた農民層をつかみなおそうとした。

レーニンは、地下にあって国内の情勢を注意ぶかく見守っていた。革命の首領は、どんな変動にも、人民の気分と階級関係のごく小さな変化にも解答をあたえた。一一〇日間の地下生活のあいだに、彼は六〇以上の論文と手紙を執筆し、党はそれから指針をえていた。これらの労作のなかで特筆すべきものは、『さしせまる破局、それとどうたたかうか』という著書である。それは、国を破滅から救うにはどうすればいいかという、人民大衆の疑問にこたえた党の政綱であった。レーニンは、ブルジョアと地主の支配のために大衆がおとしいれられた困窮と飢えの状況をえが

いたうえで、破局を未然に防ぐことのできる革命的方策をもかかげた。労働者による生産の統制、銀行・シンジケート等の国有化、それとならんで地主の土地の没収とすべての土地の国有化がそれであった。破局や飢えとたたかう方策は完全に実施できるものだったが、「ブルジョア的所有の神聖」をおかすというだけの理由で実施されていなかった。支配階級は、人民がこれらの方策の実施にとりかかるなら、国は破綻と破滅におびやかされるだろうと断言していた。

「もしエス・エルとメンシェヴィキが、統制の方策をすべて妨げ生産をサボタージュしているブルジョアジーと『連立』したりせずに、四月にソヴェトへの権力の移行を実現していたなら」とレーニンは書いている。「ロシアは、いまごろは完全に経済的に改造され、農民が土地をもち、銀行が国有化された国になっていたであろうし、そのかぎりで（ところで、これは、現在生活のきわめて重要な経済的基礎である）ほかのどの資本主義国よりも高度な国になっていたであろう」（全集、第二五巻、三八八ページ）。

ボリシェヴィキの政綱が実施されれば、勤労大衆の生活はただちに楽になり、改善されたであろう。レーニンがしめしたように、ロシアでは社会主義の物質的土台の準備がととのっていた。これは、ロシアが帝国主義の鎖の一環だからというだけでなく、ロシアの資本主義が、先進資本主義諸国にくらべておくれてはいても、やはりかなり発達していて、国家独占資本主義に成長転化していたからでもあった。プロレタリア大革命の前夜の政綱の出発点は、社会主義が最初はただ一つの国でも勝利することが可能であるというレーニンの基本的な命題であった。

「一般に歴史では、とくに戦時には、立止まっていることはできない」とレーニンは書いている。「前進するか、それとも後退するかしなければならない。共和制と民主主義を革命

的な方法でたたかいとった二〇世紀のロシアでは、社会主義にむかってすすまずには、社会主義にむかって歩みをすすめずには、前進することはできない」（同、三八六ページ）。

レーニンは、その著書のなかで、勝利したプロレタリアートに偉大な任務を負わせた。

「革命の結果、ロシアは数ヵ月で、政治体制の点で先進諸国に追いついた。だが、それだけではたりない。戦争は仮借ないものであり、容赦ないきびしさでつぎの問題を提起している。すなわち、ほろびるか、それとも経済的にも先進諸国に追いつき、さらに追いこすか、という問題である。……

ほろびるか、それとも全力をあげて突進するか。歴史は問題をこのように提出している」（同、三九一―三九二ページ）。

このころ、レーニンは、マルクス主義の国家学説をさらに前進させた、名著『国家と革命』を書きあげた。レーニンは、日和見主義者たちがわすれたり、ゆがめたりしていたマルクス・エンゲルスの見解を原状に復し、新しい革命的経験、とくにソヴェトの活動の経験にもとづいて、マルクス主義の国家学説をさらに前進させた。レーニンのこの著書は、二つの戦線で――日和見主義的裏切者にたいしても、無政府主義者にたいしても――断固として妥協せずにたたかうという思想につらぬかれていた。この両者はプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を否定する点で近似している。右翼社会主義者の指導者は、勝利した労働者階級がブルジョア国家を粉砕しなければならないということをみとめずに、ブルジョア国家を直接擁護するほど転落した。無政府主義者は、革命的プロレタリアートが社会主義を建設するために国家権力を利用するのに反対し、こうしてプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を否定する。

勝利したプロレタリアートは、ブルジョア国家の暴力機構——勤労者を搾取する機関——を完全に粉砕し、資本主義から共産主義の最初の段階である社会主義への過渡期全体にわたってプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を樹立しなければならない。

「一階級の執権（ディクタツーラ）は、あらゆる階級社会一般にだけ必要なのではなく」とレーニンは書いている。「またブルジョアジーをうちたおしたプロレタリアートにだけ必要なのではなく、さらに、資本主義と『無階級社会』、共産主義とをへだてる歴史的時期全体にも必要なことを理解した人だけが、マルクスの国家学説の本質を会得したものである。……資本主義から共産主義への過渡は、もちろん、きわめて数多くのさまざまな政治形態をもたらさざるをえないが、しかしそれにもかかわらず、本質は不可避的にただ一つ、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）であろう」（全集、第二五巻、四四五ページ）。

ブルジョア国家では、民主主義は徹頭徹尾偽善的で、ごまかしである。なぜなら、そのなかのもっとも民主主義的な国家にあっても、民主主義はとるにたりない少数者のため、金持のため、搾取者と徒食者のための民主主義だからである。ところが、プロレタリア国家は「新しい型の民主主義」国家である。というのは、ここでは、民主主義は、圧倒的多数の勤労者のための民主主義だからである。また、それは「新しい型の執権（ディクタツーラ）」国家である。なぜなら、それは、ブルジョアジーにたいする執権（ディクタツーラ）であり、少数者にたいし、搾取者にたいする大多数の人民の執権（ディクタツーラ）だからである。プロレタリアートは、搾取者を抑圧するためだけでなく、主として、社会主義の建設にあたって勤労者を指導するためにも、国家権力を利用する。

社会を改造するうえでのプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の役割と意義を規定して、レーニンは、

この執権（ディクタツーラ）で指導的な力となり、方向を決定する力となるのは、共産主義者の党であると、強調した。彼は、第二インタナショナルの日和見主義者を容赦なく暴露した。彼らは党の役割をゆがめ、党を、大衆から遊離し人民の利益を裏切り売りわたす、高給の上層労働者の代表者の組織にしているのである。

「マルクス主義は、労働者党を教育することによって」とレーニンは書いている。「プロレタリアートの前衛——権力を奪取し、全人民を社会主義にみちびき、新しい体制を指導し組織する能力をもち、またブルジョアジーをいれずにブルジョアジーに対抗して、自分の社会生活を建設するうえで、すべての勤労被搾取者の教師となり、指導者となり、首領となる能力をもつ前衛——を教育する」（同、四三六ページ）。

レーニンの著書は、新しい型の国家である社会主義国家を組織し建設する問題についての綱領的文書になった。

九月一二日と一四日のあいだに、レーニンは、ボリシェヴィキ党の中央委員会、ペトログラート委員会、モスクワ委員会あての手紙（『ボリシェヴィキは権力を掌握しなければならない』）と中央委員会あての手紙（『マルクス主義と蜂起』）を書いて、蜂起を組織するよう党に呼びかけた。レーニンは、これらの手紙のなかで、自分の情勢分析を総括して、なぜ、ほかならぬいまボリシェヴィキは権力をにぎることができるか、またにぎらなければならないかという問題にきわめて明快にこたえた。両首都のソヴェトにたいする指導権は、ボリシェヴィキの手にうつった。人民大衆はボリシェヴィキにしたがっている。彼らは、自分たちの利益を代表しまもってくれるのはボリシェヴィキ党だけであることを確信するにいたった。権力をにぎったなら、ソヴェトは、た

だちに民主主義的な講和の締結に着手し、土地を地主から無償でとりあげて農民にひきわたし、政府によってふみにじられた自由を確立するであろう。すべてこうしたことは大衆の完全な支持を受けるであろう。

ブルジョアジーはペトログラートをドイツ人にあけわたす準備をしており、イギリス・フランス帝国主義者は、ロシアに対抗し、ロシアを犠牲にして、ドイツとの単独講和について話合っている。権力をにぎることによってのみ、ボリシェヴィキ党は、この犯罪的な陰謀をぶちこわすことができるであろう。蜂起の情勢は完全に熟している。党の任務は、蜂起を技術としてとりあつかい、蜂起を細心に準備し、その成功に必要なあらゆる方策を熟考し、自然の成行きにまかせないことにある、と。

レーニンの手紙には、武装蜂起のおおよその計画も立てられていた。彼は、ただちに蜂起部隊の司令部を設置し、兵力を配置し、もっとも忠実な部隊をもっとも重要な箇所に集中し、政府の建物の包囲を準備し、電話局と電信局を占領するよう、提案した。レーニンは、敵を市の中心部に進出させるよりは死をえらぶ覚悟のある強固な部隊をつくり、労働者を武装させ、士官学校生徒その他の反革命部隊のありうべき攻撃にたいして同市の防衛を確保するよう、勧告した。

レーニンは自分の計画をおおよその計画と呼んだが、蜂起の事実上の経過は、この計画が非常に深く、全面的に練りあげたものであることをしめした。レーニンは、マルクス主義の創始者たちの蜂起についての思想を発展させて、それをまとまった学説にした。

世界革命運動の経験、まず第一にロシアにおける二度の革命の経験を概括して、レーニンは蜂起の成功を規定する基本的条件の特徴を示した。蜂起は、陰謀や政党に依拠するのではなくて、

先進的階級に依拠しなければならない。それはまた、盛り上がってくる革命の歴史のうちで、人民の先進層の活動性がもっとも大きくなり、敵とその味方の陣営の動揺がもっとも強くなるような転換点に依拠しなければならない、と。レーニンのこの概括は蜂起をみとめない右翼日和見主義者にも、蜂起準備の客観的および主体的条件を考慮せずに蜂起を呼びかける冒険主義者、一揆主義者にも鋒先をむけていた。

歴史上どの政党も、ボリシェヴィキ党ほど細心に、蜂起実行の準備をととのえていた党はなかった。レーニンのおかげで、党は、科学的に仕上げられた武装蜂起理論と、もっとも綿密な蜂起組織計画と、蜂起が勝利した直後にとるべき政治経済的方策の面での練りあげた政綱とをもっていた。

レーニンの手紙は、九月一五日の中央委員会で審議された。社会主義革命に反対する闘争をつづけていたカーメネフは、蜂起を組織しようというレーニンの提案に反対し、手紙そのものを破棄することを主張した。降伏主義的な決議案は否決された。レーニンの手紙は最大級の党組織におくられた。

中央委員会は蜂起の準備にとりかかった。中央委員会所属の軍事組織は、赤衛軍の新しい部隊の編成を早めるよう委任された。首都では軍事教官養成のための講習会がひらかれた。労働者は武器の使用法をまなんだ。バルチック艦隊のボリシェヴィキは、艦隊を蜂起に参加させる準備をするようにという指示を受けた。各軍艦には、党の呼びかけがあればいつでも首都に到着する用意をととのえた特別の戦闘小隊がつくられた。前線のボリシェヴィキ組織は、ペトログラートで蜂起した人々を援助するため戦闘部隊を選抜した。最大級の党組織の指導者は蜂起の準備につい

てまえもって知らされていた。

反革命のほうでも、革命の盛り上りを阻止する方策をとった。首都にはカザック連隊が集結させられた。ボリシェヴィキをよわめるために、ペトログラートから革命的な気分をもった守備部隊を移動させることにきまった。前線では、ボリシェヴィキ的な気分をもった連隊を包囲し武装解除する目的で、部隊の移動がおこなわれた。コルニーロフやその共犯者たちは、投獄されてはいたが、実際には、前線の将軍たちと連絡をとって、反革命行動の新しい計画をねっていた。臨時政府は、第二回目のコルニーロフ陰謀を準備中であった。

エス・エルとメンシェヴィキも、人民にたいするこの陰謀にくわわった。彼らは、蜂起の近づいたことを感じて、革命勢力の動員を阻止しようともう一度もくろんで、ペトログラートに全ロシア民主主義会議を招集することにした。ソヴェトのなかでは社会コルニーロフ派は多数者の地位をうしなっていたので、彼らは、三ヵ月後に大会を招集する義務をおっていたにもかかわらず、新しい大会の招集に応じるのをおそれていた。協調主義者の指導者たちは、偽造をあえてし、ソヴェト大会を民主主義会議にすりかえた。この駆引の目的は、人をまん着して、大衆にたいする指導権を確保し、臨時政府を支持することであった。

民主主義会議は九月一四日にひらかれた。その顔ぶれはお手盛りのもので、国民の小部分を代表するにすぎない市議会、ゼムストヴォ、協同組合が、人民の圧倒的多数を統合していたソヴェトや陸海軍の組織よりも、多くの票をもっていた。一〇〇〇万人を擁する軍隊全体のもつ議席が、臨時政府が自分の支柱とみていた少数のカザックの議席の二倍しかなかった。ボリシェヴィキは、エス・エルやメンシェヴィキの策略を暴露するために会議に参加した。

協調主義者は、会議の成員のなかから、共和国臨時評議会、彼らのいわゆる予備議会を選出し、こうして、ロシアに議会制度がおこなわれているように見せかけようとした。カーメネフ、ルィコフ、リャザノフは、労働者を蜂起からそらそうとして、エス・エルとメンシェヴィキのこの偽造を支持した。レーニンは、民主主義会議というもくろみ全体がわなであるとみて、予備議会のボイコットを強硬に主張した。予備議会に参加することは、この機関が革命の課題を解決できるという幻想をふりまくことを意味していた。中央委員会は、レーニンの提案を審議して、カーメネフその他の降伏主義者の抵抗をしりぞけ、ボリシェヴィキを予備議会に参加させないという決定を採択した。中央委員会は、各地で県や地方のソヴェト大会をひらいてソヴェト第二回大会の招集のためにたたかうよう、指令した。

一〇月一〇日、中央委員会の会議がひらかれ、その席上、中央委員会の指示でそれよりすこしまえペトログラートに到着していたレーニンが、当面の情勢についての報告をおこなった。彼は、政治情勢は権力をプロレタリアートと貧農の手にうつすのに十分熟している、いまや蜂起そのものを論じなければならない、と強調した。レーニンは、全党が武装蜂起の問題を日程にのぼす必要があると考えていた。

「中央委員会はつぎのことをみとめる」とレーニンの提案した決議案はのべている。「ロシア革命をめぐる国際情勢（全ヨーロッパに世界社会主義革命が成長している端的なあらわれとして、ドイツの海軍に反乱がおこったこと、さらに、ロシアの革命を圧殺する目的で帝国主義者が講和をむすぶおそれがあること）も、——軍事情勢（ロシアのブルジョアジーとケレンスキー一派が、確かに、ピーテルをドイツ軍にあけわたす決意をしていること）も、

――プロレタリア党がソヴェト内で多数を獲得したこと、――これらすべては、農民の蜂起や、人民の信頼がわが党のほうに向くようになったこと（モスクワの選挙）と関連して、――最後に第二のコルニーロフ陰謀が明らかに準備されていること（ピーテルからの軍隊の撤退、カザックのピーテルへの派遣、カザックのミンスク包囲等々）も、――これらすべては、武装蜂起を日程にのぼせている。

このように、武装蜂起が避けられないものとなり、完全に機が熟したことをみとめて、中央委員会は、すべての党組織に、このことを指針とし、この見地からすべての実践的問題（北部地方ソヴェト大会、ピーテルからの軍隊の撤退、モスクワおよびミンスクの住民の行動、等々）を討議し解決するよう提案する」（『ソ連邦共産党決議集』、第一巻、五一六―五一七ページ）。

この決議に反対したのは、ジノヴィエフとカーメネフだけであった。彼らは、労働者階級には社会主義革命をおこなう能力がないとし、ブルジョア共和制を主張していたメンシェヴィキの立場に転落した。

これは社会主義の事業を裏切るものであった。ジノヴィエフとカーメネフの立場は偶然ではなかった。彼らの裏切りは、彼らのすべての日和見主義的動揺の直接の結果であった。

トロツキーは中央委員会の会議では、蜂起の決議に反対する投票はしなかった。だが、彼は、第二回ソヴェト大会が招集されるまで蜂起を延期することを主張した。これは、実際には、蜂起を失敗させることを意味していた。なぜなら、エス・エルとメンシェヴィキは、大会招集の期日をのばすかもしれなかったし、また、臨時政府は、大会の招集日までに、行動を粉砕するための

兵力を集中することができたであろうから。

中央委員会はレーニンの決議案を承認した。この決議は、ただちに武装蜂起の準備をととのえよという、党の指令となった。

首都で蜂起をおこなう機関となったのは、党中央委員会の提案でペトログラート・ソヴェトのもとにつくられた軍事革命委員会であった。軍事革命委員会には、中央委員会とペトログラート委員会、ソヴェト、工場委員会、労働組合、守備隊、バルチック艦隊その他の組織の各代表がはいった。軍事革命委員会は党中央委員会の直接の指導をうけて活動した。

全国のすべての重要な地区で、武装行動の計画的な準備がすすめられた。ペトログラートでは約五万の党員を代表するボリシェヴィキ第三回全市協議会がひらかれた。協議会は、一〇月一一日、レーニンの蜂起についての決議を採択した。七万近い党員を代表していたモスクワ地方ビューローは蜂起に賛成した。モスクワのボリシェヴィキ全市協議会も同じ決議を採択した。九月と一〇月だけでも、ボリシェヴィキ党の大部分を代表する三〇以上の地方、県、市、隣接地区の各会議がひらかれた。

いたるところで、急速に労働者赤衛軍の編成がすすめられた。一〇月には赤衛軍にくわわっていた先進的労働者は二〇万近くに達した。彼らは、革命のために生命をなげうつ覚悟をもち、勤労大衆をひきいていく能力をもっていた。

一〇月一六日、ペトログラート委員会、〔中央委員会〕軍事組織、ペトログラート・ソヴェト、ペトログラート隣接地区委員会、工場委員会、労働組合の各代表をいれて、中央委員会の拡大会議がひらかれた。会議は中央委員会の蜂起についての決議を承認した。蜂起を指導するため、ア

・エス・ブブノフ、エフ・エ・ジェルジンスキー、ヤ・エム・スヴェルドロフ、イ・ヴェ・スターリン、エム・エス・ウリツキーからなる、中央委員会軍事革命中央部が選出された。党軍事革命中央部は、ソヴェトの軍事革命委員会にはいった。

中央委員会でやぶれたジノヴィエフとカーメネフは、前代未聞の裏切り行為をあえてした。カーメネフは、自分の名とジノヴィエフの名で、党外の新聞『ノーヴァヤ・ジーズニ』〔『新生活』〕に声明を発表して、そのなかで自分たちは武装蜂起の決定に同意しないとのべた。こうして、中央委員会の蜂起についての決定は敵方にもれてしまった。レーニンは、『ボリシェヴィキ党員への手紙』と『ロシア社会民主労働党中央委員会への手紙』のなかで、革命のストライキ破りを憤然と糾弾し、彼らを党から除名することを要求した。

党中央委員会は、カーメネフとジノヴィエフのストライキ破り行為を非難し、彼らが「中央委員会の決定と中央委員会のさだめた活動方針に反対した」言動をとることを禁止した。

裏切者から警告を受けた臨時政府は、革命を鎮圧するために緊急措置をとった。戦線からは特別の部隊が呼びよせられ、ペトログラート全体は地区に分けられて、各地区には騎兵隊が設けられた。しかし革命勢力の動員を阻止することは反革命派にはもうできなかった。

蜂起を組織する活動を指導したのは、レーニンであった。彼は、軍事革命委員を呼んで、とられた措置の報告を聞き、蜂起の勝利を確保するためにあらゆる手がうたれたかどうかをたしかめた。レーニンは、蜂起の詳細な計画の作成、赤衛軍の強化と武装について指示をあたえた。陸海軍で活動していたボリシェヴィキは、彼のところへやってきて、バルチック艦隊の利用や戦線から革命的部隊を呼び寄せることについての指示を受けた。モスクワの代表もきて、同市や地方の

状態について報告した。

党中央委員会は、蜂起を技術としてとりあつかうという、マルクス主義の基本的な指示をはたした。蜂起の準備をととのえるうえで党組織を援助するため、各地に中央委員会の代表が派遣された。中央委員会には、地方の党組織の代表が指示を受けにやってきた。中央委員会からは、地方に手紙や指令がおくられた。中央委員会は「ヴォエンカ」の活動を指導し、蜂起を組織する仕事に労働組合をひきいれた。この時期の党中央委員会の活動は、集団指導の模範である。十月革命前の三ヵ月間だけでも、中央委員会の会議は三〇回以上ひらかれた。

レーニンは、一〇月二五日に予定されていた第二回ソヴェト大会以前に、ぜひとも蜂起をはじめるよう主張した。裏切者から情報をえて大会開会の日に行動がおこされるものと予想していた敵の先手をうつ必要があった。

一〇月二四日、レーニンは、中央委員会にあててこう書いている——

「けっして二五日までケレンスキー一派の手に権力をのこしておいてはならない。ぜひともきょうの夕刻か夜のうちに事を決しなければならない。

きょうなら勝利できる(またきょうならきっと勝利する)が、あすになれば多くのものを失うおそれが、いな、すべてを失うおそれがあるときに、革命家がぐずぐずするなら、歴史は彼らを許さないだろう」(全集、第二六巻、二四一ページ)。

レーニンの提案にもとづいて、蜂起は、大会のひらかれる前日の一〇月二四日に開始された。蜂起の司令部はスモーリヌィにおかれていて、レーニンは、蜂起を直接指導するために深夜そこに到着した。司令部の指令によって、赤衛軍の部隊は予定の目標を占領した。赤衛兵は工場の守

備を手配した。首都への進入路はみな革命部隊が警備して、前線から臨時政府へ増援部隊がやってこないようにした。バルチック艦隊の水兵が呼びよせられた。計画にしたがって、すべての官庁が占領され、臨時政府がにげこんでいた冬宮は包囲された。蜂起の主な戦力は、赤衛軍の部隊だった。勝利の栄誉を彼らとともにしたのは、バルチック艦隊の水兵であった。赤衛兵や水兵といっしょになって、ペトログラート守備隊の連隊もみごとにたたかった。蜂起にたいする人民大衆の支持が確保されており、蜂起の計画が綿密にねられていたので、めずらしいほど急速に蜂起は遂行された。一〇月二五日の朝には、臨時政府は打倒されていた。午前一〇時に、革命の天才的な鼓舞者であり指導者であるレーニンの書いた『ロシアの市民へ!』という、つぎのようなアピールが出された。

「臨時政府は打倒された。国家権力は、ペトログラート労働者・兵士代表ソヴェトの機関――ペトログラートのプロレタリアートと守備隊の先頭に立つ軍事革命委員会――の手に帰した。

人民のたたかいの目標であった事業、すなわち民主主義的講和の即時提唱、地主の土地所有の廃止、生産の労働者統制、ソヴェト政府の樹立は保障されている。

労働者・兵士・農民の革命万歳!」(全集、第二六巻、二四三ページ)。

打倒された政府は冬宮を支配していただけであった。その守備隊は、士官学校生徒と婦人突撃大隊から成っていた。レーニンは、このブルジョア政府の最後の拠点を攻略するよう命令した。ネヴァ河から、攻撃の合図として、巡洋艦「アウロラ」の砲声がとどろいた。一〇月二五日の夜半、冬宮は陥落した。大臣たちは逮捕された。

一〇月二五日の夕刻、第二回ソヴェト大会がひらかれた。大会は全国の四〇〇以上のソヴェトを代表していた。六五〇人の代議員のうち、約四〇〇人がボリシェヴィキであった。のこりの大多数はエス・エル左派であった。これまでソヴェトを支配していたメンシェヴィキとエス・エル右派は第二回大会では七〇－八〇人の小グループになっていた。大会そのものでも、このグループは、ひきつづきやせ細っていった。ある者はエス・エル左派にうつり、ある者は国際派メンシェヴィキにうつった。破産した、ブルジョアジーとの協調の党の少数残存分子は、大会から退場した。

第二回ソヴェト大会は、初日に、レーニンの書いた『労働者、兵士、農民諸君へ！』というアピールを採択した。

「圧倒的多数の労働者、兵士、農民の意志にもとづき」とそこにはのべられている。「ペトログラートで遂行された労働者と守備隊の蜂起の勝利にもとづいて、大会は権力を掌握する。……

大会はつぎのように決定する。地方の全権力は労働者・兵士・農民代表ソヴェトにうつる。これらのソヴェトは真の革命的秩序を確保しなければならない」（同、二四七ページ）。

労働者と貧農は、ブルジョアジーの執権（ディクタツーラ）を打倒して、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を樹立した。

一九一七年一〇月二五日（一一月七日）は、ロシアの十月社会主義大革命が勝利した日として、歴史にのこった。

一〇月二六日、大会の第二回会議で、レーニンは二度演説した。彼の最初の報告は、講和の問

題にあてられていた。大会は全員一致で、平和についての布告を採択した。この布告は、ソヴェト政府があらゆる略奪条約を完全に拒否することを声明し、交戦諸国民とその政府に、全面的で、公正で、民主主義的な講和を締結するための交渉をただちに開始するよう提案していた。

平和についての布告は、戦争を「人類にたいする最大の犯罪」と宣言し、すべての国民にとってひとしく公正な条件にもとづいて、無併合・無賠償の講和に即時調印する決意をおごそかに声明していた。権力を掌握した人民はまず最初に平和のたたかいをはじめ、自分の模範によって全人類を勇気づけたのである。

レーニンの第二の報告にもとづいて、大会は、土地についての布告を採択した。この布告は、すべての地主所有地を買取金なしに没収し、すべての土地を人民の手にうつすことを宣言した。全部で一億五〇〇〇万ヘクタール以上の土地が人民の手にうつった。農民は歴史上はじめて、土地にたいする債務から解放された。——地主、高利貸、富農にたいする個人的負債を別としても、農民は農民銀行だけにも約一五億ルーブルの借金をしていたのである。土地についての布告によって、農民は毎年の小作料を支払わなくてもよいようになったし、新しい土地の買入れに七億金ルーブルの支出をしなくてもよいようになった。こうして、土地の国有化が実行された。土地は国家全体の所有となった。

土地についての布告には、地方農民の二四二の要望書にもとづいてエス・エルが作成した農民要望書がとりいれられていた。エス・エルは、権力についていながら、この要望書を実行するためになにもしなかった。ボリシェヴィキは、権力をにぎった最初の日に農民要望書を法律にした。土地私有の廃止や地主の土地の無償没収の要求とともに、要望書は、土地用益の平等を宣言して

いた。これはボリシェヴィキ党の見解とはことなるものであった。要望書を採択したといって党を非難した者に反論して、レーニンはつぎのようにのべた。

「われわれは、民主主義的政府として、たとえ自分では異議があるにしても、人民大衆の決定を無視することはできない。実生活の試練をうけ、決定を実地に適用し、それを現地で実行するうちに、農民自身どこに真理があるかがわかるようになるだろう」（全集、第二六巻、二六二ページ）。

この法令には、党の賢明さ、大衆の利益を重視する能力、農民が土地問題でボリシェヴィキの方針を完全に支持するだろうという深い確信があらわれていた。

同じ一〇月二六日、第二回ソヴェト大会は、ヴェ・イ・ウリヤーノフ－レーニンを議長とする人民委員会議をつくった。人民は、国の指導をボリシェヴィキ党にゆだねたのである。

第二回ソヴェト大会の代議員たちは、採択された布告を実行にうつすために全国にちっていった。多くの地方では、ソヴェト権力樹立のための闘争は、白衛軍やブルジョア民族主義的反革命派の行動によって困難になった。しかし、国内各地の条件が多種多様であった――工業の発展やプロレタリアートの数の上での大きな差異、民族的特殊性、ボリシェヴィキ党の影響の程度、等等――にもかかわらず、ソヴェト権力は、ロシアの広大な領土のほとんど全域で、短期間に樹立された。

6 革命の勝因。十月社会主義大革命の国際的意義

一 十月社会主義革命が勝利したもっとも重要な原因は、革命の先頭にロシアの労働者階級が立っていたことである。彼らは、他のどの階級よりもさきに自分の党をつくった。労働者階級は、専制に反対し、ブルジョアジーの執権(ディクタツーラ)に反対する全人民の闘争の指導者として行動した。勤労者は、プロレタリアートが、地主とブルジョアジーの抑圧に苦しんでいる人民全体の利益を代表する闘士であることを確信した。ロシアのプロレタリアートは、国の社会的・政治的発展全体の主要な推進力であった。

二 十月革命が勝利したのは、搾取階級の抵抗を粉砕した社会勢力——プロレタリアートと農民の同盟——がロシアにつくられたからである。革命が発展するあいだにボリシェヴィキは、労働者階級の事業の裏切者——プロレタリアートが権力を獲得し、それを維持することができるのは、彼らが人民の大多数を占めているところでだけだと主張した日和見主義者——を暴露した。ロシアのプロレタリアートは、ロシアの農村人口の圧倒的多数——約六五%——を占める貧農の完全な支持をえた。ボリシェヴィキは、勤労農民の大多数をプロレタリアートの味方に獲得して、ブルジョアジーから農民大衆をうばいとった。

三 十月革命が他のすべての革命とちがっている点は、労働者が自分の権力機関を創設したことである。プロレタリアートの内部に革命権力の新しい形態——労働者代表ソヴェト——がうま

れた。労働者・兵士・農民代表ソヴェトは、労働者の指導のもとでの労働者と農民の同盟を具現した機関であり、組織形態であった。

「もし革命的諸階級の人民的創造力がソヴェトをつくりださなかったなら」とレーニンは書いている。「ロシアでは、プロレタリア革命は見込みのない事業であったろう」（全集、第二六巻、九四ページ）。

四　十月革命が勝利したのは、ロシアのブルジョアジーが革命の敵としては比較的よわかったからである。ロシア資本主義の歴史的発展過程全体、先進資本主義諸国と比較したロシア資本主義の後進性と外国資本への従属は、ロシア・ブルジョアジーの無気力、臆病、経験の不足を説明している。協調主義者のエス・エルやメンシェヴィキにも、ロシア・ブルジョアジーを援助する力はなかった。ボリシェヴィキは、多年にわたる闘争のなかで、彼らをブルジョアジーの手先として暴露してきた。これらの党は、十月革命の前夜に公然と反革命の陣営にうつった。

五　革命が勝利した決定的な条件は、人民大衆の先頭に試練をへた、戦闘的・革命的なボリシェヴィキ党が立っていたことである。

革命を準備し遂行した時期に、党はきわめて大きな理論活動をおこない、新しい命題でマルクス主義をゆたかにした。レーニンの著作、四月協議会と第六回党大会の決議や中央委員会の決定や決議にはブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化の具体的な計画が理論的に基礎づけられている。

党は、日和見主義者との闘争のなかで、ロシアで社会主義が勝利することは可能であるという学説を仕上げ、守りぬいた。レーニンは、マルクス主義の社会主義革命理論を発展させ、プロレ

タリアートの執権（ディクタツーラ）の政治形態であるソヴェト共和国を発見してこれを基礎づけ、武装蜂起についてのマルクス主義の命題を発展させて、それを蜂起の学説にした。党は、労働者階級の先進的理論であるマルクス＝レーニン主義理論を指針にしていた。

十月大革命は、レーニンの社会主義革命理論を実際に適用し実現した模範である。

勤労大衆は、他のすべての党があるいは単独で、あるいはさまざまな組みあわせで権力についたのをみてきた。彼らは、ブルジョアジーを代表するカデットをその目でみ、カデット、エス・エル、メンシェヴィキの連合の権力を身をもって味わい、またエス・エルやメンシェヴィキがソヴェト内で多数を占めていたとき、彼らの行為によって彼らを点検した。革命の過程でブルジョア政党と協調主義政党は、すべてその反革命的本質をさらけだして、破産してしまった。勤労者は、ブルジョアジーとの協調の諸党に背をむけ、召還権を行使して、信頼を裏切った代議員をソヴェトから追放し、ボリシェヴィキをそのかわりに選出した。こうして、メンシェヴィキとエス・エルは大衆から孤立した。ボリシェヴィキ党は、プロレタリアートとすべての勤労者の革命闘争を単独で指導した唯一の党であった。

ボリシェヴィキ党は、いろいろな革命運動――平和をめざす全人民の運動、土地を求める農民の闘争、ロシアの被抑圧民族の民族解放闘争、社会の指導勢力であるプロレタリアートの社会主義をめざす闘争をすべて統合して、それらを帝国主義打倒という単一の目標にむけるすべを知っていた。ボリシェヴィキ党の指導のもとに、労働者と貧農は、ブルジョアジーの政府を打倒して、ソヴェト権力をうちたてた。

以上が、革命の成功を保障した主要な国内的原因である。

十月社会主義大革命の勝利を保障した国際的な原因の一つに、革命が世界帝国主義戦争の時期に展開されたという事情がある。イギリス＝フランス・ブロックも、ドイツ・ブロックも、ロシア・ブルジョアジーに直接の武力援助をあたえることができなかった。これらの国は、資金資材を供給し、陰謀をくわだてることによって、ロシア・ブルジョアジーをたすけたが、いくらかでも大きな兵力をこれにさくことができなかった。ロシアのブルジョアジーは、すべての勤労者を指導していたプロレタリアートに直接対決させられていて、大衆の攻撃を持ちこたえることができなかった。

国際プロレタリアートの支持も、革命にとってきわめて有意義であった。十月革命の影響を受けて、すべての資本主義国に大衆的な革命運動がつよまった。国際プロレタリアートの行動は帝国主義者の手をしばって、十月革命が全国にわたって勝利の行進をおこなうのを容易にした。

十月社会主義大革命の国際的意義を規定して、レーニンは、この意義が、他の国々の革命運動に影響をおよぼす点と、ロシア革命の基本的な特徴が国際的な規模でくりかえされることは避けられないという点との、二つの形態にあらわれている、と書いている。

十月社会主義大革命の根本問題はみな広い意味の国際的意義をもっている。搾取され、帝国主義の抑圧のもとで苦しんでいる人々の世界全体が、十月革命の直接の影響を受けて動きはじめた。一連の革命——ドイツ、オーストリア＝ハンガリーその他の国々での——とヨーロッパとアメリカの労働者大衆の革命的行動とは、資本主義世界を根底からゆすぶった。植民地の隷属させられた人民が動きはじめた。革命は、労働者の革命的行動と民族解放闘争とを結合して、帝国主義をたおす力のある単一の勢力とする端緒をひらいた。

十月革命は、資本主義の全般的危機の激化のもっともはっきりしたあらわれであった。それは、帝国主義の鎖を突破して、新しい社会主義社会をつくりだす可能性をひらいた。帝国主義の全一的な支配はおわりを告げた。地球の六分の一に社会主義の旗がかかげられた。世界は死にかけた資本主義の陣営と発展しつつある社会主義の陣営の、二つの陣営に分裂した。十月革命は、人類の新しい時代――すべての搾取形態を一掃する時代、共産主義が勝利する時代の端緒をひらいた。

十月革命の最大の国際的意義は、それが世界史の過程全体を促進した点にあるだけではなく、十月革命の根本的な特徴がどの国の社会主義革命でもくりかえされることは避けられないということをしめした点にもある。十月革命は、労働者に指導されるプロレタリアートと農民の同盟がなければ、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）がなければ、革命の勝利は不可能であることをしめした。十月革命は、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）についてのレーニンの命題をロシアで典型的に実現したものであった。プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）は、ロシアの労働者とロシアの農民との同盟であるだけではなく、ロシアの労働者とロシアのすべての民族の勤労者との同盟でもあり、先進国のプロレタリアートと植民地の被抑圧民族との同盟でもある、とレーニンはのべている。レーニンの社会主義革命理論のこれらの基本命題は、すべての国に適用できるものである。

十月革命のもつきわめて重要な世界的意義は、それが、人民に政治的権利をあたえただけでなく、ゆたかな生活の物質的な条件をもあたえた世界最初の革命であった点にある。

十月革命は、全世界に、まず第一に、人類の大半を占める従属民族と植民地民族に、民族問題を解決する唯一の正しい道をしめした。

十月大革命は平和のスローガンをかかげ、諸国民間の新しい関係を宣言した。

十月大革命が勝利したのちにはじまった、ソ連邦における社会主義建設の理論と実践は、国際プロレタリアートにとってきわめて大きな意義をもっている。資本主義から社会主義へ移る道を最初に切りひらく任務は、ソヴェトの国に課せられたのである。

ロシアにおける社会主義革命の勝利は、マルクス＝レーニン主義思想の力、ボリシェヴィキ党の戦略戦術の正しさをはっきり裏書きし、それによって、平和と民主主義と社会主義をめざす、すべての国の勤労者の闘争をやりやすくした。

要　約

一九一七年の十月革命は、資本主義制度の一掃を保障し、民族的破局を防ぎ、国を自主的な発展の軌道にのせる能力のある勢力は、ボリシェヴィキ党だけであることを、すべての勤労者にしめした。レーニンの四月テーゼと第七回全国協議会の決定のなかで、党は、ブルジョア民主主義革命から社会主義革命に移る具体的な計画を人民にあたえ、平和、パン、土地、自由をかちとるソヴェトに全権力をひきわたすためにたたかうよう、大衆に呼びかけた。レーニンは、プロレタリアートの執権（ディクタツーラ）の国家形態としてのソヴェトを発見した。

「全権力をソヴェトへ！」というスローガンをかかげたとき、党が二重権力のもとで出発点としたのは、革命の平和的発展の可能性、血を流さずに全権力をソヴェトにうつす可能性、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的執権（ディクタツーラ）がプロレタリアートの社会主義的執権（ディクタツーラ）に平和

的に成長転化する可能性であった。

だが、反革命的ブルジョアジーが単独権力の獲得に成功した七月事件のあとでは、革命の平和的な道は不可能になった。「全権力をソヴェトへ！」というスローガンは、第六回党大会で一時とりさげられた。なぜなら、メンシェヴィキとエス・エルがソヴェトを反革命的な臨時政府の付属物に変えてしまったからである。メンシェヴィキとエス・エルは、最後的に反革命的ブルジョアジーの陣営にうつった。

コルニーロフ陰謀とその粉砕とにともなう新しい革命的高揚にもとづいて、ソヴェトはたちなおって、ふたたび大衆の戦闘的・革命的な機関となった。ソヴェトがボリシェヴィキ化する時期がはじまった。党は、ふたたび「全権力をソヴェトへ！」というスローガンをかかげたが、こんどはこのスローガンは、ブルジョアジーの執権(ディクタツーラ)にたいして蜂起し、プロレタリアートの執権(ディクタツーラ)を樹立せよという呼びかけを意味していた。

大衆のなかでの献身的な活動や、具体的情勢を考慮した柔軟な戦術によって、党はプロレタリアートを自分の旗のもとに団結させ、党の思想の正しさを人民大衆に確信させて臨時政府との決戦に人民を立ちあがらせることができた。革命のなかで、共産党は、勤労者のあらゆる闘争形態をたくみにみちびいて、自由の獲得と無階級社会の建設とにいたる唯一の正しい道にむかわせる、勤労者の賢明な、試練をへた指導者として行動した。

エス・エルとメンシェヴィキは、臨時政府を救うことができなかった。これらの党は、自分の発展過程を完了して、十月革命の前夜に、資本主義制度を守る、反革命の公然たる擁護者になってしまった。革命の過程で、またボリシェヴィキの宣伝活動の影響を受けて、人民大衆は、エ

ス・エルとメンシェヴィキの反革命的本質を理解した。大衆は、革命の根本問題を解決し、国を破局から救いだす能力のあるのはボリシェヴィキ党だけであることを確信した。労働者、勤労農民、兵士は、党が人民大衆の利益へ一身をささげていることを、党員の英雄精神を確信し、共産主義者が社会主義革命の勝利のためには死地におもむく覚悟をしていることを確信した。人民大衆は、唯一つ革命的で、最後まで首尾一貫した、大衆の利益の擁護者であるボリシェヴィキ党に、自分の運命をゆだねた。彼らは、党の呼びかけにおうじてブルジョア臨時政府を打倒し、ソヴェト社会主義共和国を樹立した。

十月社会主義革命は人民革命であった。それは搾取者の圧制を打倒した。それは、貧農の支持をえて共産主義社会の基礎の建設に着手したプロレタリアートの執権（ディクタツーラ）を実現した。十月革命は、人類の歴史に新しい時代——社会主義と共産主義が勝利する時代をひらいた。レーニン主義の母国であるロシアは、世界社会主義革命の端緒をひらいた。

ソ連邦共産党史（1）

一九七二年一〇月一二日第一刷発行
一九七七年一〇月三一日第三刷発行

定価はカバーに表示してあります

訳者© ソ連邦共産党史翻訳委員会

東京都文京区本郷二丁目十一番九号
発行者 小林直衛

東京都新宿区水道町二十九番地
印刷者 山元正宜

発行所 東京都文京区本郷二ノ十一ノ九 株式会社 大月書店
電話(813)四六五一(代表)
振替東京三-一六三八七

落丁・乱丁本はお取替いたします

三晃印刷・田中製本

マルクス＝エンゲルス著 共産党宣言・共産主義の原理

エンゲルス著 空想から科学へ

マルクス著 経済学批判

エンゲルス著 革命と反革命

マルクス＝エンゲルス著 ドイツ・イデオロギー

エンゲルス著 『資本論』綱要

エンゲルス著 ドイツ農民戦争

土屋保男編訳 マルクス回想

エンゲルス著 自然の弁証法 I・II

エンゲルス著 家族、私有財産および国家の起源

マルクス著 哲学の貧困

エンゲルス著 フォイエルバッハ論

マルクス＝エンゲルス著 ゴータ綱領批判 エルフルト綱領批判

H・ポリット編 婦人論

マルクス＝エンゲルス著 労働組合論

マルクス著 クーゲルマンへの手紙

エンゲルス著 反デューリング論 I・II

マルクス＝エンゲルス著 文学・芸術論

マルクス著 賃金、価格、利潤

マルクス著 賃労働と資本

マルクス著 フランスにおける階級闘争

マルクス著 資本論 全9分冊

岡崎次郎著 資本論入門

マルクス著 剰余価値学説史 全9分冊

マルクス著
経済学・哲学手稿

マルクス著
資本主義的生産に先行する諸形態

マルクス著
直接的生産過程の諸結果

マルクス著
ヘーゲル法哲学批判序論

マルクス著
フランスにおける内乱

マルクス著
ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日

マルクス＝エンゲルス著
資本論書簡　全3分冊

エンゲルス著
イギリスにおける労働者階級の状態　I・II

ベーベル、メーリング他著
エンゲルスの追憶

エンゲルス著
ビューローとバリケードのあいだで

大月書店編集部編
猿が人間になるについての労働の役割

エンゲルス著
住宅問題

マルクス著
資本論第一巻初版

大月書店編集部編
マルクス＝エンゲルス略年譜

レーニン著
マルクス＝エンゲルス
＝マルクス主義　I・II・III

レーニン著
国家と革命

レーニン著
帝国主義論

レーニン著
民族自決権について

レーニン著
共産主義における「左翼」小児病

レーニン著
民主主義革命における
社会民主党の二つの戦術

レーニン著
プロレタリア革命と
背教者カウツキー

レーニン著
農業問題と「マルクス批判家」

レーニン著
なにをなすべきか？

レーニン著
ストライキ闘争について

レーニン著
農業における資本主義

レーニン著
第二インタナショナルの崩壊

レーニン著
いわゆる市場問題について

レーニン著
社会主義と戦争

レーニン著
唯物論と経験批判論　I・II

レーニン著
民族問題にかんする批判的覚書

レーニン著
帝国主義と民族・植民地問題

レーニン著
一歩前進、二歩後退

レーニン著
平和のための闘争

レーニン著
貧農に訴える

レーニン著
一九〇五年の革命

レーニン著
ロシアにおける
資本主義の発展　I・II・III

レーニン＝スターリン著
青年論

レーニン著
「人民の友」とはなにか

レーニン著
社会民主党の農業綱領

レーニン著
哲学ノート I・II

レーニン著
カール・マルクス

レーニン著
さしせまる破局、
それとどうたたかうか

レーニン著
労働組合論 I・II・III

日本共産党中央委員会宣伝部編
マルクス
エンゲルス 労農同盟論

日本共産党中央委員会宣伝教育文化部編
レーニン 労農同盟論 I・II

日本共産党中央委員会宣伝部編
レーニン 宣伝・扇動 I・II

大月書店編集部編
弁証法の問題について

レーニン著
国家論ノート―マルクス主義国家論―

五十嵐顕編
レーニン 教育論

日本共産党中央委員会青年学生部編
レーニン 青年学生論

宮森繁、村田陽一編訳
レーニン トロツキズム批判

岡田進編
レーニン 協同組合論

レーニン著
経済学的ロマン主義の
特徴づけによせて

副島種典編
レーニン 労働者統制・国有化論

コンフォース著
マルクス＝レーニン主義古典入門

ジダーノフ著
党と文化問題

市川正一著
日本共産党闘争小史

レオンチェフ、ドッブ著
『資本論』解説

トリアッティ著
婦人問題講話

片山潜著
反戦平和のために

トリアッティ著
平和論集

アラゴン、デュクロ著
フランスにおける党芸術

ヒルファディング著
金融資本論 I・II

ディミトロフ著
獄中からの手紙

ディミトロフ著
反ファシズム統一戦線

フレヴィル著
マルクス主義芸術論研究

ソ連邦共産党史翻訳委員会訳
ソ連邦共産党史 全3冊

ポリティカル・アフェアズ編集部編
アメリカ共産党の五〇年

アディベコフ著
プロフィンテルン小史

プレハーノフ著
社会主義と政治闘争

コルバラン著
チリ人民連合政府樹立への道

メーリング著
マルクス伝 全3冊

クララ・ツェトキン著
カールとローザ—ドイツ革命の断章—

エリザロヴァ他著
革命のペテルブルグへ—回想のレーニン—

トリアッティ著
統一戦線の諸問題

ピーク著
統一戦線への歴史的転換

トレーズ著
フランス人民戦線